

熊本県文化財調査報告 第47集

古保山・古閑・天城

1980

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告 第47集

古保山・古閑・天城

1980

熊本県教育委員会

序 文

熊本県教育委員会では、九州縦貫自動車道建設に伴ない、日本道路公団の委託により、昭和46年度から昭和54年度にかけて熊本～八代間の埋蔵文化財発掘調査を実施しました。

本報告書は、この間に実施した上益城郡益城町の「古閑遺跡」、下益城郡松橋町の「古保山遺跡」に関するものであります。古閑遺跡は縄文晩期を主体とする広大な遺跡であり、古保山遺跡は縄文早期の集石遺構を主とする遺跡で、ともに縄文時代の文化解明に貴重な資料をうることができました。

本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに学術・研究上の一助になれば幸いです。

発掘調査の実施に当たりましては、日本道路公団の御理解と御協力をはじめとして、調査指導の先生、地元の方々からの御協力を賜りました。とくに古閑遺跡の整理・報告書執筆につきましては、別府大学教授賀川光夫氏の御協力を受けました。ここに心からお礼を申し上げます。

昭和55年 3 月31日

熊本県教育長 井 本 則 隆

例 言

- 1 本報告書は熊本県教育委員会が行った埋蔵文化財発掘報告書である。
- 2 本書には九州自動車道建設事業で発掘調査した古保山遺跡（下益城郡松橋町）、古閑遺跡（上益城郡益城町）の他、圃場整備事業に伴う天城遺跡（菊池市）を附として集録した。
- 3 古保山については平岡勝昭氏（熊本市立泉が丘小学校教諭：元文化課勤務）、古閑については別府大学考古学研究室に整理、執筆をお願いし、天城遺跡は島津義昭、清田純一が整理、執筆した。
- 4 本書の編集は別府大学考古学研究室の協力を得て隈昭志が行い、西町圭子の助力をうけた。

古保山遺跡

本文目次

第Ⅰ章	古保山A遺跡	3
	1. 遺跡の性格	3
	2. 出土遺物	3
第Ⅱ章	古保山B遺跡	7
第Ⅲ章	古保山C遺跡	8
	1. 調査の経過	8
	2. 調査区の設定	9
	3. 遺跡と周辺遺跡	11
	4. 古保山付近の地質	12
	5. 出土遺物	20
	6. 押型文土器と集石遺構	20
第Ⅳ章	潭之上観世音菩薩祭礼記考	27

挿図目次

第1図	A遺跡出土遺物実測図	4
第2図	木葉繁文とその脚部の例	5
第3図	夫婦塚古墳周辺測量図	7
第4図	古保山C遺跡トレンチ配置図	10
第5図	周辺遺跡分布図	11
第6図	古保山遺跡周辺地質図	15
第7図	古保山の地質模式図	16
第8図	くぬぎ塚の地質模式図	16
第9図	DP22地質模式図	17~18(折込み)
第10図	沈目東の地質模式図	19
第11図	遺物出土分布図	21
第12図	G25集石遺構	22
第13図	G23集石遺構	23
第14図	H27集石遺構	25
第15図	F34集石遺構	26

表目次

第1表	阿蘇・熊本および周辺地域の水理地質層序対比表	13~14(折込み)
-----	------------------------	------------

図版目次

図版1	集石遺構：C区土器出土状況	209
図版2	G25集石遺構：G23集石遺構	210
図版3	D29集石遺構：F34集石遺構	211
図版4	B区土壙	212

図版 5	K19集石遺構：H27集石遺構：C13集石断面状況：P09夜臼式土器片	213
図版 6	阿高式土器検出状況：阿高式土器：B区土壙と柱穴：C区播鉢状の掘り込み	214
図版 7	P12土層：土層調査区と唐芋穴	215

古 閑 遺 跡

本 文 目 次

第Ⅰ章	古閑遺跡	31
第Ⅱ章	縄文時代の遺物	33
	1. 晩期以前の土器	33
	2. 晩期の土器	35
	3. 穀類の種子(穀)痕付の土器	40
	4. 石 器	58
第Ⅲ章	弥生時代以降の遺物	117
	1. 弥生土器	117
	2. 古式土師器	119
	3. 歴史時代の遺物	130
第Ⅳ章	特殊遺物	134
	1. 土 製 品	134
	2. 石 製 品	134
第Ⅴ章	ま と め	140

挿 図 目 次

第16図	種子痕付土器	40
第17図	縄文晩期以前の土器	68
第18図	縄文晩期の土器	69
第19図	縄文晩期の土器	70
第20図	縄文晩期の土器	71
第21図	縄文晩期の土器	72
第22図	縄文晩期の土器	73
第23図	縄文晩期の土器	74
第24図	縄文晩期の土器	75
第25図	縄文晩期の土器	76
第26図	縄文晩期の土器	77
第27図	縄文晩期の土器	78
第28図	縄文晩期の土器	79
第29図	縄文晩期の土器	80
第30図	縄文晩期の土器	81
第31図	縄文晩期の土器	82

第32図	縄文晩期の土器	83
第33図	縄文晩期の土器	84
第34図	縄文晩期の土器	85
第35図	縄文晩期の土器	86
第36図	縄文晩期の土器	87
第37図	縄文晩期の土器	88
第38図	縄文晩期の土器	89
第39図	縄文晩期の土器	90
第40図	縄文晩期の土器	91
第41図	石器	92
第42図	石器	93
第43図	石器	94
第44図	石器	95
第45図	石器	96
第46図	石器	97
第47図	石器	98
第48図	石器	99
第49図	石器	100
第50図	石器	101
第51図	石器	102
第52図	石器	103
第53図	石器	104
第54図	石器	105
第55図	石器	106
第56図	石器	107
第57図	石器	108
第58図	石器	109
第59図	石器	110
第60図	石器	111
第61図	石器	112
第62図	石器	113
第63図	石器	114
第64図	石器	115
第65図	石器	116
第66図	弥生土器	118
第67図	古式土師器	123
第68図	古式土師器	124
第69図	古式土師器	125
第70図	古式土師器	126
第71図	古式土師器	127
第72図	古式土師器	128
第73図	古式土師器	129

第74図	歴史時代遺物	136
第75図	歴史時代遺物	137
第76図	特殊遺物	138
第77図	特殊遺物	139
第78図	I式土器形態図	140

表 目 次

第2表	縄文晩期以前の土器	34
第3表	晩期土器形態別統計表	40
第4表	縄文晩期土器	41
第5表	器種別総数	67
第6表	弥生土器	117
第7表	古式土師器	119
第8表	歴史時代遺物	131

図 版 目 次

図版8	縄文晩期以前の土器：縄文晩期の土器	216
図版9	縄文晩期の土器	217
図版10	縄文晩期の土器	218
図版11	古式土師器	219
図版12	古式土師器	220
図版13	古式土師器	221
図版14	古式土師器	222
図版15	歴史時代の遺物	223
図版16	石 器	224
図版17	石 器	225
図版18	石 器	226
図版19	石 器	227
図版20	石 器	228
図版21	石 器	229
図版22	石 器	230
図版23	石 器	231
図版24	穀類の種子痕付の土器	232

附.	天城遺跡	143
----	------	-----

古保山遺跡

第 I 章 古保山A遺跡

この遺跡はSTA 209+40から東に20m付近を調査したものである。木原山の南麓に海平という村落がある。こことゆるい浸食谷(水田)をへだてて小高い台地が南へ伸びる。この台地上に遺跡は位置する。

調査期間は昭和47年2月28日から3月14日までである。記録をみると3月1日と4日が雪のため作業を中止している。霜どけなどもあって無理な調査であった。

1. 遺跡の性格

縄文晩期の黒川期の遺物が出土した。豊富な遺物が出土したが住居址は確認できなかった。また、遺物も文化財収蔵庫改築のため凍結状態にあるので、ここには2・3の遺物を紹介するにとどめた。

2. 出土遺物

土器 木葉繋ぎ文のある土器片が出土している。これは、別図に示すとおり高坏の脚部のとれたものではないかと考える。

布痕文土器・網目文土器・アンペラのスタンプのある土器等も出土している。

表土からは土師・須恵器も多量に採集されている。

土製紡錘車 (図1) 一部分かけるがほぼ完形品である。径10.2cm、厚さ1.8cmやや扁平な形である。中央に径1.2cmの穴があく。重さ170g、出土はM10—3層。

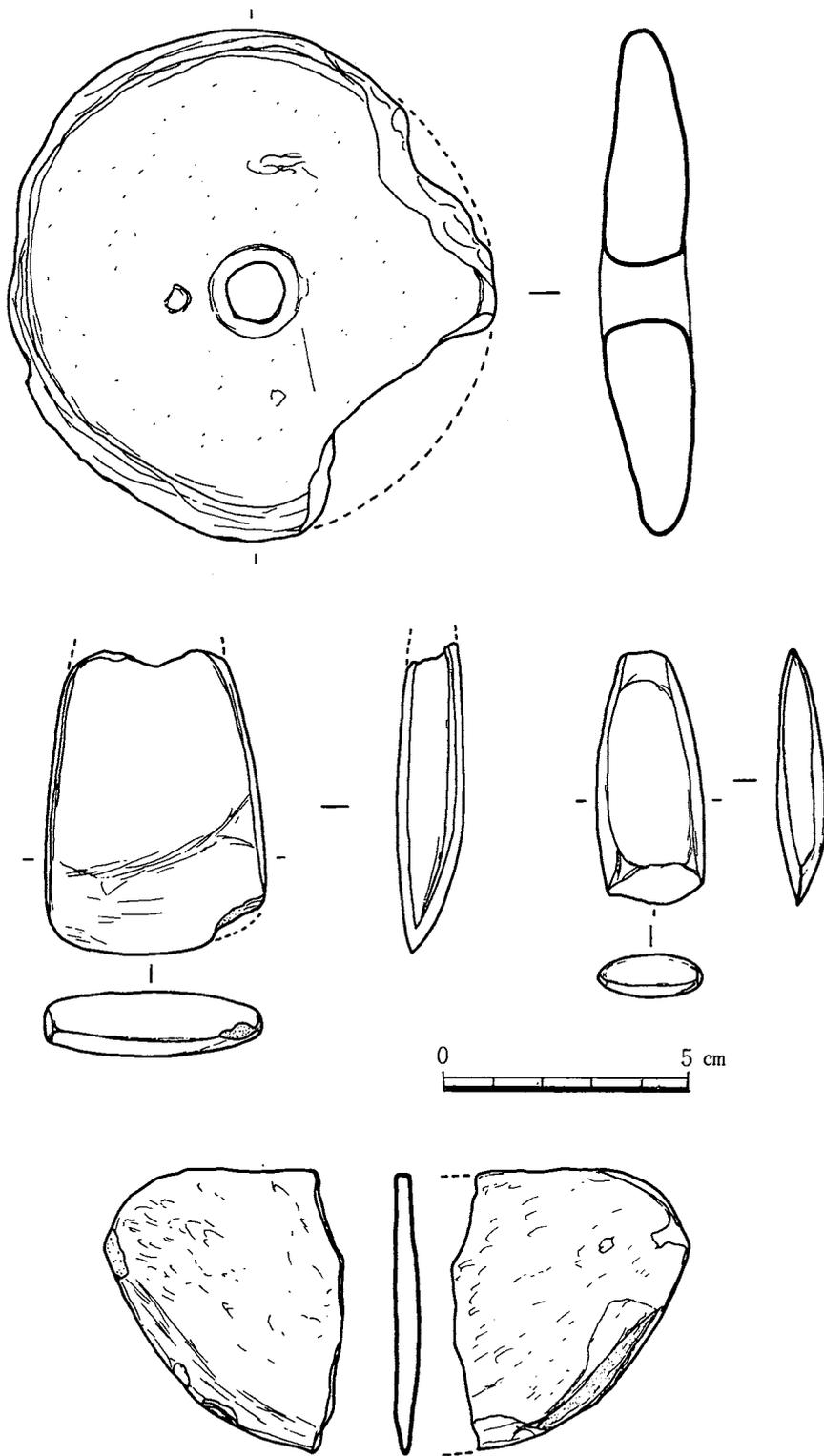
石器

石器は磨製石斧・打製石斧・小型磨製石斧・粗製石包丁型石斧・石鏃石ヒと多量に出土している。

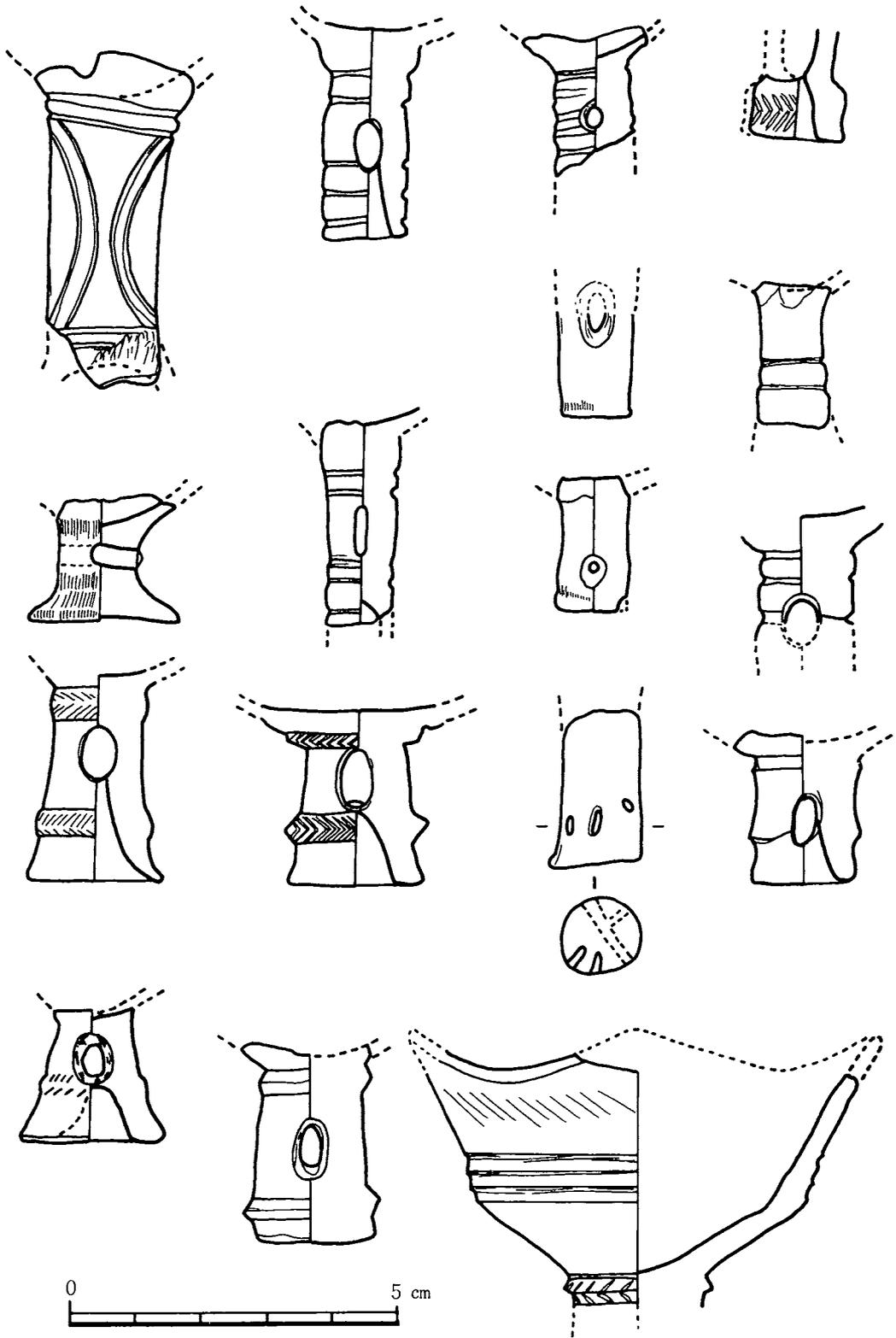
小型磨製石斧 (図1) 小型磨製石斧は長さ5cm・幅2.2cm・厚さ0.9cm。実用に供されたものと見て刃先はすりへっている。これに平行して打製石斧(長さ10cm、幅5.2cm、厚さ1.6cm)が出土している。セットになっていたものであろうか。小型磨製石斧は重さ26g、打製石斧は重さ135gである。

粗製石包丁 (図1) 粘板岩の薄い石包丁型をした石器である。刃部と思われるところが磨かれている外は、形をととのえたと見られるだけである。弥生文化の石包丁の祖形とみてよいのではないだろうか。

磨製石斧 (図1) 蛇文岩のきれいな石斧で基部は破損していると思われる。長さ6cm、幅4.5cm、厚さ1.4cm、重さ69gである。



第1图 A遺跡出土遺物実測図



第2図 木葉繁文とその脚部の例

以上、資料紹介にとどめるが晩期縄文文化の諸相を示すものと思われるが遺物の報告の時点で考察を加えたい。

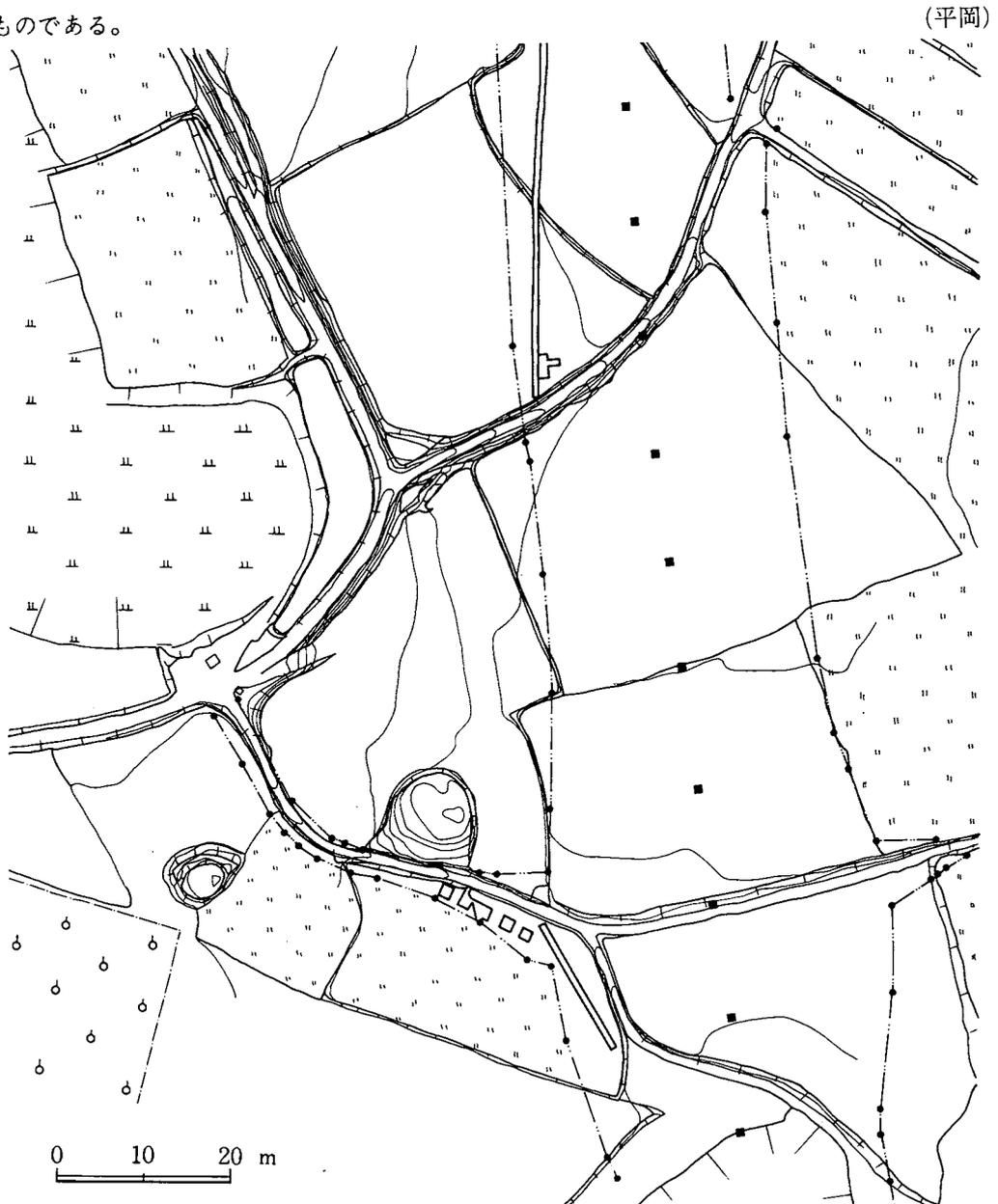
(平岡勝昭)

第Ⅱ章 古保山B遺跡

この遺跡は夫婦塚古墳の周溝があるのではないかということと土師、須恵器の散布が見られたので実施した。

バックフォアによるトレンチの結果、遺物の包含層の発見はできなかった。トレンチ位置図と夫婦塚の測量図をかかげておく。

昭和47年2月17日調査。なお、測量図は昭和47年3月14日から宇土高校の社会部が実施したものである。



第3図 夫婦塚古墳周辺測量図

第三章 古保山C 遺跡

所在地 熊本県下益城郡松橋町大字古保山

九州縦貫自動車道予定地御船—松橋間 (S T A 218 +80～219 +80)

標高3.5m・現在の海岸線まで6.4km

時代区分 縄文時代 早期(押型文土器を主体とする遺跡)

晩期(御領式・山ノ寺式土器を 層より出土する。)

1. 調査の経過

昭和46年度は社会教育課文化係が調査にあたった。47年度は新設になった文化課文化財係が調査を実施した。

調 査 期 日	調 査 区	調 査 員
昭和47年 2月15日～3月30日	A. B. C	桑 原 憲 彰 (社会教育課主事) 高 木 正 文 (同 嘱託) 上 野 辰 男 (同 参事)
昭和47年 5月10日～7月30日	DY-05～45	原 口 長 之 (文 化 課嘱託) 高 木 正 文 (同 嘱託) 平 岡 勝 昭 (同 主事)
昭和48年 2月 5日～3月 9日	DY-05～45	平 岡 勝 昭 (同 主事)

昭和44年度国庫補助事業による九州縦貫自動車関係地域文化財分布調査は、飽託郡託麻村(現熊本市)から下益城郡松橋町の間長さ23.8km・巾200mの区域で実施された。この報告書(註1)によると、

(35)古保山C遺跡 押型文単純遺跡であると思われ、多量の押型文及びシャルルスタイン製の礫器、チャート製のスクレイパーの出土を見た。ほかに縄文・後期の弥生・須恵の破片の散布をみる。試掘溝調査及びトレンチ調査の必要がある。包蔵地の価値は比較的重要、指定の有無は無し、昭和45年3月2日調査。

(34)古保山大道夫婦塚女古墳 夫塚の南方30mの所にある円墳で直径約5mの女塚で、重要性は夫婦塚と同様である。保存の必要あり。きわめて重要、指定の有無は無し。昭和45年2月5日調査。

(33)古保山大道夫婦塚男古墳 夫婦塚の夫塚にある方で原型からは大分くずれているが、直径15cm程の円墳で、周濠の一部も残っている。この一帯の古墳の被葬者は、奈良時代の宇土郡司につながることは確かである。北方の古保山部落には宇土の郡寺である古保山廃寺がある。

註1 九州縦貫自動車道鹿児島線、宮崎線(託麻—松橋)文化財分布調査報告書(昭45)

保存の必要あり。包蔵地の価値きわめて重要。指定の有無は無し。和昭45年3月2日調査。

(32)古保山B遺跡 縄文晩期を主体として少量の弥生・須恵土器が点在する。出土量は多くないが、かなり広い範囲から出土している。試掘溝調査の必要あり。包蔵地の価値は普通。指定の有無は無し。昭和45年2月27日調査。

(32)古保山A遺跡 水田の中にある独立丘の南の畑に、少量の縄文晩期土器が散布している、試掘の要あり。包蔵地の価値は普通。指定の有無なし。昭和45年3月2日調査。
と報告されている。この報告にしたがって熊本県教育委員会と日本道路公団の間に調査の委託契約がなされた。

2. 調査区の設定

予備調査で縄文土器散布の見られたSTA 219地点を中心にバックフォーで南北に130mの試掘溝を設ける。

第1次調査

この試掘溝で遺跡の見られた地点に一辺2mのC調査区を設定、STA 219+20の中心杭にそって巾4m、長さ14mのB調査区、ほぼ遺跡のはずれと考えられるSTA 219杭北側一辺2mの試掘溝を2mおきに5箇所設定しここをA調査区とした。A調査区は上野辰男、B調査区は高木正文、C調査区は桑原憲彰がそれぞれ担当者となり発掘を進めた。

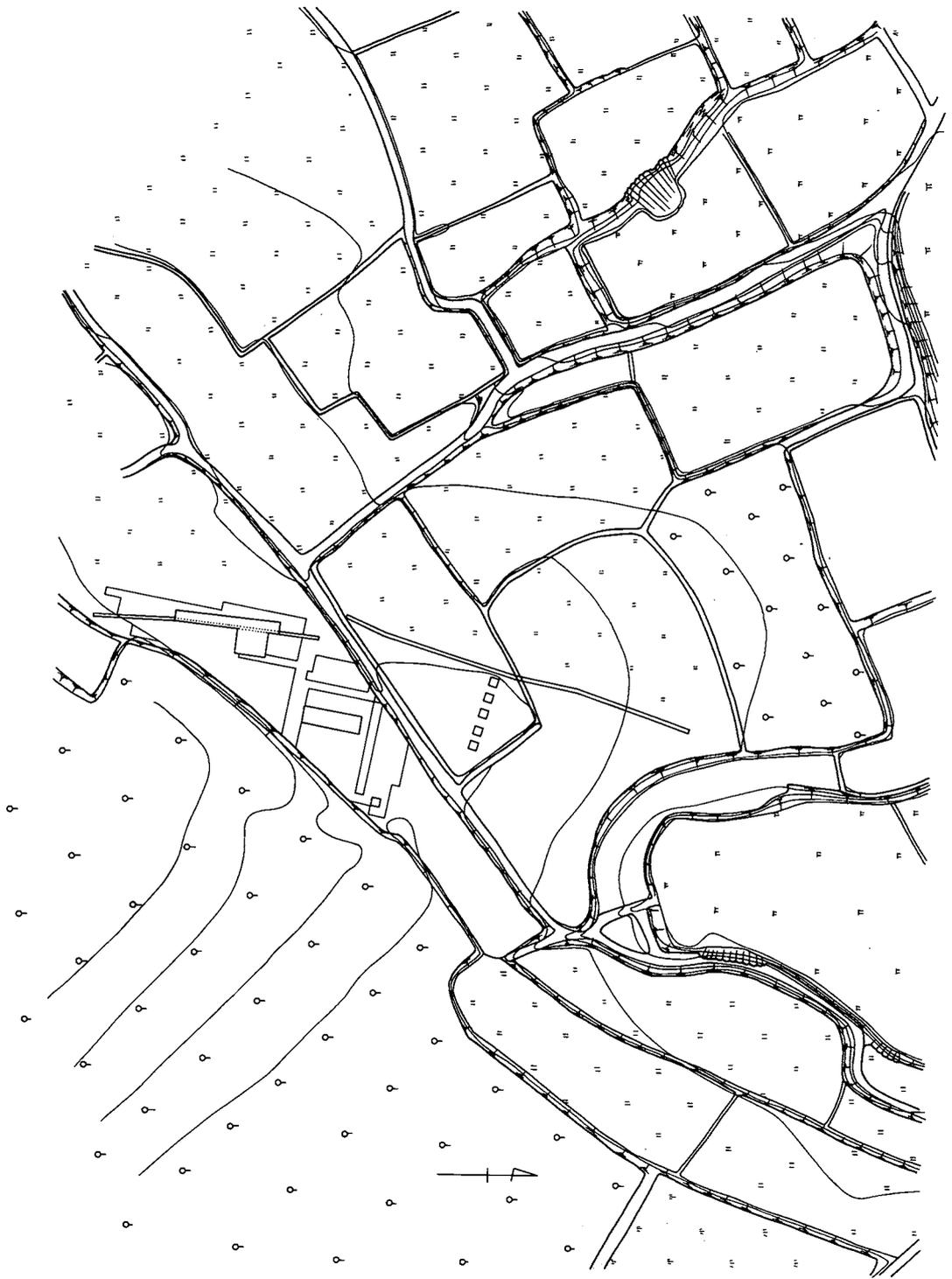
この結果、B調査区からは図版に示すように多量の押型文土器と土壌柱痕と見られる遺構が検出され、C調査区では摺鉢型の大きな土壌と集石遺構が発見された。A調査区ではほとんど土器の発見も見られなかった。ここで年度末を迎え、社会教育課から文化課新設へのあわただしさを迎へ一応調査は打ち切られたかたちとなった。

第2次調査

新設になった文化課で原口長之を主査に高木正文が継続で、平岡が新しくはいり48年5月10日から7月30日まで調査を実施した。調査目的は集石遺構の性格の確認と押型文土器の調査であった。そこでSTA 219の杭を中心に第4図の通り全域を2mおきに01～50までの番号をつけた。道路中心線と直角には2mおきにA～Zまでの網の目をかぶせ全掘の体制をとった。表土はぎの段階で集石遺構が確認された範囲について調査区を広げて行った。この結果、11箇所の集石遺構が確認された。この時点で地質調査を依頼した。

第3次調査

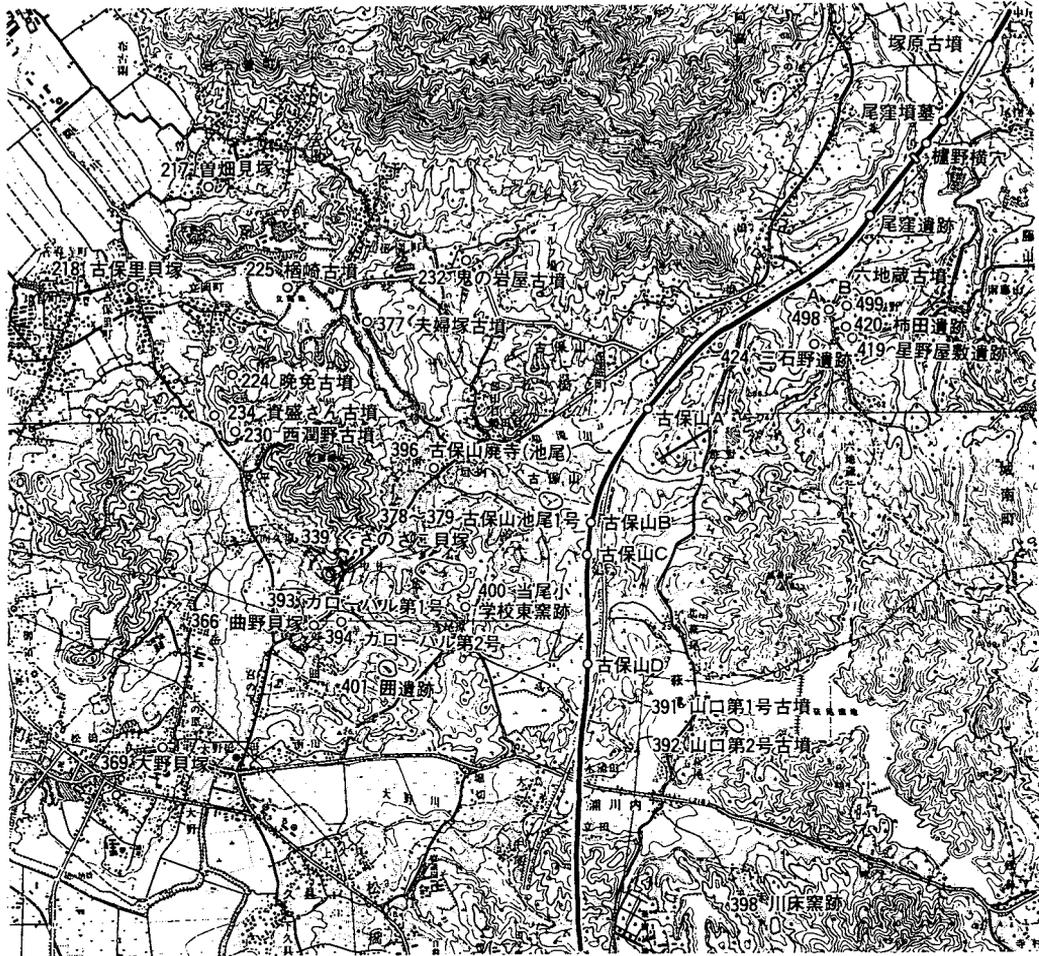
第3次調査は別府大学教授賀川光夫、熊本大学教授国分直一、同助教授小谷凱宣、同助手佐藤伸二の各氏にそれぞれ調査を依頼した。そして、集石遺構の性格調査を実施した。平岡は集石遺構の実測にはいる。4月1日付で平岡は市内小学校に転出、遺跡調査は緒方勉、高木正文によって継続された。



第4図 古保山C遺跡トレンチ配置図

3. 遺跡と周辺遺跡

周辺の遺跡については、第5図に示すとおりで、以下、年代順に略記する。



第5図 周辺遺跡分布図

年代区分	遺跡番号	遺跡名	年代区分	遺跡番号	遺跡名	年代区分	遺跡番号	遺跡名
縄文時代	217	曾畑貝塚	古墳時代	378	池尾第1号古墳	古墳時代	230	西潤野古墳
	218	古保里貝塚		379	池尾第2号古墳		234	資盛さん古墳
	369	松橋大野貝塚		380	畑中古墳		224	晩免古墳
		古保山A遺跡		381	中ノ原古墳		337	夫婦塚古墳
		古保山D遺跡		382	真ッ辻古墳		232	鬼ノ岩屋古墳
	339	くさのぎこ貝塚		383	鳴滝古墳		225	檜崎古墳
	347	嫁坂A遺跡		384	三本木戸古墳		505~552	向野田古墳
	348	嫁坂B遺跡		385	大道夫婦塚男古墳			塚原古墳群
	368	宮島貝塚		386	大道夫婦塚女古墳			鴨籠古墳
	216	宮ノ庄貝塚		387	笹原夫婦塚男古墳		372	松橋貝塚
417	御領貝塚	388	笹原夫婦塚女古墳	歴史時代	400	当尾小学校東窯跡		
416	阿高貝塚	389	中原古墳		398	川床窯跡		
421	沈目遺跡	391	山口第1号古墳		396	古保山廃寺		
弥生時代	220	境目甕棺遺跡	392		山口第2号古墳	558	浄水寺跡	
		西藏遺跡	393		ガローバル1号古墳	529	陣内廃寺	
			394	ガローバル2号古墳				

縄文時代 押型文土器を出土する周辺の遺跡はあまり多くない。沈目遺跡はその代表的なものである。この遺跡については小林久雄先生の「所謂橢円捺型文土器に就て」(註1)の報文がある。又九州自動車縦貫道内については『沈目』(註2)の報告がある。縄文時代前期曾畑式土器を出土する貝塚は、当遺跡より北西3kmの地点にある。同じく轟貝塚、阿高貝塚、大野貝塚と周辺に数多くの標式的貝塚が見られる。

縄文後期の御領式土器を出土する御領貝塚は北に4.5km、モースの『日本その日その日』に出てくる大野貝塚は南に10kmの地点である。

宇土半島は北に有明海、南に不知火海と熊本の海湾を2分するのであるが、その基部にあたる遺跡地周辺は貝塚が密集する地域でもある。

註1 小林久雄著『九州縄文土器の研究』

註2 江本直他『沈目』熊本県文化財調査報告第13集 熊本県教育委員会 昭和49年

弥生時代 須久式の壟棺は分布の南限として知られる境目遺跡、支石墓もこのあたりが南限である。又、石戈なども発見されている。又、城南町宮地安幕の重弧文をほどこした舟形注口土器(国指定)がある。弥生式土器は沖積平野が少ないせいかなり多くを見ない。

古墳時代 九州縦貫道内の塚原古墳群、向野田古墳・鴨籠古墳、その他の円墳が付近に多数見られる。火の君の発生の地として比定され前期古墳も多い。

歴史時代 古保山廃寺には塔心礎が残っている。益城国府や陣内廃寺・浄水寺跡などはこの地域がかつて肥後の一大中心地であったことを示すものである。明治以前の薩摩街道の要所であることをものがたる。

古保山については作業員がここからきていた関係で村の祭りにも招かれた。民俗記録として別記しておきたい。(第IV章参照)

4. 古保山付近の地質

九州縦貫自動車道は、熊本平野の東部を大きく迂回して、御船I.Cから雁回木原山(314.4m)の東部を経て松橋I.Cにはいる。

木原山は中生代白亜系山塊でなだらかな山容と木原百谷という小さな谷をつくる。付近はなだらかな洪積世台地が広がり、宇土駅から松橋駅の国鉄線路にそって、標高3～6m位の沖積平野が広がる。古保山付近の遺跡はこの洪積世台地に点在する。東部は高岳山(153.3m)、南部は大野川水系できれ、八代平野へとつながる。このため水系が浅く、いたるところに溜池が見られる。高岳山南麓には萩尾溜池、木原山南麓には清正公が築いたという岡池がある。この岡池は土地の古老に聞くと「8町8反8畝6歩ある。」という。これは旅の瘦せ六部(巡礼)がこの池の広さをたずねたので土地の人が「8町8反瘦せ六部」と邪揄したという。小さな溜池は20箇所にもものぼる。水系は木原山の南麓を西に流れる鳴滝川がある。これは岡池をとおり曾

第1表 阿蘇・熊本および周

地質時代	氷期	周辺地域			阿蘇西麓		
		島原半島	有明海	熊本	植木	菊地	
沖積世	絶対年代 ×1000年BP 10 ポレアル アレレエド オールドリアス 王ウルムⅡ	普賢岳黒色火山灰	深江砂レキ層	有明粘土層	クロボク		
				白色火山灰			
	20 パウドルフ				島原海湾層 ●	上部ローム (Hy, Ho, Au) 15350 ±	
						保田窪少レキ	
					三江ローム (23000BP)	中部ローム (Hy, Ho, Au) 19600 ±	
					大江層 25900 ± 1000 ●	託麻砂レキ ▲	
					大三崎ローム 30400 ± 3000	下部ローム (Hy, An, Of) ▲ 菊地砂レキ	
	洪積世	30 主ウルムⅠ			新期阿蘇火山碎属物 33000 ± 3000	Aso 4 非溶結軽石流 中溶結	Aso 4
					(赤色土壤)	古土壤	花房層
		初期ウルム			未詳洪積層	Aso 3 弱溶結岩滓流 中溶結岩滓流	
吾妻層							
リスウルム間氷期					吾妻層および粘土層		
					砥川溶岩 ●	Aso 2 中～強 ▲ ●	
300 リス氷期 ミンデルリス 間氷期					砂レキ		
					瑞穂ローム		
					竜石層 ●	粘土層 ●	植木層 ●
300 ミンデル 先ミンデル					佐伊津層 ●	三の岳溶岩	
	口ノ津層						
基盤岩類		先阿蘇火山岩類 花崗岩類, 結晶片岩類					

阿蘇地域の水理地質層序対比表

阿蘇南西麓	阿蘇東麓	カルデラ壁	カルデラ底	阿蘇中央火口丘
高遊原	竹田	象が鼻	内牧	
クロボク	▲ 沖積砂レキ アカホヤ 4640±80	クロボク アカホヤ	黒色土壌 (4630BP) ▲ 上部阿蘇谷層	中岳火口掘出物 寄生火山 中岳・高岳・杵島岳主火山体
320	後カルデラ火山灰(末区分)		● 下部阿蘇谷層	根子岳主火山体 中岳・高岳・杵島岳初期活動 古根子岳・鷲峰火山体 御かまど・夜峰火山体 火山基底掘出物
500				
非溶結軽石流	Aso 4 B 溶結軽石流 Aso 4 A 軽石流 (非~強溶結)	軽石まじり火山レキ層 E		
古期扇状砂レキ 大塚山火山掘出物 高遊原溶岩 布田層	降下軽石 砂レキ・久住軽石流		久住軽石流	
	Aso 3 C } 弱~中溶結 3 B } 岩滓流 3 A }	Aso 3 弱溶結岩滓流 ▲ 33100 BP±1900 ▲		
	※間ローム	35600 BP±2200		
溶結岩滓流		▲ Aso2 強溶結岩滓流		
▲ 秋田溶岩	▲ 柏原溶岩 ●	ローム ▲ 象が鼻溶岩 砂レキ		
	Aso 1 強溶結岩滓流			
	降下軽石	レキ層		
下陳レキ層	今市火砕流			
先阿蘇火山岩類	大野川層群	先阿蘇火山岩類	花崗岩類	花崗岩一片岩類

Hy: 紫蘇輝石

Ho: 角閃石

▲ 自由地下水

● 被圧地下水

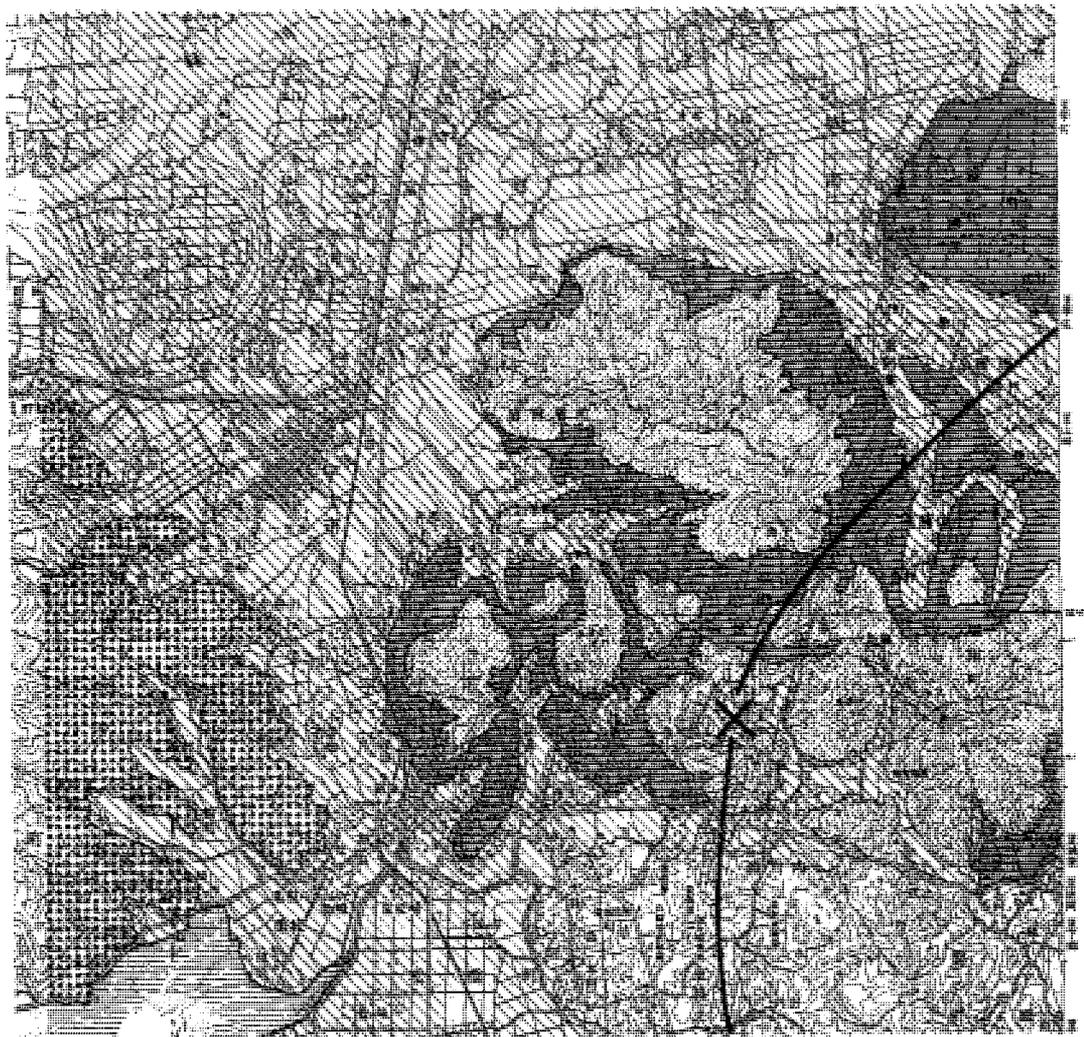
—13~14—

Au: 普通輝石

Ol: かんらん石

畑貝塚と古保里貝塚の間をぬけ潤川となり、濱戸川から緑川へ合流し有明海へと注ぐ。道徳山(132.4m)南麓から大野川へ、古保山遺跡から南流して大野川へ、これは松橋町をとり不知火海へと流れる。

宇土半島の基部で地質も大きく変化する。近年沖積世、洪積世の地質研究は著しいものがある。この地域を俯瞰する意味で第1表をかかげておく。



第6図 古保山遺跡周辺地質図

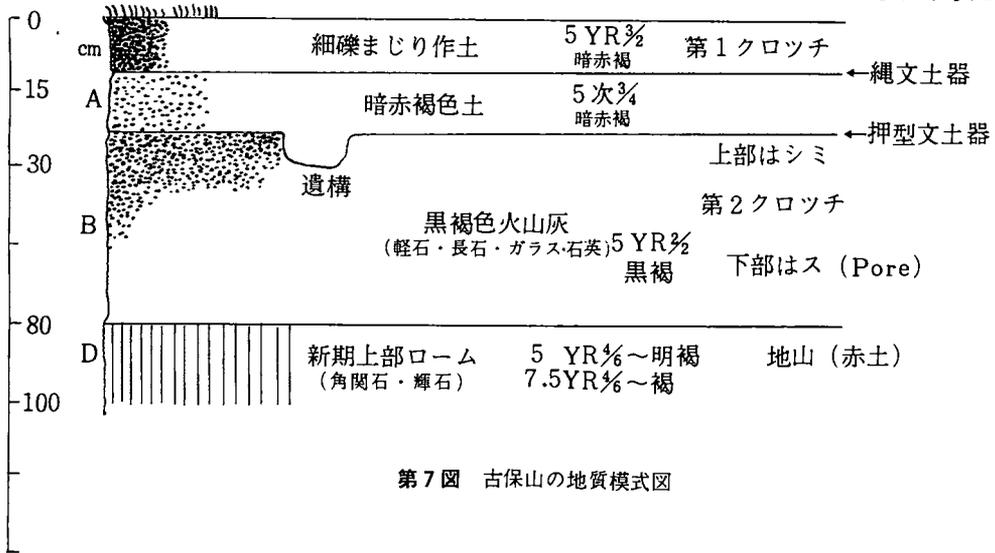
古保山遺跡の地質

古保山遺跡の地質については、初倉氏の調査によると第7～9図の如くである。作土は細礫まじりの暗赤褐色、これに縄文土器が混在する。次に暗赤褐色土、押型文土器や集石遺構を含む層、更に黒褐色火山灰がある。下部は新期上部ローム層の地山となる。

以上、4箇所の地質図でA層には縄文土器(後・晩期)が、B層上面には押型文が出土する。これは、熊本平野から松橋地区あたりまで共通するものである。

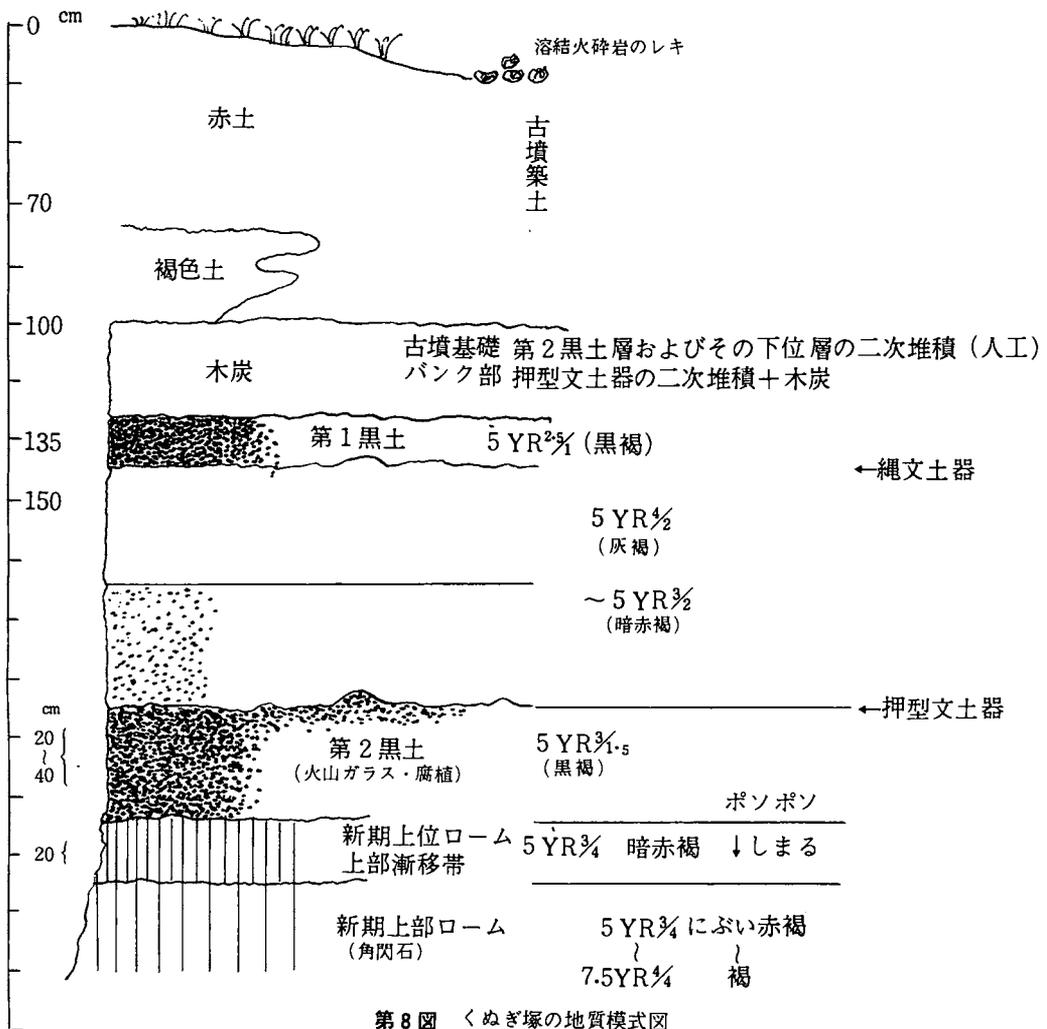
古保山 (九州縦貫道)

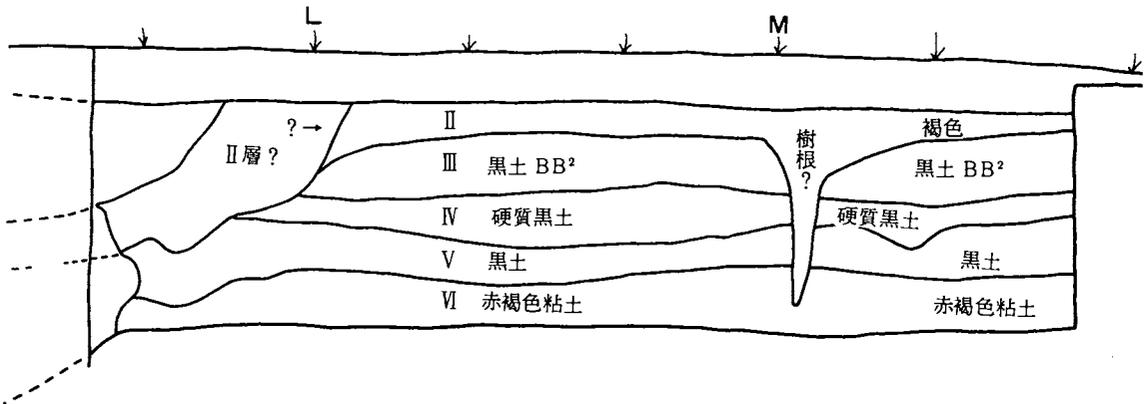
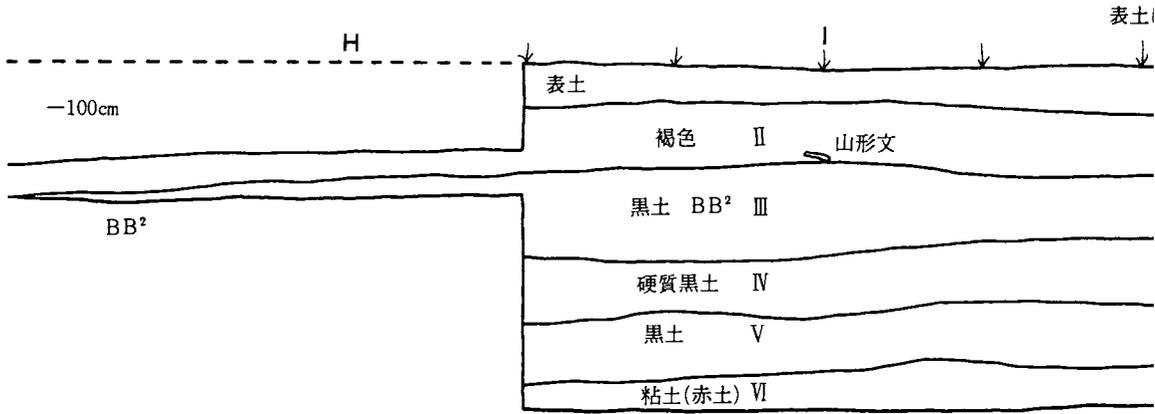
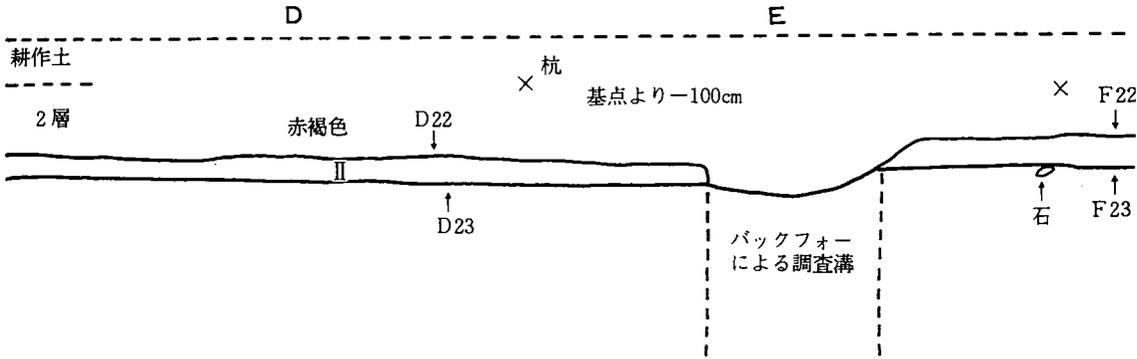
47. 8. 29 もみくら記載

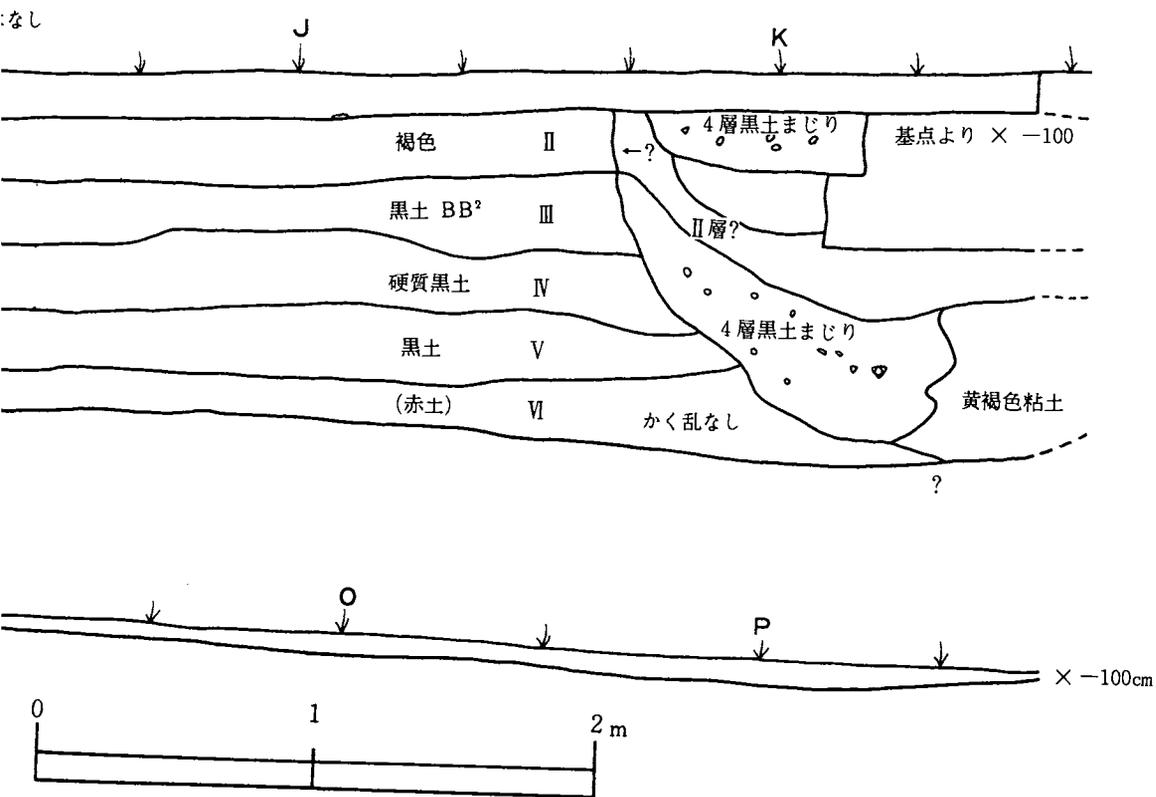
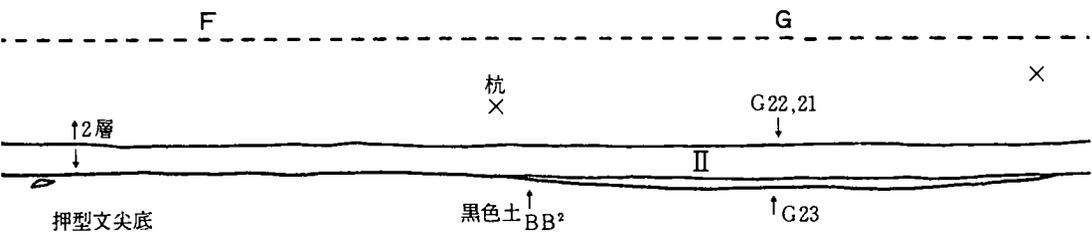


くぬぎ塚 (塚原古墳群)

47. 8. 29



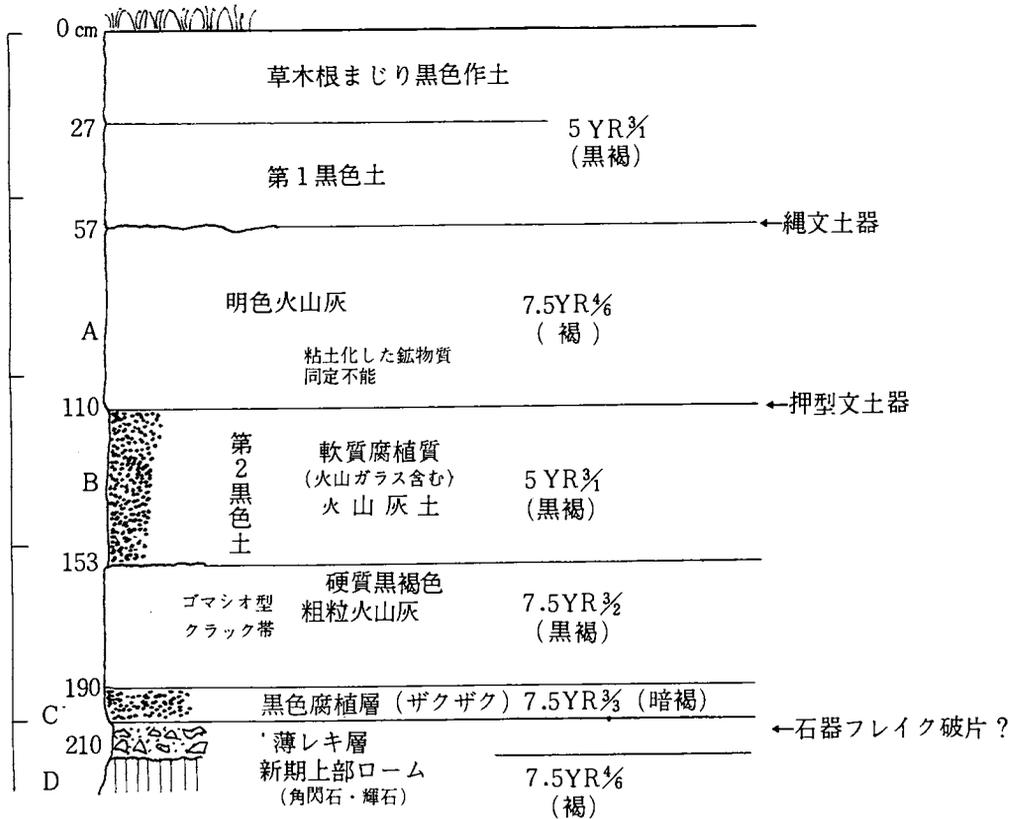




S 48.3.5~6 実測 平岡

第9図 DP22地質模式図

-17~18- (折込み)



第10図 沈目東の地質模式図

DP22地層断面

STA 219 地点は北にゆるやかにのぼり、南は小さな涯をともなって水田となる。東西は水田がはいり分水嶺をかたちづくる地点である。この点より南に42mの地点でゆるやかに西から東に向って斜面をつくる。DからHまでは調査によってすでに二層まで露出されていた。F区で押型文土器の尖底が、I区でも山形文が見られる。K区では4層の黒土が混入した落ち込みが、赤褐色粘土層（赤土）まではいる。性格は不明である。I区からM区までは赤褐色粘土層までほりさげたのであるが各層とも正常な堆積が見られる。これは、この地層断面と直交するバックフォーによる試掘溝でも全く同じである。F22・23の面を示しているが、この面に集石遺構がのる。

5. 出土遺物

土器及び石器については、原稿整理依頼期間中が文化財収蔵庫の改造とかさなつたため、遺物が凍結状態にあるので別の機会に報告したいと思う。

集石遺構が炉跡ではないと考えられる。というのは住居跡であれば堅い床面と集石が焼けていなければならないと思う。付近には炭化物も見られないし、柱痕らしい穴も方形又は円形の住居跡特有の並びも見受けられなかったようである。

押型文土器（第11図参照） 押型文は土層がよく残っていたせいかな全域から出土している。G 23・N 14付近は特に濃厚な分布を示している。F 32からは撚糸文の尖底土器が出土している。これは熊本市甲山（カプトヤマ）遺跡から条痕文と無文の尖底2点、宇土市宮ノ庄蟲貝塚から丸底の条痕文土器片と極端に少ない。一般に九州脊梁山脈の西側は平底の押型文が多い。訪諏原遺跡出土の撚糸文は平底である。

この遺跡の押型文は沈目式といわれる一群よりはやや古く、甲山遺跡の土器よりは山形文などが少なく、大形化している点でやや新しいものではないかと考える。発掘の層序ではこの遺跡の押型文の使用された期間は単一だと考えられ楕円押型文を中心とした時代だと考えられる。

阿高式土器 謂ゆる太凹文の典型的な阿高式で単独出土である。

黒川・山ノ寺式土器 耕作土直下にあつて攪乱を受けた残りの層がわずかに確認される。網目、蓆目の二種類と山ノ寺のくノ字口縁、又は夜臼式までさがる土器であろうか、出土している。

須恵器 須恵器や近世陶磁器片は表土から採集されている。

半磨製石斧 後、晩期の土器に伴うものであろう。石質等については手もとにひかえがないので不明である。

ポイント様石器 出土状態は表土に近いので確定できないが押型文に伴うものであろう。

石鏃 押型文土器に伴う層からの出土がある。3点ばかりで多く見られない。他に打製斧、円盤形石器などが出土している。

6. 押型文土器と集石遺構

地層的にみると黒土（B B²）の上に集石遺構がある。耕作土をはぐ段階では特に変化は認められないので、この遺構は押型文土器を伴うかあるいは押型文を礫中に混入するに容易な時代と考える。やや大きめの自然石を使って炉のようにかこみ、やや空間があつて上に角礫をのせる。この中に押型文土器が混入するのであるが円文の場合が多く、1個体分をふくむわけでもなさそうである。他に条痕文土器も見られる。角礫は人為的に割られたものであろうが、やや風化したような感もうける。

+

+



ムシロ目文土器

網目文土器

●御領式、黒川式土器

+

+

+

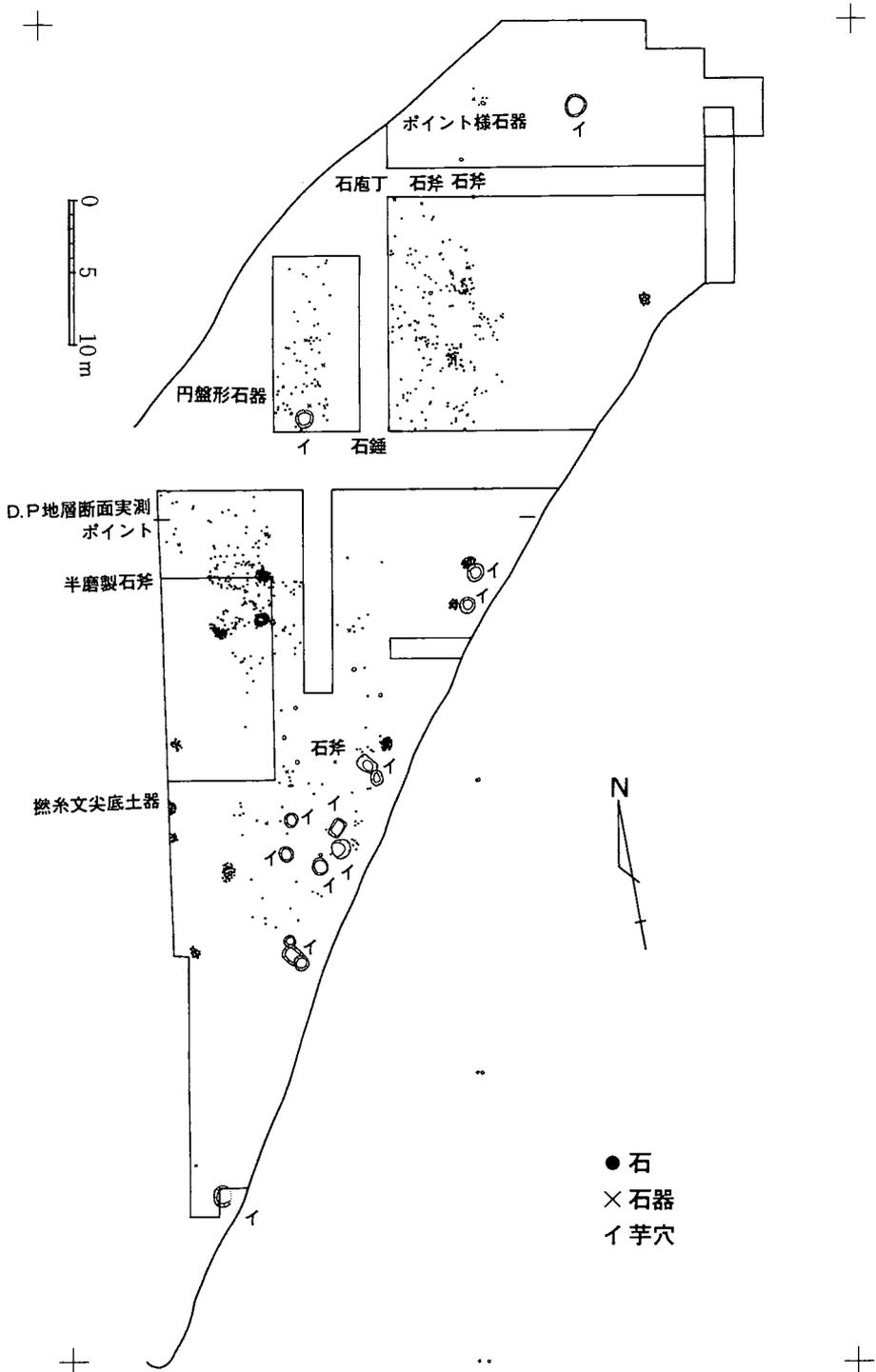
+



● 押型文土器

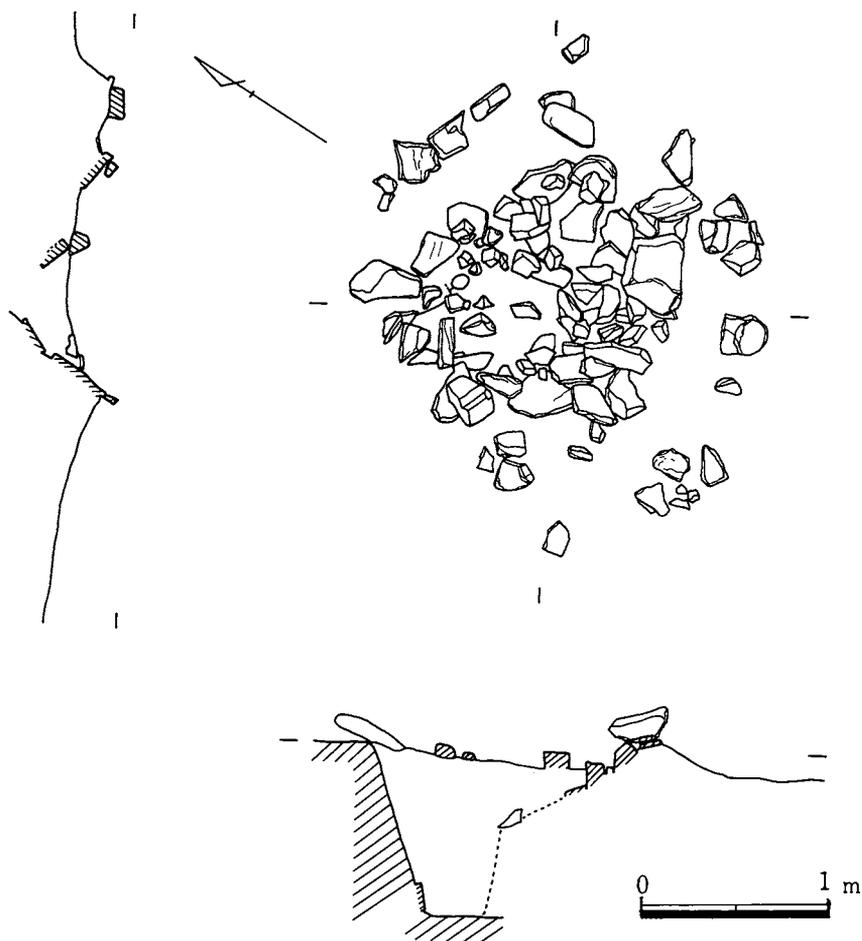
+

+



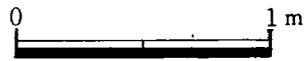
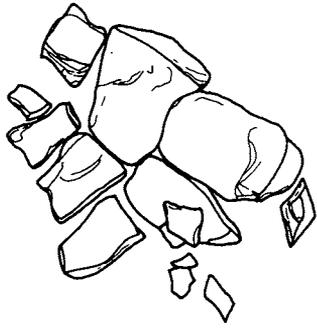
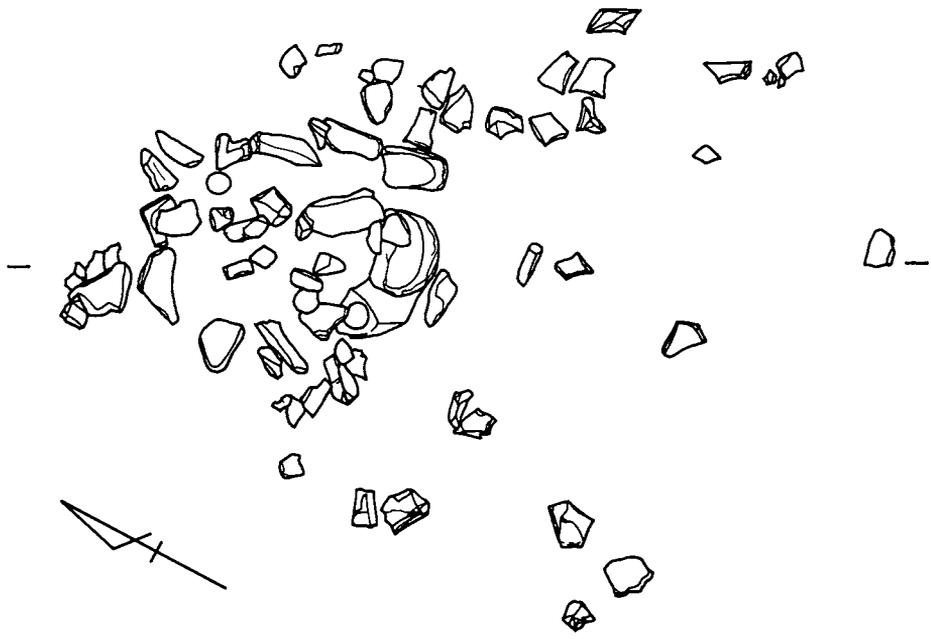
第11図 遺物出土分布図

G25集石遺構（第12図 図版2上） 石が中心部に向って45度位の傾斜をもっているこの遺構も平面図と断面図のみで完掘していない。この遺構調査の最後の実測図ではないかと思う。土饅頭にのせてあった石が中央が陥没した状態によく似ている。集石は扁平な石が多く、長径120cm、短径1m位のほぼ正円に近い。土器は楕円押型文が土の上に密着している。



第12図 G25集石遺構

G23集石遺構（第13図、図版2下） この集石遺構は調査当時熊本大学に在職された国分直一教授及び小谷凱宣助教授が担当されたが、期間が短かく平面図のみで完掘まではいたらなかったと思うがいずれ詳細な報文に接する機会があると思うが実測図にしたがって略記しておく。



第13図 G23集石遺構

土壌の確認はされていないが、大きな石5個が蜜着し中央が凹部になる。これに4×3cmの大きさの長楕円文土器がへばりつくようにのつている。大きな石は28×17cm、厚さ6cmである。この集石の状態は中のものを完全に密封したという感をいだかされる。この中に楕円押型文の破片が3点と条痕文土器の破片が見られる。

なお、実測図は国分、小谷両先生によるものである。

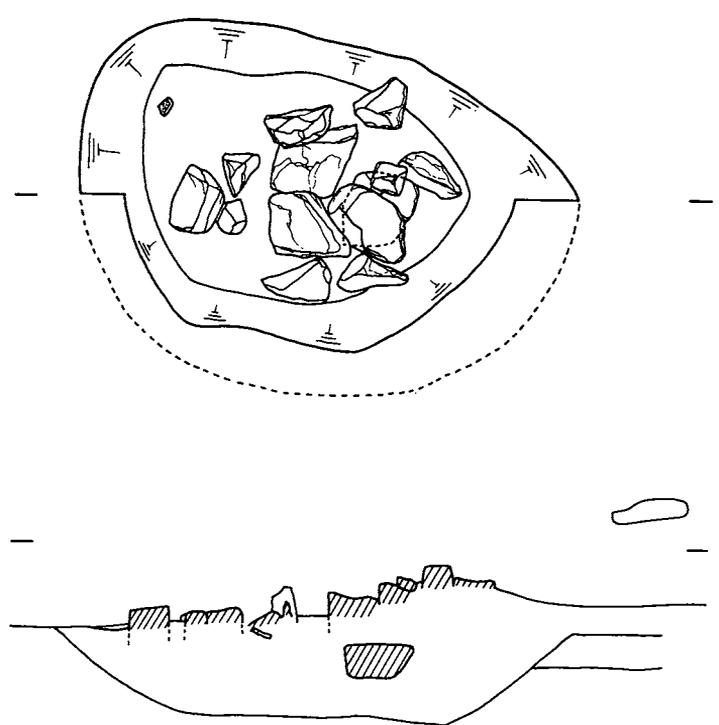
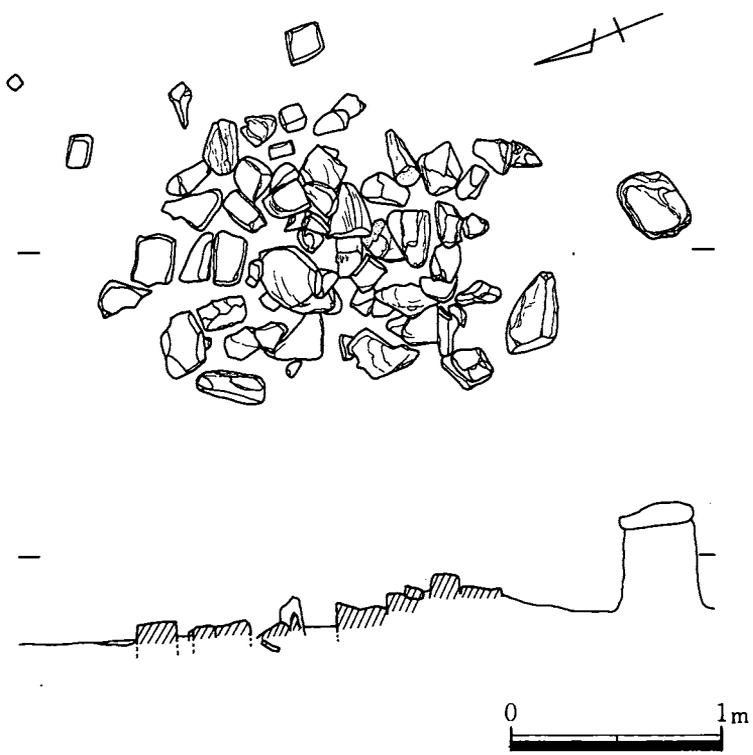
H27集石遺構（第14図、図版1） 表土に近い所に集石の存在を示すような15×12cm、厚さ4cm位の自然礫が認められる。平面図ではやや集石よりずれているが、他の集石遺構では確認できなかった。これは集石の上面が耕作土に近い関係で抜き取られたものであろう。卵形に近い土壌があつて、集石との間に約10cmの土層空間がある。大きな礫が中心に向かって傾いているのは空間が元はまだ大きかったものであろうか。この大きな礫の上に小さな角礫がほぼ土壌を覆うように広がっている。石組中に楕円押型文の破片が、また土壌にへばりつくように楕円押型文が出土した。この集石の材質は付近に見られる砂岩質の安山岩である。

土壌は卵形で長さ115cm、幅75cm、2層から掘りこみ3層まで深さ20cm、浅い皿状の土壌である。

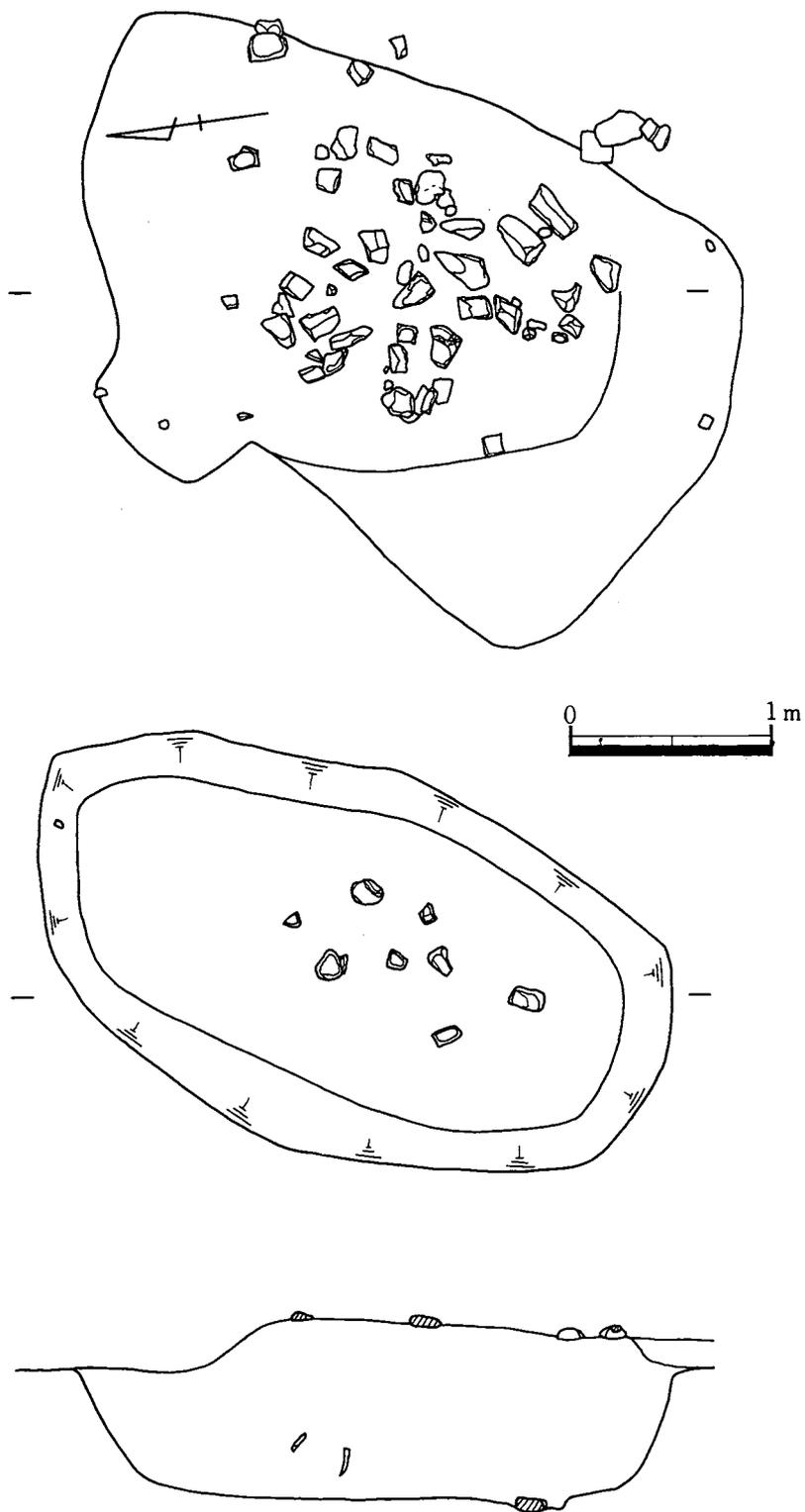
F34集石遺構（第15図、図版3下） 長楕円形の土壌の上に小礫が散在する。土壌は長軸145cm、幅88cm、深さ30cm、表面の集石は角礫であるが、他のように密でない。山形文の大きな破片が2個、土壌内には小礫と山形文口縁部の破片、他に小破片、円文の押型文が出土した。土壌底と集石との間には約40cmの空間がある。土壌内の土器片や小礫はこの穴を掘り、埋めるときに混入したものではなかろうか。小礫は土壌の半分を覆う感が強い。埋葬遺構と考えてよいのではなかろうか。

集石遺構の関連資料

集石遺構—配石遺構—石組・粗石遺構と表現は異なるが、これらの集石遺構については『中後迫遺跡』（菊池郡大津町中後迫遺跡調査団）の報告にくわしい。 （平岡）



第14図 H27集石遺構



第15図 F34集石遺構

第Ⅳ章 潭之上觀世音菩薩祭礼記考

はじめに

古保山の縄文遺跡を調査中に「観音講をやっているのだが百年祭でもやりたいので、一度古い記録を調べてくれないか。」という話があって、昭和47年7月、日野氏のところを訪れて引き継の箱をみせて貰った。その中には、講帳・覚・くじ札・竹ノ棒・近年の領収証がはいっており、講帳の表書からこの講が150年も前から続いていることを知った。しかし、残念なことには筆者はくずし字が読めないのです。写真におさめてその日はかえった。

後日、小場佐氏に「百年はすぎて来年は150年になる。」と話しておいた。本年は150年を記念して盛大に祭がなされることになった。

祖先の伝えたこの記録について明治生れの方は自分のおじいさんや父の名前がでてくるのではないのでしょうか。今後の研究のために色々と資料を提供いただければと思います。

覚

塔尾畑壺枚

一、野開畑九歩

右者北古保山村今度再地撫ニ付、右之地
方新規畝野開ニ相成申候。然處、私共立会、
観世音菩薩免地として地撫方并村方江、
奉願置申候。左候得者、祭礼之助ケニ茂可相成
存寄ニ而、右之段相認仕申候。以来祭礼之
儀者、竈当りより相勤申候ニ付、右畑作り茂矢張
祭礼ニ以連候。若又己後ニ至、祭礼其外如何
様之間違御座候而茂、右之地方者向後相違
無御座候。為其、覚書認置申処如件

天保十五年辰十一月

茂	助	金	助	萬	七
円	八	梅	田	武	八
半右衛門		又	八	甚	助

解説

本文は別添の資料のとおりであるが、免税の願いを村方へお願いして許されたその覚書である。又、収穫は祭のために使用すること、作は廻りですることなどその用途をきめている。

(26.5×38.2cm)

解説は、県文化財専門委員、原口長之先生にお願いいたしました。

お観音堂について

昭和二十四年三月十八日 建築 池屋組

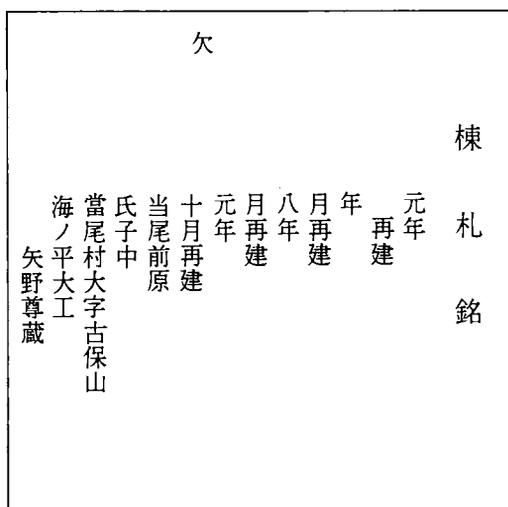
奉祭祀神代永盛棟

棟梁 小畑 豊秀

と見られ、池屋組の氏名と寄付者の一覧が堂内の板にかかっている。又一枚の古い棟札が残っておりこれは次のように記録されている。だが半分に割れており年号が不明である。長62.5cm 現存巾17cm。

だがこの棟札によると四回、創建の時と戦後の再建で計六回、二十五年に一回おそらく昔は草葺きの屋根であったのであろう。礎石には次に記すような燈籠の竿石が使用してある。

嘉永七年
奉寄進
池尾前原 氏子中



(平岡)

古 閑 遺 跡

例 言

- 1 本書は昭和48年熊本県教育委員会が熊本県上益城郡益城町古閑における遺跡の緊急発掘による一部の報告である。
- 2 報告書は、別府大学考古学研究室が、出土遺物の整理をおこない、実測図を作成し、それについての観察表を添付して全体をまとめたものである。
- 3 遺跡の全容については、資料の都合で割愛する。
- 4 本報告書作成の、実測図作成、整理、復原などにたずさわった者は下記の通りである。

整理・復原 下村 悟、加藤良彦、久保伸洋、宮本 教、
種浦 修、提 安信、沢田宗順、道上康仁、
米原圭子、野田英治、佐藤昭則、茂 和敏、
木村明史、安部裕久、角上寿行、妹尾周三、
小野信彦、綿貫俊一

実測図作成・図版作成 加藤良彦、久保伸洋、道上康仁、
野田英治、佐藤昭則、茂 和敏、木村明史、
角上寿行、妹尾周三

観察表及び本文作成 加藤良彦、久保伸洋、清田純一、
道上康仁、野田英治

写真撮影及び作業 藤田晴一、白井昭一、橘 昌信

第I章 古 閑 遺 跡

1

熊本県上益城郡益城町古閑は、赤井川の支流木山川の北側に位置する低い丘陵地帯に位置し、有望な縄文晩期主体の遺跡である。調査は、熊本県教育委員会文化課緒方勉、桑原憲彰、丸山武水氏らによっておこなわれ、多数の焼土とともに柱穴が存在し、晩期後半（晩期Ⅰ末）の集落として注目されたといわれる。

時代を判定する土器は晩期Ⅰ式（大石）後半の鉢形（口縁部体部より起立する二重口縁土器）と、浅鉢、皿形（黒色磨研土器）を主とする土器で、粗製、精製土器が相半する。加えて扁平石斧など多数が発見されて、この種遺跡の代表的存在といわれた。

この遺跡が発掘され以上の如く有望な遺構と、遺物の出土が風の便りとして私の耳に入ったのは、昭和48年（1973）のことであった。たまたま当時菊池市郊外の天城遺跡では縄文後期の低湿地遺構が大々的に発掘されていた。この方は熊本県教育委員会の依頼もあつて、遺跡の全容を細部にわたって実見することができた。天城遺跡は、溝状遺構と竪穴住居址群からなり、おびただしい縄文後期遺物の出土する中で、礫槨やカメ棺などが発見されて注目された。

古閑遺跡は、天城遺跡に後続する晩期初頭の遺跡として重要であったが、ついに調査中に遺跡の実態を実見することができず、残念であった。

古閑遺跡出土遺物は、調査後の昭和52年（1977）熊本県教育委員会より整理依頼があり、大量の遺物が持ち込まれた。土器の量は尨大で、その主体は縄文晩期前半（晩期Ⅰ式後半）にあたり、大分県大石遺跡や、熊本県新南部遺跡などの出土土器と時代を同じくするものと推定された。土器に共伴する石器にも注目すべきものが多く、扁平石斧をはじめ晩期特有の石器が多数発見され、全体として石鍬の数が少ないことが目立った。

2

古閑遺跡の縄文晩期遺物の整理は尨大な量の土器、石器であつて、これを一点一点検討していくうちに、接合資料が別の地点の採集箱からでてくることもあつて、ついに全体の総点検をしなければ整理ができなくなった。調査者の勘違いによって整理中にあやまり投入されたものとみられる。これによって後に送付された実測図写しと符合せず、止むなく、類似土器ごとに整理し、晩期土器の時代的特徴にしたがい、大きく分類せざるを得なかった。それにしても整理の途上で気付いたこともあつて、全体の進行がいちぢるしくおくれる結果となつた。そこで最終的には整理分類し、それに観察表を添付して実測図を作成することに止めざるを得なくなった。このように実測図作成にかかった頃、再度の遺物が昭和53年（1978）に送付された。古閑遺跡出土の土師式土器である。

近年土師式土器のうち古式土師の研究はさかんであるが、その大系が九州各地にまで及び、それぞれの特徴を分類するところまでは至らない。ここで古閑出土の土師式土器は、熊本県中央部における重要資料として精察しなければならないものであった。しかし、これについても、遺跡の実態は勿論、十分な出土資料がないので、それぞれの土器を正確に実測し、それに観察表を添付して問題を問う以外に方法がなかった。

本報告は、以上の理由から、主として実測図を正確に作成し、それについての特徴を観察するという方法で古閑遺跡出土土器を資料として検討していただくことに止めた。石器についても同様であるが、石器そのものには、製作技法の上で検討の必要もあり、若干の説明と古閑遺跡の特徴を述べることにした。

土器、石器の他に若干の土製品、土偶、石製品などがあるが、これも土器、石器同様、実測図に若干の観察、説明を加えたに止めた。石材や、石器の搬入などについては専門的な検査を実施して、その結果のみを記して参考とした。このように全体として、実測図による分類と資料の観察所見のみをもって報告書にかえる結果となったことについて、残念な点も多い。しかし、調査者の誠実な行動は、かくも多数の土器、石器の採集に勢力的に行動されたことをもって理解される。また尠大な資料の一点一点にあたり、それを細かく点検して、復原し、それを実測図にまとめあげるまでの困難な仕事にあたった整理者の努力を特記しておかねばならぬ。

3

ある時代の生活を明確にとらえ、そこで起きた技術や、行動を物的に証明するのが、層位的観察である。土器はその層位的研究にもとづいて把握した相対年代をあらわすものであるから、そのみでもある程度の年代的観察は可能である。しかし、層位は考古学にとってあらゆるものよりも優先すべきものであるので、遺跡ごとに把握すべきものである。古閑遺跡においては、前述の如く、遺物を観察するための現地実測に手違いがあったとみえて実際には土器形式のみを実測図によって把握せざるを得なくなった。そのなかで、「古閑遺跡 II区、東側土層断面」という20分の1縮尺の実測（昭和48年9月10日記）が丸山武水氏によって記録されている。これによると、1層から3層までの層位の中で、3層上部（茶褐色土）まで各層とも遺物がみられ、特に3層上部に多い。としながらも、全体に縄文、弥生、土師式土器が混合し攪乱のあとが強いと判断されている。こうした点を参考にしてみると、一部に露顕されたとみられる柱穴状の遺構や、溝状遺構は一部が後世の遺構ともみられる。このことは特に攪乱の強い1層下部にみられる焼土色（オレンジ）の小粒混合や、2層下面より掘り込みがみられる柱穴と判断される遺構など上記の実測図や、説明によると一部攪乱された面での遺構とみられ、縄文晩期の住居遺構と判断することを躊躇せざるを得ない。このように遺跡の状況を判断する調査資料から、調査者が如何に苦勞して遺構の確認にあたったかがよくわかる。それにしても、それぞれの遺

物出土状況の平面図から判断すると、安定した土器の包含は3層上面とみられる。

層序的な不安定は、実測図断面でもわかるが、土器そのものも細部に変化が多い。もともと縄文晩期土器は、粗製土器（深鉢）と、精製土器（浅鉢）に分類され、おおかた形態上の統一がみられるのである。古閑遺跡出土の晩期土器の細部に微妙な変化がみられることは、興味深いことであった。（賀川光夫）

第Ⅱ章 縄文時代の遺物

1. 晩期以前の土器

古閑遺跡出土の縄文土器は、晩期のものがその主体をしめ、それ以前のものについては、謹かに10点を数えるのみであり、その内訳は、早期4・中期4・後期2である。以下それぞれについて概説する。

(1) 早期（第17図1～4）

いずれも押型文である。全部で4片の出土であり、口縁部2、胴部2である。口縁部のものは、山形のもの③と楕円のもの④があり、前者は、東九州におけるヤトコロ式^{註1}並行期、後者は、田村式^{註2}並行期と思われるが、小片のため詳細は不明である。いずれにせよ、早期後葉のものであろう。

(2) 中期の土器（第17図5～8）

全部で4片の出土であり、口縁部3、胴部1である。口縁部のものは、口唇部が波状をなすもの⑤・⑧と、そうでないもの⑥・⑦があるが、いずれも阿高式^{註3}の形式名で呼ばれる土器にきわめて類似するが、小片のため詳細は不明である。

(3) 後期の土器（第17図9・10）

全部で2片の出土であり、いずれも口縁部である。口唇部に爪形様の連続文をほどこすもの⑨と、口縁部の沈線間に縄文をほどこすもの⑩があり、いずれも北久根山式^{註4}の形式名で呼ばれるものである。前川威洋氏の分類によれば、前者は北久根山遺跡出土土器第1類C、後者は第1類dにそれぞれ類似する。（清田純一）

（註1）鎌木義昌編「縄文文化の発展と地域性—九州東南部—」（日本の考古学）

（註2）同 上

（註3）同 上

（註4）乙益重隆・前川威洋「縄文後期文化—九州—」（新版考古学講座）

（註5）前川威洋「九州後期縄文土器の諸問題—北久根山遺跡—」（九州縄文文化の研究）

第2表 縄文晩期以前の土器

器種	図版番号	法量(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
深鉢	17-1		○口縁部が外反する深鉢である。	○外面と内面の口縁部に山形押型文をほどこし、内面胴部はナデによって調整する。	○色調：内面—黄褐色 外面—黄灰色 ○胎土：0.3~1mmの砂粒を含む。 ○早期後葉
深鉢	17-2		○深鉢である。胴部のみの破片であり、全様はわからない。 ○口縁部近くと思われ、外反する。	○外面にはタテ方向の山形押型文をほどこし、内面は、指による調整と思われ指頭痕がのこる。	○色調：内面—淡黄褐色 外面—明黄褐色 ○胎土：1mm前後の砂粒を含む。 ○早期後葉
深鉢	17-3		○口縁部のみの破片であり深鉢と思われる。	○外面に大形の楕円押型文をほどこし、内面には原体条痕をほどこす。	○色調：明褐色 ○胎土：0.3~0.5mmの砂粒を含む。 ○早期後葉
深鉢	17-4		○胴部のみの破片であり、深鉢と思われる。	○外面は横方向のナデのあと粗雑な山型押型文をほどこす。内面の調整については器壁が荒れており観察不可能。	○色調：内面—暗褐色 外面—明褐色 ○胎土：0.2~0.5mmの砂粒を含む。 ○早期後葉
深鉢	17-5		○口縁部のみの破片である。口唇部は波状を呈し、胴部へ向ってほぼ直立する。	○外面には、うずまき或いは右下りの凹線文をほどこす。内面は、板状の工具によるナデによって調整する。	○色調：内面—褐色 外面—暗褐色 ○胎土：0.5~1mmの砂粒及び滑石を含む。 ○阿高式土器
深鉢	17-6		○深鉢である。口縁部のみの破片である。口唇部に接合の痕跡がのこる。	○外面はナデによる調整のあと凹点文をほどこす。内面は、指によるナデによって調整する。	○色調：茶褐色 ○胎土：0.2~0.4mmの砂粒を含む。 ○阿高式土器
深鉢	17-7		○深鉢である。口縁部近くの破片であり、胴部へ向ってほぼ直行する。	○外面は、条痕の上からヘラナデをほどこし、上半には凹線文をほどこす。	○色調：内面—赤褐色 外面—暗褐色 ○胎土：0.1~0.2mmの砂粒を含む。 ○阿高式土器
深鉢	17-8		○口唇部が波状をなす深鉢である。口縁部のみの破片であり、胴部へ向ってほぼ直行する。	○外面は、ナデの上から凹点文及び凹線文をほどこし、内面は、指圧ののち、ヘラ状工具によるとと思われるナデをほどこす。	○色調：内外面とも暗褐色 口唇部のみ褐色 ○胎土：0.2~0.4mmの砂粒及び滑石を含む。 ○阿高式土器
深鉢	17-9		○口唇部に爪形状の連続文をほどこし、山形口縁を呈する深鉢形土器である。口縁部のみの破片であり、外反する。	○内外面ともヘラナデによる調整であり、口縁部内面に稜線をもつ。	○色調：内面—明黄褐色 外面—明褐色 ○胎土：0.2~0.5mmの砂粒を含む。 ○北久根山式土器
深鉢	17-10		○口縁が山形を呈する深鉢である。口縁部から頸部にかけての破片であり、頸部から口縁部へ向ってなだらかに外反する。	○外面は、粗研磨をほどこし、口縁部に2本、頸部直下に1本の沈線をほどこし、さらに、口縁部の沈線間にRL状の縄文をほどこす。	○色調：内面—暗褐色 外面—明黒褐色 断面—明黒褐色 ○胎土：0.5mm前後の砂粒を含む。 ○北久根山式土器

2. 晩期の土器

本遺跡より出土した縄文土器はそのほとんどが晩期のものであり、存在期間も数期にわたると思われ、その様相は単一でない。ここでは形態、手法の特徴から大きく粗製深鉢形土器と精製浅鉢形土器とに分け、さらに細分した。

(1) 粗製深鉢形土器

粗製深鉢形土器は口縁部が立ち上がるものA・B類と口縁部が直口するものC～F類とに大別される。

A類 (第18図-6)

頸部がゆるく彎曲してやや外反し、口縁が若干内反して長く立ち上がる。肩はゆるく小さく張り口径より小さい。全体的になめらかな形態を示す。

B類 (第18図2～5・7・第19図～24図)

肩が稜をなして強く屈曲し、頸部がゆるく彎曲して長くのび内反する。上部が外反しその上面に口縁が立ち上がり口縁下に段をつくる。口縁外面に条痕・平行沈線・弧線を基調とした沈線文を施す土器群である。

Ba類 (第18図1)

口縁の立ち上がりは短く、やや内反して長大にゆるく彎曲する頸部にそのままつらなる。

Bb類 (第18図2～5・7)

頸上部がゆるく外彎しその上端に口縁が若干内反するか(2・3・4)直立して(5・7)立ち上がる。外面に2～4条のヘラ描沈線を施文する。

Bc類 (第19・20・21図)

頸上部が強く外彎するか(第19図1・第20図1～3・6第21図2・3)稜をなして屈曲し(第19図3第20図4・5第21図1・4・6)その上端に口縁が外反して立ち上がる。また頸部の屈曲が大きく、立ち上がりの短いもの(第19図1・第20図3～6・第21図4・5)と屈曲がゆるく、立ち上がりながいBd類に程近い形態を示すものがある。口縁外面は貝殻条痕を残すもの(第19図3)貝殻条痕を若干ナデて平行沈線状に残すもの(第19図2・第20図2・3・6・第21図1・2)と数条のヘラ描沈線を施文するもの(第21図3)鋸歯状の沈線を施文するもの(第21図6)ナデ・ヘラナデ調整で無文のものがある。

Bd類 (第22・23図1・3～5)

頸上部が稜をなして強く短く外反し、その上面全体を覆って口縁が長く立ち上がって外反する。よって頸部内外面の稜が残る。(第22図1・2)はゆるい山形隆起をもつ。口縁外面は、貝殻条痕を残すもの(第22図4)貝殻条痕を若干なでて文様化するもの(第22図7)数条のヘラ描沈線を施文するもの(第22図3)ナデ調整で無文のもの(第22図1・5第23図1・4・5)

がある。

Be類 (第23図2・6～8)

Bd類の屈曲をさらに一段と小さくしたもので、頸部内面の稜線が消える。外面に貝殻条痕を残すもの(2・6)と条痕を平行沈線状に文様化するもの(7)とナデによる無文のもの(8)がある。

C類 (第24・25・26図)

頸・肩部で稜をなして「く」の字形に屈曲し、A・B類に比べ頸部は短く肩がやや強く張る。円盤貼付底部をなす。口縁部は直線的に外反するもの(第25図1～4・第26図4・5・7)と内彎気味に外反するもの(第26図1～3・6)がある。(第25図2)は7ヶ所に小さな山形隆起をもつ。(第26図3)は内面で段をなす。(第26図4)はBd類に類似し外面の段を沈線化したものと思われる。また頸部外面に「X」字状に貼付突帯をつけるもの(第26図8)とリボン状粘土帯をつけるもの(第26図9)がある。口縁外面には貝殻条痕を平行沈線状に文様化するもの(第26図1・3)ヘラ描沈線を施文するもの(第26図2)複線山形文を施するもの(第26図7)ナデ・ヘラナデによる無文のもの(第25図1～4・第26図4～6)がある。

D類 (第27図)

口縁部が直線的にのびて外反し頸部でゆるく外彎し、稜をなしてやや大きく張る肩になめらかにつらなる。口縁部外面は条痕調整後ナデ消すもの(1・4)と条痕を残して文様化するもの(2・3)がある。

Da類 (1～3)

頸部が外彎気味にのびて肩につらなるものである。

Db類 (4)

口縁がやや外彎気味にのび端部に貝殻擬似縄文を施す。頸部は内彎気味に開き胸が丸く張る形態を示す。

E類 (第29図3～5・7・9)

肩部で稜線をなして屈曲し、口縁部が内反もしくは外反し条痕調整を施す。

Ea類 (4・5・7)

屈曲した肩から口縁が内反し上部でゆるく外彎する。(7)は胸が丸く張る。

Eb類 (3・9)

屈曲した肩から口縁が直線的にのび内反するもの(3)とやや外反し口縁端部外面に刻目を施すもの(9)がある。

F類 (第29図6・8)

頸部がゆるく外彎気味にのび口縁が外反する小形土器で(8)はヘラケズリがなされる。

底部（第30図）

底部は形態の特徴から大きく4つに分類される。

a. 胴部からゆるやかなカーブをなして底部端につらなるもの（1）、b. ほぼ直線的につらなるもの（2・4・5）、c. 胴部から外反しほぼ垂直に底部端につらなるもの（3・6・7・8・12・15）と、d. 底部端が張り出すもの（9・10・11・13・14・16）がある。（2・4・6・8・10・15）は浅い上底をなす。

（2）精製浅鉢形土器

精製土器は所謂黒色研磨土器で入念な研磨がなされた土器群である。この手法の特徴から播鉢形土器も含め細分した。

G類（第31～34図）

口頸部が長くのび口縁部が低く立ち上がり外面に沈線を施文する土器群である。

Ga類（第31図1・3～12）

頸部が直立か（3・4・12）内反して長くのび、上位で強く外反し端部にやや発達した立ち上りをみせる肩が大きく張る形態を示す。（1）は立ち上がりが発達して外面に2条の沈線を施文しており古い様相を示す。（5・10）は1対の山形隆起をつくり、（10）には重弧文を施す。（7）は肩外面上部に沈線を1条施しともに古い様相を示す。（3・11）は頸部内面で稜をなす。

Gb類（第31図2・第32図1～5）

口頸部が比較的短く、中～下位でゆるく外彎し肩部で稜をなして小さく張り、胴の深い形態を示す。（第31図2）は口縁の立ち上がりが発達しゆるやかに波状口縁をなして波頂部上下端に刻み目を施しており古い様相を示す。

Gc類（第32図6・7第33図3・4・7・9・11・第34図1～5）

Gd類（第33図1・2・5・6・8・10・第34図6）

口頸部が彎曲気味に直線的に大きく外反し肩部で稜をなして小さく張り、胴部の浅い形態を示す。Gc類は頸部下位で彎曲しゆるやかに肩部につらなり、Gd類は口頸部が直線的にのび頸・肩部で稜をなして屈曲する傾向が強い。微妙な成形技法の差と思われるが基本的な形態に大差がなく、明瞭な分類は難しい。

Ge類（第34図7・8）

口頸部が直線的に大きく外反し頸・肩部で稜をなして屈曲し肩がやや大きく張る若干深い形態を示す。

H類（第35図2～9・第40図10）

口縁が直線的にのびる直口口縁でゆるい波状をなす形態を示す。

Ha類 (2～6)

口縁が直線的に大きく外反し頸部内面で稜をなし外面が凹線気味になって低い段をなすもの(2・3)と口縁外面に滋賀里式類似の2段の重弧文を施し頸部で稜をなして若干肩がつくもの(4)頸部内面が段をなすもの(5)頸下部でゆるく彎曲し肩が小さく張るもの(6)がある。(5)以外いずれも浅い胴部につらなる。

Hb類 (第35図7～9・第40図10)

口縁は比較的短く外反し、頸・肩部で稜をなして屈曲し肩がやや大きく張る。頸部に円筒状の粘土帯を貼り付けるもの(7)とリボン状の粘土帯を貼り付けるもの(8・9)がある。(8)は波頂端部に凹点を施す。

I類 (第35図1)

肥大した短く外反する直口口縁をなし頸・肩部で稜をなして屈曲し肩が大きく張る。口縁内面と肩外面上部に沈線を施す。古い様相を示す。

J類 (第36・37図1～10)

口頸部が短く外反し口縁内面が低い段をなしやや深い塊状の胴部につらなる土器群である。

Ja類 (第36図1・3・4・9・第37図7)

口縁の立ち上がりが比較的発達し外面に沈線を施すもの(1)と凹線気味に仕上げるもの(3)ゆるい山形隆起をなすもの(4)がある。頸部内面で稜をなして屈曲し外面で凹線気味に小さく彎曲し小さく張る肩につらなる。

Jb類 (第36図10・第37図1～5)

頸部内面が張り出し気味に稜をなして強く屈曲し外面は凹線気味に小さく彎曲して口縁から小さく張る肩へとなめらかにつらなる。(第37図1・5)はゆるい山形隆起をなし波頂部に凹点を施す。(第37図4)は胴部の彎曲がゆるく深い形態を示す。

Jc類 (第36図2)

口縁が低く立ち上がり、頸部内面で平坦面をつくって小さく彎曲し肩につらなる。

Jd類 (第36図6～8・11)

頸・肩部で稜をなして屈曲しやや肩が張る。(7)は口縁端部に凹点を施す。

Je類 (第37図6)

口縁内面が低い段をなし頸部でゆるく稜をなして屈曲し肩が張らずそのまま胴部につらなる。

Jf類 (第37図8・9)

口縁が短く外反しゆるく肩の張る胴部へとなめらかにつらなる。(9)は口縁端部外面に凹点を施す。(8)はJe類との中間的な形態を示す。

Jg類 (第36図5)

口縁が短く直立し外面は凹線気味に仕上げ屈曲してそのまま胴部へとつらなる。

K類 (第37図10)

口縁がゆるく外彎する直口口縁をなし、肩部で稜をなして屈曲する。

L類 (第40図3・4)

口縁が短く水平に近く外反する。頸部内面で稜をなして直角に屈曲しほぼ垂直にのび肩で稜をなして屈曲する。口縁内面に沈線を1条施す。

M類 (第29図1・2)

頸部中位でゆるく外彎する口頸部をなしやや肩の張る肩へつらなる。(2)は口縁が比較的発達して立ち上がる。調整のやや粗いものが目立つ。

N類 (第37図11・12・第40図11)

口頸部が短く外彎し中位に最大径をもつ球形の胴部になめらかにつらなる深い形態を示す。口縁部が低く立ち上がり外面に沈線を1条施す。

O類 (第38・39図)

胴部に最大径をもち口縁がやや内彎気味にまっすぐに立ち上がる直口口縁をなす播鉢形の形態を示す土器群である。

Oa類 (第38図3・4・6・10)

胴上部にうず巻状の貼付突帯を施すもの(3・4)と弧状の貼付突帯を施すもの(6・10)がある。

Ob類 (第38図2・5・7～9・11～14・第39図1・4)

胴上部に平行線・弧線を基調とした沈線文を施し多様な文様構成をなす。(第38図7・13・第39図1)には「X」字文を施す。(第38図14・第39図1)はほぼ直角に短く外反し内面に段をなす口縁部をもつ。(第39図4)は無文である。

Oc類 (第39図2・3・5)

口縁が低く立ち上がり頸部で稜をなして屈曲し外方に大きく張り出す胴部につらなる。(2)は口縁内面で段をなす。

Od類 (第38図1)

口縁が内彎気味に外反、頸部で稜をなして屈曲し下位から中位にかけてゆるく張る胴部につらなり平底に近い丸底をなす。

P類 (第40図1・2)

口縁部は直線的にのびて外反し内面に沈線を1条施す(2) 胴部は稜をなして強く屈曲し上半はゆるく外彎する。肩上部に2条の凹線を施す(1)。

Q類 (第40図5・6)

浅い皿状をなし直口口縁で口縁が大きく開くもの(6)と内彎するもの(5)がある。研磨はなされずナデが施される。

R類 (第40図7～9・12・13)

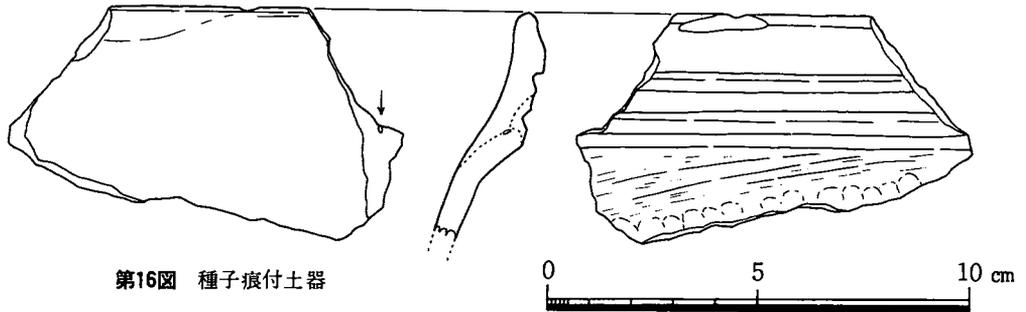
口径10cm内外の小形土器で深鉢・浅鉢の良好なセットをなす。祭祀土器と考えられる。(7)はGd類、(8)はHa類、(9)はOb類、(10)はHb類、(12)はC類、(13)はBb類の模造と思われる。

以上の如く古閑遺跡出土の晩期土器は多種多様を極め、従来あまり知られていない器種も多量に検出された。時期的には全期間にわたって遺物が見受けられるが、前葉から中葉にかけての時期に主体がおかれるようである。出土状況が不明であり各器種の共伴関係は不明であるが、参考までに各器種の口縁破片総数とその比率を第3表であげておく。(加藤良彦)

3. 穀類の種子(殻)痕付の土器

粗製の深鉢形土器の口頸部で、分類ではBc類にあたる。口縁部は外開きの頸部にゆるく曲折して立ち上がり外反する。口縁端部は丸く、口縁部外面はヨコナデの上から2条のヘラ描沈線が施文されている。頸部外面と口頸部内面は丁寧なヨコヘラナデで仕上げている。色調は外面が暗褐色で内面は黒褐色を呈し、胎土に0.5～1mmの砂粒を含む。焼成は良好である。

種子痕は、外開きの頸部の接合面上(図中の矢印)にある。(久保伸洋)



第16図 種子痕付土器

第3表 晩期土器形態別統計表

形態分類	A	Ba	Bb	Bc	Bd	Be	C	Da	Db	Ea	Eb	F	不明	小計			
口縁部破片総数	14	19	31	265	304	19	96	17	7	10	9	6	603	1400			
百分率(%)	0.5	0.7	1.2	10.0	11.5	0.7	3.6	0.6	0.3	0.4	0.3	0.2	22.8	52.8(%)			
Ga	Gb	Gc	Gd	Ge	G(不明)	Ha	Hb	I	Ja	Jb	Jc	Jd	Je	Jf	Jg	J(不明)	K
58	92	120	49	33	605	81	2	2	12	27	12	23	14	2	7	6	9
2.2	3.5	1.9	4.5	1.3	22.9	3.0	0.1	0.1	0.5	1.0	0.5	0.9	0.5	0.1	0.3	0.2	0.3
L	M	N	Oa	Ob	Oc	Od	P	Q	R		小計	総計					
9	5	4	7	11	1	36	3	9	9		1247	2647					
0.3	0.2	0.2	0.3	0.4	0.1	1.4	0.1	0.3	0.3		47.2(%)	100(%)					

第4表 縄文晩期土器

分類	図版 番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Ba	18-1	口径(41.6)	口頸部と胴部上半残存。外開きの頸部に曲折して立ち上がる口縁部。やや外反する口縁部。曲折部分はやや丸い。口縁端部はやや丸い面をなす。	口縁部外面、ヨコヘラナデ。胴部上半外面、左上りのヘラナデ。口縁部内面、ヨコヘラナデ。胴部内面、ヨコナデ。	外、暗赤褐色 内、明赤褐色 0.2~0.3mmの砂粒煤付着。
Bb	18-2	口径(36.4)	口縁部のみ残存。外開きの頸部に曲折して立ち上がる口縁部。やや内反する口縁部。曲折部分はやや丸い。口縁端部はやや丸い面をなす。口縁部外面に、3条の沈線。	外面、ヨコナデ。内面、ヨコヘラナデ。	外、暗褐色 内、褐色 0.2~0.3mmの砂粒。煤付着。
Bb	18-3	口径(32.0)	口頸部のみ残存。外開きの頸部に曲折して立ち上がる口縁部。曲折部分はやや丸い。ほぼ直立する口縁部。端部は丸い。口縁部外面に、4条の沈線。	口縁部外面、ヨコナデ。胴部外面、ナデ。口縁部内面、ヨコナデ。胴部内面、器面が荒れている。	外、暗褐色 内、灰褐色 0.5~1mmの砂粒。
Bb	18-4	口径(25.7)	口縁部のみ残存。外開きの頸部に曲折して立ち上がる口縁部。曲折部分はやや丸い。若干内反する口縁部。端部はやや丸い面をもつ。口縁部外面に、2条の沈線。	口縁部外面、沈線の上からヨコナデ。頸部外面、ヨコナデ。内面、ヨコナデ。	外、明灰褐色 内、明赤褐色 0.4~0.5mmの砂粒。煤付着。
Bb	18-5	口径(31.0)	口縁部のみ残存。外開きの頸部に曲折して立ち上がる口縁部。曲折部分はやや丸い。ほぼ直立する口縁部。端部は丸い。口縁部外面に、4条の沈線。	口縁部外面、沈線の上からヨコナデ。頸部外面、ヨコナデ。内面、ヨコヘラナデ。	外、暗黄灰色 内、明灰褐色 0.5~1mmの砂粒。
A	18-6	口径(19.7) 胴径(17.9)	底部のみ欠損。外開きの頸部に曲折して立ち上がる口縁部。曲折部分は丸い。内反する口縁部。端部は内傾する面をもつ。	口縁部・胴部上半の外面、ヨコナデ。胴部下半外面、タテヘラナデ。口縁部内面、ヨコナデ。胴部上半内面、ヨコヘラナデ。胴部下半内面、ヨコヘラナデ。	外、暗褐色 内、明褐色 0.2~0.5mmの砂粒。
Bb	18-7	口径(31.1)	口縁部のみ残存。外開きの頸部に曲折して立ち上がる口縁部。曲折部分はやや丸い。ほぼ直立する口縁部。端部はやや丸い面。口縁部外面、4条の沈線。	口縁部外面、沈線の上をヨコナデ。頸部外面、ヨコヘラナデ。内面、ヨコヘラナデ。	外、明褐色 内、黒褐色 1mm前後の砂粒。
Bc	19-1	口径(28.1) 器高(31.8) 胴径(29.6)	完形品。外開きの頸部に曲折して立ち上がる口縁部。曲折部分はやや丸い面をもつ。口縁端部はやや丸い面をもつ。胴部中に曲折部分をもち、やや丸い。底部は突帯し、平底。	口縁部両面、横方向の条痕の上をヨコナデ。胴部上半外面、ヨコナデの上を部分的にヨコヘラナデ。胴部上半内面、ヨコヘラナデの上をナデ。胴部下半外面、左上りのヘラナデ。胴部下半内面、丁寧なヨコヘラナデ。底部外面、摩滅。	外、内、暗黄褐色 0.1~0.2mmの砂粒。煤付着。内面に炭化物付着。接合痕が残る。
Bc	19-2	口径(32.6) 胴径(31.7)	口頸部・胴部の一部残存。外開きの頸部に曲折して立ち上がる口縁部。曲折部分はほぼ直角。胴部中に曲折部分をもち、やや丸い。	口縁部外面、横方向の条痕。胴部上半外面は、ヨコヘラケンマ。胴部下半外面は、左上りのヘラケンマ。内面は、ヨコヘラケンマ。	外、内、暗黄褐色 0.2~0.5mmの砂粒。煤付着。
Bc	19-3	口径(47.6)	口頸部のみ残存。外開きの頸部に曲折して立ち上がる口縁部。曲折部分は丸く、口縁部は外反する。端部は面をもつ。	外面は、横方向の条痕。口縁部内面は、ヨコナデ。胴部内面は、器面が荒れている。	外、内、明黄褐色 0.2~0.5mmの砂粒を多量に含む。接合痕が残る。

分類	図版 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
Bc	20-1	口径(39.0)	胴部下半欠損。外開きの頸部に曲折して立ち上がる口縁部。曲折部分はやや丸く、口縁部はすこし外反する。端部は丸みをもった面をもつ。胴部中に曲折部分をもち、丸い。	口縁部外面は、横方向の条痕の上をヨコヘラナデ。胴部上半外面は、左上りのヘラナデ。口縁部内面は、ヨコヘラナデ。胴部上半内面は器面が摩滅。	外、暗褐色 内、明黄褐色 0.2~0.5mmの砂粒。
Bc	20-2	口径(26.9)	口頸部のみ残存。外開きの頸部に曲折して立ち上がる口縁部。曲折部分は丸く、口縁部はすこし外反する。端部は丸みをもった面をもつ。	口縁部外面、横方向の条痕。胴部外面、左上りのヘラナデ。内面、ヨコヘラケンマ。	外、黒褐色 内、暗黄褐色 0.2~0.5mmの砂粒。
Bc	20-3	口径(34.4)	口頸部のみ残存。外開きの頸部に曲折して立ち上がる口縁部。曲折部分は丸く、口縁部は外反する。端部は丸い。	両面、横方向の条痕の上をヨコナデ。	外、暗黄褐色 内、明黄褐色 0.2mm~0.5mmの砂粒。 煤付着。
Bc	20-4	口径(26.0)	口頸部のみ残存。外開きの頸部に曲折して立ち上がる口縁部。曲折部分は直角に近く、やや丸い。口縁部は外反。端部は丸い。	口縁部外面、指圧痕の上をヨコナデ。口縁部内面、指圧痕の上をヨコヘラケンマ。	外、暗褐色 内、明茶褐色 0.5~0.7mmの砂粒。 煤付着。 口縁部に種子痕?
Bc	20-5	口径(31.9)	口頸部のみ残存。外開きの頸部に曲折して立ち上がる口縁部。曲折部分はやや丸く、口縁部は外反する。端部は、やや丸い面をもつ。	口縁部外面、横方向の条痕の上をヨコヘラナデ。頸部外面、ヨコヘラナデ。内面、ヨコヘラナデ。	外、内、暗褐色土。 0.2~0.5mmの砂粒。 煤付着。
Bc	20-6	口径(30.1)	口頸部のみ残存。外開きの頸部に曲折して立ち上がる口縁部。曲折部分は角をなす。口縁部は外反し、端部はやや丸い面をなす。	口縁部外面、左上りの条痕の上をヨコナデ。頸部外面、ヨコナデ。内面、ヨコヘラナデ。	外、内、明黄褐色。 0.2~0.5mmの砂粒を多量に含む。
Bc	21-1	口径(27.6)	口頸部と胴部上半が残存。外に若干開く頸部にあまり曲折せずに立ち上がる口縁部。曲折部分は丸く、あまり顕著ではない。口縁部と胴部はほぼ直立する。口縁端部はやや丸い面をもつ。	口縁部外面は、横方向の条痕の上をヨコヘラナデ。胴部外面、左上りのヘラナデ。口縁部内面、ヨコヘラナデ。胴部内面、器面が摩滅。	外、黄褐色 内、淡褐色 0.2~0.3mmの砂粒。 1mm前後の砂粒を少量含む。
Bc	21-2	口径(26.6)	口縁部のみ残存。外開きの頸部に曲折して立ち上がる口縁部。曲折部分は丸く、顕著ではない。口縁部は若干外反。口縁端部は、やや丸い面をもつ。	口縁部外面は、調整具?で多条沈線。頸部外面、ヨコナデ。口頸部内面、横方向の条痕。	外、明赤褐色 内、明褐色 0.5~1mmの砂粒を多量に含む。
Bc	21-3	口径(22.3)	口縁部のみ残存。外開きの頸部に曲折して立ち上がる口縁部。曲折部分は丸く、顕著ではない。口縁部は外反。口縁端部はやや丸い面をもつ。口縁部外面に、5条の沈線。	外面、ヨコナデ。口縁部内面、ヨコヘラナデ。頸部内面、器面が荒れている。	外、明褐色 内、明赤褐色 0.2~0.5mmの砂粒。
Bc	21-4	口径(28.0)	口縁部のみ残存。外開きの頸部に曲折して立ち上がる口縁部。曲折部分は角をなす。口縁部はやや外反する。端部は丸い。	口縁部外面、横方向の条痕の上をヨコヘラナデ。胴部外面と口縁部、ヘラケンマ。胴部内面、ヨコヘラナデ。	外、褐色 内、暗褐色 0.2~0.3mmの砂粒。
Bc	21-5	口径(33.5)	口縁部のみ残存。外開きの頸部にゆるく曲折して立ち上がる口縁部。外反する口縁部。端部はやや丸い面をもつ。	口縁部外面、ヨコナデ。口縁部内面、ヘラナデ。	外、灰褐色 内、明灰色 0.2~0.5mmの砂粒。 煤付着。

分類	図版番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Bc	21-6	—	口縁部のみ残存。外開きの頸部にゆるく曲折して立ち上がる口縁部。外反する口縁部。端部は面をもつ。口縁部外面に鋸歯状の沈線。	口縁部外面、横方向の条痕の上をヨコナデ。頸部外面、ヨコナデ。内面、ヨコヘラナデ。	外、暗褐色 内、褐色 0.2~0.5mmの砂粒。 煤付着。
Bc	21-7	口径(25.7)	口縁部のみ残存。外開きの頸部にゆるく曲折して立ち上がる口縁部。やや外反する口縁部。曲折部分はやや丸く、顕著でない。口縁端部はやや丸い面をなす。	外面、ヨコナデ。内面、指圧痕の上をヨコナデ。	外、暗灰褐色 内、淡灰褐色 0.5~2mmの砂粒を多量含む。
Bd	22-1	口径(44.8)	口頸部のみ残存。「く」の字形に曲折して外反する口縁部。頸部内面に稜をなす。口縁端部はゆるい波状で、端部は面をなす。	口縁部外面、ヨコナデ。胴部外面、ヨコヘラナデ。内面、ヨコヘラナデ。	外、明褐色 内、黒褐色 1mm前後の砂粒。
Bd	22-2	口径(30.4)	口頸部のみ残存。「く」の字形に曲折して外反する口縁部。頸部内面に稜をなす。口縁端部はゆるい波状で、端部は面をなす。口縁部外面に、5条の沈線。	口縁部外面、沈線の上をヨコナデ。胴部上半外面、横方向の条痕の上をヨコヘラナデ。胴部下半外面、ヘラナデ。口縁部内面、ヨコナデ。胴部内面、ヨコヘラナデ。	外、黒褐色 内、明赤褐色 0.2~0.5mmの砂粒。
Bd	22-3	口径(40.3)	口縁部のみ残存。「く」の字形に曲折して外反する口縁部。口縁端部は丸い。口縁部外面に、二連の重弧文沈線。頸部内面に稜をなす。	口縁部外面、ヨコナデの上を沈線。口縁部内面、ヨコヘラナデ。	外、内、明黄褐色 0.2~0.5mmの砂粒。
Bd	22-4	口径(35.6)	口縁部のみ残存。「く」の字形に曲折して外反する口縁部。端部は丸い。頸部内面に稜をなす。	口縁部外面、左上りの条痕。頸部外面、ヨコナデ。内面、ヨコナデ。	外、黒褐色 内、褐色 0.2~0.5mmの砂粒。
Bd	22-5	口径(41.7)	口縁部のみ残存。「く」の字形に曲折して外反する口縁部。端部は面をなす。頸部内面に稜をなす。	外面、ヨコナデ。内面、ヨコナデ。	外、暗褐色 内、褐色 0.2~0.3mmの砂粒。
Bd	22-6	口径(29.1)	口縁部のみ残存。「く」の字形に曲折して外反する口縁部。端部は丸い。頸部内面に稜をなす。口縁部外面に、3条の沈線。	口縁部外面、沈線の上をヨコナデ。頸部外面、ヨコナデ。口縁部内面、ヨコヘラケンマ。頸部内面、ヨコヘラナデ。	外、明褐色 内、黒褐色 0.5~1mmの砂粒。
Bd	22-7	口径(30.8)	口縁部のみ残存。「く」の字形に曲折して外反する口縁部。端部は面をなす。頸部内面に稜をなす。	口縁部外面、横方向の条痕の上をヨコナデ。胴部外面、ヨコナデ。内面、指圧痕の上をヨコナデ。	外、暗灰褐色 内、明黄褐色 0.2~0.5mmの砂粒。
Bd	23-1	口径(49.5)	口縁部のみ残存。外反する口縁部。端部は面をなす。	口縁部外面、横方向の条痕の上をヨコナデ。口縁部内面、ヨコナデ。	外、明黄褐色 内、明褐色 0.2~0.5mmの砂粒。
Be	23-2	口径(39.8)	口縁部のみ残存。外反する口縁部。端部は丸い。	口縁部外面、横方向の条痕。頸部外面、横方向の条痕の上をヨコナデ。内面、ヨコナデ。	外、黒褐色 内、明褐色 0.5~1mmの砂粒。
Bd	23-3	口径(35.0)	口縁部のみ残存。外反する口縁部。端部は面をもつ。口縁部外面に、5条の沈線が途中まで施文。	口縁部外面、横方向の条痕の上をヨコナデ後に沈線。頸部外面は、ヨコナデ。内面、ヨコヘラナデ。	外、黒褐色 内、暗褐色 0.2~0.5mmの砂粒。

分類	図版 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
Bd	23-4	口径(29.0)	口縁部のみ残存。外反する口縁部。端部は面をもつ。	外面、横方向の条痕の上をヨコナデ。内面、ヨコナデ。	外、暗褐色 内、暗灰褐色 0.5mm前後の砂粒を多量に含む。 煤付着。
Bd	23-5	口径(19.9)	口縁部のみ残存。外反する口縁部。端部は丸い。頸部内面にゆるい稜をもつ。	外面、ヨコナデ。内面、ヨコナデ。	外、明黄褐色 内、明褐色 0.2~0.5mmの砂粒。
Be	23-6	口径(23.1)	口縁部のみ残存。外反する口縁部。端部は面をもつ。頸部内面にゆるい稜をもつ。	口縁部外面、横方向の条痕。頸部外面は、ヨコナデ。口縁部内面、ヨコヘラナデ。頸部内面、ナデ。	外、明黄褐色 内、明赤褐色 1mm前後の砂粒。
Be	23-7	口径(13.3)	口縁部のみ残存。外反する口縁部。端部はやや丸い面をもつ。	口縁部外面、左上りの条痕。頸部外面、ヨコナデ。内面、ヨコナデ。	外、明褐色 内、明黄褐色
Be	23-8	口径(27.1)	口頸部のみ残存。若干外反する口縁部。曲折部分は不明瞭。口縁端部は丸い。	外面、横方向の条痕の上をヨコナデ。口縁部内面、ヨコナデ。頸部内面、横方向の条痕の上をヨコナデ。	外、暗灰褐色 内、明灰褐色 1mm前後の砂粒。
C	24-1	口径(38.2)	口縁部のみ残存。「く」の字形に外反する口縁部。端部は丸い。頸部内面に、稜をもつ。	口縁部外面、ヨコヘラナデの上に一部タテヘラナデ。頸部外面、ヨコナデ。内面、ヨコヘラナデ。	外、明茶褐色 内、明褐色 0.2~0.5mmの砂粒。 24-2と同一個体?
C	24-2	胴径(42.5)	胴部中位に曲折部分をもつ。	胴部上半外面、左上りのヘラナデ。胴部下半外面、左上りの条痕のヘラナデ。胴部上半内面、ヨコヘラナデ。胴部下半外面、器面が荒れている。	外、暗褐色 内、明褐色 0.2~0.5mmの砂粒。 煤付着。 24-1と同一個体? 接合痕が残る。
C	25-1	口径(30.3) 器高(23.5) 胴径(28.4)	完形品。「く」の字形に外反する口縁部。端部は丸い。頸部内面に稜をもつ。胴部中位に曲折部分をもつ。突出した底部は、ほぼ平底。	口縁部と胴部上半の外面は、横方向の条痕の上をヨコヘラナデ。胴部下半外面、ナデ。口縁部と胴部上半の内面は、横方向の条痕の上をヨコヘラナデ。胴部下半内面、ヘラナデ。	外、暗茶褐色 内、褐色 0.5~1mmの砂粒。 煤付着。
C	25-2	口径(32.1) 胴径(31.7)	口頸部のみ残存。「く」の字形に外反する口縁部。端部は面をなす。頸部内面にゆるい稜。胴部中位に曲折部分をもつ。口縁端部に7ヶ所の山形隆起があると考えられる。	外面、横方向の条痕の上をヨコヘラナデ。口縁部内面、指圧痕の上をヨコナデ。胴部内面、横方向の条痕の上をヨコヘラナデ。	外、明赤褐色 内、明黄褐色 0.2~0.3mmの砂粒。 煤付着。
C	25-3	口径(30.0)	口縁部のみ残存。「く」の字形に外反する口縁部。端部はやや丸い面をもつ。頸部内面に、稜をもつ。	外面、条痕の上をヨコナデ。口縁部内面はヨコナデ。その他の内面は器面が荒れている。	外、明茶褐色 内、明黄褐色 0.2~0.5mmの砂粒。
C	25-4	口径(23.5)	口縁部のみ残存。「く」の字形に外反する口縁部。端部は面をなす。頸部内面に、稜をなす。	外面、左上りの条痕の上をヨコナデ。内面、ヨコヘラナデ。	外、明褐色 内、明黄褐色 0.2~0.5mmの砂粒。
C	26-1	口径(31.2) 胴径(28.4)	胴部下半欠損。「く」の字形に外反する口縁部。端部は丸い。頸部内面に、稜をなす。胴部中位にゆるい曲折部分。口縁部外面に、調整具?による沈線が3条。	口縁部外面、沈線の上をヨコナデ。胴部外面、ヨコナデ。内面、ヨコヘラナデ。	外、暗褐色 内、明褐色 0.2~0.5mmの砂粒を多量含む。 接合痕が残る。

分類	図版 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
C	26-2	口径(25.0)	口縁部の残存。内彎しながら外反する口縁部。端部は丸い。口縁部外面に、5条の沈線。	口縁部外面、沈線の上をヨコナデ。口縁部内面、ヨコナデの上をヘラナデ。	外、暗褐色 内、明褐色 0.2~0.3mmの砂粒。
C	26-3	口径(32.1)	口縁部のみ残存。外反する口縁部。端部はやや丸い面をなす。	口縁部外面、横方向の条痕の上をヨコナデ。頸部外面、ヨコナデ。内面、ヨコナデ。	外、明黄褐色 内、明灰褐色 0.2~0.5mmの砂粒を多量に含む。
C	26-4	口径(16.7)	口縁部のみ残存。「く」の字形に外反する口縁部。端部は丸い。頸部内面に稜をなす。頸部外面に1条の沈線。	口縁部外面、横方向の条痕の上をヨコナデ。頸部外面、ヨコナデ。内面、横方向の条痕の上をヨコナデ。	外、暗褐色 内、明褐色 1mm前後の砂粒を少量含む。
C	26-5	口径(22.6)	胴部下半を欠損。「く」の字形に外反する口縁部。端部は面をなす。頸部内面に稜をなす。胴部中位に曲折部分。	口縁部外面、横方向の条痕の上をヨコナデした後にヘラナデ。胴部外面、条痕の上をヘラナデ。胴部内面、ヘラナデ。	外、内、暗褐色 0.2~0.5mmの砂粒。 煤付着。
C	26-6	口径(21.0)	口縁部のみ残存。内彎しながら「く」の字形に外反する口縁部。端部はやや丸い面をなす。頸部内面にやや丸い稜。	外面、横方向の条痕の上をヨコナデ。内面、指圧痕の上をヨコナデ。	外、暗褐色 内、明黄褐色 0.5~1mmの砂粒。 煤付着。
C	26-7	——	口縁部のみ残存。外反する口縁部。端部は丸い。頸部内面にやや丸い稜。口縁部外面に3~4条単位の連続山形文。	外面、ヨコナデとヘラナデの上に沈線。内面、ヨコナデの上をヨコヘラナデ。	外、明赤褐色 内、明灰褐色 1mm前後の砂粒。
C	26-8	胴径(20.9)	胴頸部のみ残存。頸部から胴部にかけて幅8mm前後の粘土帯を「X」字形に貼りつけている。	外面、内面、ヨコヘラナデ。	外、内、暗褐色 0.2~0.3mmの砂粒。
C	26-9	——	頸部のみ残存。頸部外面にリボン状の粘土帯。頸部内面に稜。	外面、ヨコナデ。内面、ヨコナデ。	外、内、明茶褐色 0.5~1mmの砂粒を多量に含む。煤付着。
Da	27-1	口径(45.1)	口縁部のみ残存。外反する口縁部。端部はやや丸い面をなす。	外面、左上りの条痕の上をヨコナデ。内面、ヨコヘラナデ。	外、褐色 内、明褐色 0.2~0.5mmの砂粒。
Da	27-2	口径(31.5)	胴部下半欠損。外反する口縁部。胴部中位に曲折部分をもつ。口縁端部はやや丸い面をなす。	口縁部外面、左上りの条痕。胴部外面は、指圧痕の上をヨコナデ。内面、指圧痕の上を横方向の条痕した後にヨコナデ。	外、暗褐色 内、明褐色 0.2~0.5mmの砂粒。 煤付着。 内面に炭化物付着。
Da	27-3	口径(31.7)	口縁部のみ残存。外反する口縁部。端部はやや丸い面をなす。	口縁部外面、横方向の条痕。口縁部内面、ヨコナデ。	外、暗褐色 内、明褐色 0.2~0.5mmの砂粒。
Db	27-4	口径(26.4)	口頸部のみ残存。やや外反する口縁部。端部は面をなす。頸部はゆるく曲折する。	口縁端面に、擬似縄文。口縁部外面、横方向の条痕の上をヨコナデ。胴部外面、条痕の上をナデ。内面、横方向の条痕の上をナデ。	外、明褐色 内、明灰褐色 0.5~1mmの砂粒。 煤付着。
	28-1	——	胴部下半のみ残存。外面に斜格子状に沈線文。	外面、タテヘラナデの上を沈線。内面、ヨコヘラナデ。	外、明赤褐色 内、褐色 0.2~0.5mmの砂粒。
	28-2	——	口縁部のみ残存。外反する口縁部。端部はやや丸い面をなす。	口縁部上半外面、ナデ。口縁部下半外面は、ヨコヘラケズリ。内面、ヨコヘラケンマ	外、暗褐色 内、黒色 0.2~0.5mmの砂粒。 焼成前の補孔？

分類	図版 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
	28-3	—	口縁部のみ残存。外反する口縁部。端部は丸い。口縁端部に山形突起がある。外面に山形突起を中心にした弧状沈線文が2条。	外面、横方向の条痕の上をナデの後にナデ。内面、横方向の条痕をヨコナデ。	外、内、明褐色 0.2~0.3mmの砂粒。
	28-4	胴径(38.4) 底径(10.3)	胴部上半欠損。胴部中位にゆるい曲折部分。突出して、やや上底の底部。	胴部外面、条痕の上を左上りのナデ。胴部内面、横方向の条痕の上をナデ。底部外面、ナデ。	外、暗褐色 内、明褐色 0.2~0.5mmの砂粒。 煤付着。
M	29-1	口径(39.6)	口縁部のみ残存。胴部中位で曲折部分をもつ。外反する口縁部。端部は、やや丸い面をもつ。	外面、条痕の上をヨコヘラナデ。内面、ヨコヘラナデ。	外、内、明灰褐色 0.2~0.5mmの砂粒。
M	29-2	口径(29.6)	口頸部のみ残存。外開きの頸部に曲折して立ち上がる口縁部。端部は丸い。胴部中位に曲折部分。	外面、ヨコヘラケンマ。内面、ヨコヘラケンマ。	外、黒褐色 内、褐色 0.4~0.8mmの砂粒。 煤付着。
Eb	29-3	口径(27.2)	口縁部のみ残存。外反する口縁部。端部は丸い。	外面、横方向の条痕。内面、横方向の条痕の上をヨコナデ。	外、暗褐色土 内、褐色 0.5~0.8mmの砂粒。
Ea	29-4	口径(27.2)	口縁部のみ残存。やや外反する口縁部。端部はやや丸い面をもつ。	外面、横方向の条痕。内面、ヨコナデ。仕上げが粗い。	外、褐色 内、暗灰色 0.5~0.8mmの砂粒。 煤付着。
Ea	29-5	口径(22.9)	口縁部のみ残存。外反する口縁部。端部は丸い。	外面、横方向の条痕。内面、ヨコヘラナデの上をヨコナデ。仕上げが粗い。	外、内、明褐色 0.2~0.3mmの砂粒。 煤付着。
F	29-6	口径(12.4)	口縁部のみ残存。外反する口縁部。端部は丸い。	外面は、ヨコナデ。胴部外面の一部は、ヨコナデの上をヘラナデ。内面、ヨコナデ。	外、内、暗灰褐色 0.2~0.5mmの砂粒。
Ea	29-7	口径(19.7) 胴径(22.4)	胴部下半欠損。外反する口縁部。端部は丸い。胴部は丸くはる。	外面、左上りの条痕の上をヨコナデ。胴部内面、指圧痕の上をヨコヘラナデ。口縁部内面、ヨコナデ。	外、暗茶褐色 内、明褐色 1mm前後の砂粒を多量に含む。
F	29-8	口径(17.1)	口縁部のみ残存。外反する口縁部。端部はやや丸い面をなす。	外面、ヨコヘラケズリ。内面、ヨコヘラケズリの上を部分的にヨコナデ。	外、暗灰褐色 内、淡灰褐色 0.5~1mmの砂粒を多量に含む。
Eb	29-9	—	口縁部のみ残存。直口する口縁部。端部はやや丸い面をなす。端部外面に刻み目をもつ。	外面、右上がりの条痕。内面、左上がりのヘラナデ。	外、褐色 内、明茶褐色
底部 a	30-1	底径(4.8)	底部のみ残存。底部端は鈍角をなす。ほぼ平底。	外面、ヨコヘラナデ。底面、ナデ。内面、ヨコナデ。	外、暗黄褐色 内、明黄褐色 0.5~1mmの砂粒。
底部 b	30-2	底径(6.5)	底部のみ残存。底部端は鈍角をなす。やや上底。	外面、ヨコヘラケンマ。底面、丁寧なナデ。内面、ヨコナデ。	外、黄灰褐色 内、暗灰褐色 1mm前後の砂粒を多量に含む。
底部 c	30-3	底径(8.7)	底部のみ残存。底部端は直角に近い。ほぼ平底。	外面上部、左上がりのヘラナデ。外面下部、ヨコナデ。底面、ナデ。内面、ヘラナデ。	外、内、明黄褐色 0.5~1mmの砂粒。
底部 b	30-4	底径(11.0)	底部のみ残存。底部端は鈍角をなす。やや上底。	外面、底面、内面ともナデ。	外、明灰褐色 内、暗灰褐色 0.5~1mmの砂粒。

分類	図版 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
底部 b	30-5	底径(7.4)	底部のみ残存。底部端は鈍角をなす。平底。	外面、ヨコヘラナデ。底面、ヘラナデ。内面、タテナデ。	外、暗褐色 内、黒灰色 1mm前後の砂粒。
底部 c	30-6	底径(8.5)	底部のみ残存。底部端はほぼ垂直に立つ。やや上底。	外面、タテヘラナデの上からヨコナデ。底面、ヨコナデ。内面、ヨコナデ。	外、内、暗褐色 0.5~1mmの砂粒。 煤付着。
底部 c	30-7	底径(9.9)	底部のみ残存。底部端はほぼ垂直に立つ。平底。	外面、底面、内面ともナデ。	外、淡赤褐色 内、明灰褐色 0.5~1mmの砂粒。 煤付着。
底部 c	30-8	底径(7.5)	底部のみ残存。底部端はほぼ垂直に立つ。やや上底。	外面、条痕の上を一部ヨコナデ。底面、ナデ。内面、ナデ。	外、明黄褐色 内、淡黄褐色 0.5~1mmの砂粒。
底部 d	30-9	底径(9.5)	底部のみ残存。底部端は外側にはり出す。ほぼ平底。	外面、ヨコナデ。底面、ヨコナデ。内面、ナデ。	外、内、黄褐色 1mm前後の砂粒。
底部 d	30-10	底径(8.8)	底部のみ残存。底部端は外側に若干はり出す。やや上底。	外面、ヨコナデ。底面、ナデ。内面、ヨコナデ。	外、明黄褐色 内、灰褐色 1mm前後の砂粒。
底部 d	30-11	底径(6.3)	底部のみ残存。底部端は外側にはり出す。ほぼ平底。	外面、ヨコヘラナデ。底面、ナデ。内面、ヨコヘラナデ。	外、暗褐色 内、黒褐色 0.2~0.5mmの砂粒。
底部 c	30-12	底径(15.0)	底部のみ残存。底部端は外側に若干はり出す。平底?	外面、条痕。底面と内面、ナデ。	外、内、明灰褐色 0.5~1mmの砂粒。
底部 d	30-13	底径(6.5)	底部のみ残存。底部端は外側に若干はり出す。平底。	外面、条痕の上をナデ。底面、ナデ。内面、ヘラナデ。	外、明黄褐色 内、暗灰色 1mm前後の砂粒。
底部 d	30-14	底径(9.7)	底部のみ残存。底部端は外側にはり出す。平底。	外面と内面、ヨコナデ。底面、ナデ。	外、赤褐色 内、暗黄褐色 1mm前後の砂粒。
底部 c	30-15	底径(9.2)	底部のみ残存。底部端はほぼ垂直に立つ。やや上底。	胴部外面、縦方向の条痕の上をナデ。底部外面、ヨコナデ。底面、ナデ。内面、ヨコヘラナデの上をヨコナデ。	外、黄灰色 内、暗褐色 0.5~1mmの砂粒。
底部 d	30-16	底径(12.7)	底部のみ残存。底部端は外側にはり出す。平底。	胴部外面、タテヘラナデ。胴部内面、ヨコヘラナデ。底部外面、ヨコナデ。底部内面、ヨコナデ。底面、ナデ。	外、暗黄褐色 内、黒褐色 1mm前後の砂粒。
Ga	31-1	口径(50.2)	口頸部のみ残存。口縁の立ち上がりは比較的発達し、外面に沈線2条施文。内面は段をなし、口縁端部とともに平坦に仕上げる。器壁がやや厚い。	内外ともにヨコナデ後粗いヨコヘラケンマ。	内、暗黄褐色 外、暗褐色 1~0.5mmの砂粒を少量。 煤付着。
Gb	31-2	口径(48.5)	口頸部のみ残存。ゆるやかな波状口縁をなし、波頭部と下端に一点刻み目を施す。外面に幅広の沈線1条施文。内面は段をなし、外面とともに平坦に仕上げる。器壁がやや厚い。	内面、ヨコヘラケンマ。外面、ヨコヘラナデ。	内、黒褐色 外、暗灰褐色 0.5mm以下の砂粒微量。

分類	図版 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
Ga	31-3	口径(37.8)	胴部下半欠損。口縁の立ち上がりは低い。口縁端部は丸く仕上げる。外面に沈線1条施文。頸部内面上位で稜をなす。	内、外面ともにヨコヘラケンマ。	内、やや明るい暗褐色 外、暗褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。 煤付着。
Ga	31-4	口径(36.8)	口頸部のみ残存。口縁の立ち上がりは低い。口縁端部は平坦に仕上げる。外面に凹線気味の平坦面をなす沈線1条施文。	内面、ヨコナデ後粗いヨコヘラケンマ。外面、ヨコナデ後半で粗いヨコヘラケンマ。	内、黒褐色 外、暗褐色 0.5mm程度の砂粒を多量。
Ga	31-5	口径(37.0)	口頸部のみ残存。口縁の立ち上がりは比較的発達し、1対の低い山形隆起を施す。口縁端部は若干平坦に仕上げる。外面に沈線1条施文。頸上部で強くほぼ水平に外彎する。	内面、ヨコヘラケンマ。頸下部に右上がりの指圧痕残る。外面、ヨコヘラケンマ。	内、黒褐色 外、暗褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。 煤付着。
Ga	31-6	口径(28.6)	口頸部のみ残存。口縁の立ち上がりは低い。口縁端部は丸く仕上げる。外面に沈線1条施文。頸上部で強く外彎する。	内面、粗いヨコヘラナデ。外面、ヨコヘラナデ。沈線施文後、ナデしており、沈線が寸断される。	内、淡黄褐色 外、灰褐色 0.5~1mm前後の砂粒を多量。 煤付着。
Ga	31-7	口径(29.1)	口頸部のみ残存。口縁端部は丸く仕上げ、外面に沈線1条施文。頸上部で強く外彎する。頸下部外面に沈線1条施文。	内、外面ともにヨコヘラケンマ。	内外とも上半黄灰褐色、 下半暗灰褐色 0.5mm以下の砂粒微量。
Ga	31-8	口径(30.5)	口頸部のみ残存。口縁の立ち上がりはやや発達し端部は丸く仕上げる。外面に沈線1条施文。頸上部で強く外彎する。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、黄褐色 外、暗褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。
Ga	31-9	口径(30.0)	口頸部のみ残存。口縁端部は丸く仕上げ、外面に浅い沈線1条施文。	内面、ヨコヘラケンマ。外面、粗いヨコヘラケンマ。	内、暗褐色 外、灰褐色 1~0.5mm前後の砂粒を少量。
Ga	31-10	——	口頸部のみ残存。口縁の立ち上がりは発達し、1対の山形隆起を施す。口縁端部は丸く仕上げ、外面に隆起間を起点とした5条の重弧文、下に沈線1条施文。頸上部で強く屈曲し、内面に稜をなす。	内面、ヨコヘラケンマ。外面、ヨコナデ後ヨコヘラケンマ。沈線施文後ケンマしており、沈線が寸断される。	内外とも暗灰褐色 0.5mm前後の砂粒を少量。 煤付着。
Ga	31-11	口径(20.0)	胴部下半欠損。口縁の立ち上がりはやや発達し、外反する。口縁端部は若干平坦に仕上げ、外面に沈線1条施文。頸部と肩部で強く屈曲し、内面に稜をなす。	内面、やや粗いヨコヘラケンマ。外面、ヨコヘラケンマ。	内外ともに淡黄褐色 0.5mm以下の砂粒を微量。 丹塗りの痕跡。 煤付着。
Ga	31-12	口径(17.0)	口頸部のみ残存。口縁の立ち上がりはやや発達し、口縁端部は平坦に仕上げる。外面にやや幅広の沈線1条施文。器壁が薄い。	内、外面ともにヨコヘラケンマ。	内、明灰褐色 外、暗灰褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。
Gb	32-1	口径(47.1)	底部欠損。口縁の立ち上がりは低く、外反する。口縁端部は若干丸く仕上げ、外面に幅広の沈線1条施文。頸下位で彎曲し、肩部で内外面に稜をなして屈曲する。器壁は口頸部で厚く、胴部下半はその半分程度。	内面、口縁から胴上半までヨコヘラケンマ。胴部下半タテヘラケンマ。外面、口縁から胴部上半までやや粗いヨコヘラケンマ。胴部下半は粗い左上がりのヘラケンマ。	内外とも暗褐色 0.5mm前後の砂粒を少量。 煤付着。

分類	図版番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Gb	32-2	口径(46.1)	胴部下半欠損。口縁の立ち上がりは低く、口縁端部は若干平坦に仕上げる。外面に凹線気味の平坦面をなす沈線1条施文。頸中位で彎曲し、肩部で外面に稜をなして屈曲する。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、暗褐色 外、暗灰褐色 0.5mm以下の砂粒を多量。 煤付着。
Gb	32-3	口径(43.9)	胴部下半欠損。口縁の立ち上がりはやや発達し外反する。口縁端部は比較的平坦に仕上げられ、外面に凹線気味の浅い沈線1条施文。頸下位でゆるく彎曲し、肩部で外面に稜をなして屈曲する。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、上半暗褐色、下半暗黄褐色 外、暗褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。
Gb	32-4	口径(42.8)	胴部下半欠損。口縁の立ち上がりは低く、やや内反する。口縁端部は丸く仕上げ、外面に沈線1条施文。頸下位でゆるく彎曲し、肩部で外面に稜をなして屈曲する。	内面、ヨコヘラケンマ。外面、ヨコヘラケンマ。胴部に不明瞭ながらタテ方向の指圧痕が残る。	内、上半暗灰褐色、下半黄灰褐色 外、暗灰褐色 0.5mm以下の砂粒を多量。
Gb	32-5	口径(41.1)	口頸部のみ残存。口縁の立ち上がりは低く外反する。口縁端部は丸く仕上げ、外面に浅い沈線1条施文。頸下位でゆるく彎曲。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、黄灰褐色 外、暗褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。 煤付着。
Gc	32-6	口径(38.0)	胴部欠損。口縁の立ち上がりは未発達で、やや内反する。口縁端部は平坦に仕上げ、外面に凹線気味の平坦面をなす沈線1条施文。頸部がゆるく外反しながら長くのび、下位で彎曲し肩部で内面に稜をなして屈曲する。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、黄灰褐色 外、暗褐色 0.5mm以下の砂粒を多量。
Gc	32-7	口径(26.8)	底部欠損。口縁の立ち上がりはやや発達し、口縁端部は丸く仕上げる。外面に凹線気味の平坦面をなす沈線1条施文。頸部が直線的にのび、下位で彎曲し、内面で不明瞭な稜をなす。肩部で内外面に稜をなして屈曲する。	内、外面とも粗いヨコヘラケンマ。	内、黒褐色 外、黄灰褐色 0.5~1mm前後の砂粒を多量。 煤付着。
Gd	33-1	口径(49.6)	胴部欠損。口縁部の立ち上がりは低く、口縁端部は丸く仕上げる。内面は段をなし平坦に仕上げ、外面に沈線1条施文。頸部は外反しながら直線的にのび、下端の内外面と肩部内面で稜をなして屈曲する。器壁が厚い。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、外とも暗褐色 0.5~1mm前後の砂粒を少量。 煤付着。
Gd	33-2	口径(43.1)	胴部欠損。口縁の立ち上がりはやや発達し、肥大する。口縁端部は平坦に仕上げ、外面に沈線1条施文。内面は段をなし平坦に仕上げる。頸部は直線的にのび下端の内外面で稜をなして、屈曲する。器壁が薄い。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、黒褐色 外、暗褐色 0.5mm前後の砂粒を多量。 煤付着。
Gc	33-3	口径(37.3)	全周のち残存。口縁の立ち上がりはやや発達し、端部は尖る。外面は凹線気味に仕上げる。頸部はゆるく彎曲してのび、肩部の内外面で不明瞭な稜をなしてゆるやかに屈曲する。	内、外面ともヨコヘラケンマ。横方向の条痕が若干残る。	内、黒褐色 外、口縁~ 胴上半暗褐色、胴下半~ 底部明赤褐色 0.5mm前後の砂粒を少量。 煤付着。

分類	図版 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
Gc	33-4	口径(42.7)	胴部欠損。口縁の立ち上がりは低く、肥厚する。口縁端部は丸く仕上げる。外面に浅い沈線1条施文。頸部はゆるく彎曲して長くのび、下端の内面で稜をなしてゆるやかに屈曲する。	内面、ヨコヘラケンマ。外面、ヨコヘラナデ。	内、黒褐色 外、暗灰褐色 0.5~1mm前後の砂粒を多量。
Gd	33-5	口径(35.0)	胴下半欠損。口縁の立ち上がりはやや発達し、外反する。口縁端部は平坦に仕上げる。頸部はゆるく彎曲しながら長くのび下端の内外面と肩部外面で稜をなして屈曲する。	内面、ヨコヘラケンマ。肩部に右上がりのヘラ圧痕を残す。外面、やや粗いヨコヘラケンマ。	内、外とも暗褐色 0.5mm前後の砂粒を多量。
Gd	33-6	口径(36.6)	胴下半欠損。口縁の立ち上がりは比較的発達し口縁端部は尖る。外面は凹線気味に仕上げる。頸部は直線的にのび、下端の内外面、肩部外面で稜をなして屈曲する。	内面、ヨコヘラケンマ。胴部に指圧痕が若干残る。外面、やや粗いヨコヘラケンマ。	内、暗灰褐色 外、黄灰褐色 1mm以下の砂粒を少量。 煤附着。
Gc	33-7	口径(28.1)	胴下半欠損。口縁の立ち上がりはやや発達し外反する。口縁端部は丸く仕上げ外面に沈線1条施文。頸部下端面と肩部内外面で稜をなして屈曲する。口頸部の器壁が厚い。	内面、ヨコヘラケンマ。外面、粗いヨコヘラケンマ。	内、黒褐色 外、上半暗褐色、下半黒褐色 0.5mm以下の砂粒を多量。
Gd	33-8	口径(26.5)	胴下半欠損。口縁の立ち上がりは未発達で口縁端部は若干平坦に仕上げる。内面は段をなし平坦に仕上げる。頸部は直線的にのび下端内面と肩部外面で稜をなして屈曲する。肩部が若干のびる。	内、外面とも粗いヨコヘラケンマ。	内、外とも暗褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。 煤附着。
Gc	33-9	口径(18.5)	胴下半欠損。口縁の立ち上がりは未発達で口縁端部は丸く仕上げる。頸部下端内外で稜をなして屈曲し胴がゆるく張る。	内面、やや粗いヨコヘラケンマ。頸上部と胴部に指圧痕が残る。外面、左へのヘラケズリ後、粗いヨコヘラケンマ、ケズリ痕が残る。	内、暗黄褐色 外、暗褐色 0.5~1mm前後の砂粒を多量。
Gd	33-10	口径(28.5)	胴下半欠損。口縁の立ち上がりはやや発達し外反する。口縁端部は丸く仕上げ、内面は段をなす。外面に深い沈線1条施文。頸部下端内面と肩部外面で稜をなして屈曲する。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、灰褐色 外、黄灰褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。 胴部内面に炭化物附着。 頸上部に外面からの二次穿孔。
Gc	33-11	口径(16.9)	底部欠損。口縁の立ち上がりは低く口縁端部は尖る。外面は凹線気味に仕上げる。頸部はゆるく彎曲し下端内外面と肩部外面で稜をなして屈曲する。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、暗灰褐色 外、黒褐色 0.5mm前後の砂粒を多量。 頸下部に内面からの二次穿孔。
Gc	34-1	口径(45.8)	胴部欠損。口縁の立ち上がりは低く口縁端部は丸く仕上げる。外面に沈線1条施文。頸部は直線的にのび下端で彎曲する。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、灰褐色 外、暗褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。
Gc	34-2	口径(45.4)	胴部欠損。口縁の立ち上がりはやや発達し外反する。口縁端部は丸く仕上げ内面は段をなす。外面に沈線1条施文。頸部下端で強く彎曲する。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、黄褐色 外、暗褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。

分類	図版 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
Gc	34-3	口径(40.0)	胴下部欠損。口縁の立ち上がりは未発達で口縁端部は丸く仕上げる。内面は段をなし、若干平坦に仕上げる。頸部下端外面と肩部外面で稜をなして屈曲しゆるやかに胴部へと移行する。	内面、やや粗いヨコヘラケンマ。外面、横方向の条痕調整後粗いヨコヘラケンマ。条痕が若干残る。	内、灰褐色 外、暗褐色 0.5~1mm前後の砂粒を多量。 煤付着。
Gc	34-4	口径(39.7)	胴部欠損。口縁の立ち上がりはやや発達し端部は丸く仕上げる。内面は平坦に仕上げ外面に凹線気味の沈線1条施文。頸下位で彎曲し肩部外面で稜をなして屈曲する。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、暗褐色 外、黒褐色 0.5mm前後の砂粒を少量。
Gc	34-5	口径(37.6)	胴部欠損。口縁の立ち上がりは低く、端部は丸く仕上げる。内面は平坦に仕上げ外面に浅い沈線1条施文。頸下位で彎曲し、肩部内面で稜をなして屈曲する。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、暗黄褐色 外、暗褐色 1mm以下の砂粒を少量。
Gd	34-6	口径(34.3)	胴下半欠損。口縁の立ち上がりは低く端部は丸く仕上げる。内面は若干平坦に仕上げ外面は浅い沈線1条施文。頸部下端肩部内外面で稜をなして屈曲する。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、灰褐色 外、淡黄褐色 1mm以下の砂粒を多量。
Ge	34-7	口径(30.5)	胴下半欠損。口縁の立ち上がりは低く、口縁端部は丸く仕上げる。内面は平坦に仕上げ外面は沈線1条施文。頸部下端内外面でゆるい稜をなして屈曲し、肩が張り外面に稜をなして屈曲する。	内面、ヨコヘラケンマ。外面、粗いヨコヘラケンマ。	内、暗褐色 外、上半黒褐色、下半暗黄褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。
Ge	34-8	口径(21.0)	底部欠損。口縁の立ち上がりは低く口縁端部は丸く仕上げる。外面に浅い沈線1条施文。頸部は直線的にのび、下端内外面肩部外面で稜をなして屈曲する。肩が張る。	内、外面ともヨコヘラケズリ後粗いヨコヘラケンマ。器壁の凹凸が目立つ。	内、黒褐色 外、暗褐色 0.5~1mm前後の砂粒を多量。
I	35-1	口径(47.0)	胴下半欠損。口縁は肥大したやや尖る直に口縁をなし、短く外反する。口縁端部は若干平坦に仕上げる。頸部内外面と肩部外面で稜をなし直角に屈曲する。口縁内面と肩上部外面に沈線1条施文。	内面、口縁部ヨコヘラケンマ。胴部ヨコヘラケズリ後下半でヨコヘラケンマ。外面、ヨコヘラケンマ。	内、灰褐色 外、黄灰褐色 0.5mm前後の砂粒を微量。
Ha	35-2	口径(33.1)	胴下半欠損。口縁は直線的に長くのびる直口縁でゆるい波状をなす。口縁端部は平坦に仕上げる。頸部内面で稜をなして屈曲し外面は段をなす。肩部内外面でゆるい稜をなして屈曲する。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、外とも暗黄褐色 0.5mm以下の砂粒を多量。
Ha	35-3	口径(23.8)	胴部下半欠損。波頂部がやや強く立ち上がるゆるい波状口縁をなす。口縁端部は若干平坦に仕上げる。頸部内面で稜をなして屈曲し外面は低い段をなす。肩部外面でゆるく屈曲する。	内面、ヨコヘラケンマ。外面、口縁上半左上がりのヘラケンマ、以下ヨコヘラケンマ。	内、外とも上半で暗黄褐色、下半で黒褐色 1mm以下の砂粒を少量含む。 内、外ともに煤付着。

分類	図版 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
Ha	35-4	口径(15.5)	全周の凸残存。波頂部欠損。ゆるい波状口縁をなし、口縁端部は平坦に仕上げる。外面には上下2段2条単位、4連の重弧文を施すと思われる。上段は波頂部、下段は波底部下を起点とする。頸部内外面と肩部外面でゆるい稜をなして屈曲する。	内面、上半ヨコヘラケンマ、底部不定方向のヘラケンマ。外面、上半ヨコヘラケンマ、底部タテヘラケンマ。	内、上半暗褐色、下半暗黄褐色 外、上半暗褐色 下半黒褐色 1mm以下の砂粒を多量。
Ha	35-5	口径(18.6)	胴下半欠損。やや強い波状口縁をなし口縁端部は平坦に仕上げる。頸部内面で大きく、外面で凹線気味に小さく段をなし、塊状の胴部につながる。	内面、上半ヨコヘラケンマ、下半右上がりのヘラケンマ。外面、口縁左上がりのヘラケンマ、胴上部ヨコヘラケンマ、胴下部左上がりのヘラケンマ。	内、外とも暗褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。
Ha	35-6	口径(14.5)	底部・波頭部欠損。ゆるい波状口縁をなし口縁端部は若干平坦に仕上げる。頸部でゆるく彎曲し、肩部外面で稜をなして屈曲する。	内、外面ともヨコナデ後粗いヨコヘラケンマ。器種の凹凸が目立つ。	内、黒褐色 外、上半黒褐色、胴下部暗褐色 0.5mm前後の砂粒を少量。
Hb	35-7	胴径(22.0)	口縁、底部欠損。頸部肩部で強く屈曲して肩が張り、算盤玉状をなす。肩上部に上方に彎曲する貼付突帯を残しており、これは頸部にかけての円筒状の突起の欠損と思われる。	内、外面ともヨコナデ。	内、外とも上半暗褐色、下半黒褐色 0.5mm前後の砂粒を少量。
Hb	35-8	口径(16.8)	胴下半欠損。波状口縁をなし口縁端部は平坦に仕上げる。波頭部口縁端に凹点を施す。頸部、肩部で稜をなし直角に屈曲する。波頂部下の頸部外面に4cm程のリボン状粘土帯を貼り付ける。	内面、ヨコヘラケンマ。外面、口縁上部右上がりのヘラケンマ、以下ヨコヘラケンマ。	内、上半暗褐色、下半黄褐色 外、暗灰褐色 1mm以下の砂粒を少量。
Hb	35-9	胴径(33.2)	口縁部胴下半欠損。頸部、肩部で強く屈曲して肩が張り、算盤玉状をなす。頸部内面に沈線1条施文。外面に6cm程のリボン状粘土帯を貼り付ける。	内、外面ともヨコナデ。	内、上半暗黄褐色、下半黒褐色 外、暗褐色 0.5~1mm前後の砂粒を少量。 外面煤付着。 内面下半炭化物付着。
Ja	36-1	口径(43.8)	底部欠損。口頸部が短く、外反する。口縁端部は平坦に仕上げ内面は段をなし平坦に仕上げる。外面に浅い沈線1条施文。頸部内面と肩部内外面で稜をなしてゆるく屈曲する。	内面、口縁~胴上半ヨコヘラケンマ、胴下半左上がりのヘラケンマ。外面、口縁~胴上半ヨコヘラナデ、胴下半タテヘラナデ。	内、暗褐色 外、上半暗褐色、下半黄褐色 0.5mm以下の砂粒を多量。 1~1.5mm前後の砂粒を少量。 煤付着。
Jc	36-2	口径(34.8)	胴下半欠損。口縁の立ち上がりは未発達で口縁端部は丸く仕上げる。頸部内面で平坦面をつくって小さく彎曲し、肩部外面で稜をなして屈曲する。	内面、やや粗いヨコヘラケンマ。外面、ヨコヘラケンマ。	内、暗灰褐色 外、口縁部暗灰褐色、以下黒褐色 0.5mm前後の砂粒を多量。 内、外ともに煤付着。
Ja	36-3	口径(29.8)	胴下半欠損。口縁の立ち上がりは未発達で外反し端部は尖がる。内面は低い段をなし、外面は凹線気味に仕上げる。頸部内面と肩部外面で稜をなしてゆるく屈曲する。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、口縁部黄灰褐色、以下黒褐色 外、暗褐色 0.5mm以下の砂粒を多量。
Ja	36-4	口径(21.8)	胴下半欠損。口縁は極めてゆるい波状口縁をなし外反する。口縁端部は平坦に仕上げ、内面は段をなす。頸部内面で平坦面をつくり張り出し気味に稜をなして屈曲し外面で凹線気味に小さく彎曲する。肩外面で稜をなしゆるく屈曲する。	内、外面ともにヨコ条痕調整後ヨコヘラケンマ。	内、暗赤褐色 外、暗褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。

分類	図版 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
Jg	36-5	口径(28.5)	胴下半欠損。口縁が短く直立し、端部は尖がる。内面で低い段をなし若干平坦に仕上げる。外面は凹線気味に仕上げ屈曲してそのまま胴部につながる。	内、外面ともヨコナデ後粗いヨコヘラケンマ。器壁の凹凸が著しい。	内、暗黄褐色 外、上半暗黄褐色、下半明黄褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。煤付着。
Jd	36-6	口径(17.9)	胴下半欠損。口縁は短く外反し端部は平坦に仕上げる。内面は段をなし平坦に仕上げる。頸部内外面と肩部外面で稜をなして屈曲し胴が大きく張る。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、口縁部暗褐色、以下黄褐色 外、暗褐色 0.5~1mm前後の砂粒を少量。煤付着。
Jd	36-7	口径(26.0)	胴下半欠損。口縁は短く外反し端部は平坦に仕上げる。内面は段をなして若干平坦に仕上げる。口縁端部に凹点を施す。	内面、やや粗いヨコヘラケンマ。外面、ヨコヘラケンマ。	内、暗灰褐色 外、口縁部黒褐色、以下茶褐色 0.5mm以下の砂粒を多量。煤付着。胴下部外面に堅果類の圧痕と思われる凹点が残る。
Jd	36-8	口径(16.5)	胴下半欠損。口縁端部は丸く仕上げられ、内面に沈線1条施文。外面で稜をなして屈曲する。肩部で屈曲し肥厚する。	内面、粗いヨコヘラケンマ。外面、ヨコナデ後粗いヨコヘラケンマ。	内、暗灰褐色 外、黄褐色 1mm以下の砂粒を多量。
Ja	36-9	口径(16.3)	底部欠損。口縁端部は丸く仕上げ内面に沈線1条施文。頸部内面と肩部内面で稜をなし、頸部外面は凹線気味に仕上げる。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、暗褐色 外、暗赤褐色 0.5mm前後の砂粒を多量。
Jb	36-10	口径(16.3)	胴下半欠損。口縁端部は丸く仕上げ内面に沈線1条施文。頸部内面で稜をなして屈曲し外面は凹線気味に仕上げる。器壁が薄い。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、外とも黒褐色 0.5mm以下の砂粒を微量。
Jd	36-11	口径(14.6)	胴下半欠損。口縁端部は若干平坦に仕上げ内面は段をなして平坦に仕上げる。頸部内外面と肩部外面で稜をなし屈曲する。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、暗褐色 外、黒褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。
Jb	37-1	口径(32.2)	胴下半欠損。口縁はゆるい波状口縁をなし端部は平坦に仕上げる。内面は段をなし平坦に仕上げる。波頭端部には刺突による凹点を施す。頸部内面、肩部外面で稜をなして屈曲する。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、口縁部暗黄褐色、以下暗褐色 外、暗褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。
Jb	37-2	口径(17.8)	底部欠損。口縁端部は丸く仕上げ内面は低い段をなす。頸部内面で強く肩部外面でゆるく稜をなして屈曲する。器壁は厚い。	内、外面ともヨコナデ後粗いヨコヘラケンマ。	内、暗褐色 外、上半暗褐色、下半黒褐色 1mm以下の砂粒を多量。2~3mmの砂粒を少量。
Jb	37-3	口径(17.2)	胴下半欠損。口縁端部は丸く仕上げ内面はやや発達した段をなす。頸部内面で強く肩部外面でゆるく稜をなし屈曲する。	内面、上半ヨコヘラケンマ、下半左上がりのヘラケンマ。外面、ヨコヘラケンマ。	内、暗褐色 外、黒褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。
Jb	37-4	口径(17.9)	胴下半欠損。口縁端部は平坦に仕上げ内面は段をなす。頸部内面でやや強く肩部外面でゆるく稜をなして屈曲する。頸部外面の彎曲はゆるく胴部が深い。	内面、粗いヨコヘラケンマ。外面、口縁ヨコナデ、以下ヨコ条痕調整後ヨコヘラケンマ。	内、上半黒褐色、下半暗褐色 外、上半黒褐色、下半明黄褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。

分類	図版 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
Jb	37-5	口径(16.0) 胴径(16.3)	胴下半欠損。口縁は低い山形突起をつくり、端部は丸く仕上げ、内面で段をなす。口縁突起部外面と直下の肩部に刺突による凹点を施す。頸部内面で強く肩部外面でゆるく稜をなし、中位でゆるく張る胴部に移行する。口頸部が肥厚する。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、暗灰褐色 外、黒褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。
Je	37-6	口径(13.9)	底部欠損。口縁端部は丸く仕上げ内面は低い段をなし若干平坦に仕上げる。頸部内外面でゆるく稜をなして屈曲しそのまま塊形の胴部につらなる。	内、外面とも口縁〜胴上部ヨコナデ、以下ヨコナデ後ヨコヘラケンマ。	内、外とも上半明黄褐色 下半黒褐色 0.5~1mmの砂粒を多量。
Ja	37-7	口径(17.8)	胴下半欠損。口縁端部は若干平坦に仕上げ内面は低い段をなし平坦に仕上げる。頸部内面、肩部外面でやや強く稜をなして屈曲する。口頸部は薄く仕上げる。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、暗褐色 外、黒褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。
Jf	37-8	口径(12.4)	胴下半欠損。口縁端部は丸く仕上げ内面はやや発達した段をなす。頸部内面で稜をなして屈曲し外面はゆるやかに彎曲して胴部につらなる。	内面、やや粗いヨコヘラケンマ。 外面、ヨコヘラケズリ後粗いヨコナデ。	内、暗褐色 外、黒褐色 0.5mm前後の砂粒を多量。 1mm前後の砂粒を少量。 煤付着。
Jf	37-9	口径(19.4)	底部欠損。口縁端部は平坦に仕上げ内面は低い段をなし平坦に仕上げる。端部に凹点を施す。頸部は彎曲しやや肩の張る胴部につらなる。	内、外面ともヨコ条痕調整後粗いヨコヘラケンマ。条痕が若干残る。器壁の凹凸が著しい。	内、暗褐色 外、暗赤褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。 煤付着。
K	37-10	口径(18.4)	胴下半欠損。口縁はゆるやかに外彎し端部は平坦に仕上げる。肩部で稜をなして屈曲する。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、暗褐色 外、暗黄褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。
N	37-11	口径(21.1)	胴下半欠損。口縁の立ち上がりはやや発達し外反する。口縁端部は丸く仕上げ内面は段をなす。外面に沈線1条施文。頸部は下部でゆるやかに彎曲し外面でゆるい段をなす。内面はやわらかに中位に最大径をもつ胴部につらなる。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、黒褐色 外、暗褐色 0.5~1mm前後の砂粒を多量。
N	37-12	口径(16.6)	胴下半欠損。口縁の立ち上がりは低く内反する。口縁端部は尖る。内面は段をなし外面には凹線気味の平坦面をなす沈線1条施文。頸部は小さく彎曲し内面で稜をなしてゆるく屈曲する。外面はなめらかに胴へ移行する。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、外とも暗黄褐色 1mm以下の砂粒を微量。
Od	38-1	口径(32.0) 胴径(32.3) 器高(26.2)	全周のき残存。口縁は内彎気味にゆるく外反し端部は直立する。端部は丸く仕上げる。頸部で稜をなして屈曲し下位から中位にかけてゆるく張る胴部につらなる。底部は平底に近い丸底で中心部の器壁がやや厚い。	内面、口縁〜胴上位細かなヨコヘラナデ、胴中位左上がりのヨコヘラナデ、部分的にヘラケズリ痕が残。胴下位〜底部ヘラナデ後ヨコナデ。外面、口縁、底部ヨコヘラナデ。胴部左上がりの粗いヘラナデ。	内、口縁部黄褐色、以下暗褐色 外、口縁部黄褐色、以下暗赤褐色 0.5~1mm前後の砂粒を少量。

分類	図版番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Ob	38-2	口径(19.2)	胴下半欠損。胴下位に最大径をもち口縁が内彎気味にゆるくのびやや内反する。口縁端部は若干尖がる。外面に2条の平行沈線によって区画した中に5~7条を単位とした重弧文を上下の対位置に8連する。	内面、ヨコナデ後まばらなヨコヘラナデ。外面、上部ヨコヘラケンマ、下部左上がりのヘラケンマ。	内、黒褐色 外、黄褐色 1mm以下の砂粒を少量。
Oa	38-3	口径(13.8)	胴下半欠損。胴中位に最大径をもち口縁が内彎気味にゆるくのび若干内反する。口縁端部は若干平坦に仕上げる。外面に左回りのうずを巻く貼付突帯施文。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、暗赤褐色 外、暗褐色 1mm以下の砂粒を多量。
Oa	38-4	口径(24.7)	胴下半欠損。胴下位に最大径をもち口縁が内彎気味にゆるくのびやや内反する。口縁端部は平坦に仕上げる。外面に右回りにうずを巻く貼付突帯施文。	内面、やや粗いヨコヘラケンマ。外面、ヨコヘラナデ。	内、黒褐色 外、暗灰褐色 1mm前後の砂粒を多量。
Ob	38-5	—	口縁部小片。胴下位に最大径をもち口縁が若干内彎気味に直線的にのび強く内反する。口縁端部は平坦に仕上げる。外面は口縁下に上から5条の平行沈線、2条の重弧文、5条の平行沈線施文。	内面、口縁部ヨコナデ、以下右がりのヘラケンマ。外面、ヨコヘラケンマ。	内、黒褐色 外、暗灰褐色 1mm以下の砂粒を少量。
Oa	38-6	口径(13.4)	胴下半欠損。胴下位に最大径をもち口縁が内彎しながらゆるくのび内反する。口縁端部は尖る。口縁下に3mmの小孔を焼成前に穿ち、ほぼこの小孔上を中心として外面に7.5cmの弧を描いて1条の貼付突帯を懸下する。	内面、やや粗いヨコヘラケンマ。外面、ヨコヘラケンマ。	内、暗褐色 外、黒褐色 砂粒はほとんど含まない。
Ob	38-7	—	口縁部小片。胴上位に最大径をもち口縁がゆるく内彎する。口縁端部は若干平坦に仕上げる。外面は口縁下に沈線を1条施し以下5条単位の平行沈線をとりに囲む「X」字文を2段施し、その間上下にヘラケズリによる凹点施文。	内面、ヨコヘラケズリ後まばらなヨコヘラナデ。外面、ヨコナデ。	内、暗灰褐色 外、淡黄褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。
Ob	38-8	—	口縁部小片。胴上位に最大径をもち口縁が内彎しながらゆるくのびやや内反する。口縁端部は丸く仕上げる。外面に3条の平行沈線を施し以下に重弧文を施す。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、黒褐色 外、暗褐色 1mm以下の砂粒を少量。
Ob	38-9	—	口縁部小片。胴中位に最大径をもち口縁が内彎気味にゆるくのびやや内反する。口縁端部は若干平坦に仕上げる。外面は口縁下に9条の平行沈線施文。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、黒褐色 外、暗褐色 1mm以下の砂粒を少量。
Oa	38-10	—	口縁部小片。胴上位に最大径をもち口縁はほぼ直立する。端部は平坦に仕上げる。外面は口縁下に1条の平行沈線と口縁端部から胴部に向かって懸下する貼付突帯を施し、沈線の上と突帯の上端・突帯上に刺突列点施文。	内、外面ともヨコケンマ。	内、外とも黒褐色 0.5~1mm前後の砂粒を多量。

分類	図版 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
Ob	38-11	——	口縁部小片。胴上位に最大径をもち口縁はほぼ直立する。端部は平坦に仕上げる。外面は口縁下に2条の平行沈線を施し以下2条単位の重弧文を連続する。	内面、口縁部ヨコヘラケンマ、以下タテヘラケンマ。外面、ヨコヘラケンマ。	内、黒褐色 外、暗褐色 1mm以下の砂粒を多量。 外面丹塗。
Ob	38-12	——	口縁部小片。胴上位に最大径をもち口縁は内彎気味にゆるくやや内反する。端部はやや尖がる。外面は口縁下に1条の連弧文以下に4条の平行沈線施文。	内面、ヨコヘラナデ。外面、ヨコヘラケンマ。	内、黄褐色 外、暗黄褐色 1mm以下の砂粒を少量。 煤付着。
Ob	38-13	——	口縁部小片。胴中位に最大径をもち口縁は内彎気味にゆるくのびやや内反する。口縁端部は若干平坦に仕上げる。外面は3条単位の平行沈線をとり囲む「X」字文を2段施文する。	内面、ヨコヘラナデ。外面、ヨコナデ。	内、赤褐色 外、暗黄褐色 0.5~1mm前後の砂粒を多量。 煤付着。
Ob	38-14	——	口縁部小片。胴中位に最大径をもち大きく内彎しながらのびほぼ直角に短く外反する口縁をもつ。口縁端部は若干平坦に仕上げ内面で段をなす。外面は上から1条の平行沈線3条の重弧文・その直下に凹点を施しこれを起点とする3条単位の重弧文を両側に配しさらにその下に3条の平行沈線を施文。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、黒褐色 外、暗褐色 1mm以下の砂粒を多量。
Ob	39-1	頸部径 (21.2) 胴径(31.4) 残存高 (22.8)	口縁部欠損。胴中位に最大径をもって丸く張り、底部も丸く仕上げる。頸部で稜をなして屈曲し、口縁が外反するようである。外面胴上部に2条の平行沈線で区画し中に3段の「X」字文を施文する。	内面、ヨコヘラケズリ後ヨコナデ。外面、上半ヨコヘラケンマ、下半左上がりの条痕調整後ヨコヘラケンマ、条痕が若干残存。	内、暗灰褐色 外、暗茶褐色 0.5~1mm前後の砂粒を多量。
Oc	39-2	口径(27.2)	胴下半欠損。口縁が低く立ち上がり端部は尖る。内面は平坦に仕上げられ段をなす。頸部で稜をなして強く屈曲し胴が若干内彎気味に直線的にのび外方に大きく張り出す。	内面、口縁部ヨコヘラケンマ、以下ヨコ条痕調整後ヨコヘラケズリ及びまばらなヨコヘラナデ。外面、口縁部、胴下部でヨコヘラナデ、胴上部で左上がりのヘラナデ。	内、暗灰褐色 外、暗褐色 0.5mm以下の砂粒を多量。
Oc	39-3	口径(17.4)	口縁部小片。口縁が低く立ち上がり端部は丸く仕上げる。内面は平坦に仕上げる。頸部で稜をなして強く屈曲し胴が若干内彎気味に直線的にのび外方に大きく張り出す。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、黒褐色 外、黒灰褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。
Ob	39-4	口径(16.2)	胴下半欠損。胴下位に最大径をもち若干内彎気味ゆるくのびほぼ直角に短く外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸く仕上げ内面は段をなす。	内面、粗いヨコヘラケンマ、胴上位に指圧痕が残る。外面、粗いヨコヘラケンマ。	内、口縁部黒褐色、以下暗灰褐色 外、上半暗灰褐色、下半暗黄褐色 0.5mm以下の砂粒を多量。 1~1.5mm前後の砂粒を少量。
Oc	39-5	胴径(24.5)	胴上部・底部欠損。胴中位で丸く張る球形の胴をなし、上位で屈曲して段をなす。	内面、粗いヨコヘラケンマ。外面、ヨコヘラケンマ。	内、黒褐色 外、暗褐色 0.5~1mm前後の砂粒を少量。 煤付着。
P	40-1	胴径(32.0)	胴中部のみ残存。胴は明瞭な稜をなして屈曲し、上半はゆるく外彎する。肩上部に2条の凹線を施す。	内、外面ともヨコナデ。	内、淡灰褐色 外、黄灰褐色 0.5mm前後の砂粒を多量。

分類	図版 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
P	40-2	—	口縁部小片。やや外彎気味に直線的にのびる口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。内面に沈線1条施文。	内、外面とも粗いヨコヘラケンマ。	内、暗褐色 外、黄褐色 0.5mm前後の砂粒を多量。
L	40-3	口径(25.5)	胴下半欠損。口縁は短く、水平に近く外反し端部は若干尖がる。内面に沈線1条施文。頸部は内面で稜をなして直角に屈曲してほぼ垂直にのび、肩部内外で稜をなして屈曲する。	内、外面ともやや粗いヨコヘラケンマ。	内、明灰褐色 外、上半灰褐色、下半黄灰褐色 0.5~1mm前後の砂粒を多量。
L	40-4	口径(28.4)	胴下半欠損。口縁は短く、水平に近く外反し端部は丸く仕上げる。内面に沈線1条施文。頸部は内面で稜をなして直角に屈曲してほぼ垂直にのびる。	内面、やや粗いヨコナデ。外面、やや粗いヨコヘラナデ。	内、淡黄褐色 外、口縁部黄灰褐色、下部黒褐色 0.5mm前後の砂粒を多量。
Q	40-5	口径(25.2)	胴下半欠損。胴上位に最大径をもち、強く内彎し、口縁端部は平坦に仕上げる。	内面、ヨコナデ。外面、左上がりの条痕調整後粗いヨコナデ。	内、黄褐色 外、上半黒褐色、下半暗赤褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。 1~2mm前後の砂粒を微量。内面に堅果の圧痕。
Q	40-6	口径(20.7)	胴下半欠損。ゆるく内彎しながら口縁が大きく開き、最大径は口縁部にある。口縁端部は平坦に仕上げる。	内、外面ともタテナデ。	内、外とも淡黄褐色 0.5mm以下の砂粒を多量。
R	40-7	口径(11.9)	胴下半欠損。口縁の立ち上がりはやや発達し端部は平坦に仕上げる。外面に浅い沈線1条施文。頸部内面と肩部内外面で稜をなして強く屈曲する。口頸部の器壁が厚い。	内、外面ともやや粗いヨコヘラケンマ。	内、外ともに黒褐色~黄灰褐色 0.5mm以下の砂粒を少量。
R	40-8	口径(10.1)	底部欠損。外面に沈線を1条施文し、これで、口縁部と胴部を分ける。内面は段をなす。口縁はゆるい波状をなし端部は若干尖がる。口縁部が肥厚する。	内面、粗いヨコヘラケンマ。外面、上半ヨコヘラケンマ、下半タテヘラケンマ。	内、暗褐色 外、暗黄褐色~黒褐色 1mm前後の砂粒を多量。
R	40-9	口径(10.7)	底部欠損。胴は深い堦形をなし口縁が短く外反する。口縁端部は平坦に仕上げ内面は段をなす。	内面、ヨコヘラケンマ。外面、口縁部ヨコヘラケンマ、以下タテヘラケンマ。	内、外とも黒褐色 0.5~1mm前後の砂粒を多量。
Hb	40-10	胴径(12.7)	口縁部・胴下半欠損。頸部で彎曲し肩部内外で稜をなして屈曲する。頸部外面に1cm程のリボン状粘土帯を貼り付け両端に刺突する。頸上部に4条の重弧文を施すと考えられる。	内面、上半ヨコナデ、下半ヨコヘラケズリ。外面、ヨコナデ。	内、暗黄褐色 外、暗灰褐色 0.5~1mm前後の砂粒を少量。
N	40-11	胴径(15.1)	口縁部・胴下部欠損。頸部、肩部でややゆるい稜をなして屈曲し、肩が張る。	内、外面ともヨコヘラケンマ。	内、外とも黒褐色 1mm以下の砂粒を少量。 口縁部欠損後破損面を磨り取り2次使用。
R	40-12	口径(12.2)	胴下半欠損。口縁が頸部で稜をなしてゆるく屈曲し短く外反する。口縁端部は若干平坦に仕上げ外面に2条の浅い平行沈線を施文。	内面、ヨコ条痕調整後まばらなヨコヘラナデ。外面、口縁部ヨコヘラケンマ。以下タテヘラナデ。	内、暗灰褐色 外、暗褐色 0.5~1mm前後の砂粒を少量。 煤付着。
R	40-13	—	口縁部小片。外彎する頸部に屈曲して立ち上がる口縁部をなし、端部は平坦に仕上げる。外面に間隔のあいた鋸歯文と1条の平行沈線施文。	内、外面ともにヨコヘラケンマ。	内、外ともに明黄褐色 0.5mm以下の砂粒を多量。

4. 石器

古閑遺跡出土の石器類の総数は第5表の通りであり、剥片・碎片を含めて3,900点近くの石器類が出土している。当遺跡から出土している土器には縄文時代早期・中期それに後期のものが極めて少量含まれている。また弥生時代前期および中期のものが若干みられるが、大半は縄文時代晩期前半の土器で占められていることから石器類についても晩期前半の所産と判断して大過ないものと考えられる。

石器組成の中でまず注目されるのが黒曜石製の剥片石器およびその素材である縦長剥片（刃器状剥片）と製作過程で作出される剥片・碎片の出土が顕著で、全体の80%を越している。また各種の磨石・敲石の量が多く、しかもそれらの石器とセットをなすと考えられる石皿の数量もやはり注目に値する。さらに石斧類の数も著しく、扁平打製石斧と磨製石斧・小形の磨製石斧（石のみ状石器）の三つに大別される。

一方、石鏃は僅か10点のみで他の石器に比較して極端に少ない。また石鏃・石斧と共に縄文時代の普遍的な石器とされている石匙も典型的なものは皆無の状況である。

以上が当遺跡における石器組成の中で特に目立つものであり、全体的にいわれる縄文文化の石器とは多少趣きを異にしているようで、古閑遺跡の特色とされよう。

器種別の個々の石器についてはその分類も含めて後述するので、ここでは主要な石器についての概要といくつかの問題を挙げることにしたい。

縄文時代における代表的な狩猟具である石鏃の出土数については先に述べたように僅か10点とあまりにも少ないのである。石鏃の数量からのみ単純に狩猟による生産活動へのウエイトの置かれかたを推測することは出来ないであろうが、それにしても当遺跡での石鏃の出土数の少なさは狩猟活動のあり方の一端を反映しているものとして把握されるであろう。

二次加工剥片および刃器とした石器は黒曜石の縦長剥片を素材にしてその側辺に沿って二次加工が施されているものや、鋭利なエッジに使用によると判断される刃こぼれや擦痕が観察されるものである。形態や加工の部位、それに刃部の位置などかなりバリエーションがあり、その用途についてを明確に判断することは困難であるが、量的にかなりの数を占めていることから重要視される石器であろう。これらの石器の大半は黒曜石の剥片が有する鋭利なエッジを刃部として利用している点からすればやはり対象物を切る、削ることが主要な目的とみなされる。具体的な用途を推測できる物的証拠はないが、動物性食糧の解体・調理や木製品などの加工で大いに効果を発揮したであろう。

比較的大形のサヌカイト質の剥片の一部に二次加工を施した石器類を一括して削器とした。全体の形はほぼ長方形を呈したものが多く、しかも長軸の一側辺に刃部が形成されている。用途としては切る、削るなどが考えられるが、先に述べた黒曜石製の二次加工剥片や刃器などの存在やさらに削器とした石器の形態的な特徴を考慮した時、二次加工剥片や刃器とは別の対象

物を想定しなければならないように思える。

扁平打製石斧と判断される石器が155点出土しており、形態的には刃部の幅が10cm前後の大形のもの、5～6cmの小形のものが存在している。大形と小形の形態上の違いは用途の上でもそれなりに異なるであろうが、155点の扁平打製石斧のうち133点が欠損していることは、使用頻度が高くしかも対象物との抵抗が大きかったことを示唆している。刃部の片面に主として観察される擦痕、条痕はこの石器の刃部に直交する柄が装着されていたことを物語っている。

磨製石斧は末成品と考えられるものを含めて105点出土しており、これに小形の磨製石斧であるノミ状石器を加えると122点となり、一遺跡における磨製石斧の数としては極めて多いと言えよう。磨製石斧およびノミ状石器の柄が刃部とどのような位置で装着されていたかは別にしても対象物はやはり樹木であり、樹木の伐採およびその加工処理の道具とされる。先の二次加工剥片や刃器と磨製石斧・ノミ状石器の出土数の多いことは無関係と思われず、木製品の依存度が高かったと考えられないであろうか。

磨石、敲石の229点の存在は当遺跡を特色づける石器とみなされる。一つの石器に磨痕と打痕の両者の観察されるものが顕著であることから一括して取り扱っている。磨石・敲石類の一般的な用途としては堅果類および根茎類の加工、調理が考えられており、縄文時代の全期間を通じて普遍的に存在する石器である。しかしながら古閑遺跡における磨石・敲石の数は縄文時代の一般的な遺跡に比較して群を抜いているように考えられ、食糧の摂取で粉食の依存度が高かったことを示唆するものであろうか。石皿97点の出土は磨石・敲石の用途を一段と明確にする資料であり、植物性食糧の存在とその加工・調理の一端を如実に示していると言えよう。

最後に黒曜石製の石器の素材と関連する資料である石核について触れてみる。石核は56点出土しており、その大半は小形のもので占められている。二次加工剥片および刃器、それと剥片の大多数にはその一部に自然面を残すものが顕著であり、このことは石核の母岩が小さくしかも比較的扁平であったことを予想させる。小形の母岩から剥片の剥離作業が行なわれた場合、当遺跡から出土している黒曜石製の剥片石器および剥片の量と石核の数とが符合しなくなる。また石核に残された最終剥離面と二次加工剥片および刃器との大きさが必ずしも一致してないのである。これらのことは剥片石器の素材が当遺跡においてすべて製作されたものでなく、他所からの持ち込みを考えなくてはならないであろう。黒曜石の産地の同定については物理・化学的方法によらなければならないであろうが、断口や自然面の肉眼的な観察による限り、少なくとも二種類存在し、その一つは伊万里市の腰岳産と判断できる。

黒曜石製の縦長剥片およびそれを素材にした剥片石器は西北九州の縄文時代中・後期に特徴的に認められるものであり、この背景として縦長剥片剥離技術が存在している。これまでのところこの剥片剥離技術を基盤とする石器類は縄文時代晩期しかも熊本県に顕著でないだけに当

遺跡における黒曜石製の剥片石器の存在は注目される。

(橋 昌信)

(1) 石鏃 (第41図)

石鏃は総数10点出土しており、すべて打製石鏃である。基部に抉入のあるものを第Ⅰ類、三角鏃を第Ⅱ類とした。石材はすべて黒曜石である。石鏃の長さは小形のもので18mm、最も大きいもので29mmを測る。

第Ⅰ類 a (1～7)

全面に加工がされたもので、7点みられる。完形は5点で、先端部欠損、片脚欠損共に1点である。抉入は全体的に浅く、両側辺が彎曲するものが多い。1は長さ27mm、幅14mmの比較的小形の石鏃で、1b面は粗い加工であるのに対し、1a面は細かい加工が施されている。

第Ⅰ類 b (8・9)

剥片鏃で、2点みられ共に完形である。9は小形の剥片を素材として、先端部を主に二次加工が施されている。

第Ⅱ類 (10)

1点みられるだけである。10は先端部がわずかに欠損しており、一側辺に細かい加工が施されている。

(2) 二次加工剥片 (第42図・第43図25～31)

黒曜石製の二次加工を有する剥片は、総数58点を数える。当遺跡においては、自然面を打面および側面に有するものが多い。記述と理解の便宜上、素材の形状、二次加工の位置等に注目し、それにより分類し説明する。

第Ⅰ類 a (11, 12, 17, ~ 20, 25~27, 29)

縦長剥片を素材として、二次加工が一側辺または両側辺に施されたものをいう。11は厚みのある縦長剥片の一端に二次加工を施している。19は主軸の両端から抉入を施す削器である。20は一側辺のみに二次加工を施して、意図的に先端部が尖るように加工されている。

第Ⅰ類 b (15, 16, 21, 28, 31)

縦長剥片を素材として、二次加工が全周に施されたものをいう。21は両面に自然面を有し、また全周に粗い二次加工を施している。31は打面がカットされ、その部位に二次加工が施されている。また、二次加工はほぼ全周に施されている。

第Ⅱ類 (13, 14, 23, 24, 30)

横長剥片を素材とするものをいう。13は旧石器時代のナイフ形石器にみられるようなブランディング様の二次加工を施した削器である。24は厚みの横長剥片を素材として一側辺に粗い二次加工を施した削器である。

(3) 刃器・剥片 (第43図32~46・第44図)

黒曜石製の刃器及び剥片は、総数2184点を数える。剥片は2146点で、刃器は38点である。その大半はどこかの面に自然面を有している。このことは原石が小礫であったことを意味している。ここで刃器の一応の概念規定を行いたい。

1. 目的的な剥片であること。
2. 薄い台形ないし三角形の断面を呈し、縦長で、稜・縁が並行するような形状を呈すること。
3. 製作技術の上で、組織的な連続性及び同一性をもつこと。

刃器の長さは、最小のもので23mm、最大のもので51mmで平均38mmである。幅は最小のもので12mm、最大のもので27mmで平均17mmである。長幅比は約2 : 1である。46は横長剥片で、一側面に使用痕を有する。また2ヶ所に自然面を有する。53は自然面を打面とした縦長剥片である。a面は両端から剥離されている。このことはこの剥片が両端に打面を有する石核から剥離されたことを示している。54aは打面以外ほぼ全面に自然面を有している縦長剥片である。両側面には刃こぼれが存在する。

(4) 石錐 (第45図68~74)

黒曜石製の石錐は未製品を含めて総数7点を数える。製品は3点あり、うち2点は欠損している。また他の4点は未製品である。(68~71)ここでは刃部と柄の部分の状態から分類する。

第Ⅰ類 a (72)

細長く鋭い尖頭状の刃部を有し、柄との区別が二次加工の状態からある程度区別できる。刃部が欠損している。

第Ⅰ類 b (74)

刃部と柄との境界が挟入状の加工によって明瞭に分類されているもので、第Ⅰ類aに比較してやや幅広である。縦長片の一端に両側面から二次加工を施して中央部に錐の刃部を形成している。

第Ⅱ類 (73)

石錐の刃部と柄の部位が明瞭に判断できにくく、全体的な形は細長い尖頭器状のものである。刃部が欠損している。

(5) 楔形石器 (第45図75~77)

黒曜石製の楔形石器は、総数16点を数える。75はa・b面とも粗い剥離を施しており、両端は加撃によってつぶれている。76は細石核を思わせる楔形石器である。c面は二条のフルーティングを施している。又下端からの加撃もみられる。b面は自然面のみで、a面は上端からの加撃が顕著である。77も細石核を思わせ、両端からフルーティングが施されている。

(6) 石核 (第46図)

黒曜石製の石核は総数56点を数える。石核は大きさを含めての形状及び剥片剥離技術から分

類することができる。

第Ⅰ類 (82)

大きさは高さ、幅共に4～5cm前後で、やや長方形に近い平面形を呈する。第Ⅰ類の石核は5点みられる。両端の二ヶ所に打面を有し、打面は自然面である。82ab面とも自然面を有して、c面のみ剥離されている。このような石核から刃器が剥離されたと考えられる。

第Ⅱ類 a (81)

小形で両方向から剥離が認められるもので、全体の形態はほぼ角柱状を呈している。又、剥離作業面は全面に及んでおり、打面は数回の剥離面によって形成されている。

第Ⅱ類 b (78～80, 83～85,)

一方向からのみ剥離が行われており、その打面は自然面のものと大きな剥離面を用いているものがみられる。全体的に角錐状を呈する。剥離作業面は、1～2面である。

(7) 削器 (第47図、第48図、第49図、第50図)

黒曜石を除く削器は総数34点である。サヌカイト製27点、チャート製3点、安山岩2点、不明2点である。ここでは素材の形状、刃部の位置等に注目し、それにより分類し説明する。

第Ⅰ類 a (86, 87, 89, 90, 93)

小形の縦長剥片を素材として、刃部は一側辺に片面から二次加工を施すものである。86は縦長剥片の一側辺に主として主要剥離面から二次加工を施す。a面は自然面を有している。石材はサヌカイトで、基部に抉入を施す。87は縦長剥片の一側辺のみに両面から二次加工を施す。基部には抉入を施し、石材はサヌカイトである。93の石材はチャートで、c面でわかるように入念な二次加工を施している。

第Ⅰ類 b (92, 94,)

大形の縦長剥片を素材とし、側辺および全面に両面から二次加工を施すものである。92はバルブ調整を施し、刃部は縁辺に両面からの加工によって形成されている。

第Ⅱ類 (88, 91, 95～101)

横長剥片を素材とする削器である。両面又は片面から全周に簡単な二次加工を施すものである。95はサヌカイト製で尖頭器を思わせる。一側辺に入念な二次加工を施し、a・b両面とも粗い二次加工を施している。96は薄い小形の横長剥片を素材として、a面は三つの大きな剥離面を有している。石材はサヌカイトである。98はバルブ調整を施し、石材は安山岩である。a面はほぼ全周に二次加工を施し、b面ではほとんど二次加工は施されずに主要剥離面を有している。99は若干のバルブ調整を施し、刃部は両側辺と縁辺に両面からいねいに二次加工を施している。
(野田英治)

(8) 円盤状石器 (第50図 101)

円盤状石器として扱ったものは、比較的薄手な円礫を素材とし周囲に両面から大まかな剥離を施し成形するものである。加工が全周に及ぶものと、そうでないものとある。3点みられた

にすぎない。101は円礫を素材とし周囲に両面から最初大まかな剝離を行い、次に細かな調整を施すが加工は長軸上端部に及ばず、両面に自然面を残している。重量320gを測る。これらの資料は、一応刃部と考えられるものを有していることから、石斧の範疇に入れるべきものであるかもしれない。

(9) 扁平打製石斧 (第51～54図 102～118)

扁平打製石斧は破損品を含めて総数155点出土しているが、完形品は22点にすぎない。また、刃部に磨痕をとどめるもの27点で、このうち完形品は6点である。これらの扁平打製石斧は次の3種類に分類できる。

I類：短冊型

II類：撥型

III類：分銅型

分類できないものはすべて小形の破損品で総数75点である。

I類 (第51～53図 102～113)

撥型との中間形態もこの短冊型に含めた。I類は総数71点を数え最も多い。完形22点、頭部破損20点、刃部破損25点、胴部のみ3点、不明1点である。

102、103、107、112は、扁平な素材の周辺を両面から粗く剝離を施し形を整えている。113は横長の剝片を素材とし、周辺を両面から剝離を施し形を整えている。縦断面はやや彎曲し刃部に磨痕をとどめる。102は両面に自然面を残す刃部破損品で当遺跡出土の中でも最も重量があり、1.07kgを測る。103は頭部と刃部の接合資料で最も大形である。両面に自然面を残し縦断面はほぼ真直ぐで厚さも薄い。刃部に破損の跡か両面に数条の条痕が認められる。砥石として二次使用した可能性があると考えられる。最大長27.3cm、最大幅10.3cm、最大厚2.7cm、重量985gを測る。これらの資料は、比較的大形の一群であり、刃部の幅が9～10cmに集中する傾向がある。

104～106、108～111は、比較的小形の一群であり、刃部の幅が5～6cmに集中する傾向がある。105、106は横長の剝片を素材とし、周辺を両面から細かな剝離を施し形を整えている。105の縦断面はやや彎曲する。重量はそれぞれ295g、180gを測る。110はb面の刃先に長軸に平行する使用痕が顕著に認められ、両面とも自然面を残し、縦断面はほぼ真直ぐである。重量150gを測る。111は扁平な素材の周辺の両面に細かな剝離を施し形を整えている。縦断面はほぼ真直ぐで重量は160gを測る。

II類 (第54図 114)

II類に分類されるものは1点みられるにすぎない。縦長の剝片を素材とし、周辺に両面から細かな剝離を施し形を整えている。刃部の両面に磨痕をとどめ、また、両面に使用痕が認められる。縦断面はやや彎曲し、重量198gを測る。

III類 (第54図 115～118)

Ⅲ類に含まれるものは総数8点を数える。完形1点、頭部破損3点、刃部破損1点、胴部のみ1点、不明2点である。磨痕をとどめるもの3点も含まれる。115は比較的小形で、板状節理のものを素材とし、周辺を両面から大まかに剝離を施し、挟りを細かな調整によって形成する。また、刃部と考えられる部分に細かな剝離を施す。両面に磨痕をとどめ、縦断面はほぼ真直ぐである。重量205gを測る。117は頭部破損品で周辺に両面から細かな剝離を施す。使用痕は長軸に平行し両面に認められるが、特にa面刃部に顕著である。118は頭部破損品で比較的大形である。両面に磨痕をとどめる。刃部に比べると小さく、約1:1.5の割合である。挟りは両面から細かな剝離を施し、117に比べると浅い。重量は現存で370gを測る。

(10) 磨製石斧、未製品 (第55, 56図 119~131)

磨製石斧は破損品を含めて総数63点出土した。完形品は5点のみで、頭部破損22点、刃部破損17点、胴部のみ2点、不明17点である。形態はほとんどが定角式に近似し、刃部の幅は5~6cmに集中する傾向がある。最も重量のあるものは、刃部破損品であるが930gを測る。また、磨製石斧の未製品は破損品を含めて総数43点出土した。

120は定角式に近似し、刃部の破損は使用の際の衝撃によって剝落したと考えられる。横断面は楕円形を呈する。最大長13.2cm、最大幅5.4cm、厚さ3.1cm、重量290gを測る。

125は頭部破損で、当遺跡出土のなかでも特に薄手である。厚さ1.4cm、重量は現存で90gを測る。

131は未製品で刃部が破損している。全面に細部調整の敲打痕をとどめる。重量は現存で1.0kgを測る。縄文時代にはこの大きさの類例がなく、弥生時代に属する可能性があると考えられる。

(11) ノミ状石器 (第57図 132~136)

ノミ状石器は破損品を含めて総数17点出土し、完形品は4点のみである。ノミ状石器として扱ったものは、磨製石斧に比べると扁平で鋭利な刃をもつ、きわめて小形な一群である。また、ノミ状石器の未製品と考えられるもの3点が出土している。石材は緑色凝灰岩、粘板岩、結晶片岩を使用している。

134は完形品で扁平な粘板岩を利用した小形のものである。a面の刃先に長軸に平行する使用痕をとどめる。横断面は楕円形を呈する。重量10gを測り最も軽量である。

135は完形品で定角式に近似する。扁平な緑色凝灰岩を利用した小形のものである。b面の刃先に長軸に平行する使用痕をとどめる。横断面は楕円形を呈する。重量20gを測る。

(12) 石錘 (第58図 137~143)

石錘は破損品を含めて総数28点出土し、すべて打欠石錘(礫石錘)である。糸掛けは、長軸の両端に両面から数回の打欠きを施している。完形品25点につき計測をこころみると、重量は40g~320gを測り、その内わけは0~99gは4点、100~199gは14点と最も多く、200~299gは6点、300g以上は1点である。重量の平均は151gである。石材については同定によって明らかにされ

た安山岩、砂岩以外は表面の風化が著しく不明である。

141は比較的厚みのある円礫を利用し、糸掛けは長軸の両面から数回の打欠きを施す。最大長9.7cm、最大幅8.0、重量240gを測り、当遺跡出土の中でも大きい部類に属する。石材は不明である。

143は扁平な円礫を利用し、糸掛けは長軸の両端に両面から打欠きを施し、そのうえから切目を有する。最大長5.6cm、最大幅4.8cm、重量40gを測り、当遺跡出土の中で最も軽量である。石材は砂岩である。

(13) 磨石、敲石 (第59～62図 144～173)

磨石、敲石は破損品を含めて総数229点出土した。磨石と敲石の両者は、当時一連の作業つまり仕事の中できわめて密接な関係にあったと考えられるので、便宜上一括して取り扱った。形態から円形のをⅠ類、棒状のをⅡ類とし、使用痕を観察しその部位によってさらに細分した。石材としては花崗岩、砂岩、安山岩の他にホルンフェルス、石英が数点ある。Ⅰ類は円形のもので、破損品を含めて総211点出土した。使用痕を観察しその部位は、表面中央に敲打痕をとどめるもの、表面に磨耗痕をとどめるもの、周縁部に敲打痕をとどめるものがある。この3種類の使用痕の組み合わせにより、磨石、敲石は次のように分類できる。

Ia: 中央に敲打痕のみ有するもの。

Ib: 周縁部に敲打痕のみ有するもの。

Ic: 表面に磨耗痕のみ有するもの。

Id: 中央、周縁部に敲打痕を有するもの。

Ie: 中央に敲打痕の他に表面に磨耗痕を有するもの。

If: 周縁部に敲打痕の他に表面に磨耗を有するもの。

Ig: Ia, Ib, Icを組合わせたもの。

(Ih): 周縁部に敲打痕、表面に磨耗痕の他に表面に数条の条痕を有するもの。

Ⅱ類は棒状のもので、破損数を含めて、総数17点出土した。完形品8点である。Ⅰ類と同じく使用痕を観察しその組み合わせにより次のように分類できる。

Ⅱa: 敲打痕のみ有するもの。

Ⅱb: 両端、あるいは一方に敲打痕の他に表面に磨耗痕を有するもの。

また、分類できないものはほとんどが破損品で、Ⅰ類112点、Ⅱ類6点である。

Ⅰa類 (第60図 162)

1点のみで、円礫を利用し両面に顕著な凹みを有する。

Ⅰb類 (第61図 165, 166)

4点みられ、いわゆるhammer stoneである。石材としては、ホルンフェルス、石英を利用し、かなり硬質である。これは対象物が堅果類ではなく石の可能性が考えられる。

I c 類 (第60図 160)

4点みられ、円礫の両面に磨耗痕が認められる。

I d 類 (第60図 161)

2点みられるにすぎない。円礫の両面に敲打痕が認められ、a面に2個所の敲打痕を有する。

I e 類 (第60図 152～155)

I e 類に分類されるものは4点みられる。円礫の両面に敲打痕が認められるもの(152, 154, 155) 片面に敲打痕が認められるもの(153)とある。また152は比較的大形でanvil stoneとして使用された可能性があると考えられる。

I f 類 (第60図 156～159)

I f 類に分類されるものは総数38点みられ、完形品は25点である。周縁の敲打痕は全周に及ぶ。概して大形のものは、破損している。最も重量のあるものは破損品であるが1.1kgを測る。

I g 類 (第59・61図 144～151, 163, 164)

I g 類に分類されるものは総数44点と最も多く、完形品は33点である。円礫両面に敲打痕が認められるもの(146, 149, 150), 片面のみ敲打痕が認められるもの(144, 145, 147, 148, 151, 163, 164,)とある。166, 149, 151は中央の凹みが顕著である。これらは数例であるが、使用した時間の長短、あるいは対象の硬軟とに関係があると考えられる。163と164の両者は、接合例である。接合面を観察すると、段差をもち破損してからの二次使用と考えられる。最も重量のあるものは破損品であるが1.38kgを測る。

I h 類

図に示していないが3点である。二次使用で砥石として使われたと考えられる。

II a 類 (第62図 173)

1点のみで、4面に敲打痕が認められる。

II d 類 (第62図 167～172)

長軸の両端に敲打痕が認められるもの(169, 170) 一方端だけのもの(168, 171)とある。167は破損品で重最は840gを測り最も重い。

(14) 石皿 (第63・64図 174～181)

石皿は破損品を含めて総数97点出土した。完形品は8点のみで他は小形の破損が多い。ほとんど使用面に凹みがあり磨石と共に使用されたと考えられる。また、アバタ状の敲打痕をとどめるものもある。石材は主に砂岩を用い、安山岩も数点ある。

176は破損品で使用面に顕著な凹みをもつ。また、アバタ状の敲打痕が認められる。石材は砂岩である。

179は完形品で形態は断面平行四辺形の角柱状を呈する。4面全部に磨耗痕が認められ、使用面の凹みはあまり顕著ではない。石材は砂岩である。

181は比較的小形のもので、a面を使用面とし凹みがある。b面は剥落している。石材は安山岩である。

(15) 砥石 (第65図 182~185)

砥石は総数31点出土した。石材は砂岩が用いられ、比較的目の荒いものが多い。砥面は細い数条の溝、あるいは幅の広い溝を有し、全面に磨耗痕が認められる。このことは石皿からの転用の可能性も考えられる。概して小形のものが多い。

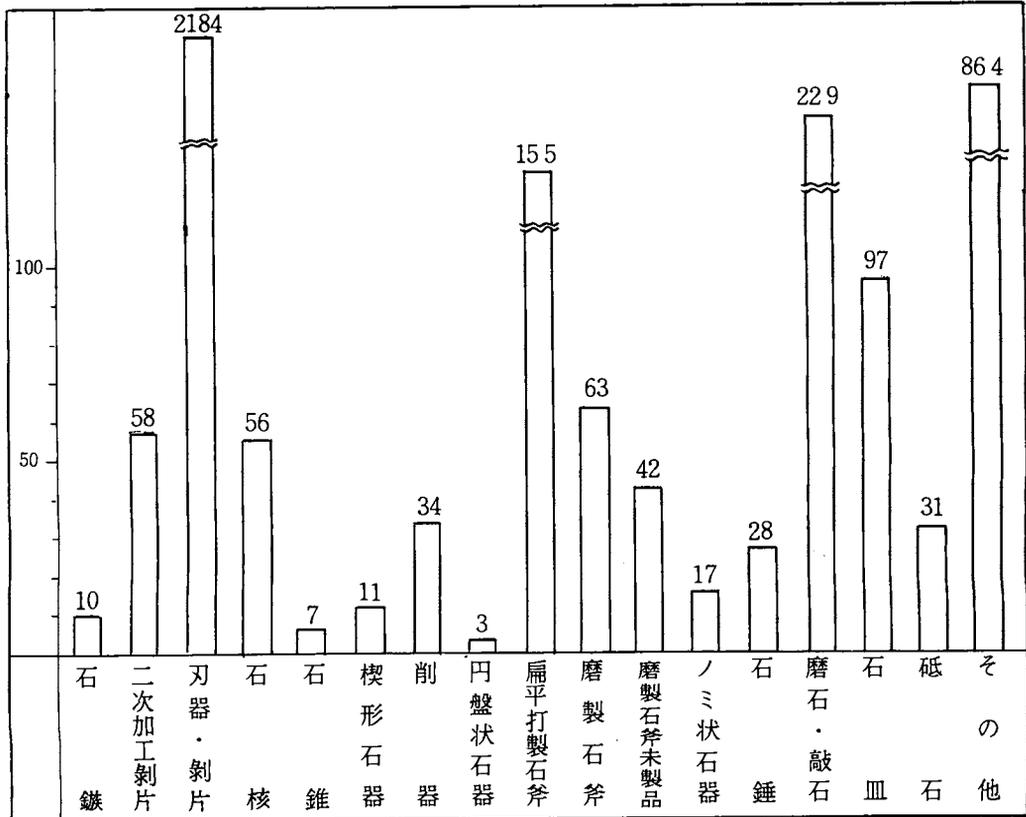
184はa面に3条の溝を有し、溝の断面は浅いV字形、U字形を呈する。形態は不整角錐状をなす。石材は砂岩である。

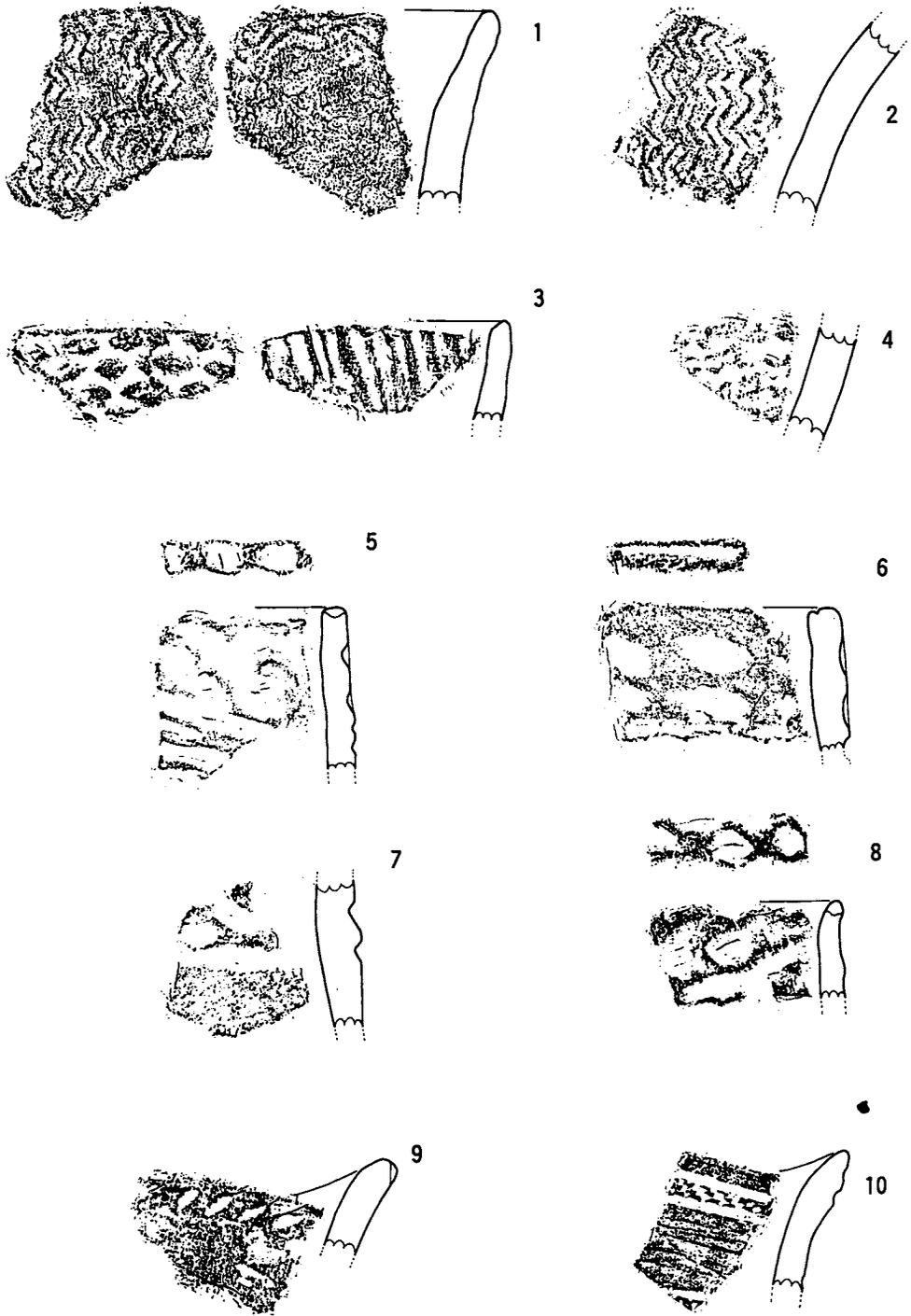
183はa・b両面とも比較的細い数条の溝を有し、溝の断面はV字形を呈する。石材は砂岩である。

185はa・b両面とも1条の比較的幅の広い溝を有し、溝の断面は浅いV字形を呈する。石材は砂岩である。

(道上康二)

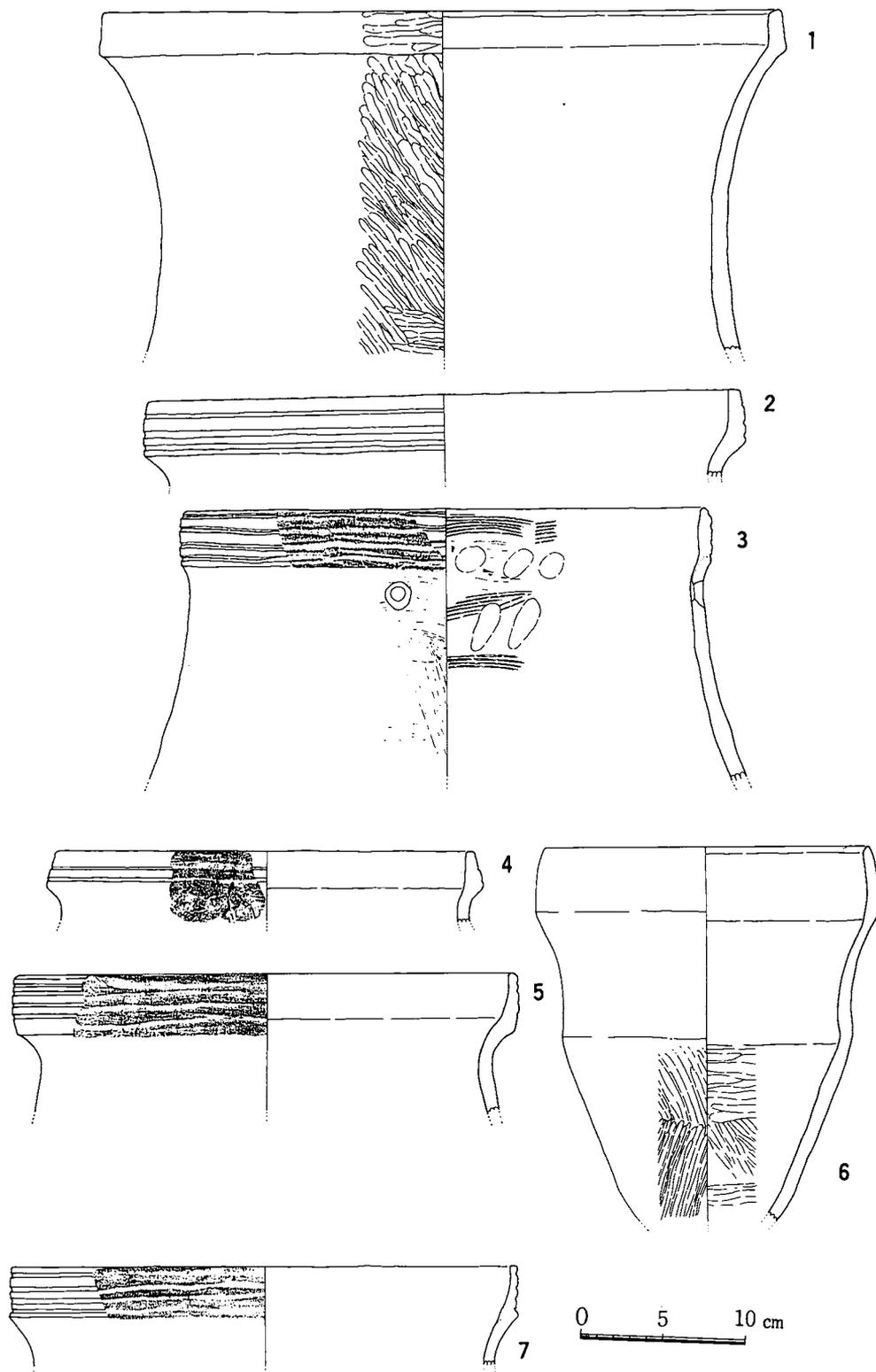
第5表 器種別総数



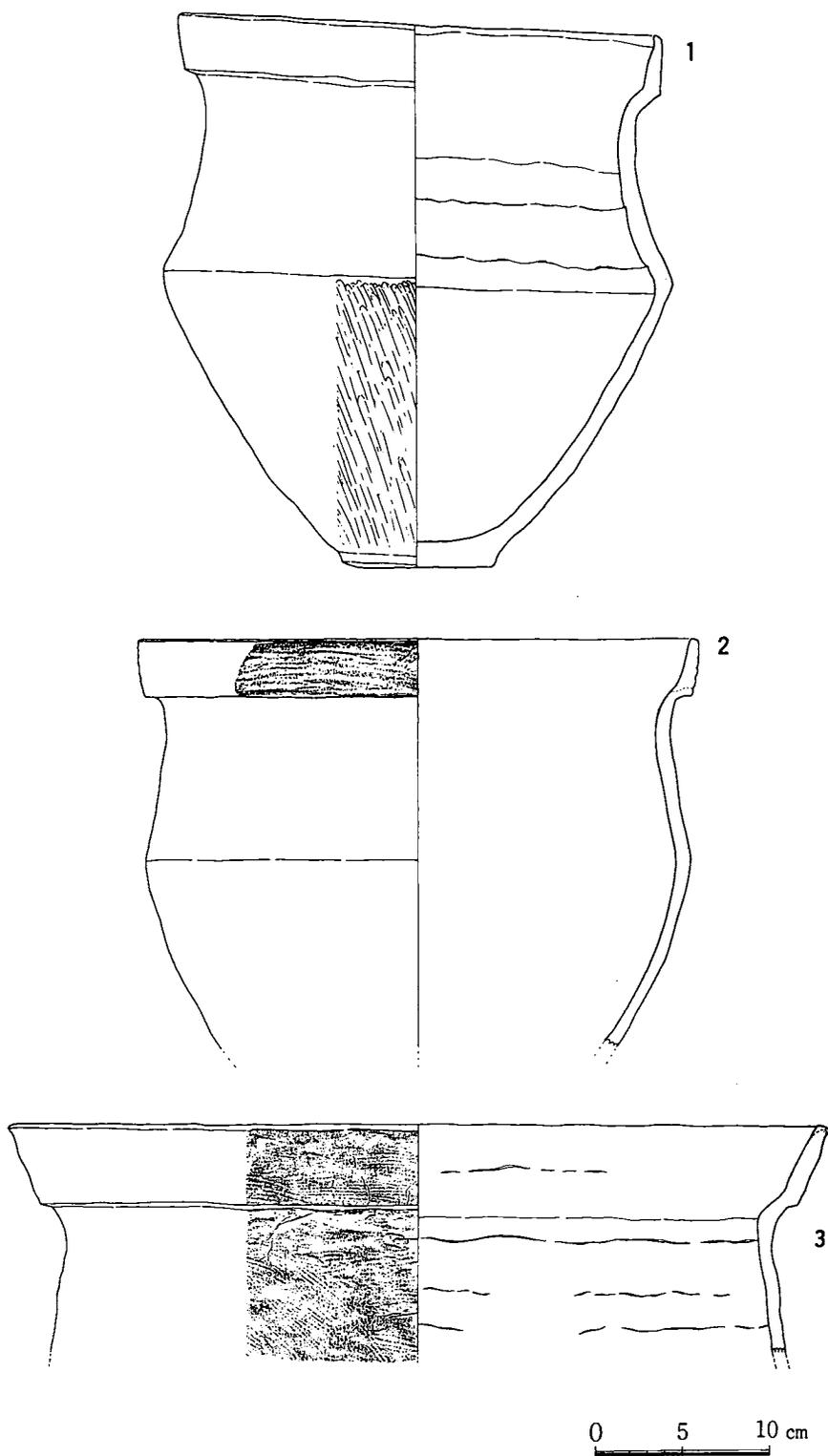


0 5 10 cm

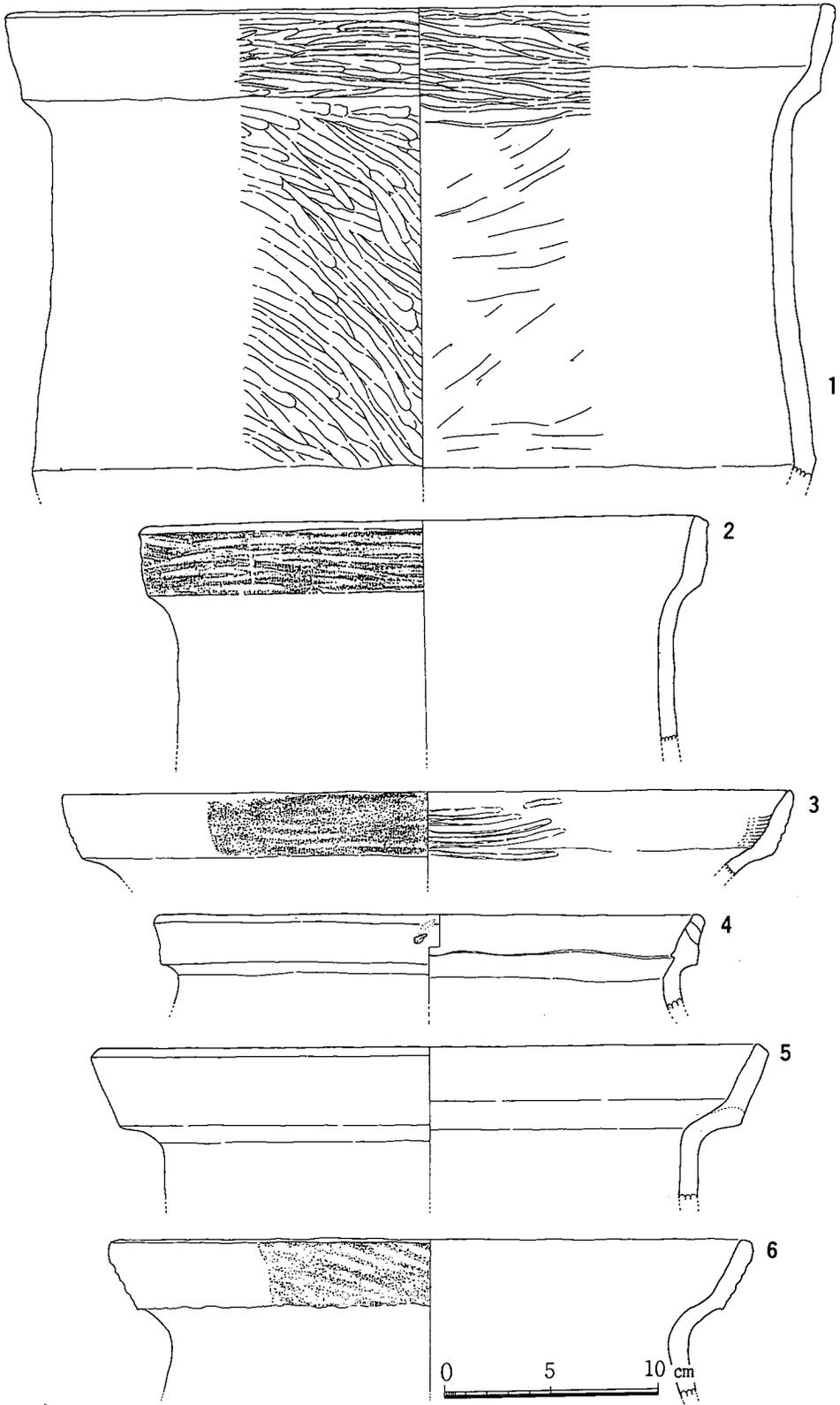
第17図 縄文晩期以前の土器



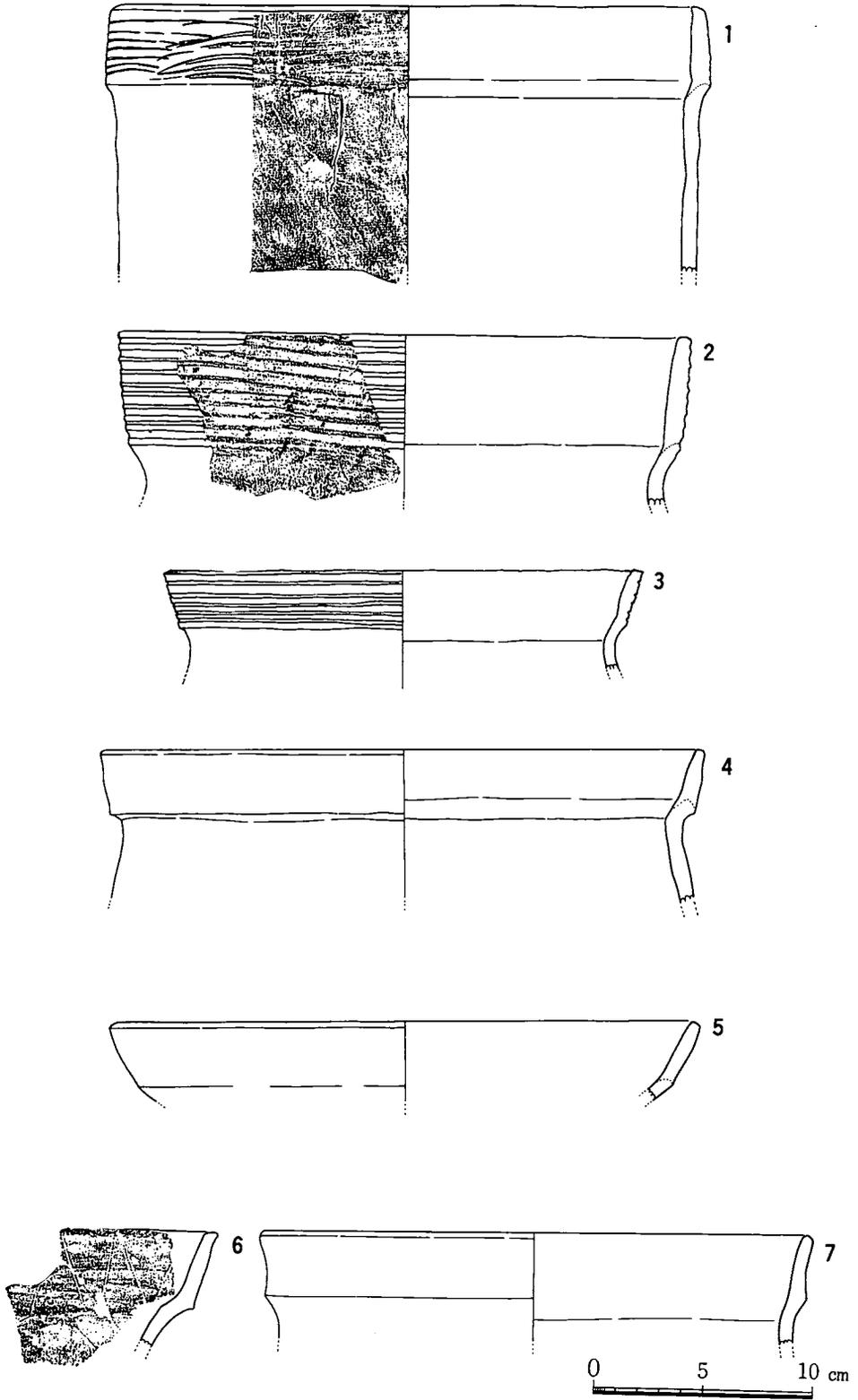
第18図 縄文晩期の土器



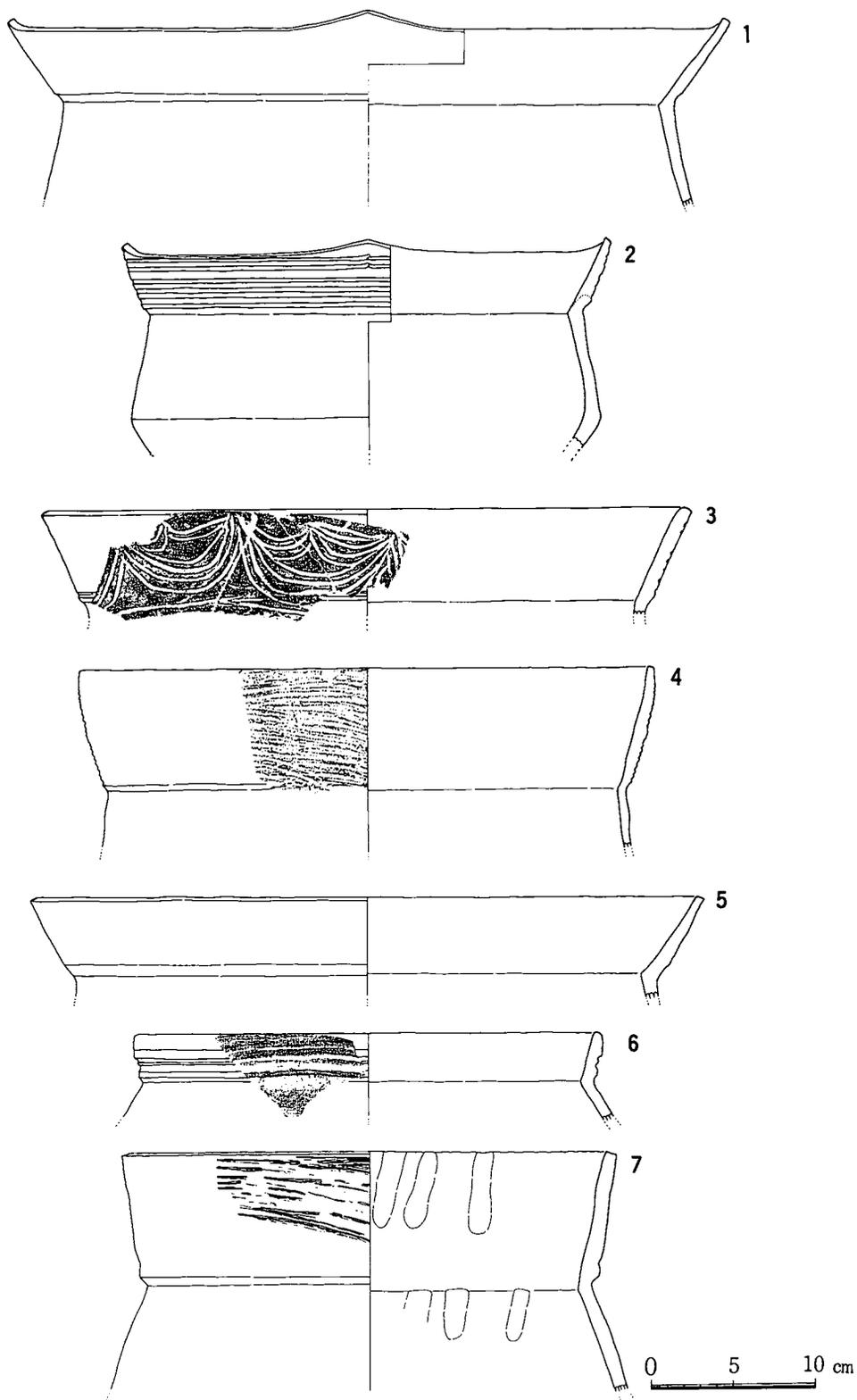
第19図 縄文晩期の土器



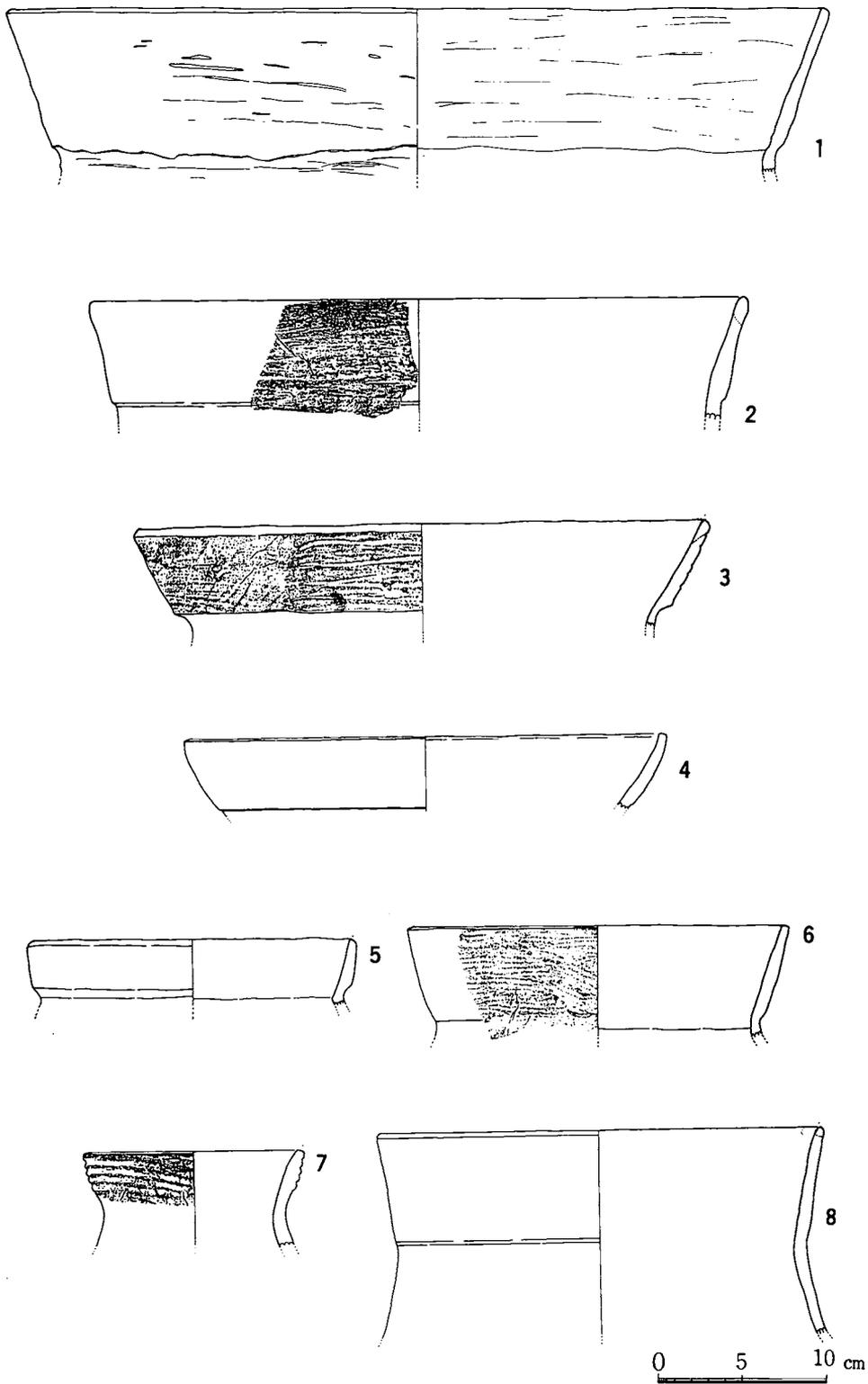
第20図 縄文晩期の土器



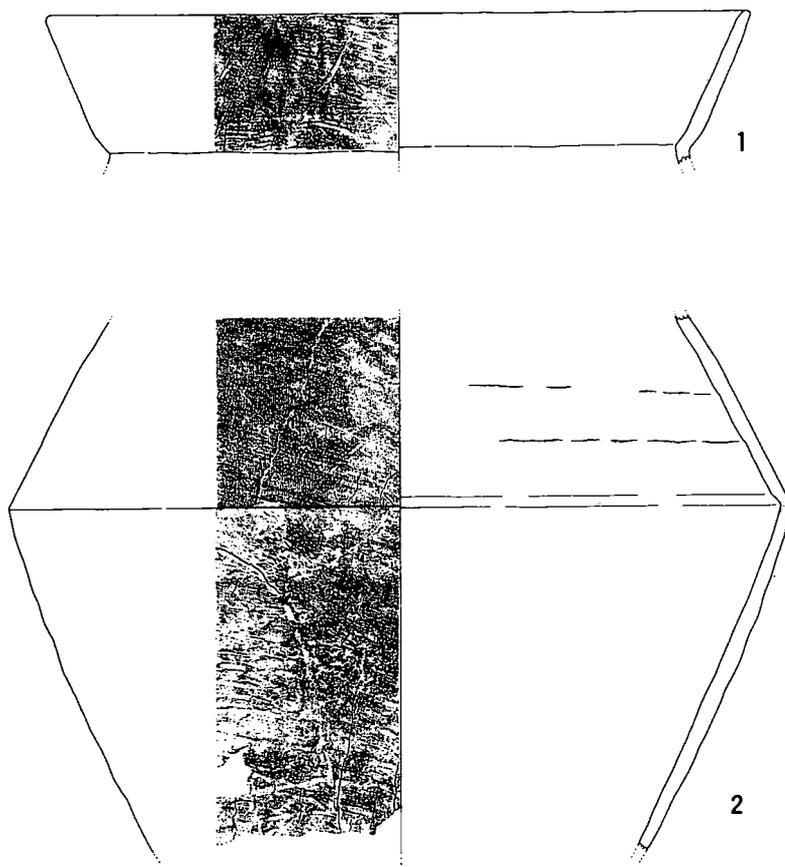
第21図 縄文晩期の土器



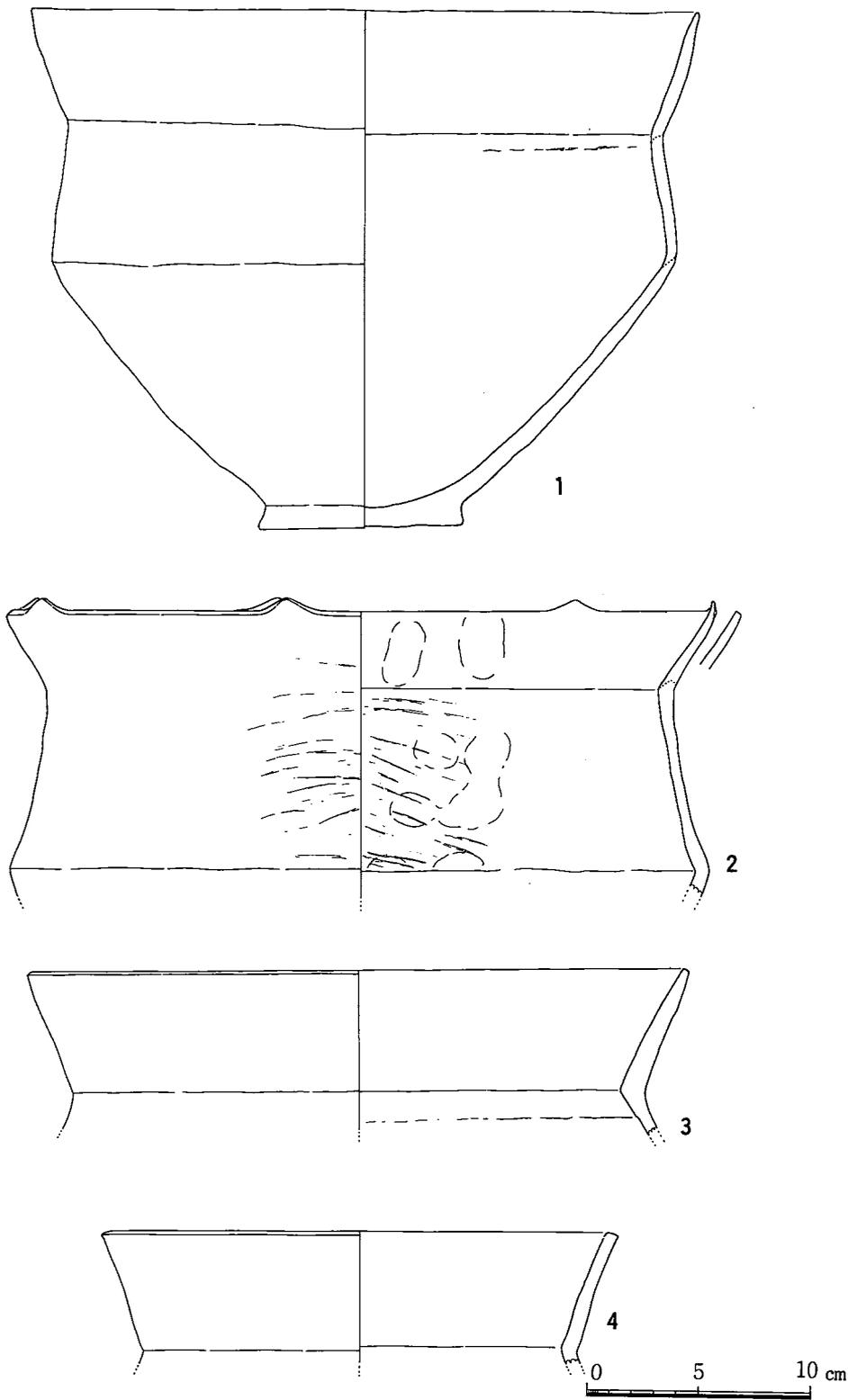
第22図 縄文晩期の土器



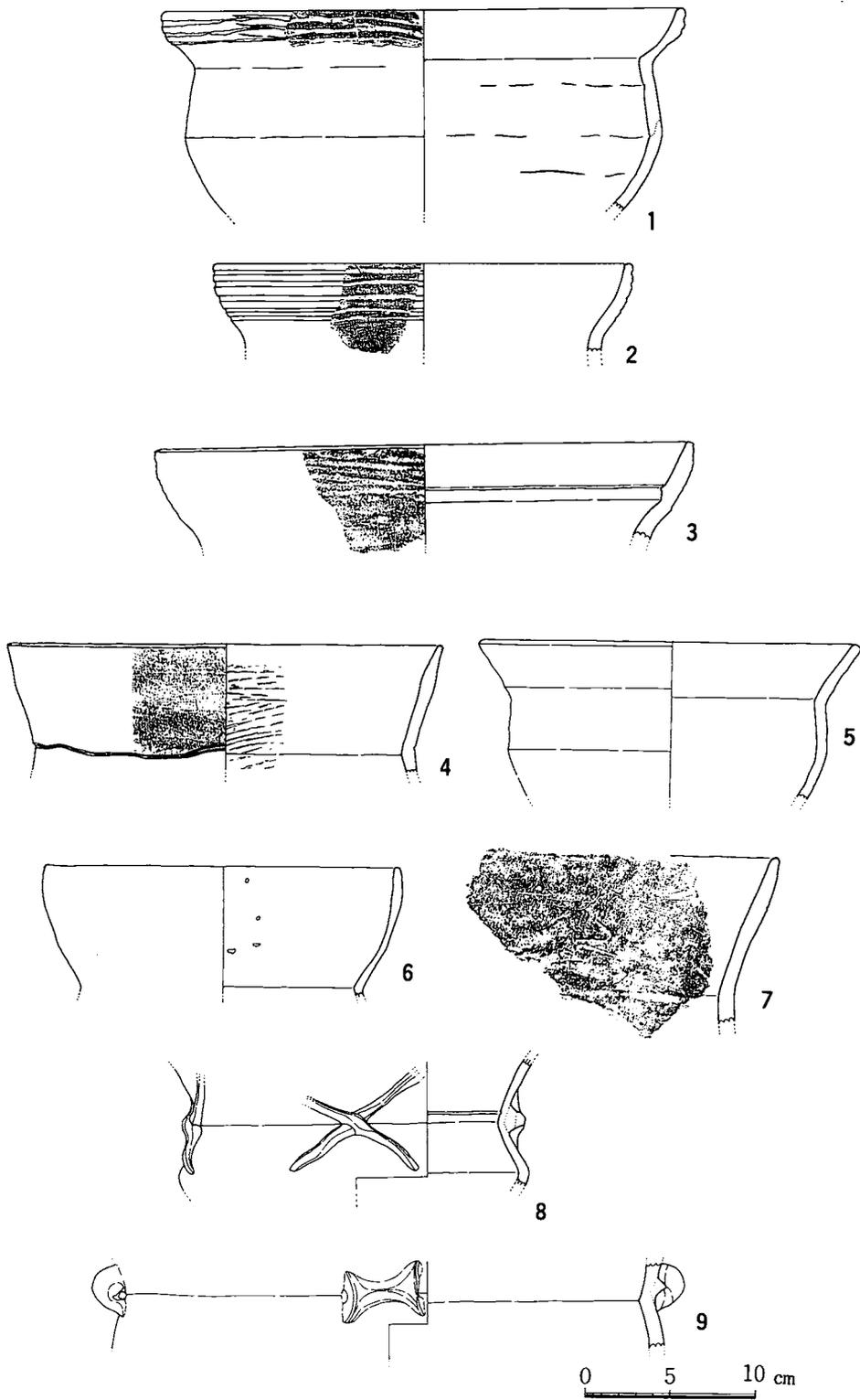
第23図 縄文晩期の土器



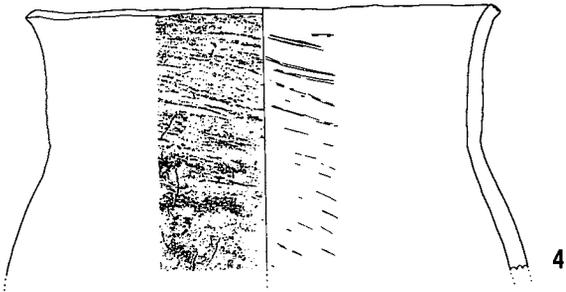
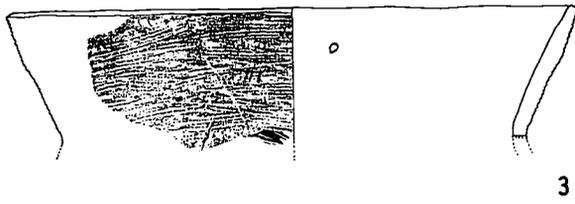
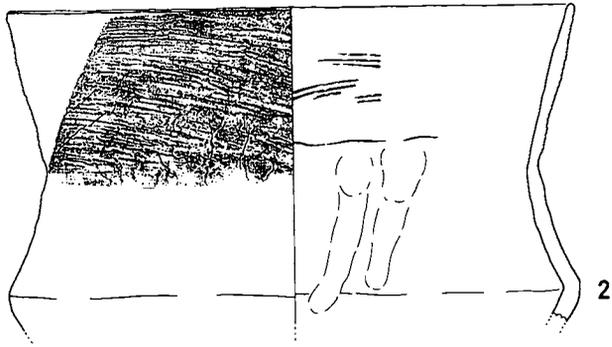
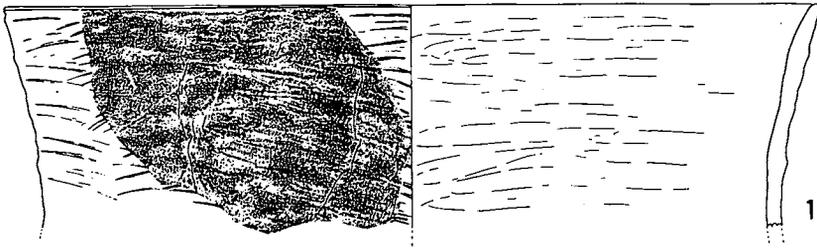
第24図 縄文晩期の土器



第25図 縄文晩期の土器

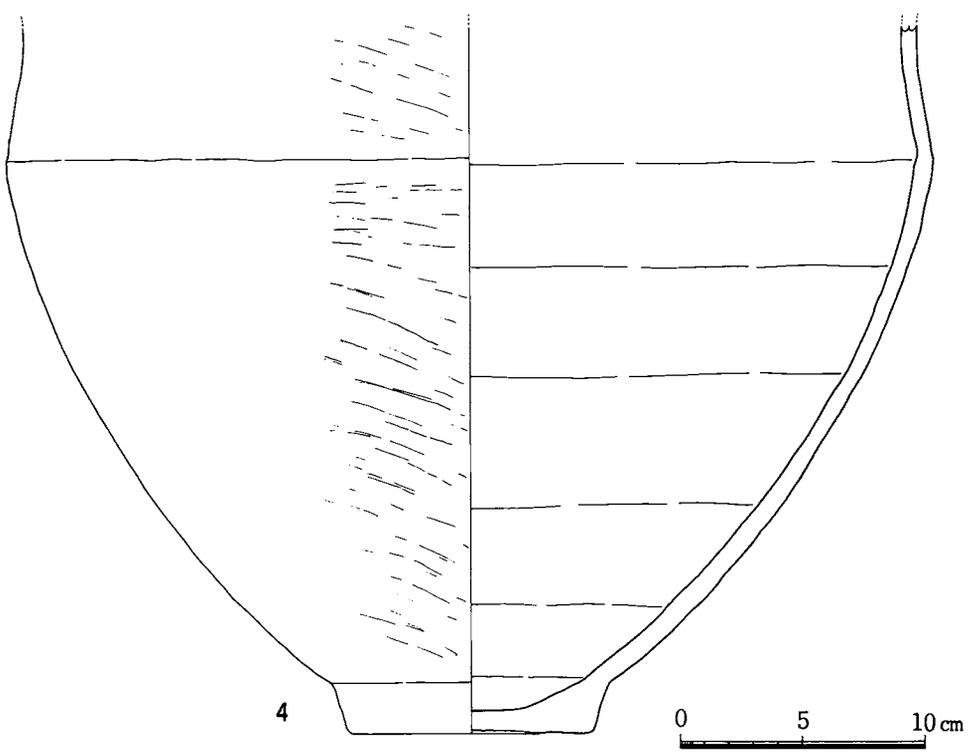
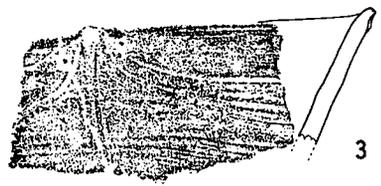
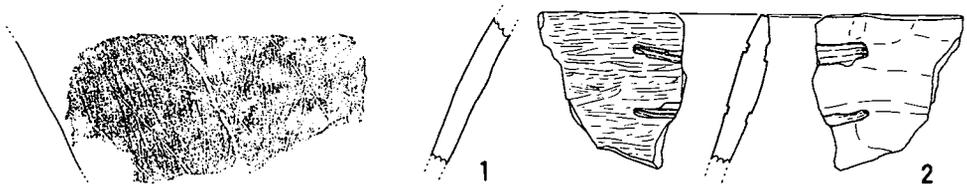


第26図 縄文晩期の土器

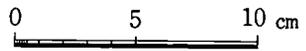
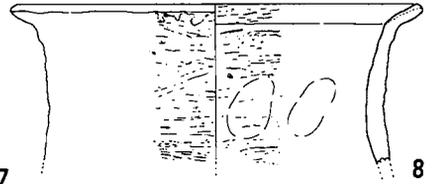
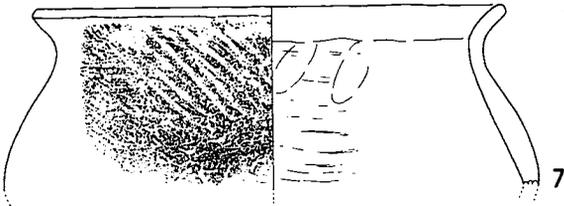
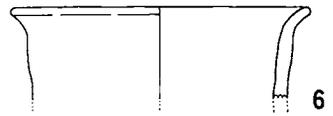
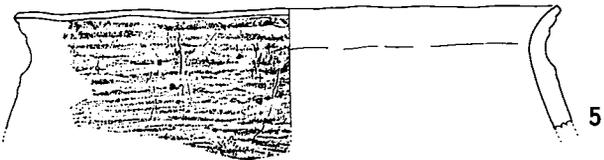
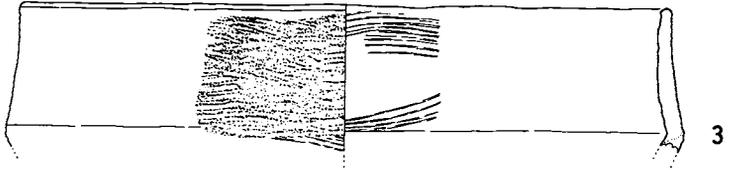
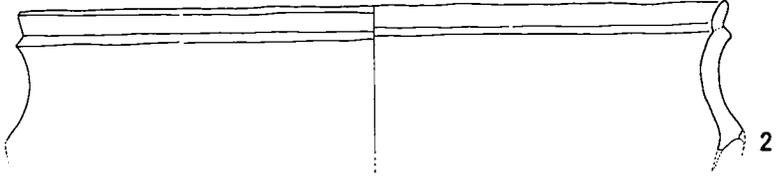
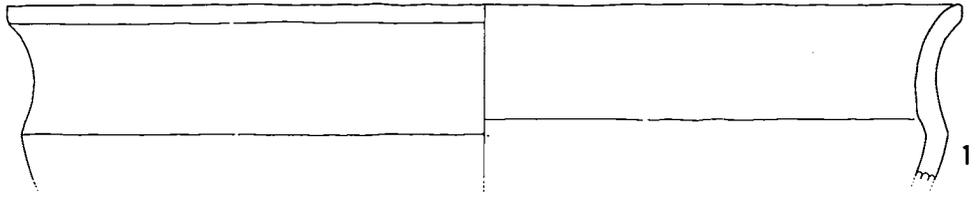


0 5 10 cm

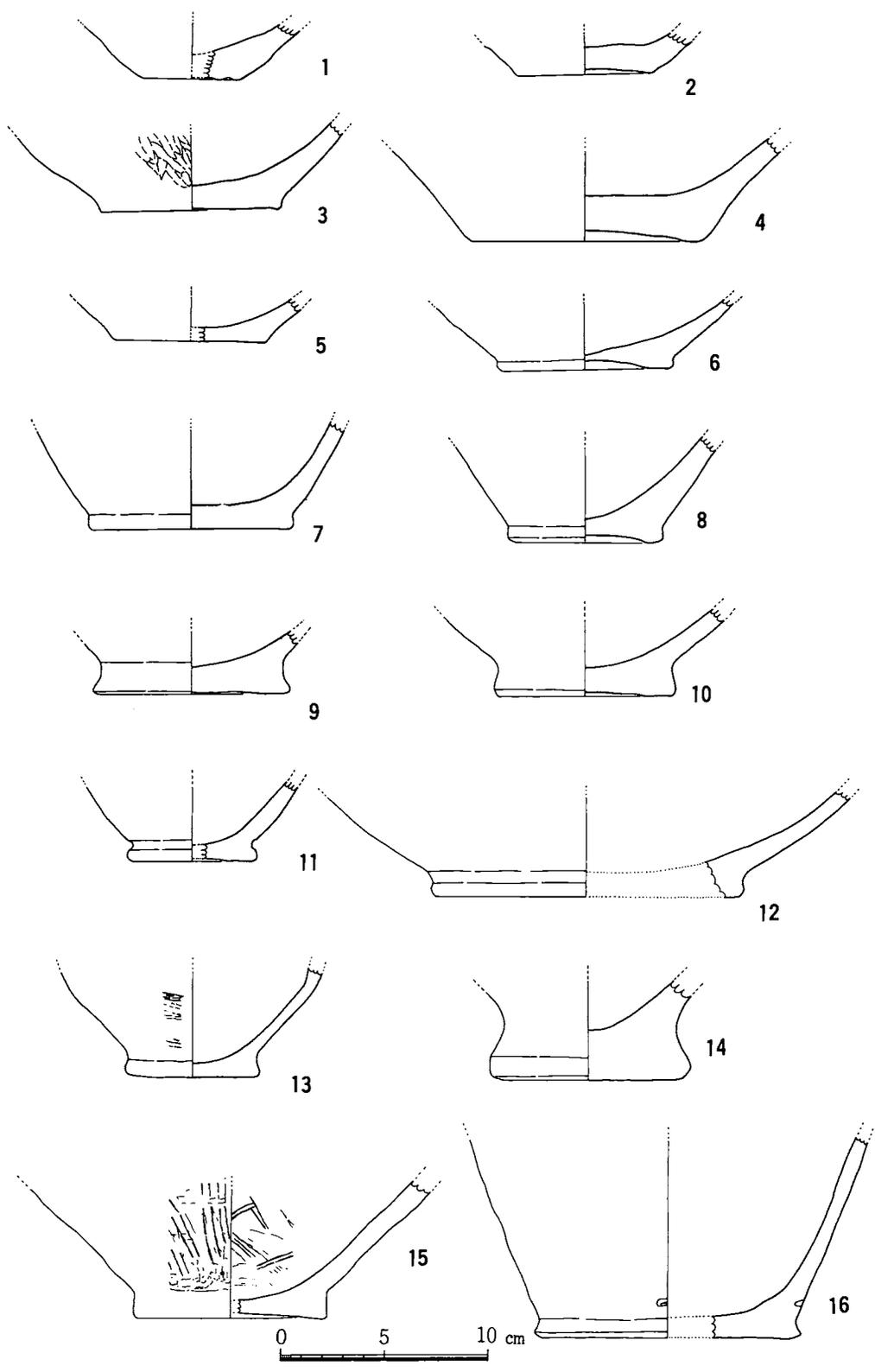
第27図 縄文晩期の土器



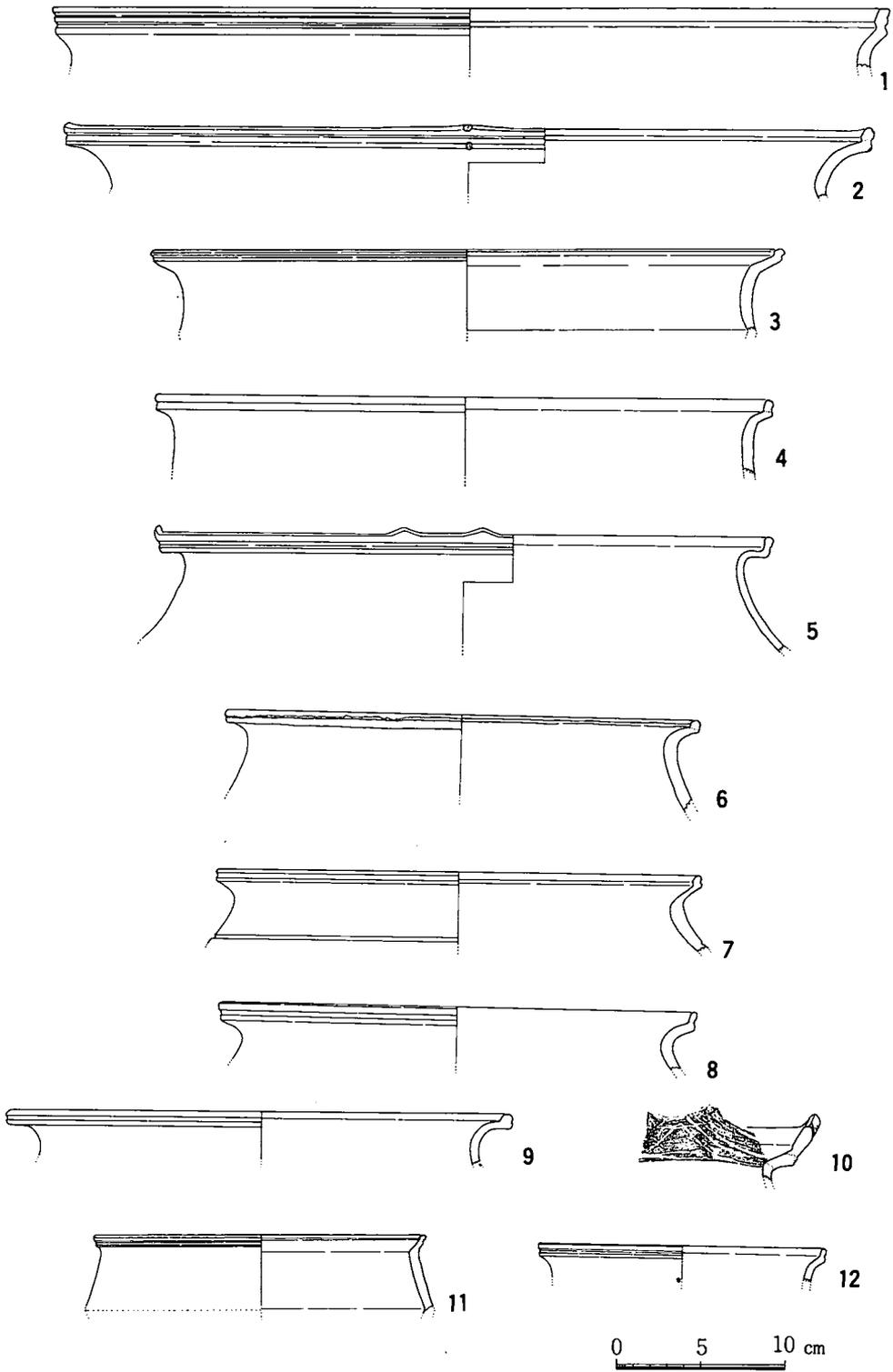
第28図 縄文晩期の土器



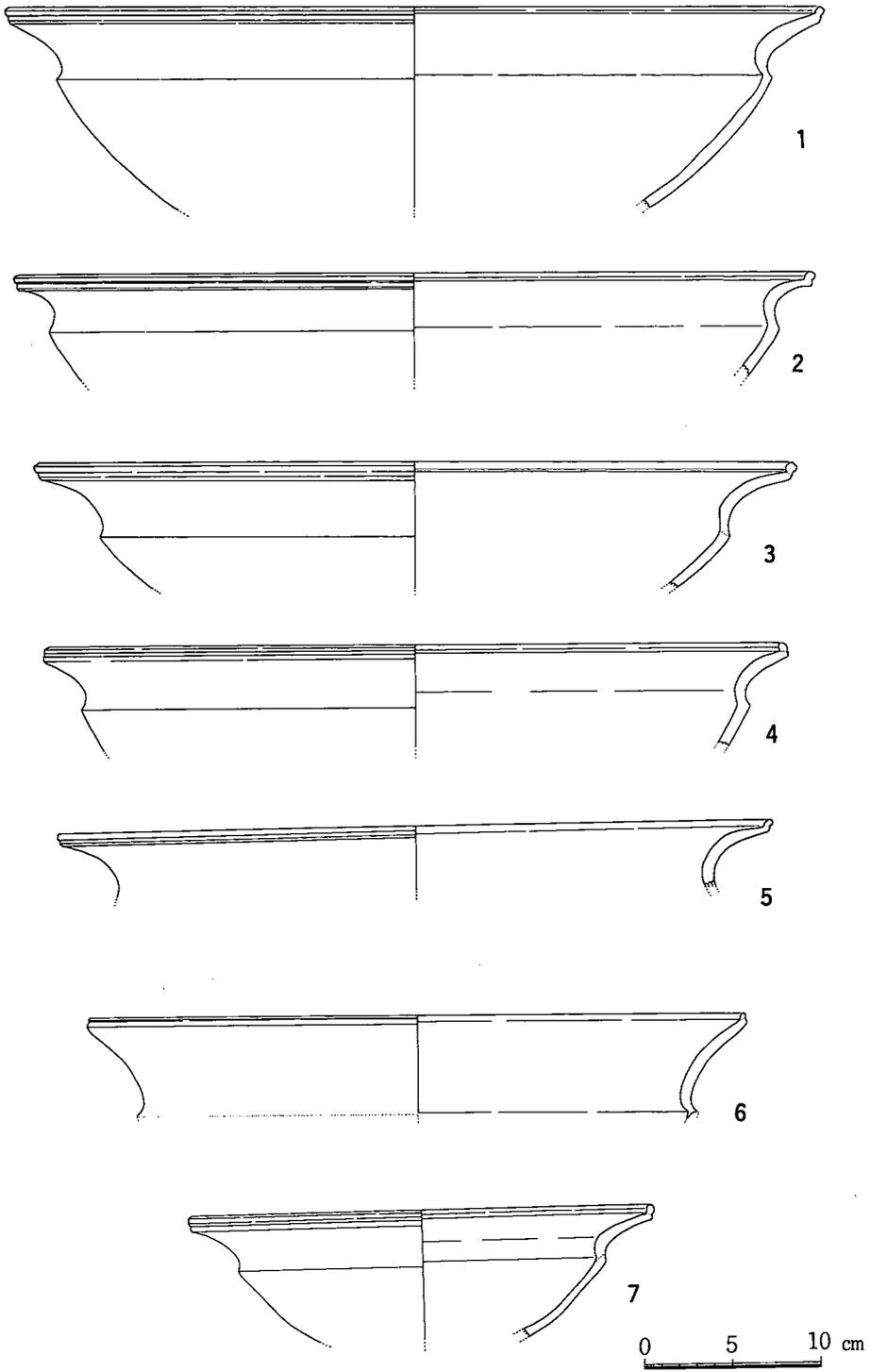
第29図 縄文晩期の土器



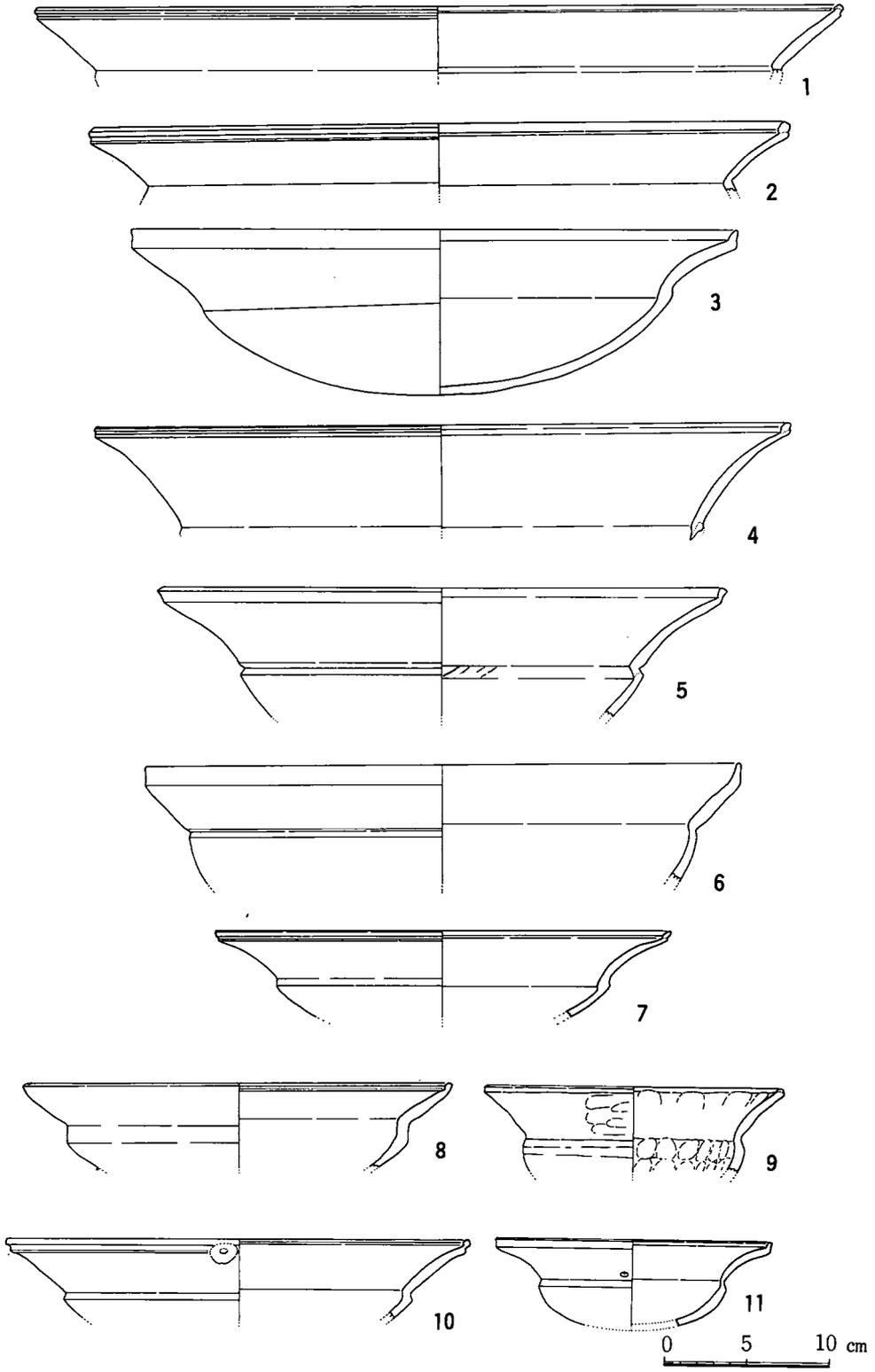
第30図 縄文晩期の土器



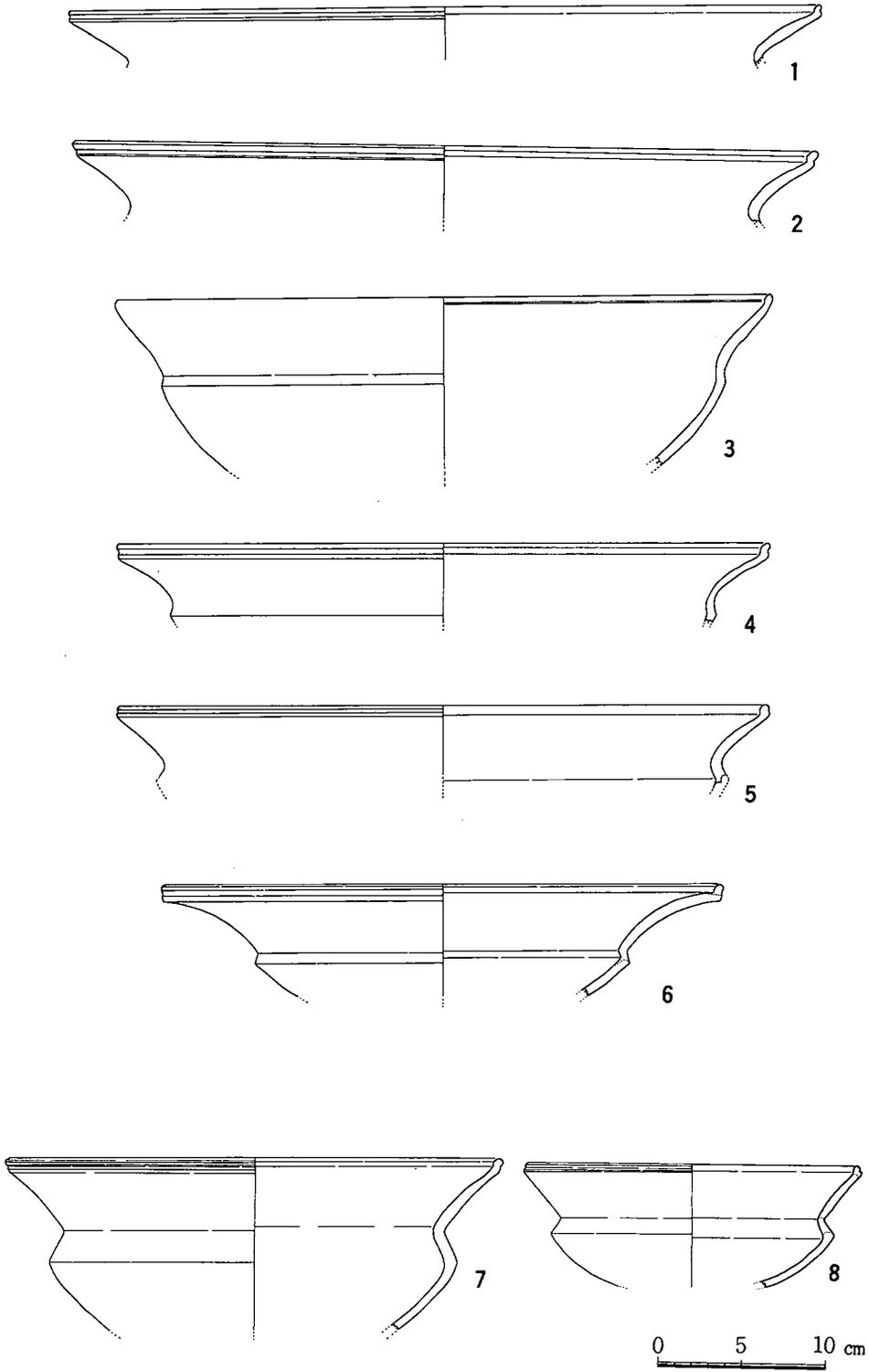
第31図 縄文晩期の土器



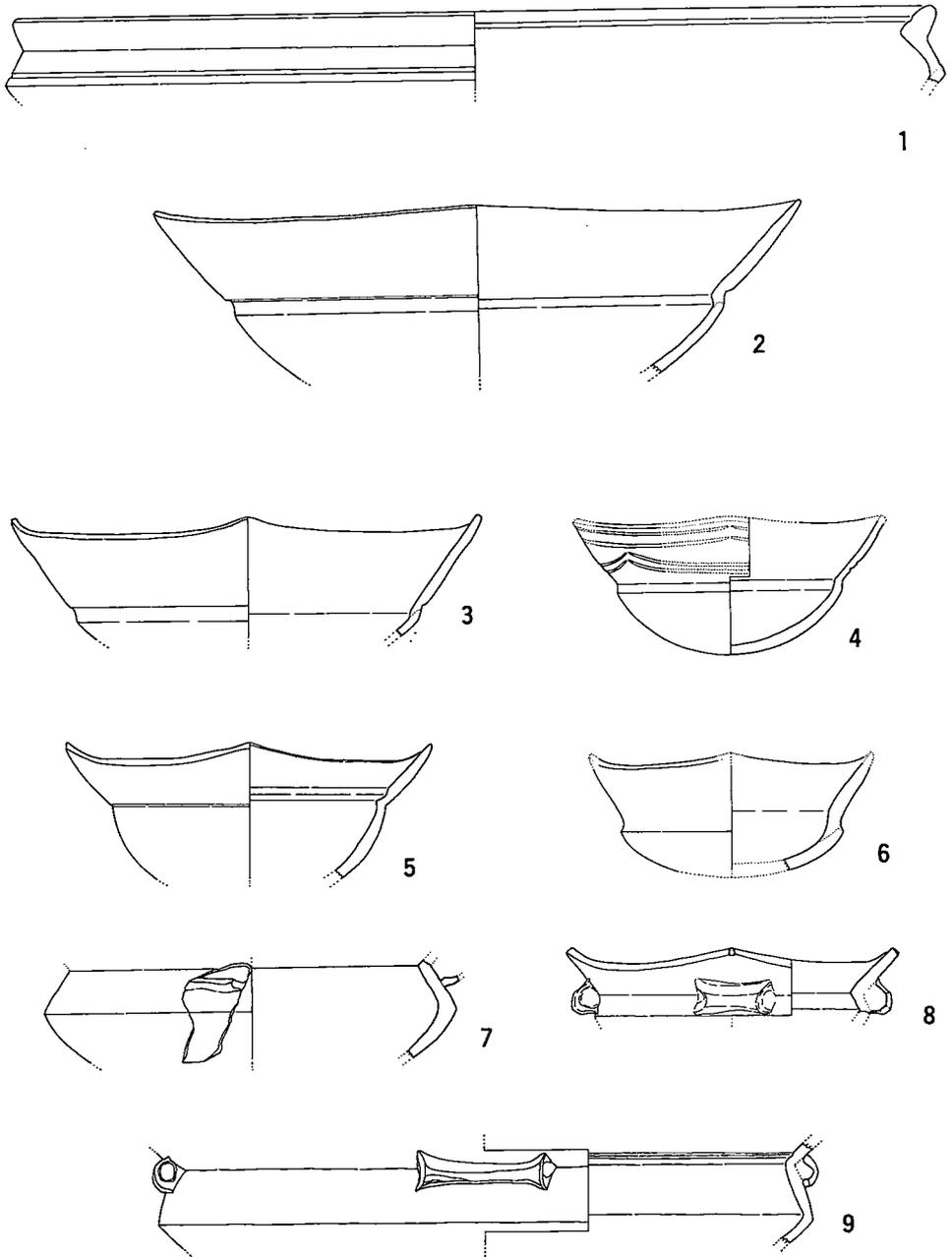
第32図 縄文晩期の土器



第33図 縄文晩期の土器

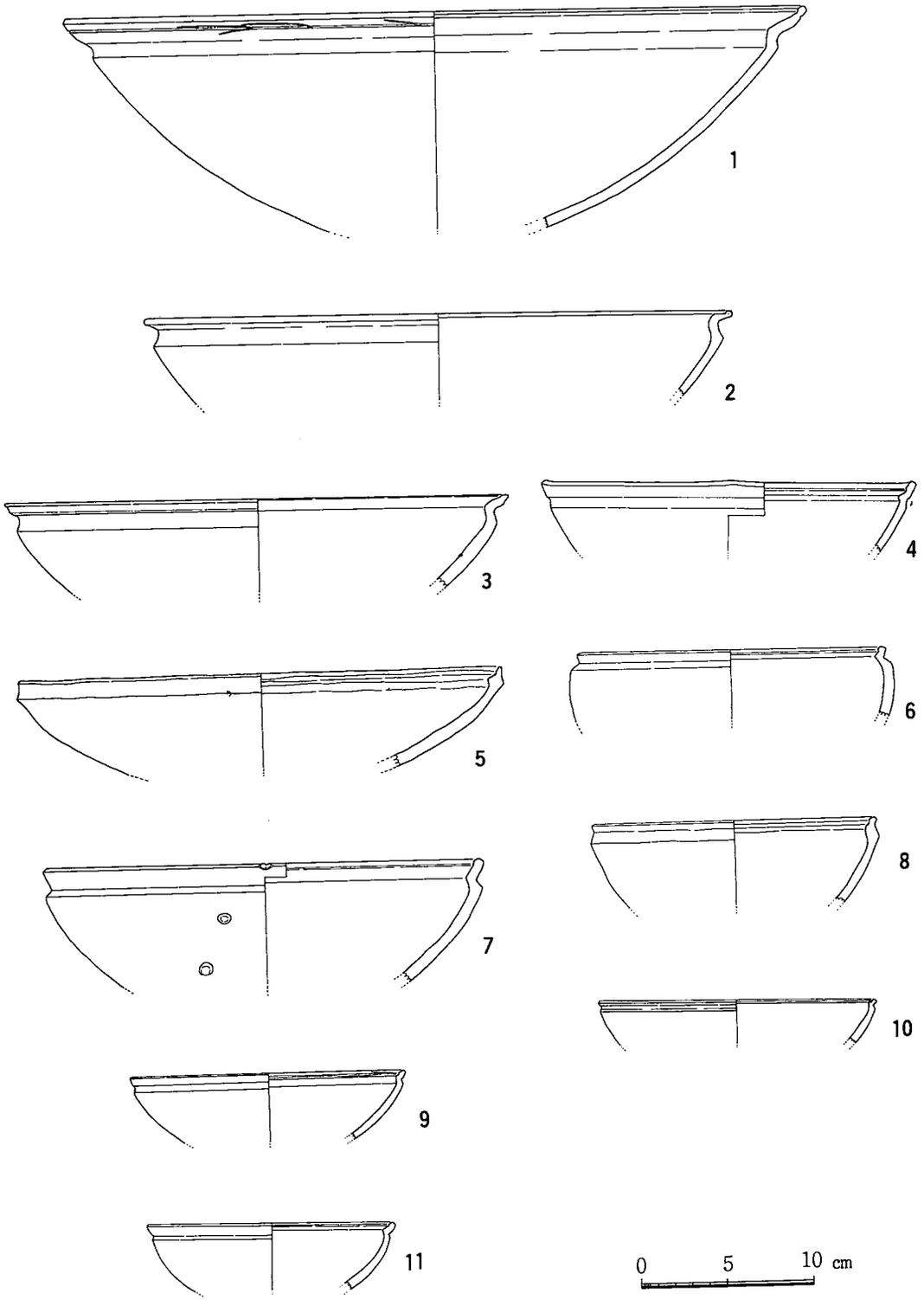


第34図 縄文晩期の土器

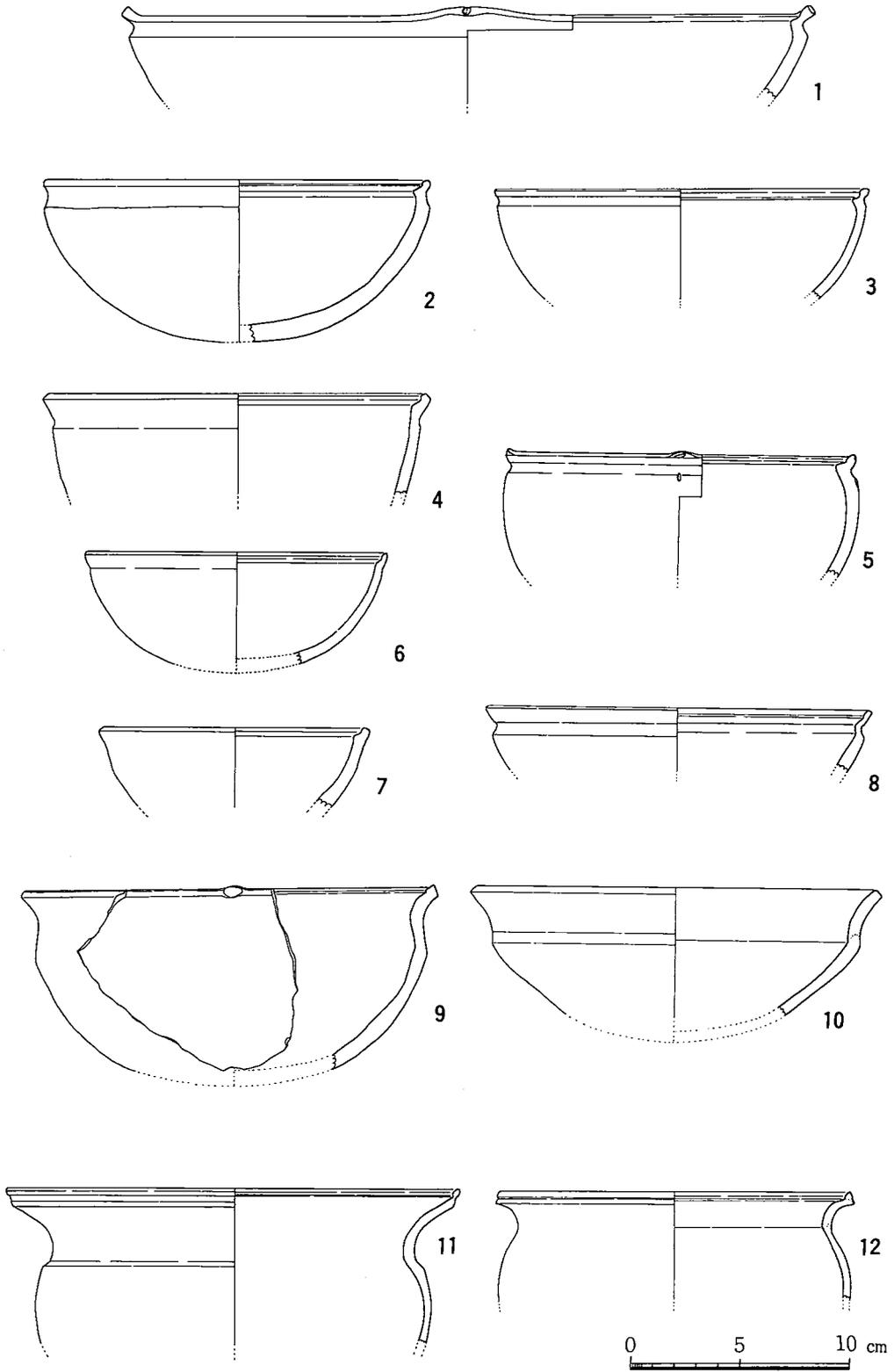


0 5 10 cm

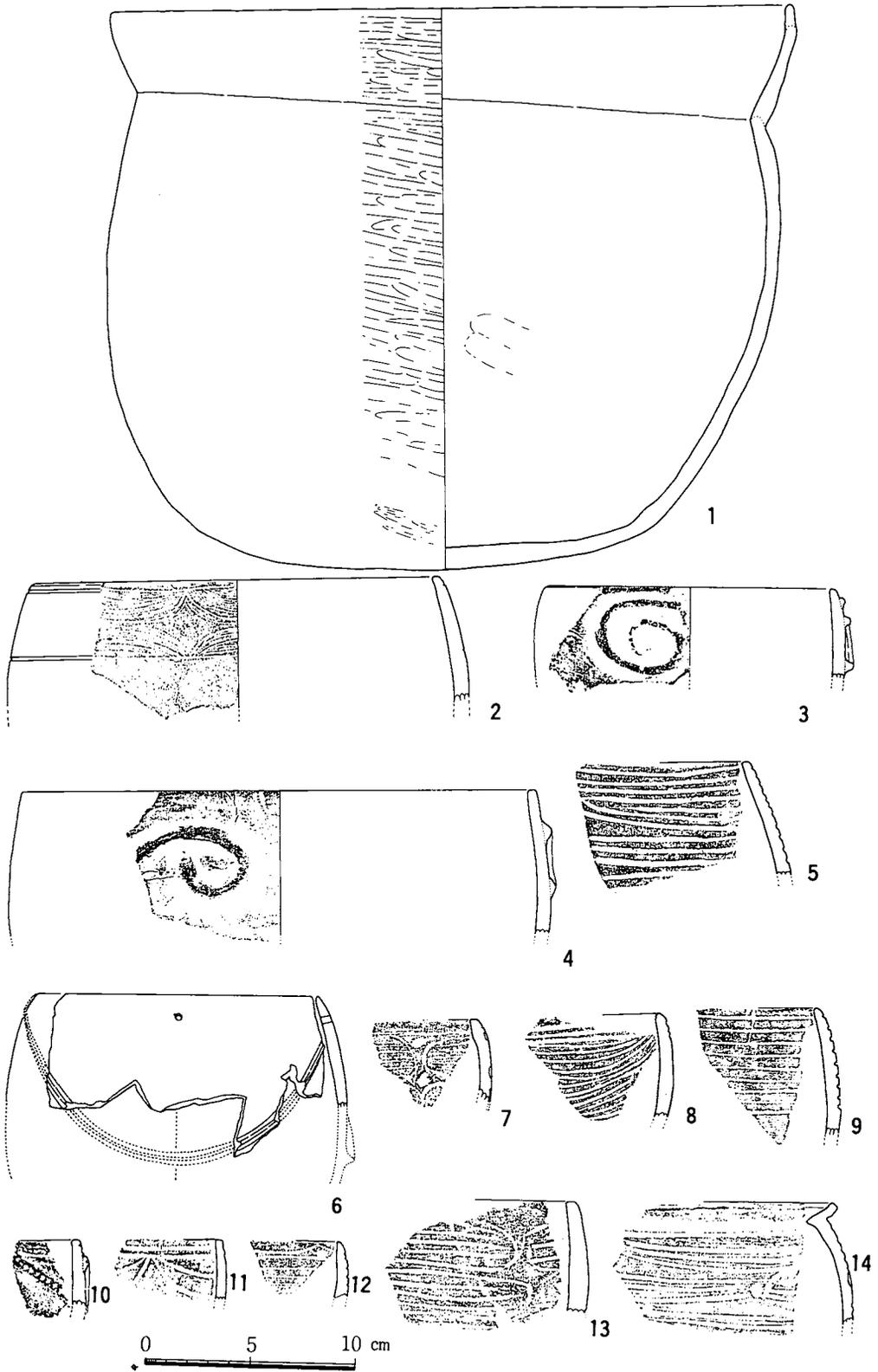
第35図 縄文晩期の土器



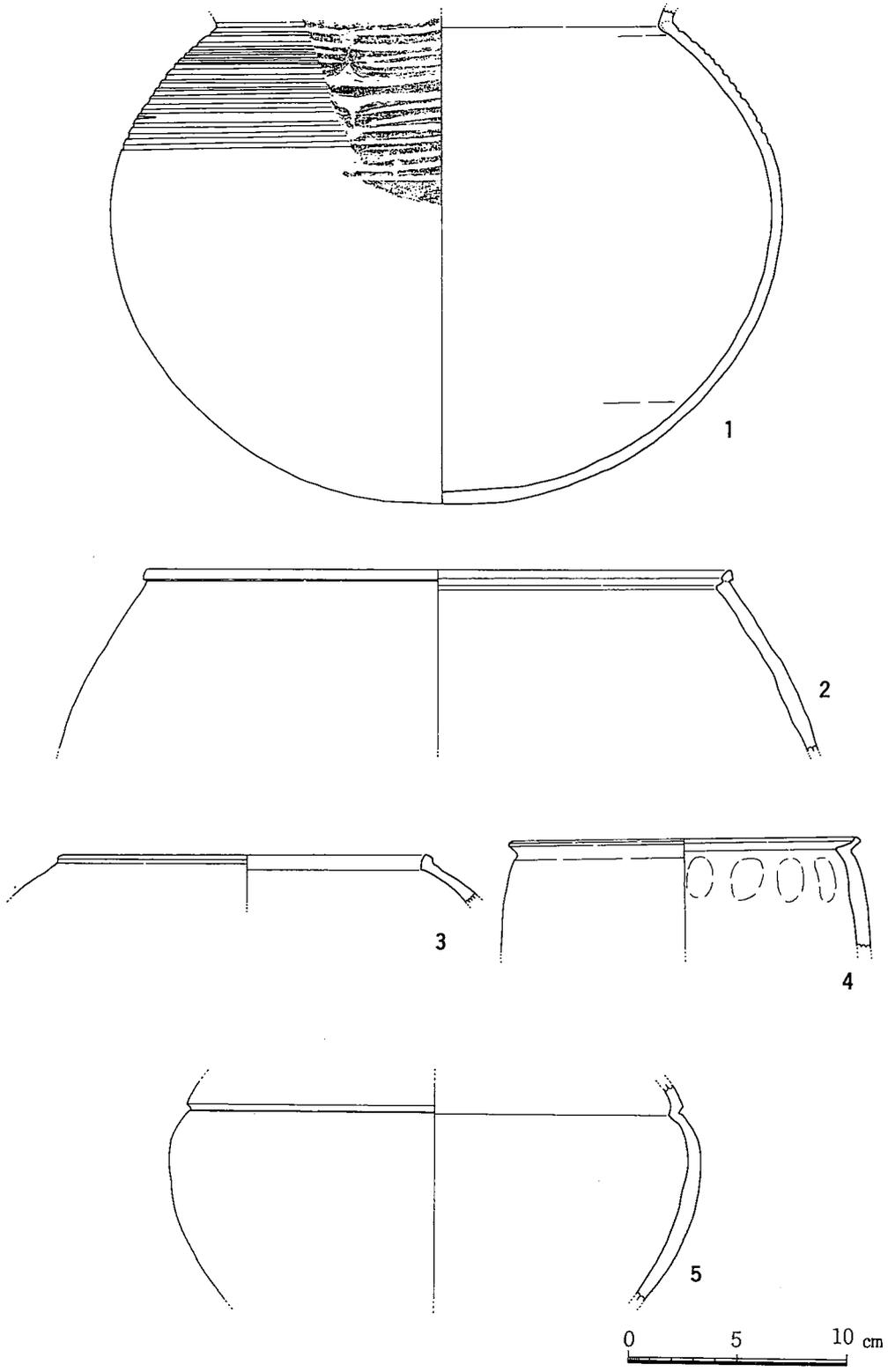
第36図 縄文晩期の土器



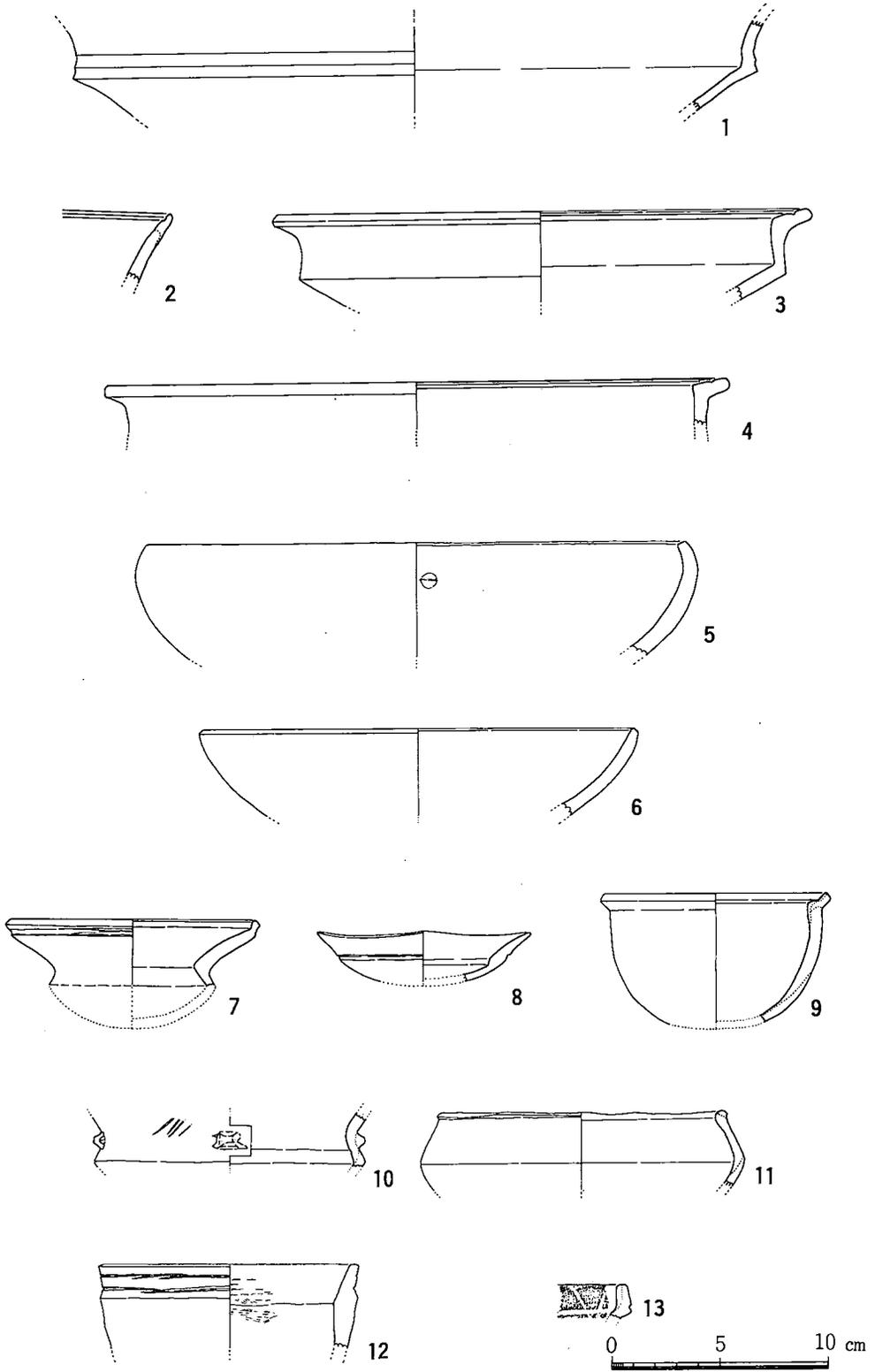
第37図 縄文晩期の土器



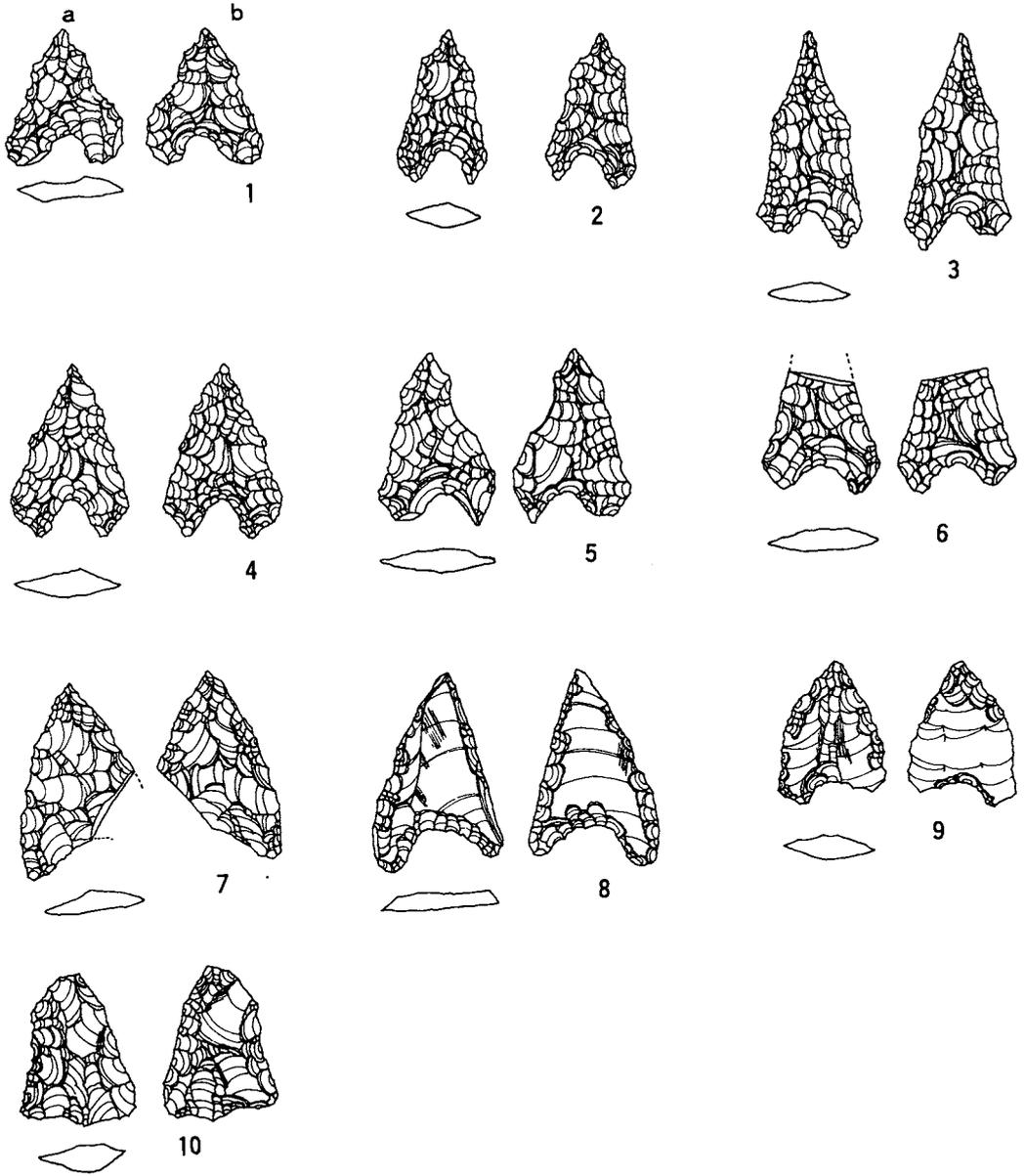
第38図 縄文晩期の土器



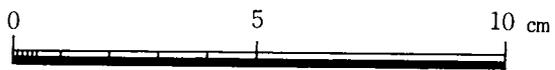
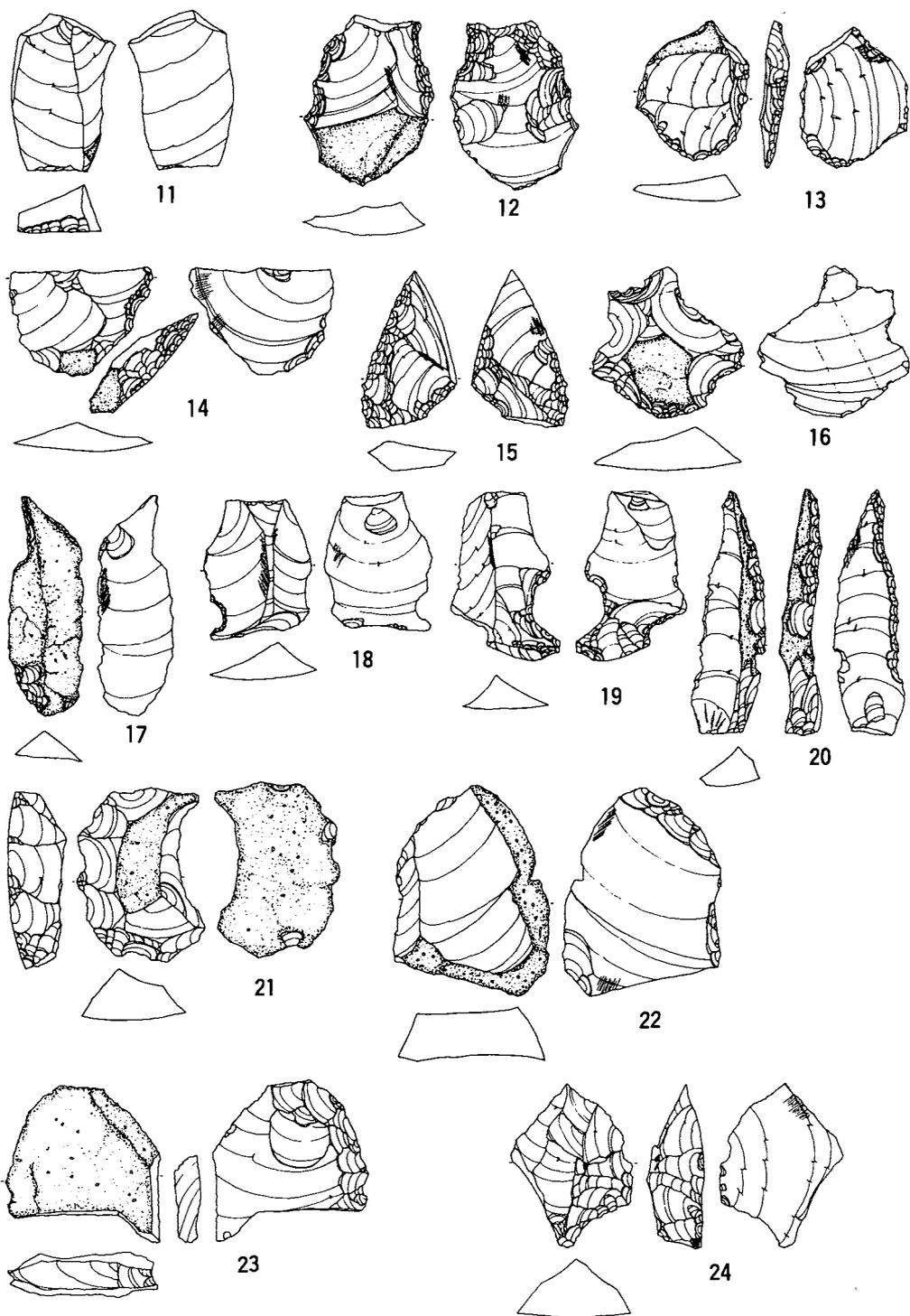
第39図 縄文晩期の土器



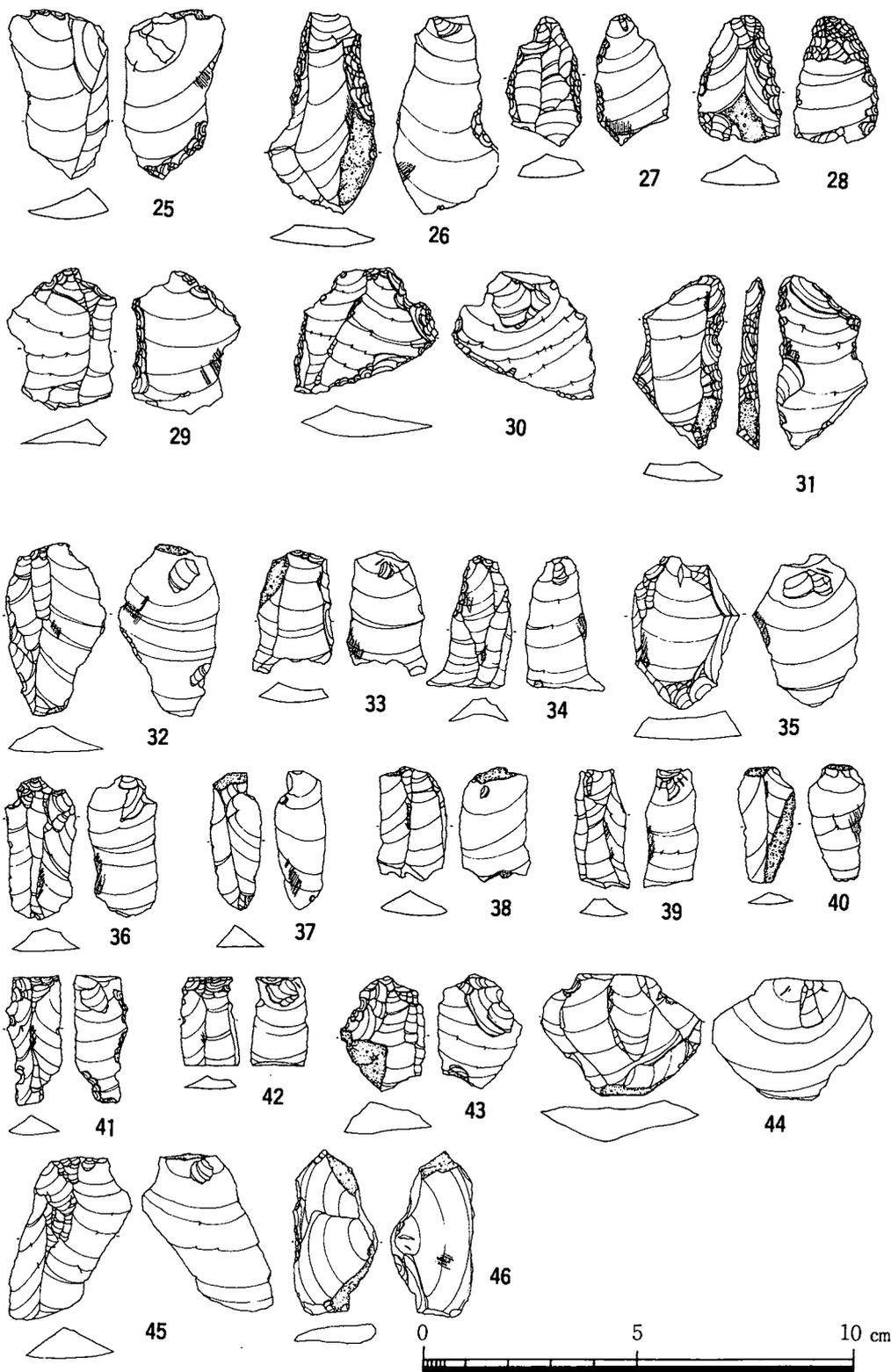
第40図 縄文晩期の土器



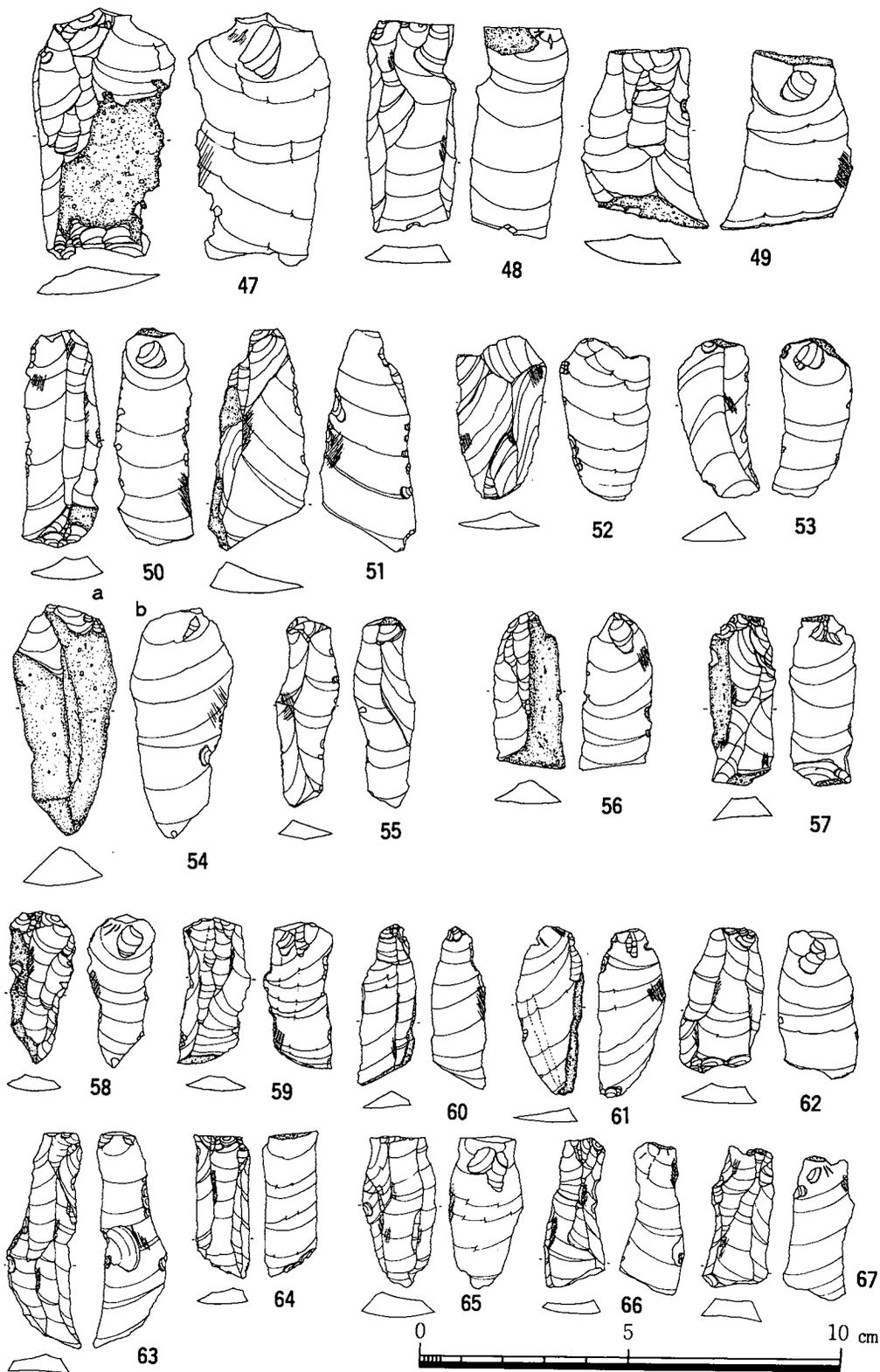
第41圖 石 器 (石 鋌)



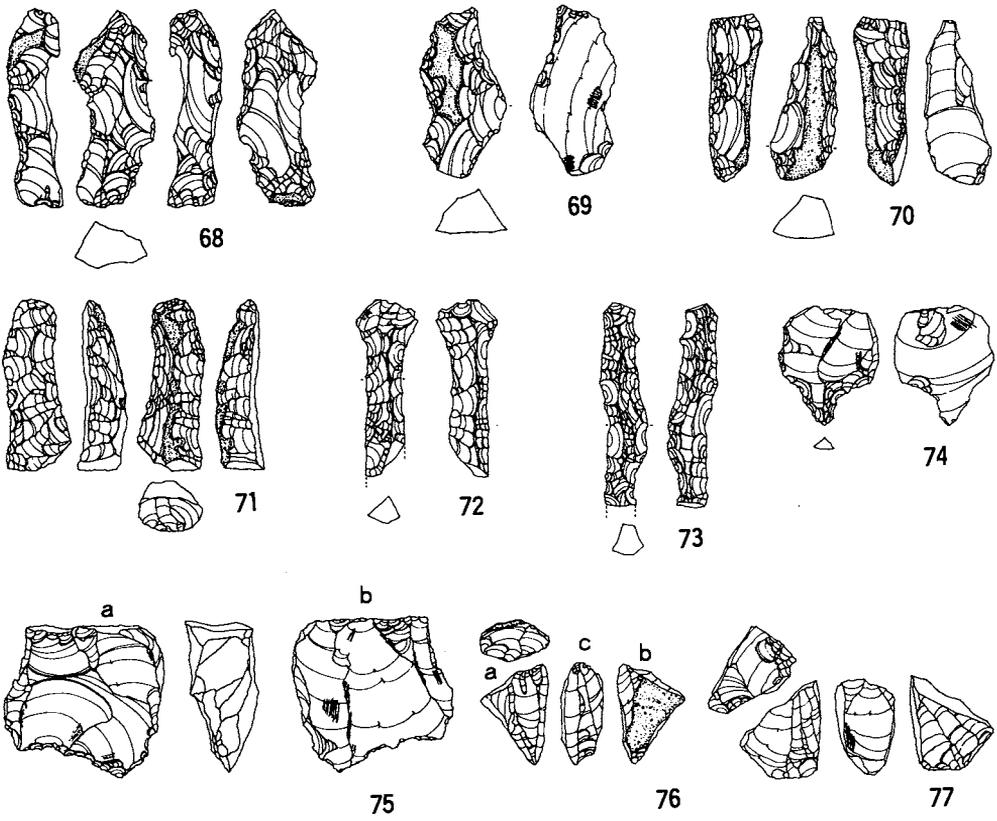
第42图 石器（二次加工剥片）



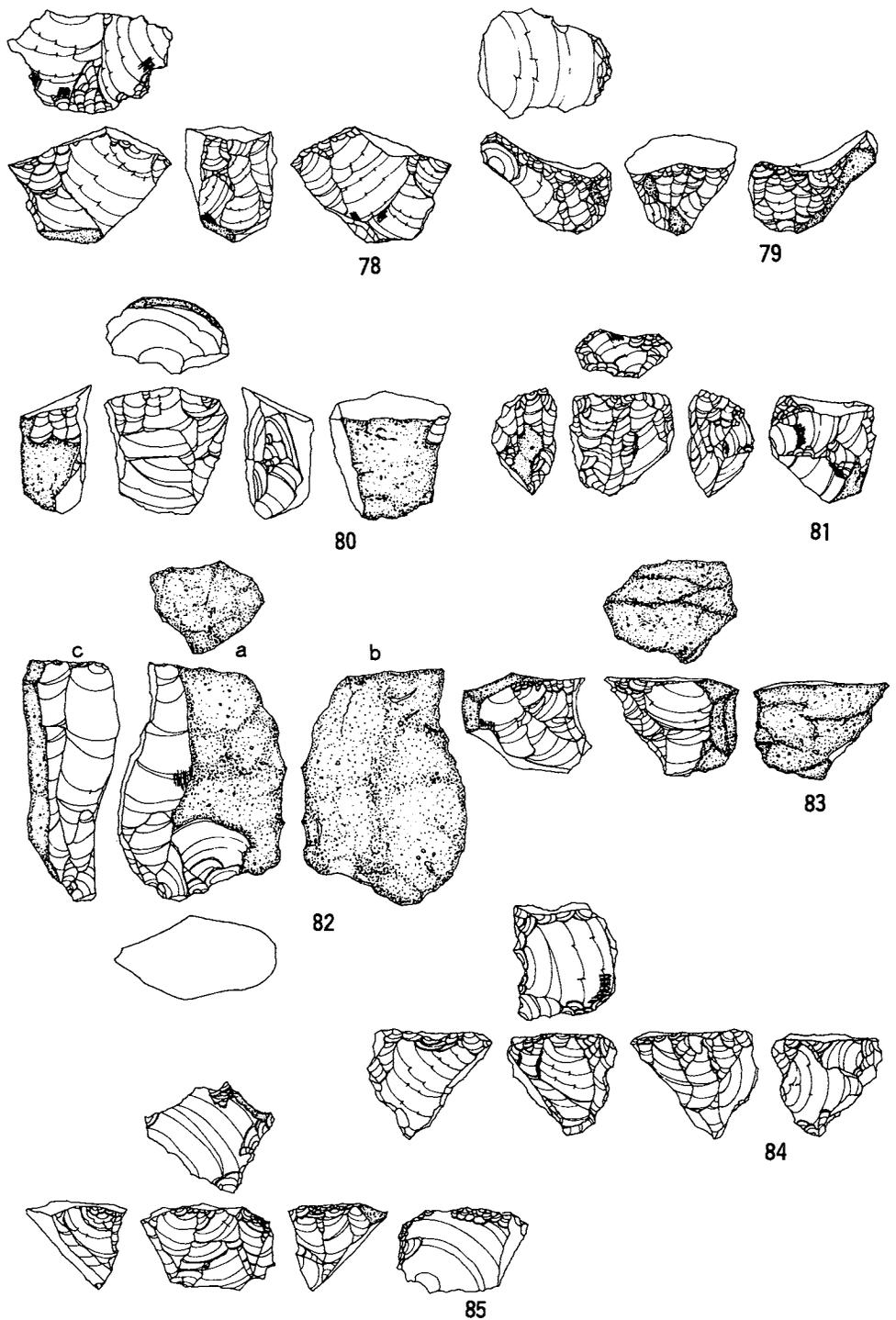
第43图 石器(二次加工剥片·刃器·剥片)



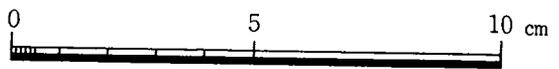
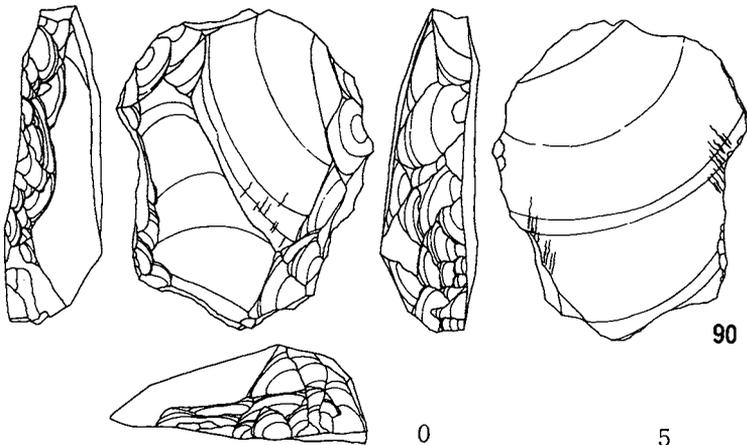
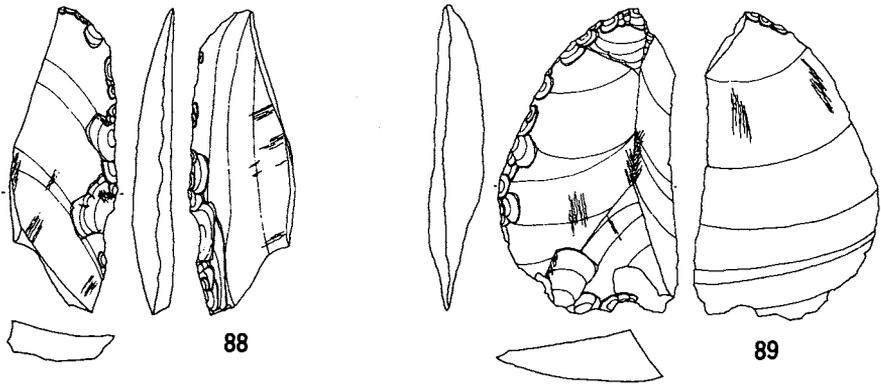
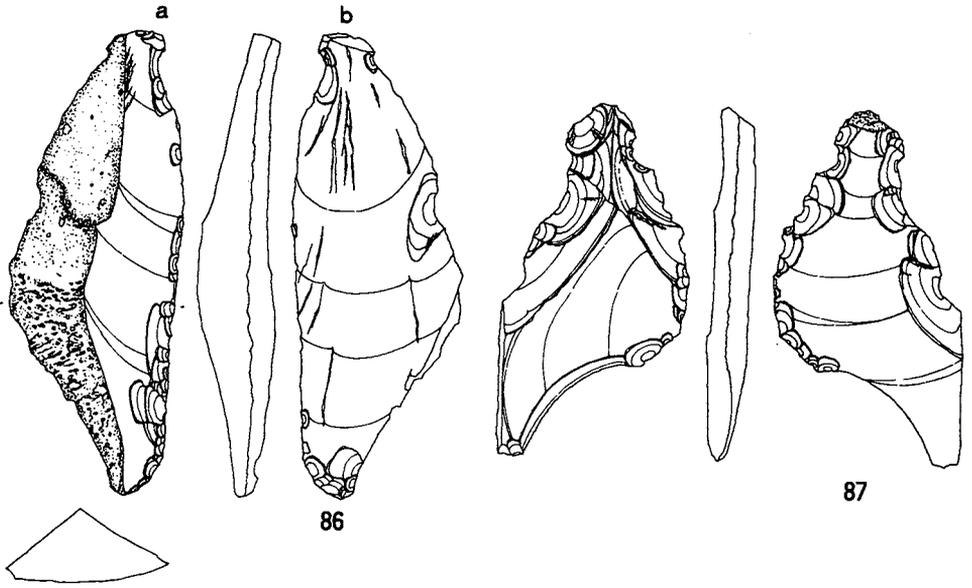
第44圖 石器(刃器・剝片)



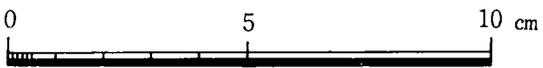
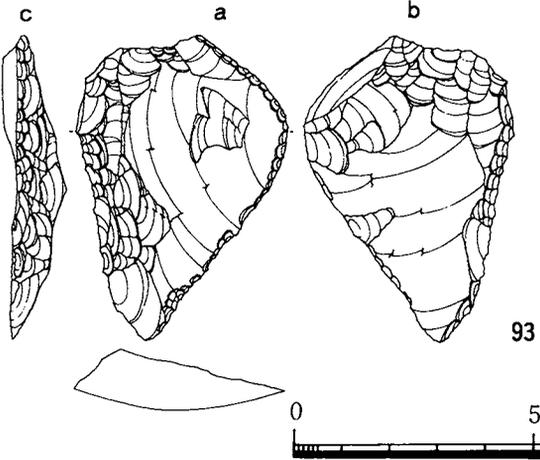
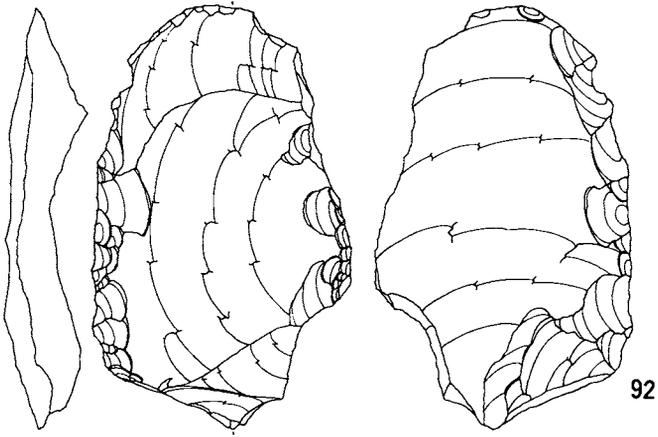
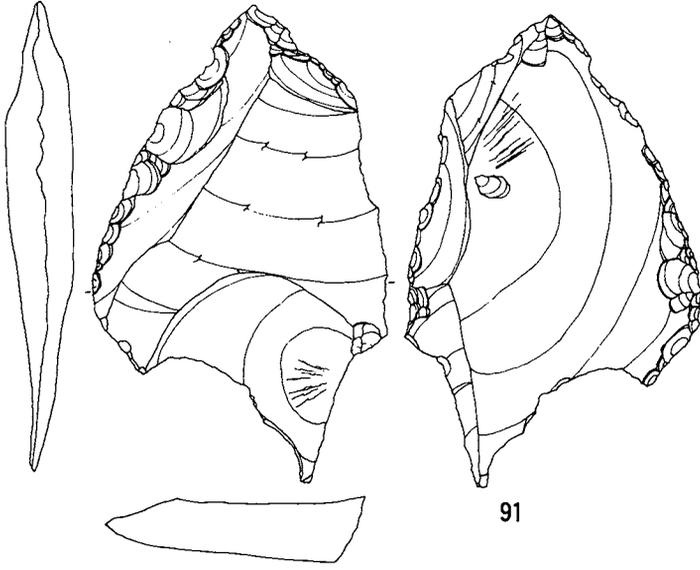
第45圖 石器（石錐・楔形石器）



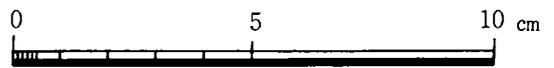
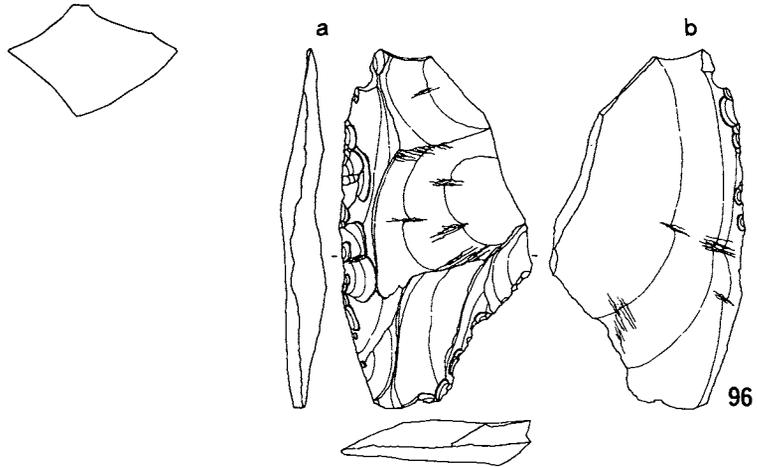
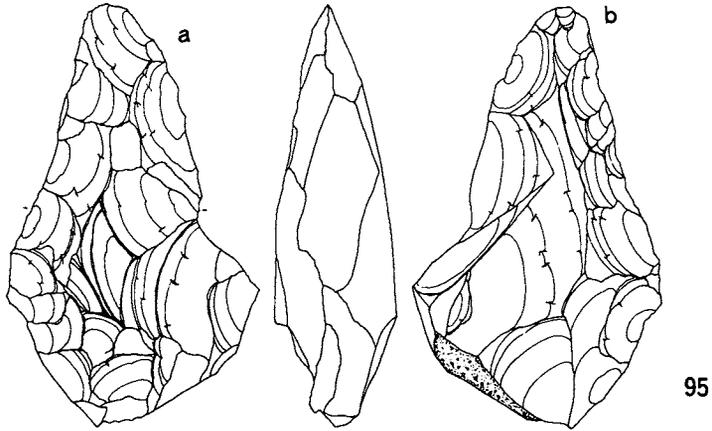
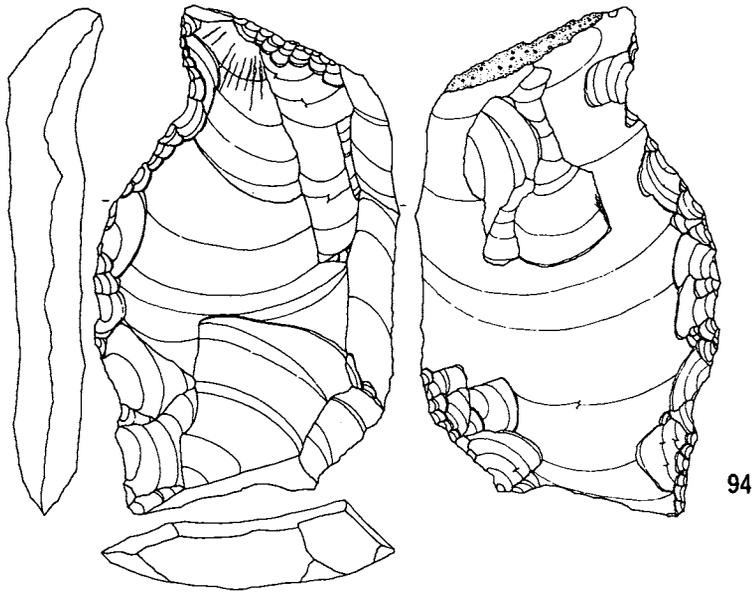
第46图 石 器 (石核)



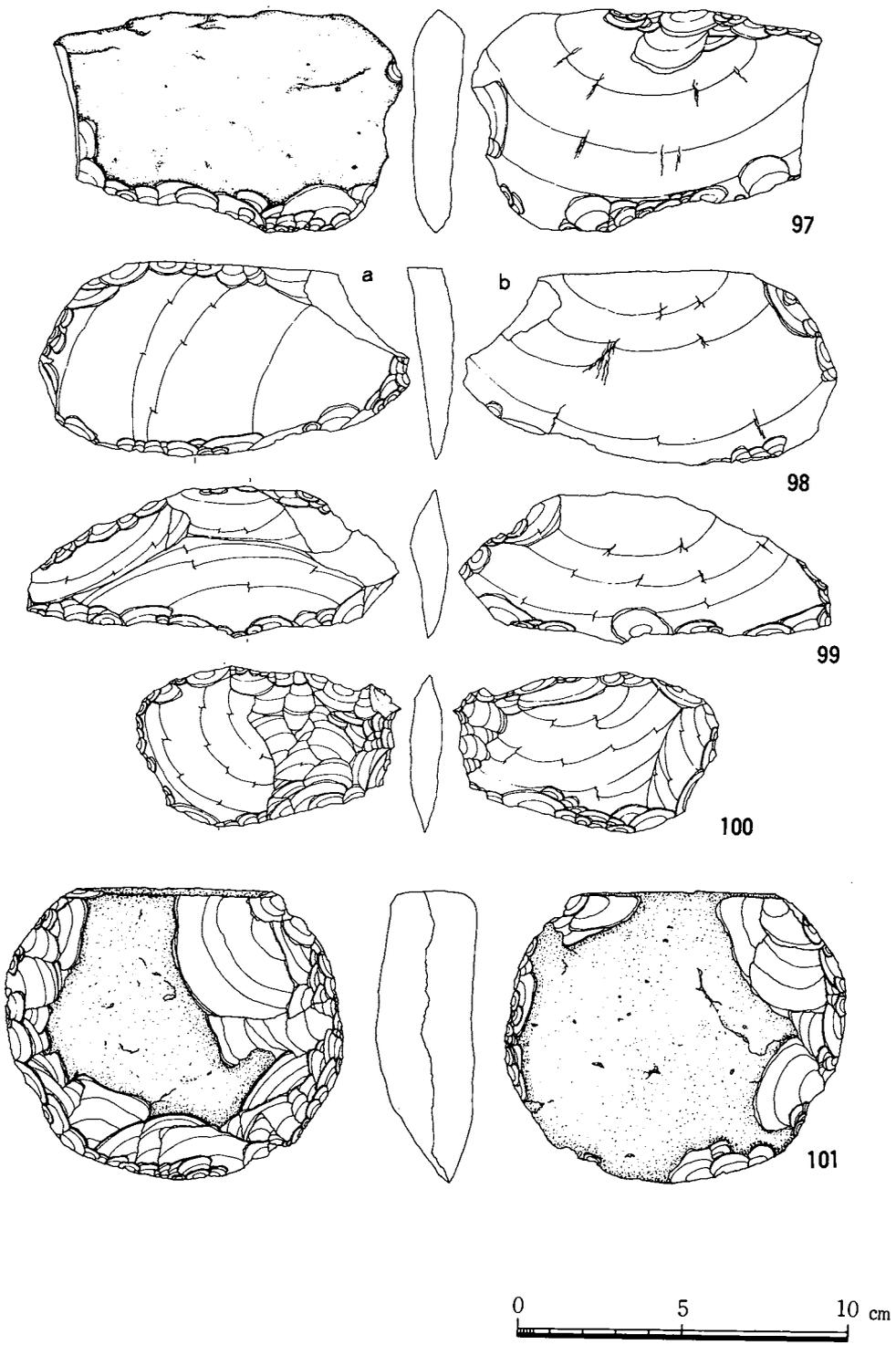
第47圖 石 器(削器)



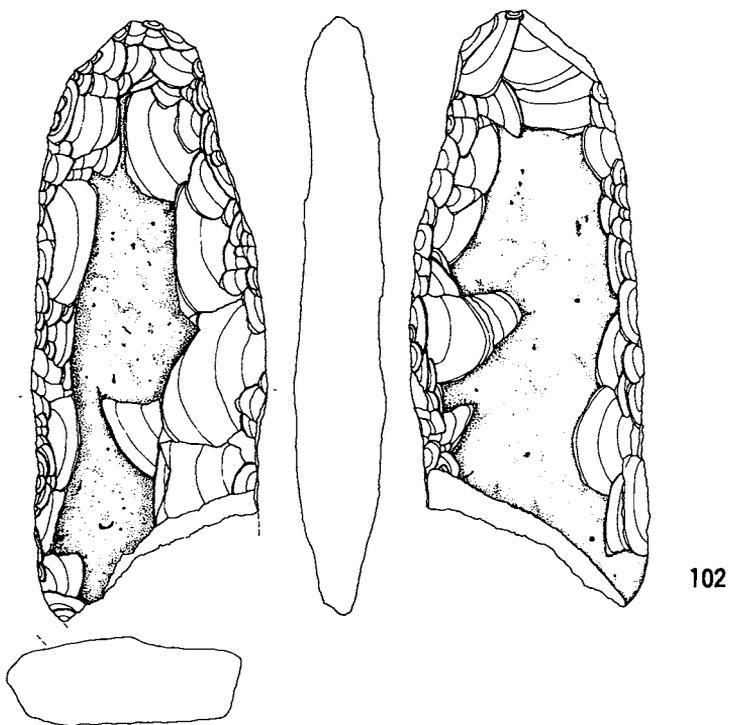
第48圖 石 器 (削器)



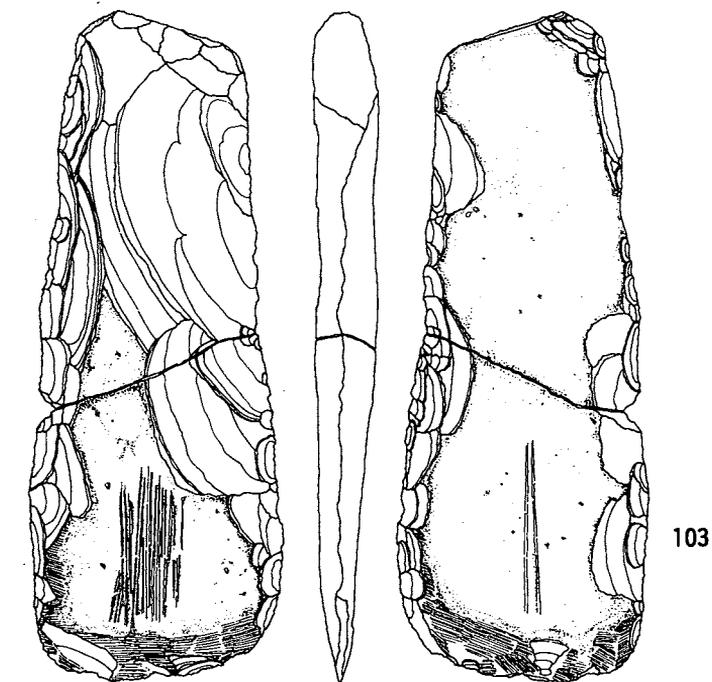
第49图 石器(削器)



第50圖 石 器 (削器·円盤状石器)



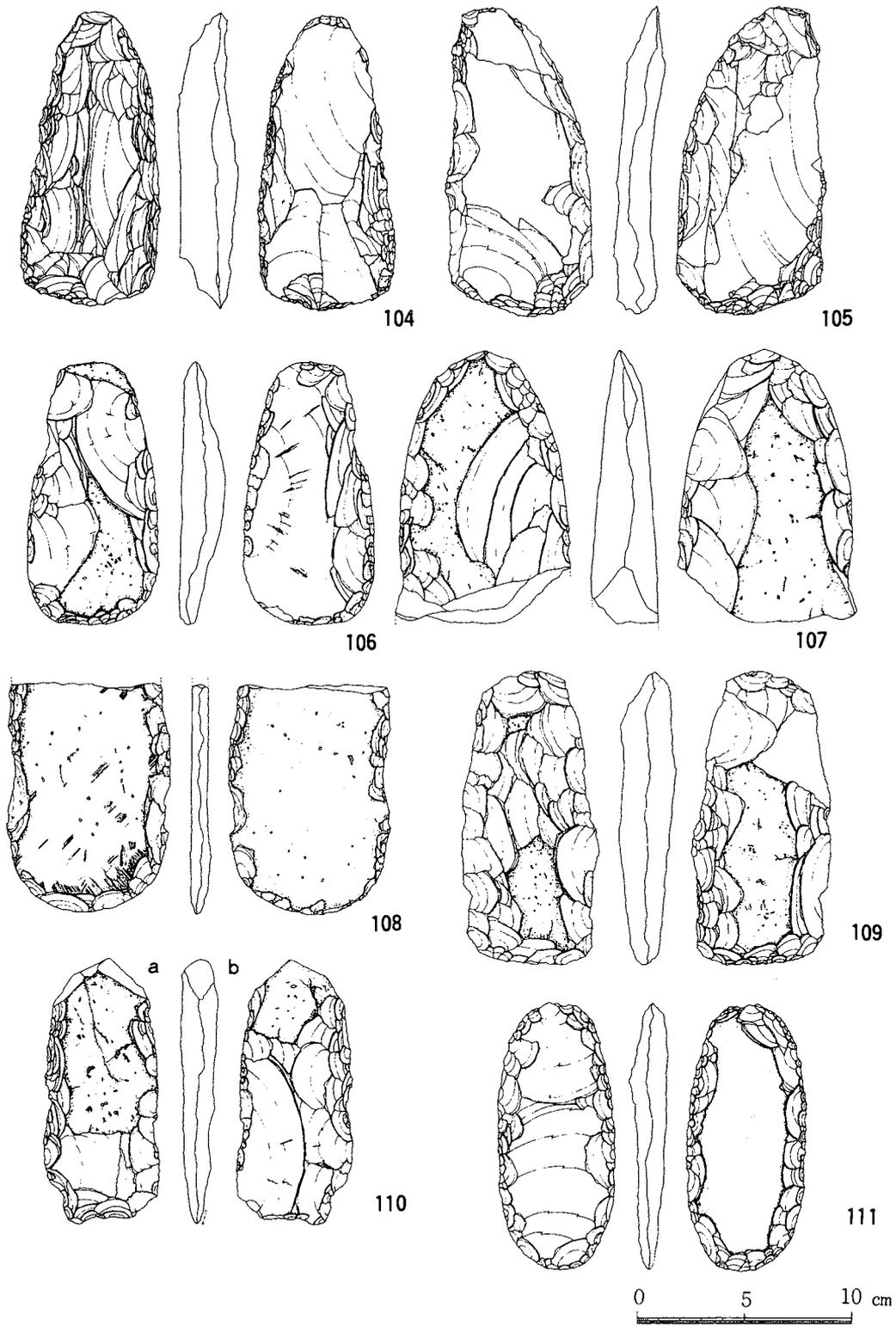
102



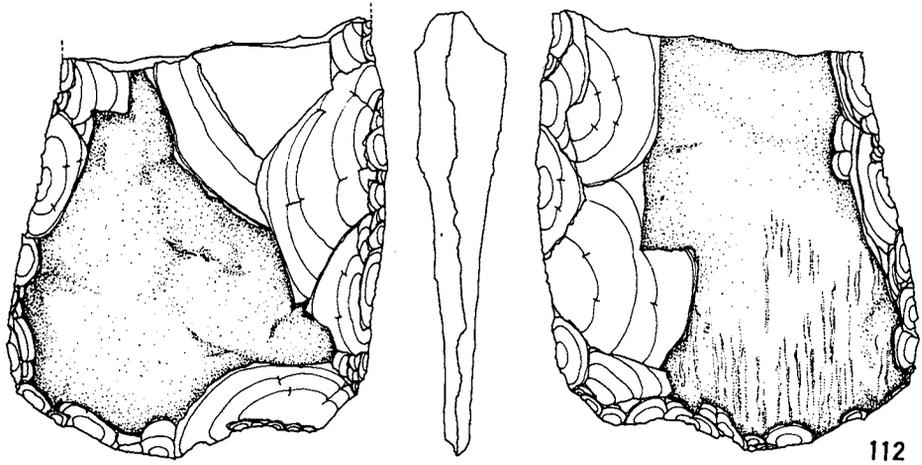
103

0 5 10 cm

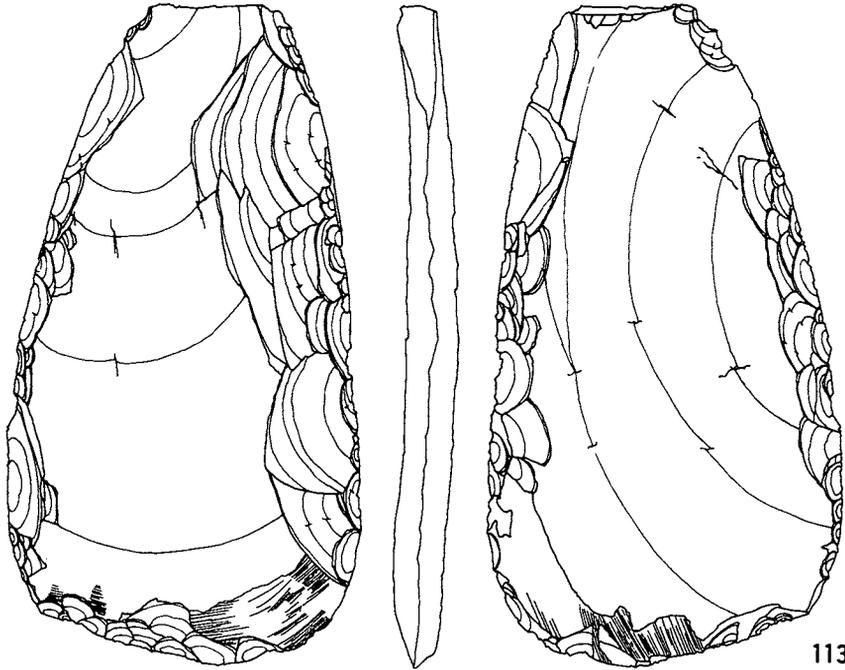
第51图 石器(扁平打製石斧)



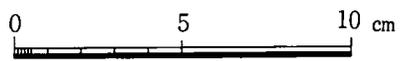
第52图 石 器(扁平打製石斧)



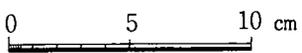
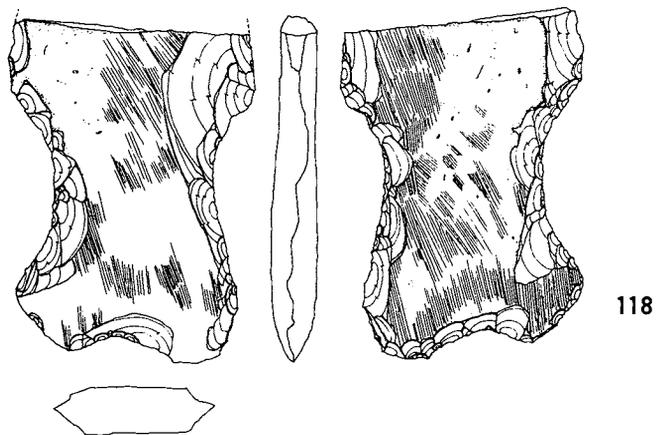
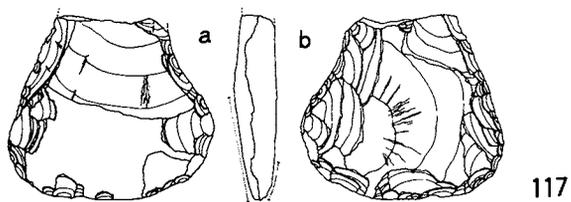
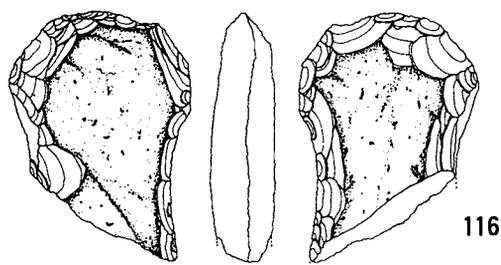
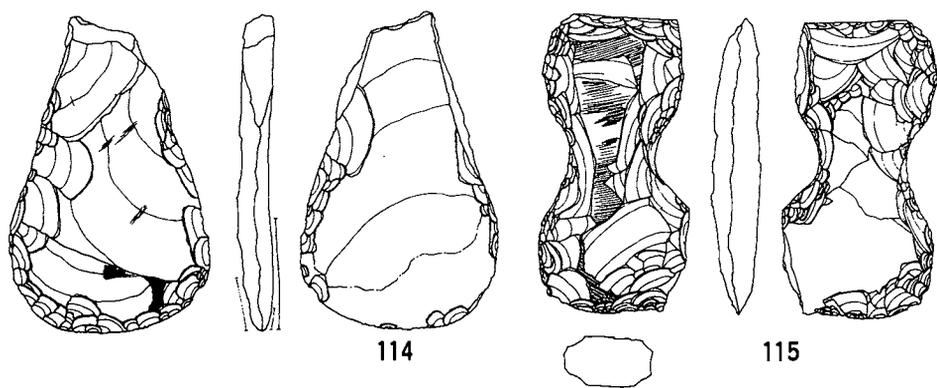
112



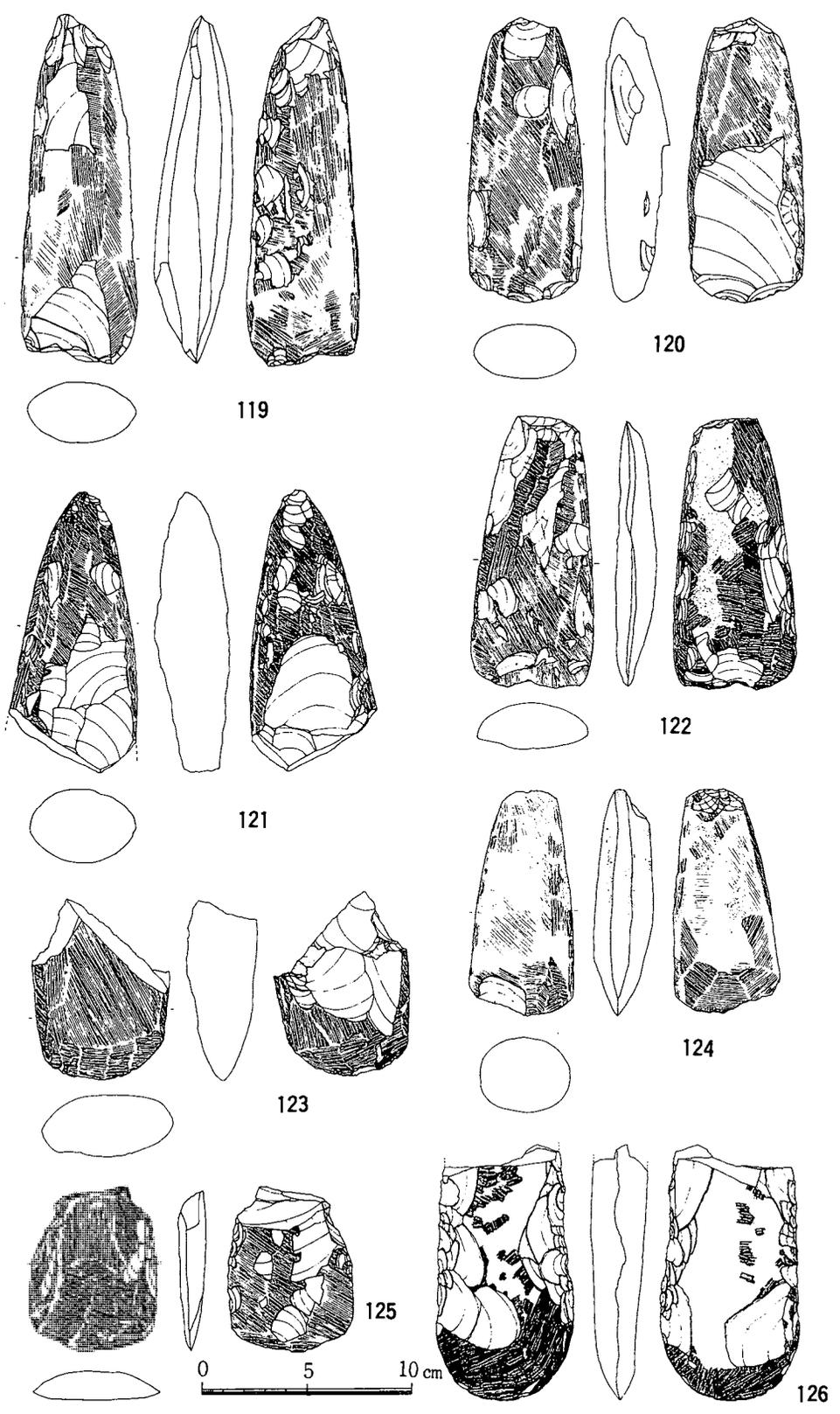
113



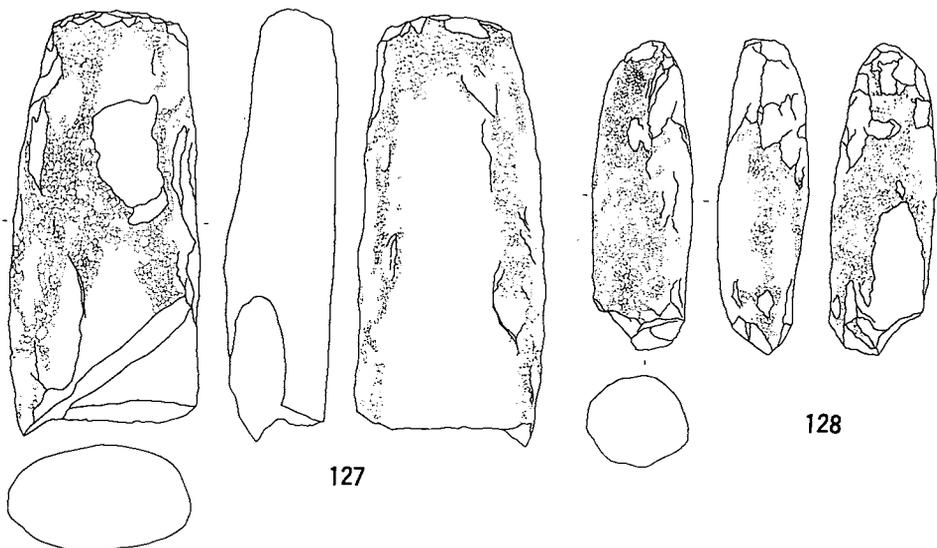
第53图 石 器(扁平打製石斧)



第54图 石 器(扁平打製石斧)

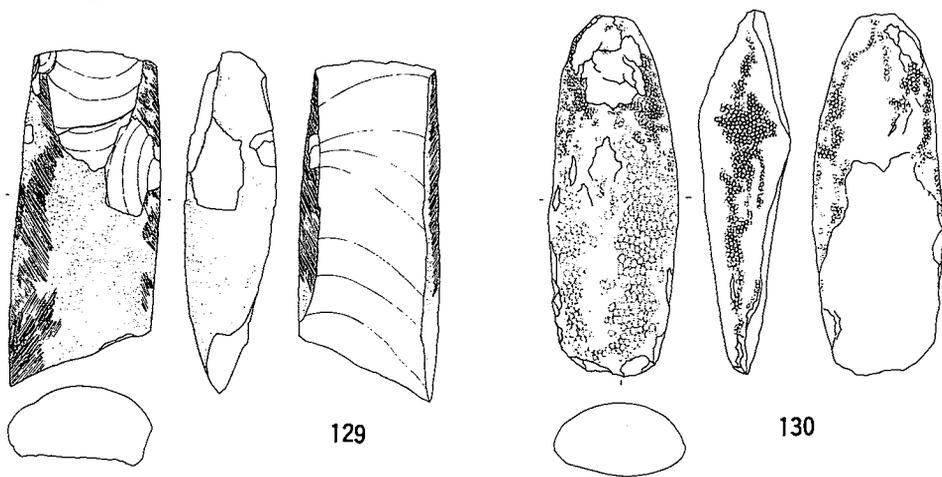


第55圖 石 器 (磨製石斧)



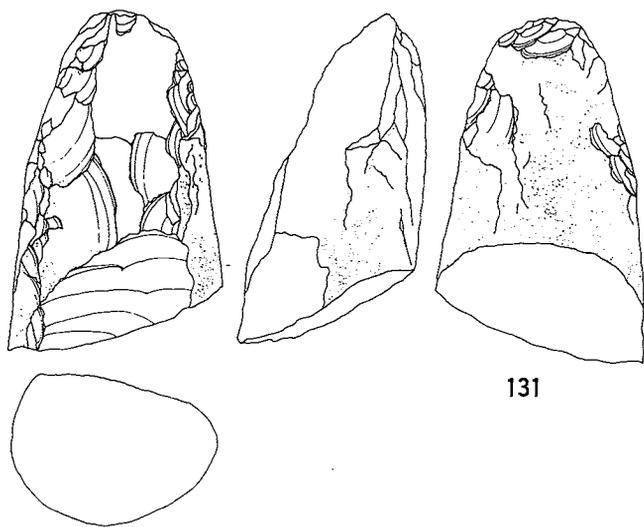
127

128



129

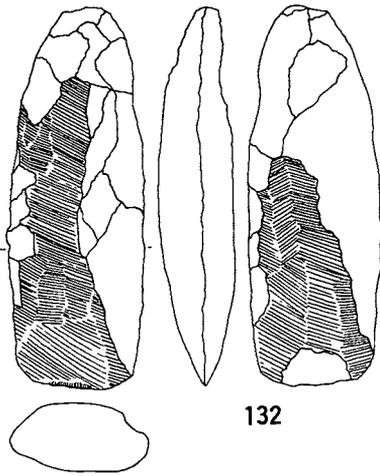
130



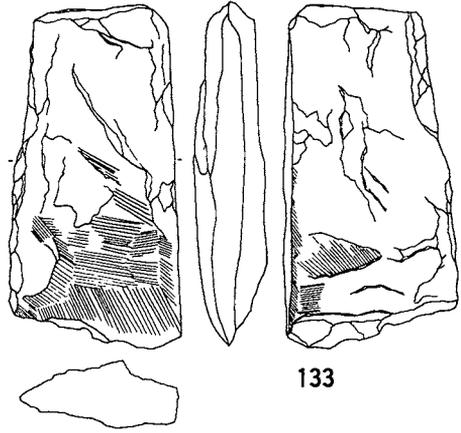
131



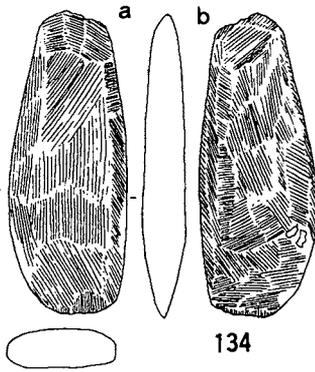
第56圖 石 器(磨製石斧未製品)



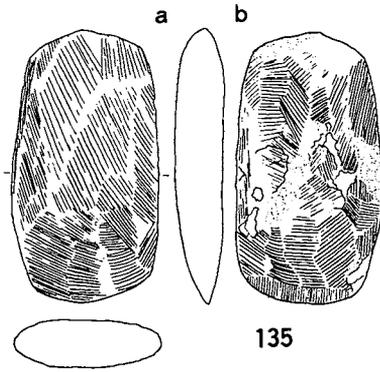
132



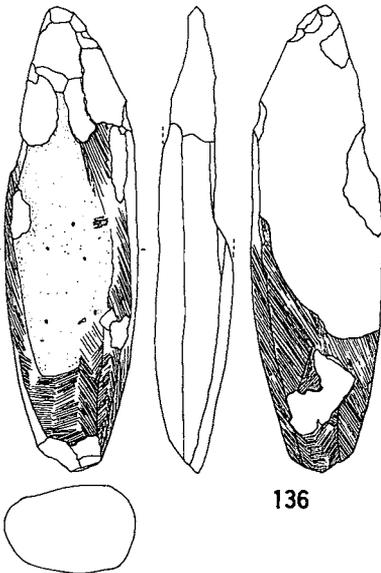
133



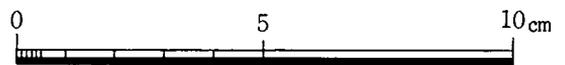
134



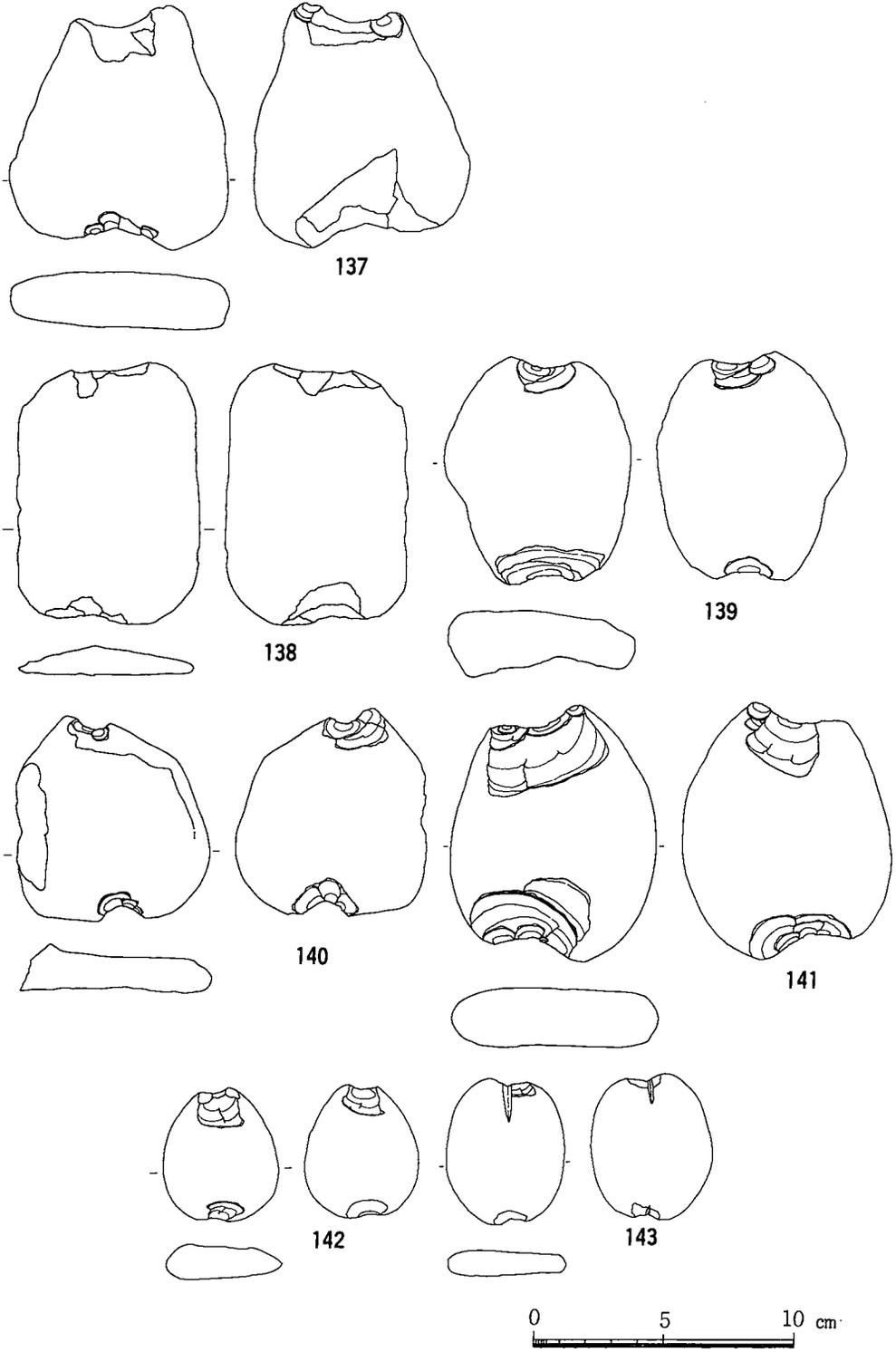
135



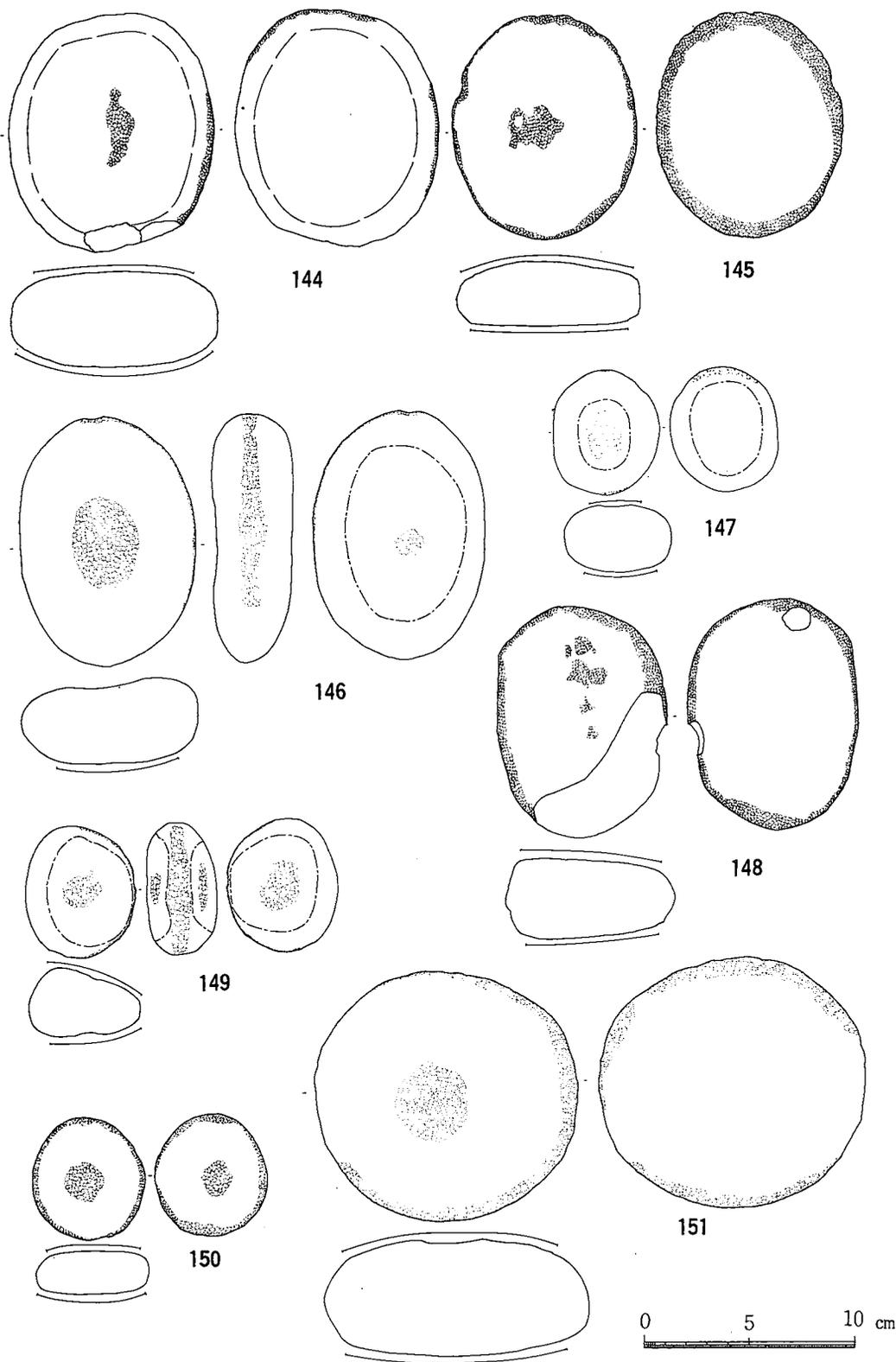
136



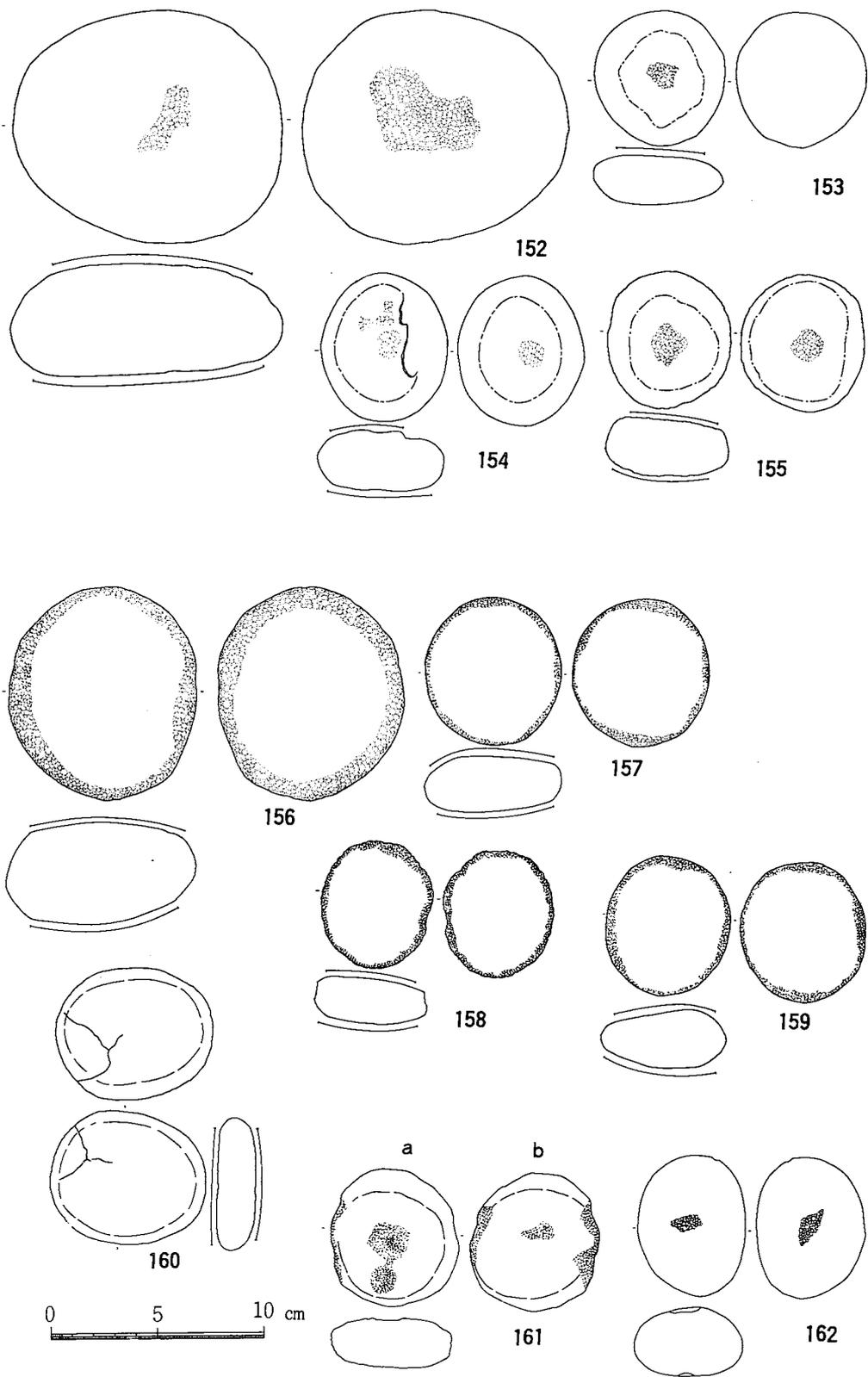
第57図 石器（ノミ状石器）



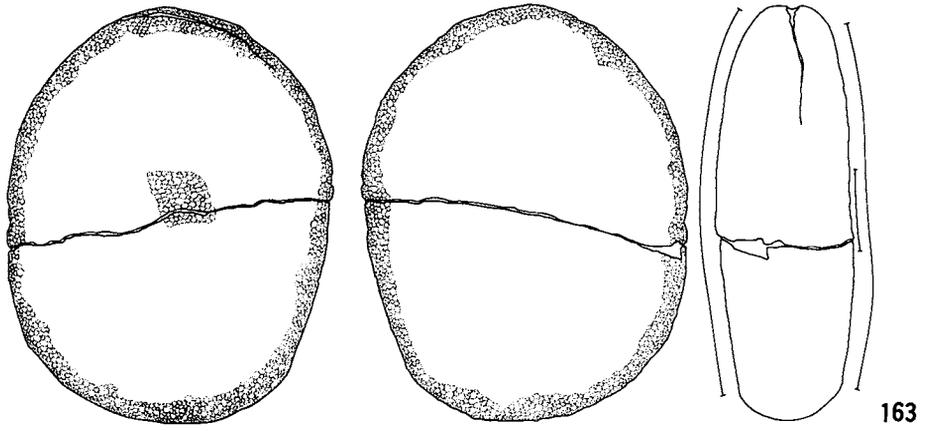
第58圖 石 器 (石錘)



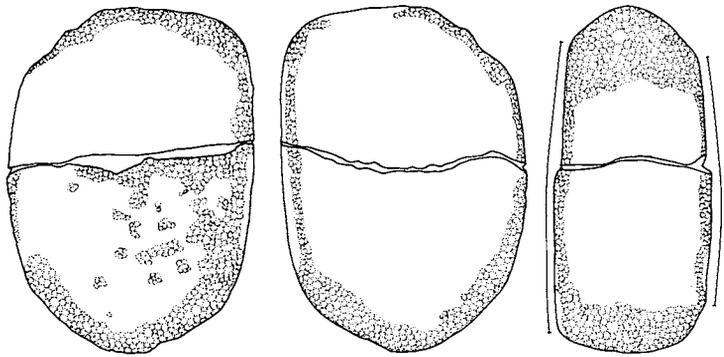
第59图 石器 (磨石·敲石)



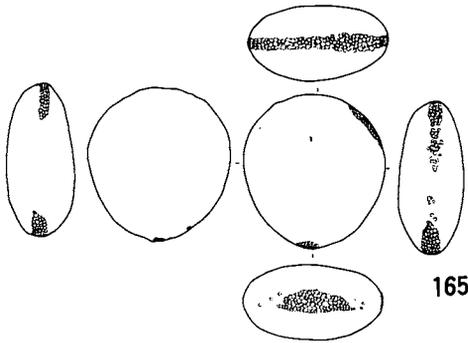
第60圖 石 器(磨石・敲石)



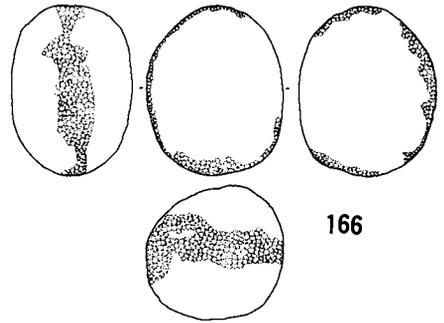
163



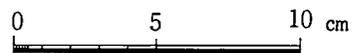
164



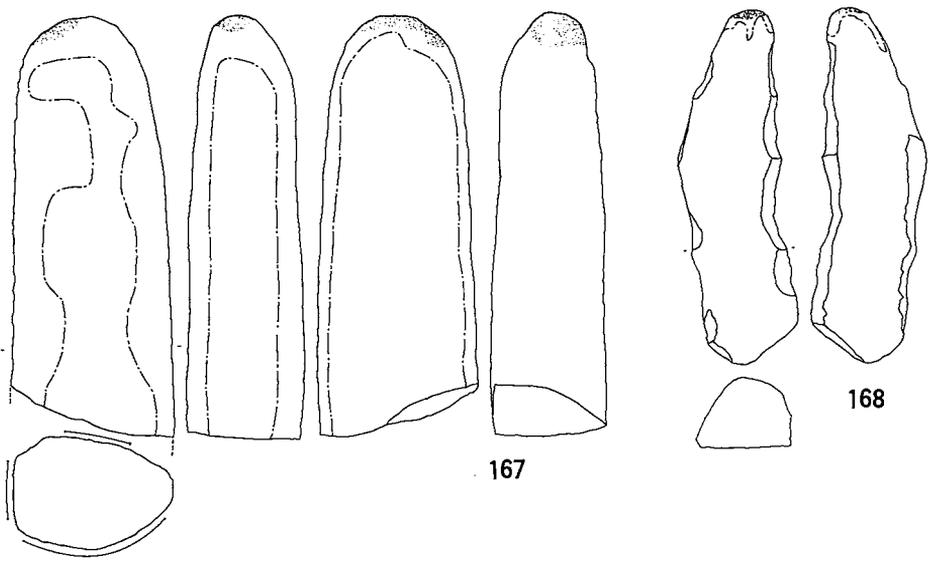
165



166

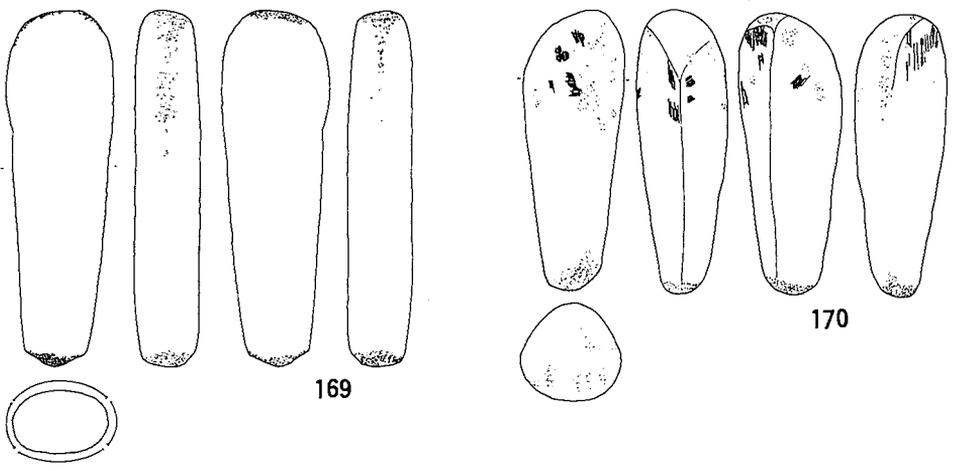


第61圖 石 器 (磨石・敲石)



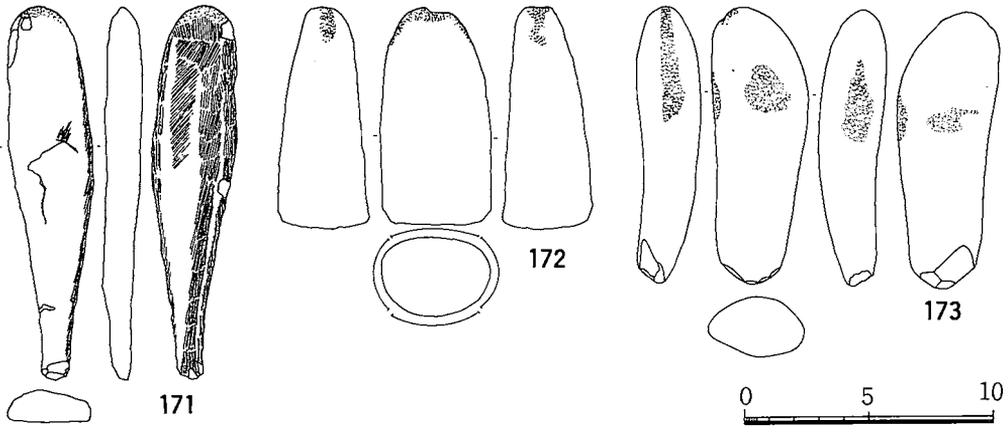
167

168



169

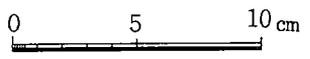
170



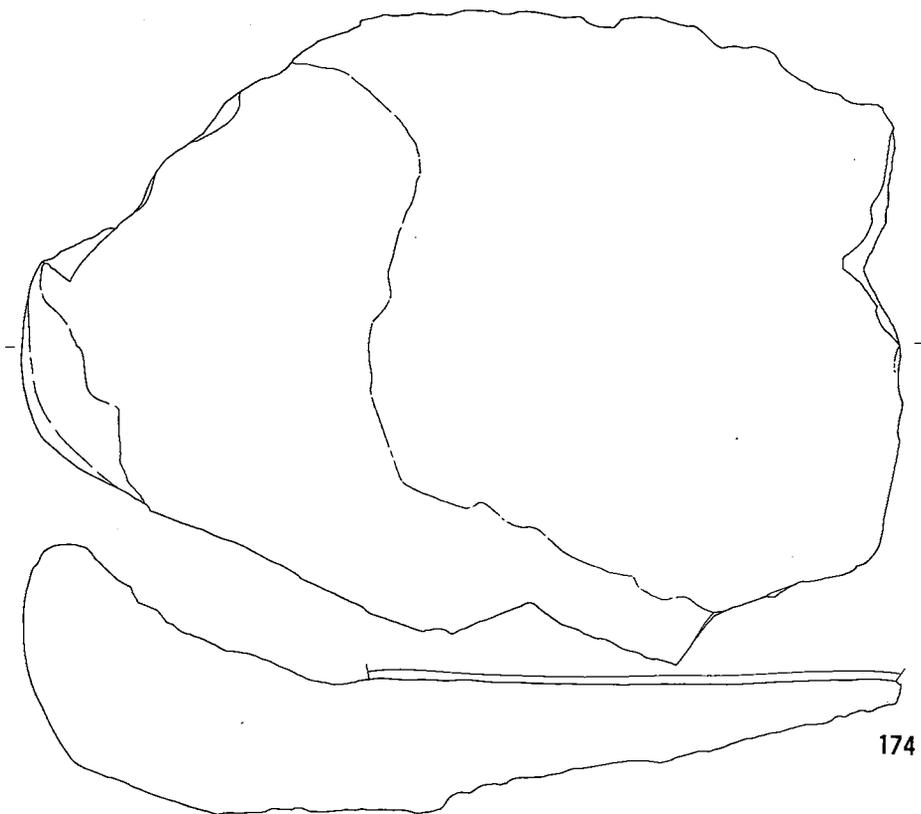
171

172

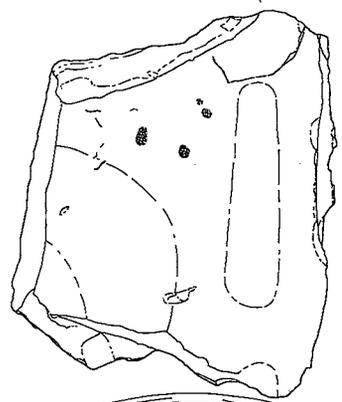
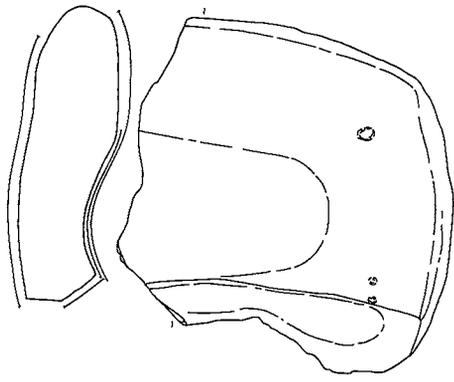
173



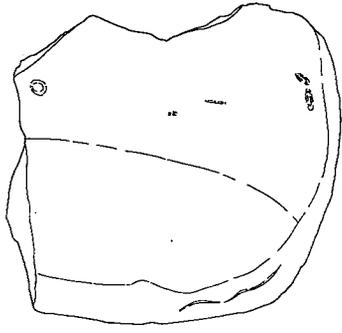
第62圖 石 器(磨石・敲石)



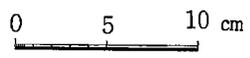
174



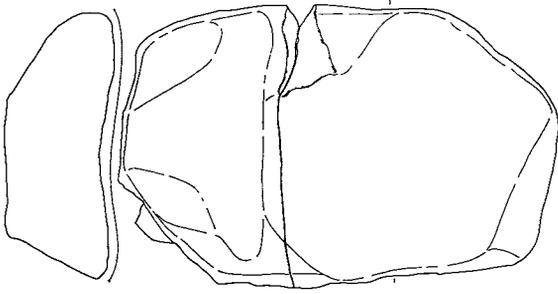
176



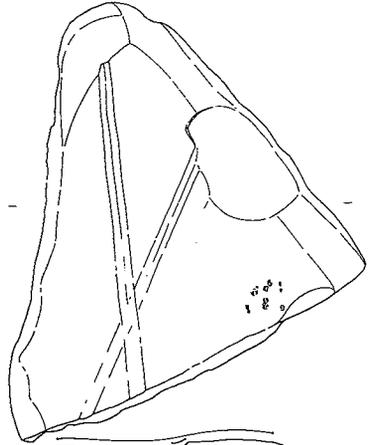
175



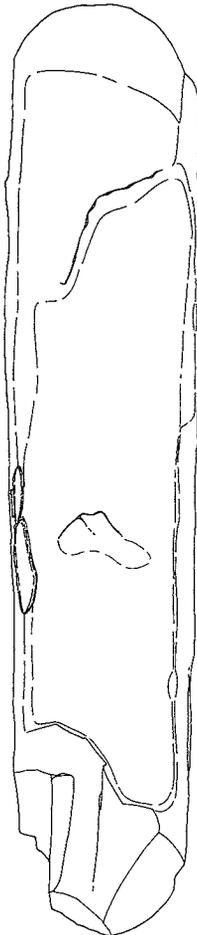
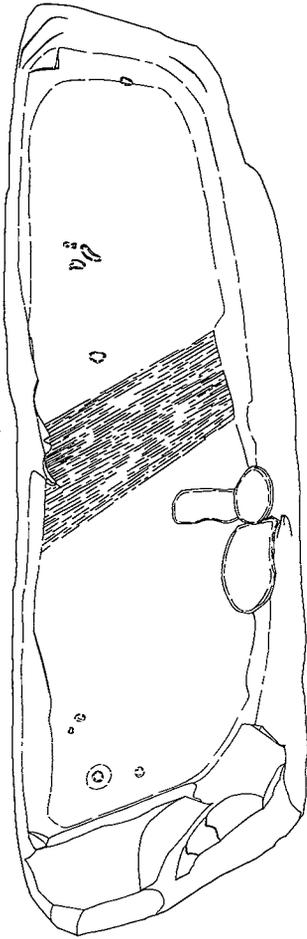
第63圖 石 器 (石皿)



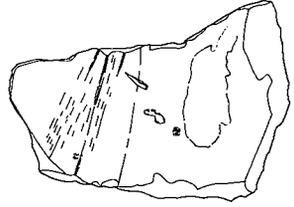
177



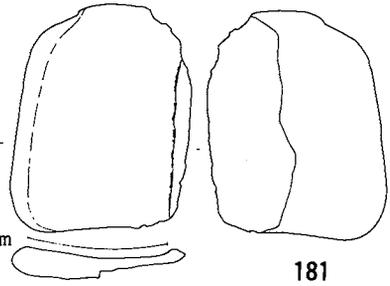
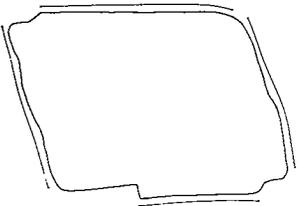
178



179



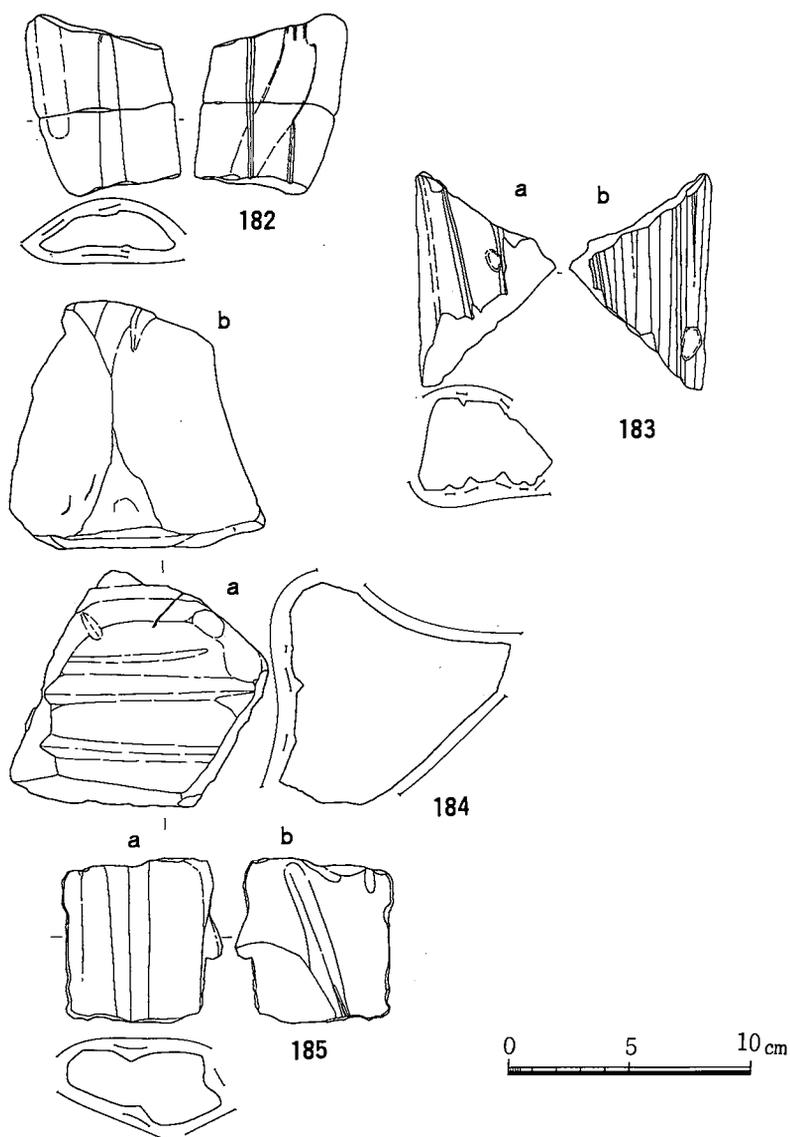
180



181

0 5 10 cm

第64圖 石 器 (石皿)



第65圖 石 器(砥石)

第三章 弥生時代以降の遺物

1. 弥生土器 (第66図)

弥生土器は縄文晩期の土器とくらべるとそれほど多くなく、整理箱一箱程度である。土器のほとんどが破片ばかりで、十分には器形を知ることができない。その種別を示せば甕、高坏、器台等となる。

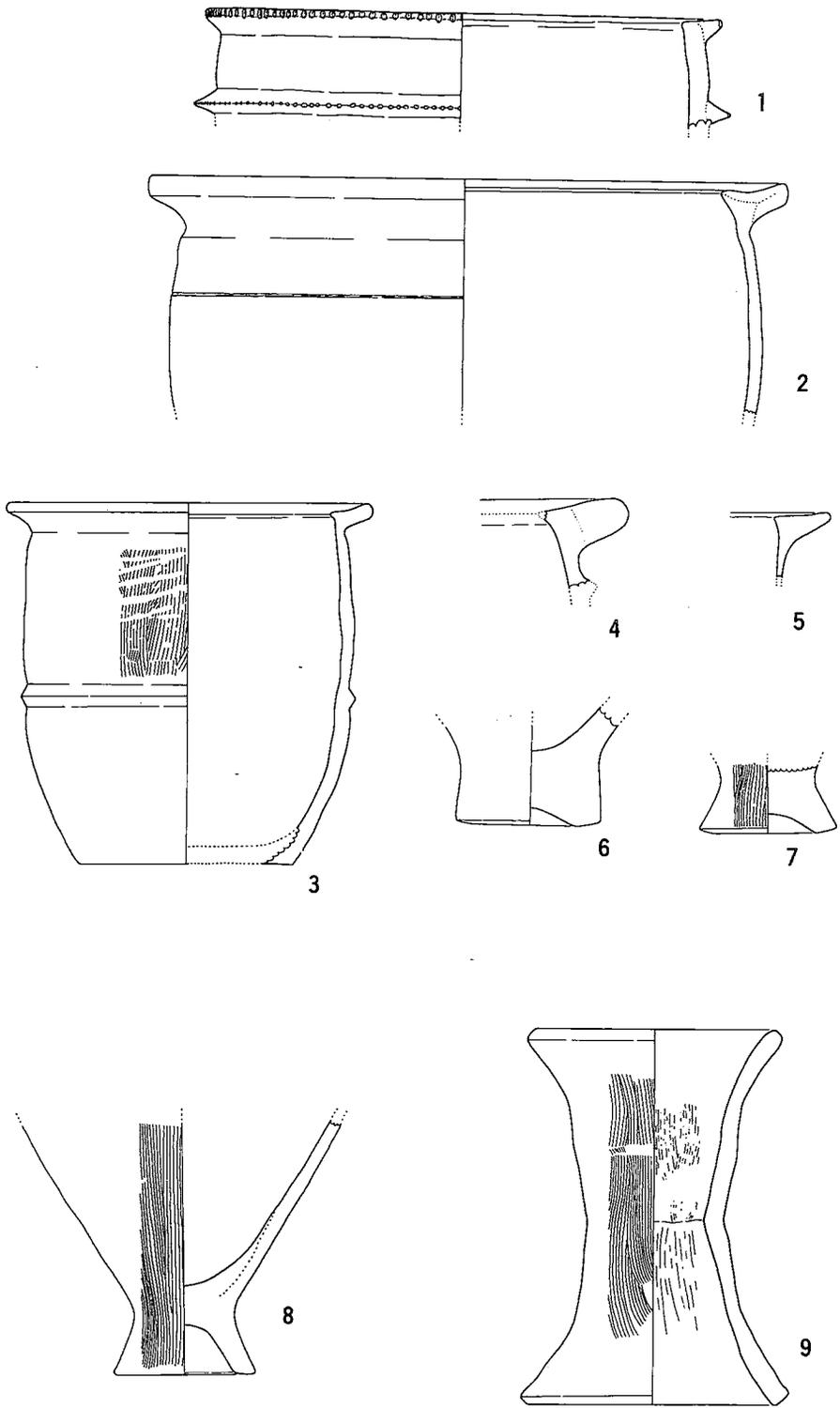
1はいわゆる亀ノ甲タイプといわれるもので、前期末に相当しよう。2は口縁部の形態や胴部上位の沈線から黒髪式と考えられる。

3はその器形で類似する出土例は少ない。北部九州から山口県にかけて若干の出土例があり、その大部分は中期初頭に位置づけられている。しかし、この土器には口縁部の特徴などに中期後半のものがあり時期は明確ではない。

9は北部九州の中期の器台として広く分布しているもので、他にこれとほぼ同一形態の土器片が一点出土している。(加藤良彦)

第6表 弥生土器

器種	図版番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕形	66-1	口径(23.0)	口縁部のみ。内傾ぎみの口縁端部外面に三角形凸帯をはりつけ、上面を平坦にした逆し字形の口縁部。口縁部下に三角形凸帯を一帯はりつけている。口縁端部外面と凸帯に刻み目。	全面に、やや粗い横方向のナデ。	外、明褐色 内、明褐色 1~2mmの砂粒を多量に含む。 煤附着。
甕形	66-2	口径(28.5) 胴径(26.4)	口頸部のみ残存。やや内傾する逆し字形の口縁部。胴部最大径の位置に浅い沈線が1条。	口縁部両面と胴部外面は、横方向のナデ。胴部内面、左上りのナデ。	外、黒褐色 内、明褐色 1~2mmの砂粒を多量に含む。 煤附着。
甕形	66-3	口径(16.3) 器高(15.9) 底径(9.4)	底部と胴部の一部が欠損。やや内傾する逆し字形の口縁部。口縁外端部は丸い。断面三角形の突帯が1条、胴部中位よりやや下方の位置にめぐる。底部は非常に大きく、やや上底。	口縁部両面・突帯部外面は、横方向のナデ。胴部上半外面は、縦方向の刷毛目の上を横方向のヘラナデ。胴部下半外面は、横方向のヘラナデ。胴部内面・底部両面は、ナデ。	外、明褐色 内、暗褐色 0.2~0.3mmの砂粒。
甕形	66-4	——	口頸部のみ残存。やや内傾する逆し字形の口縁部。口縁部直下に三角形突帯が1条。	両面、横方向のナデ。	外、内、明黄褐色 1~2mmの砂粒。 煤附着。
甕形	66-5	——	口頸部のみ残存。やや内傾する逆し字形の口縁部。ほぼまっすぐの胴部。	両面、横方向のナデ。	外、内、淡黄褐色 0.5~1mmの砂粒。 煤附着。
甕形	66-6	底径(6.5)	底部のみ。底部は突出していて、上底である。	底部側面は、縦方向の板ナデ。底部外面は、横方向のナデ。	外、明褐色 内、黒褐色 0.2~0.5mmの砂粒。 内面に炭化物附着。
甕形	66-7	底径(6.3)	底部のみ。底部は突出していて、外側に広がる。上底。	胴部外面は、縦方向の刷毛目。底部外面は、横方向のナデ。内面、縦方向のナデと指頭圧痕。	外、明褐色 内、暗褐色 0.2~0.5mmの砂粒。 煤附着。
甕形	66-8	底径(6.0)	底部のみ。底部は突出していて、外側に広がる。上底。	底部外面は、縦方向の刷毛目。底部外面は、横方向のナデ。	明褐色。
器台形	66-9	口径(11.2) 器高(16.3) 脚幅径(11.8)	口縁部の一部が欠損。口縁部は外反し、脚部も外方にひろく。口径が若干小さい。端部は丸い。	両端部両面は、横方向のナデ。体部外面は、縦方向の刷毛目。体部内面は、縦方向の刷毛目の上をナデ。	外、内、明褐色 0.2~0.3mmの砂粒。



第66图 弥生土器

2. 古式土師器

今回の報告では古閑北のものは取り扱わず、古閑南のものに限った。

土器には甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高坏形土器などの器種がある。

甕形土器は器高が25cm前後で大きく外反する口縁部をもち卵形の胴部の土器と、器高が30～40cmであまり口縁部が外反しない長胴の土器に大別できる。前者は畿内系のもの、後者は九州在来の弥生土器からの系統と考えられる。

壺形土器には長頸の口縁部をもち台付になると思われるもの(図72-2)や、二重口縁のもの(図72-3)などがある。また、図72-1の土器の外面には使用時の状態の一例を示す網目の痕跡が見られる。網目は斜方向に編んでおり菱形を呈している。網目の端部はどのような編み方をしているかはわからない。この網目で壺を覆う例は福岡市博多駅地下出土の弥生終末期の壺形土器などにあり、携帯移動時の土器を保護することが主な目的であるとされている。

(久保伸洋)

注、橋の達也「博多駅地下工事中出土の網目土器」『宮ノ前遺跡—福岡市拾六町宮ノ前F地点の調査—』

宮ノ前遺跡調査団 1971

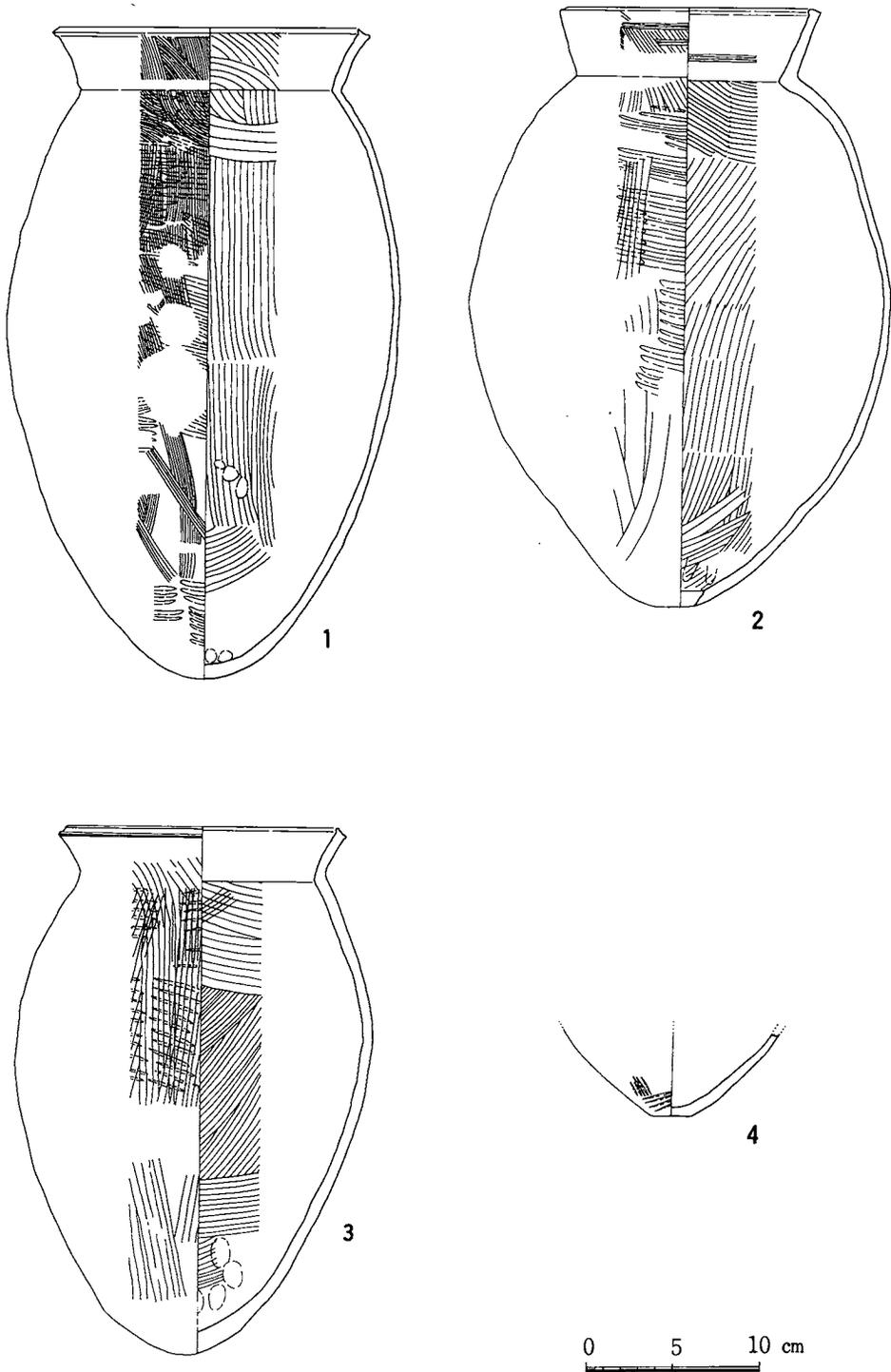
第7表 古式土師器

器種	図版番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕形	67-1	口径(17.4) 器高(37.2) 胴径(22.8)	完形品。外反する口縁部。端部は面をなす。胴径は口径より大きい。胴部は長く伸びて、丸底の底部へと続く。	口縁部は両面、左上りの刷毛目。胴部外面は、横方向と若干左上りの叩き目の上を縦方向の刷毛目。底部付近の外面はさらにその上をナデている。胴部内面、縦方向の刷毛目。底部内面は、ヘラケズリの上を指頭圧。	外、暗黄褐色 内、黄褐色 0.2～0.3mmの砂粒。 胴部外面、煤附着。胴部外面が所々で剝離。
甕形	67-2	口径(15.0) 器高(34.1) 胴径(24.4)	ほぼ完形品。外反する口縁部。端部は面をなす。胴径は口径より大きい。底部は丸底で、焼成後に外側から穿孔。	口縁部外面、縦方向の刷毛目の上をナデ。口縁部内面、横方向の刷毛目の上をナデ。胴部外面上半は左上りの叩き目の上を縦方向の刷毛目。胴部外面下半、縦方向のヘラケズリ。肩部内面、左上りの刷毛目。胴部内面、縦方向の刷毛目。底部内面、指頭圧痕。	外、暗黄褐色、内、黄褐色 2～3mmの小石を少量含む。
甕形	67-3	口径(16.7) 器高(30.3) 胴径(20.8)	ほぼ完形品。外反する口縁部。端部は面をなす。胴径は口径より大きい。胴部はややはる。底部は丸底。	口縁部両面、横方向のナデ。胴部上半内面は左上りの刷毛目。胴部下半内面は右上りの刷毛目。底部内面に指頭圧痕が残る。胴部上半外面、叩き目の上から縦方向の刷毛目。胴部下半外面、縦方向の刷毛目の上からナデ。	外、内、暗茶褐色 1～2mmの砂粒を含む。 煤附着。
甕形	67-4	—	底部のみ残存。小さな平底。	外面、叩き目の上を縦方向のナデ。内面、ナデ。	外、黄褐色(黒斑)内、黄褐色 3～4mmの小石と1～2mmの砂粒を含む。
甕形	68-1	口径(14.4) 器高(35.5) 胴径(24.0)	完形品。外反する口縁部。端部は丸みをもつ面をなす。胴径は口径より大きい。底部は丸底。	口縁部両面、横方向のナデ。頸部外面、縦方向の刷毛目。肩部内面、横方向のナデ。胴部上半外面、左上りの叩き目の上から縦方向の刷毛目。胴部下半外面、縦方向の刷毛目の上から縦方向のナデ。胴部内面は縦方向の刷毛目。底部内面はナデ。	外、黄褐色 内、暗黄褐色 砂粒を含む。

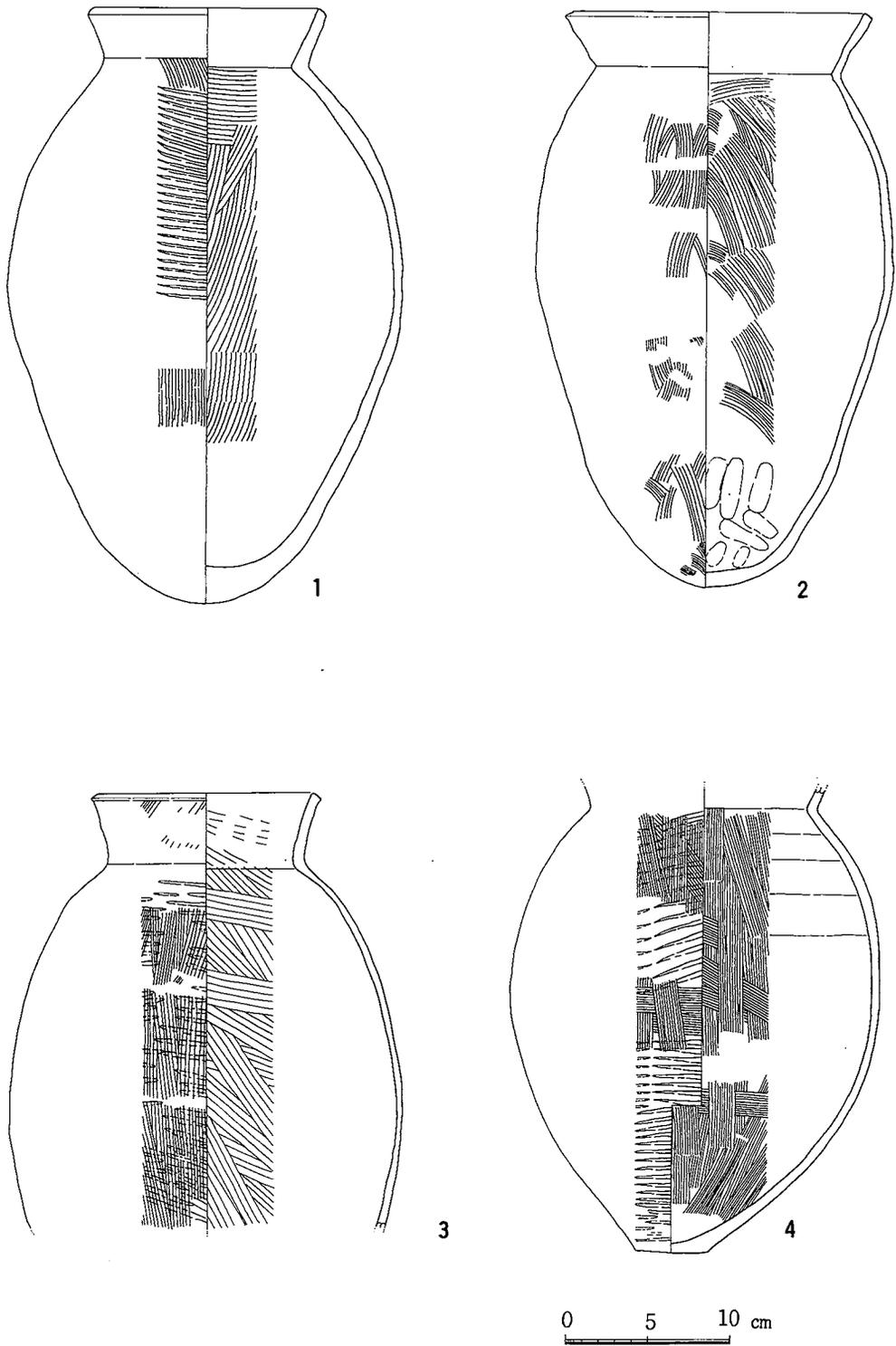
器種	図版 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
変形	68-2	口径(18.6) 器高(34.4) 胴径(21.7)	口縁部と胴部を大きく欠損。外反する口縁部。端部は面をなす。胴径は口径より大きい。底部は丸底。	口縁部両面、横方向のナデ。胴部外面、縦方向の刷毛目。肩部内面、横方向の刷毛目。胴部内面上半、左上りの刷毛目。胴部内面下半、刷毛目の上をナデ。胴部内面に指頭圧痕。	外、内、黄褐色 砂粒を含む。 煤付着。胴部外面が所々で剝離
変形	68-3	口径(13.9) 胴径(23.8)	胴部下半欠損。ゆるく外反する口縁部。端部は面をなす。胴径は口径より大きい。	口縁部外面、右上りの刷毛目の上を横方向のナデ。口縁部内面、横方向の刷毛目の上を横方向のナデ。胴部外面、横方向の叩き目の上を縦方向の刷毛目。胴部内面、左上りの刷毛目。	外、茶褐色 内、明褐色 2~3mmの小石。 0.2~0.5mmの砂粒。
変形	68-4	胴径(22.6)	口縁部欠損。口縁部は外反する? 胴部は卵形。胴径が口径より若干大きい? 底部は丸みもった平底で不安定。	口縁部両面。横方向のナデ。胴部外面上半、右上りの叩き目の上を縦と横方向の刷毛目。胴部外面下半、横方向の叩き目。胴部内面、縦方向の刷毛目。	外、淡褐色 内、明黄褐色 0.2~0.5mmの砂粒。 煤付着。
変形	69-1	口径(16.3) 器高(44.9) 胴径(28.0)	胴部一部欠損。外反する口縁部端部は面をなす。胴径が口径より大きい。底部は丸底。	口縁部外面、叩き目の上から横方向のナデ。口縁部内面、横方向のナデ。胴部上半外面、右上りの叩き目の上を部分的にヘラナデ。胴部下半外面、叩き目の上から縦方向のヘラナデ。胴部上半内面、やや右上りの横方向のヘラケズリ。胴部下半内面、縦方向のヘラケズリ。	外・内、明黄褐色 0.2~0.5mmの砂粒が少量 内面がひどく剝離。
変形	69-2	口径(16.6) 器高(40.0) 胴径(24.2)	胴部大半欠損。外反する口縁部。端部は面をなす。胴径が口径より大きい。底部は丸底。ひずみが目立つ。	口縁部外面、刷毛目の上から横方向のナデ。口縁部内面、左上りの刷毛目の上を横方向のナデ。肩部内面、左上りと横方向の刷毛目。胴部内面、縦方向の刷毛目。底部内面、刷毛目の上をナデ。胴部上半外面、叩き目の上を刷毛目。胴部下半外面、縦方向の刷毛目。	外、黒褐色(明褐色) 内、淡黄褐色 0.2mm前後の砂粒。
変形	69-3	口径(20.1)	胴部下半欠損。外反した口縁部端部は面をもつ。胴径が口径より大きい。	口縁部両面、横方向のナデ。口縁部外面に指頭圧痕。胴部外面、叩き目。胴部内面、ナデ。	外、暗黄褐色 内、淡黄褐色 0.5~1mmの砂粒。 胴部内面はひどく剝離。
変形	69-4	口径(18.8) 胴径(21.1)	胴部下半欠損。外反した口縁部端部は面をもつ。胴径が口径より大きい。	口縁部端、横方向のナデ。口縁部と胴部の外面、左上りの叩き目の上を縦方向の刷毛目。口縁部と胴部の内面、左上りの刷毛目。	外、黒褐色 内、暗茶褐色 1mm前後の砂粒。
変形	69-5	口径(16.9) 胴径(20.0)	胴部下半欠損。外反した口縁部。端部は丸みをもつ。胴径が口径より大きい。	口縁部内面、左上りの刷毛目の上を横方向のナデ。口縁部外面、縦方向の刷毛目の上を横方向のナデ。胴部外面、縦方向の刷毛目。胴部内面、指頭圧痕とナデ。	外、内、明赤褐色 0.2~0.5mmの砂粒。
変形	69-6	口径(19.8)	口頸部の一部のみ残存。外反する口縁部。端部は面をなす。胴径が口径より大きい。	口縁部両面、横方向のナデ。胴部外面、右上りの叩き目の上を左上りの刷毛目。胴部内面、横方向の刷毛目。	外、暗赤褐色 内、明赤褐色 1mm前後の砂粒。 胴部内面に接合痕。
変形	70-1	口径(14.0) 器高(34.0) 胴径(21.5)	口縁部と胴部の一部欠損。ゆるく外反する口縁部。端部はやや角ばって丸い。胴径は口径より大きい。底部は丸底。	口縁部外面、縦方向の刷毛目の上を横方向のナデ。胴部上半外面、左上りの叩き目。胴部下半外面、縦方向のナデ。胴部内面、右上りの刷毛目。底部内面、指頭圧痕。胴部外面、所々に縦方向のハケ。	外・内 明褐色 0.2~0.5mmの砂粒。 胴部外面が所々で剝離。
変形	70-2	口径(16.8) 器高(25.2) 胴径(20.9)	所々が欠損。大きく外反する口縁部。胴部は卵形。底部はやや尖りぎみの丸底。口縁端部は丸い。	口縁部両面、左上りの刷毛目の上を横方向のナデ。肩部外面、右上りの叩き目。胴部外面、不定方向の刷毛目。胴部内面、横方向の刷毛目。底部外面、ヘラケズリ。底部内面、指頭圧痕。	外、内、暗茶褐色 1~2mmの砂粒。 胴部外面が 外、内、暗茶褐色 1~2mmの砂粒。 煤付着。

器種	図版番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕形	71-1	口径(13.5) 器高(23.8) 胴径(17.6)	口縁部と胴部の一部が欠損。外反する口縁部。端部は丸い。胴部は卵形。底部は丸底。	口縁部両面、横方向のナデ。胴部外面、右上りの叩き目の上を縦方向の刷毛目。肩部内面・指頭圧痕。胴部内面、ナデ。底部外面、右上りの叩き目の上を不定方向のナデ。底部内面、指頭圧痕。	外、内、明黄褐色 1~2 mmの砂粒。
甕形	71-2	口径(16.2) 器高(24.7) 胴径(20.5)	口縁部と胴部を大きく欠損。外反する口縁部。端部は尖っている。胴部は卵形。底部は丸底。	口縁部外面、左上りの刷毛目。口縁部・肩部の内面、横方向のナデ。胴部外面、右上り叩き目の上を縦方向の刷毛目。胴部内面、左上りの刷毛目、底部内面、指頭圧痕。	外、暗灰褐色 内、明褐色 0.2~0.5mmの砂粒。 煤付着。
甕形	71-3	口径(14.7) 器高(24.7) 胴径(20.1)	口縁部と胴部の一部欠損。外反する口縁部。端部は丸い。胴部は卵形。底部は丸底。	叩きをおこなった胴部の上部を外反させ、口縁端部をはりつけた上で内外面ともに横方向にナデ。胴部外面は上半が右上り下半が左上りの叩き目の上を縦方向の刷毛目。胴部上半内面、左上りの刷毛目。胴部下半内面、右上りのヘラケズリ。	外、暗茶褐色 内、黒褐色 砂粒を多く含む。 底部内面に炭化物付着。 煤付着。
甕形	71-4	口径(18.5) 胴径(19.0)	口頸部のみ残存。外反する口縁部。端部は丸い。	口縁部外面、横方向のナデ。口縁部内面、横方向の刷毛目の上を横方向のナデ。胴部外面、右上りの叩き目の上を左上りと縦方向の刷毛目。胴部内面、右上りのヘラケズリの上を所々ナデ。	外、暗褐色 内、明茶褐色 砂粒を多量に含む。 煤付着。
甕形	71-5	口径(15.3) 胴径(22.0)	胴部下半欠損。外反する口縁部。端部は丸い。	口縁部両面、横方向のナデ。胴部外面、横方向の叩き目の上を縦方向の刷毛目。胴部内面、左上りと横方向の刷毛目の上をナデ。	外、暗茶褐色 内、明茶褐色 0.2~0.5mmの砂粒。 煤付着。
壺形	72-1	口径(13.1) 胴径(25.7)	胴部下半欠損。ややゆるやかに外反する口縁部。端部は丸い。胴部は球形。	口縁部外面、横方向のナデ。胴部外面、左上りのナデ。口縁部内面、横方向の刷毛目の上をヨコナデした後に縦方向のヘラナデ。胴部内面、左上りの刷毛目の上を部分的にスリップ。	外、明褐色 内、明黄褐色 5 mm前後の砂粒を少量含む。胴部外面に網目の痕跡が擦痕として残っている。
長頸壺形	72-2	口径(7.5) 器高(11.4)	口縁部と胴部の一部、台部が欠損。ややゆるやかに外反する口頸部。端部は尖っている。胴部はやや扁平な球形。台が付属していた可能性がある。	口頸部両面、右上りの刷毛目の上をヘラナデ。胴部外面、横方向のヘラナデ。全体として作りが丁寧。	外、内、明黄褐色 0.2~0.5mmの砂粒。
二重口形	72-3	口径(16.3)	胴部下半欠損。口縁部はややゆるやかに外反する二重口縁。端部は丸い。	口頸部両面、横方向のナデ。胴部外面、右上りの叩きの上を左上りの刷毛目。胴部内面、右上りの刷毛目の上をナデ。	外、明褐色 内、明茶褐色 砂粒を多量に含む。 内面が多く剥離。内面に接合痕。
壺形	72-4	頸径(10.6)	頸肩部のみ残存。外反する口縁部。	頸部外面、左上りの刷毛目の上を横方向のナデ。胴部外面、叩き目の上を左上りの刷毛目。胴部内面、ナデ。	外、暗黄褐色 内、黄褐色 0.2~0.5mmの砂粒。
高杯形	73-1	口径(20.9) 器高(15.0) 脚径(13.5)	口縁部一部欠損。杯部から屈曲して外反する口縁部。脚柱部から内彎ぎみに外反する脚台部。口径は、脚径より大。口縁端部は丸い。脚台部の3方に円孔を焼成前に穿つ。	口縁部外面、横方向のナデの上を左上りのヘラナデ。口縁部・杯部内面、横方向のナデ。杯部外面、ナデ。脚柱部は、面取り状のヘラ調整の上をナデ。脚台部外面は、ナデ。脚台部内面は、横方向の刷毛目の上をヨコナデ。全体として作り方が丁寧。	外、内、明褐色 0.2~0.5mmの砂粒。
	73-2	口径(14.8)	下半欠損。内彎しながら外反する口縁部。端部は丸い。	口縁部両面は横方向のナデ。外面は、左上りの刷毛目。内面は、ヘラナデ。	外、黄褐色 内、褐色 0.2~0.5mmの砂粒。
鉢形	73-3	口径(18.4) 器高(9.3)	完形品。口縁部はほぼ直立。底部は丸底。	口縁部両面は、横方向のナデ。胴部外面、左上りの叩き目の上を左上りのヘラナデ。胴部内面、ナデ。	外、黄褐色 内、明茶褐色 0.2~0.5mmの砂粒。

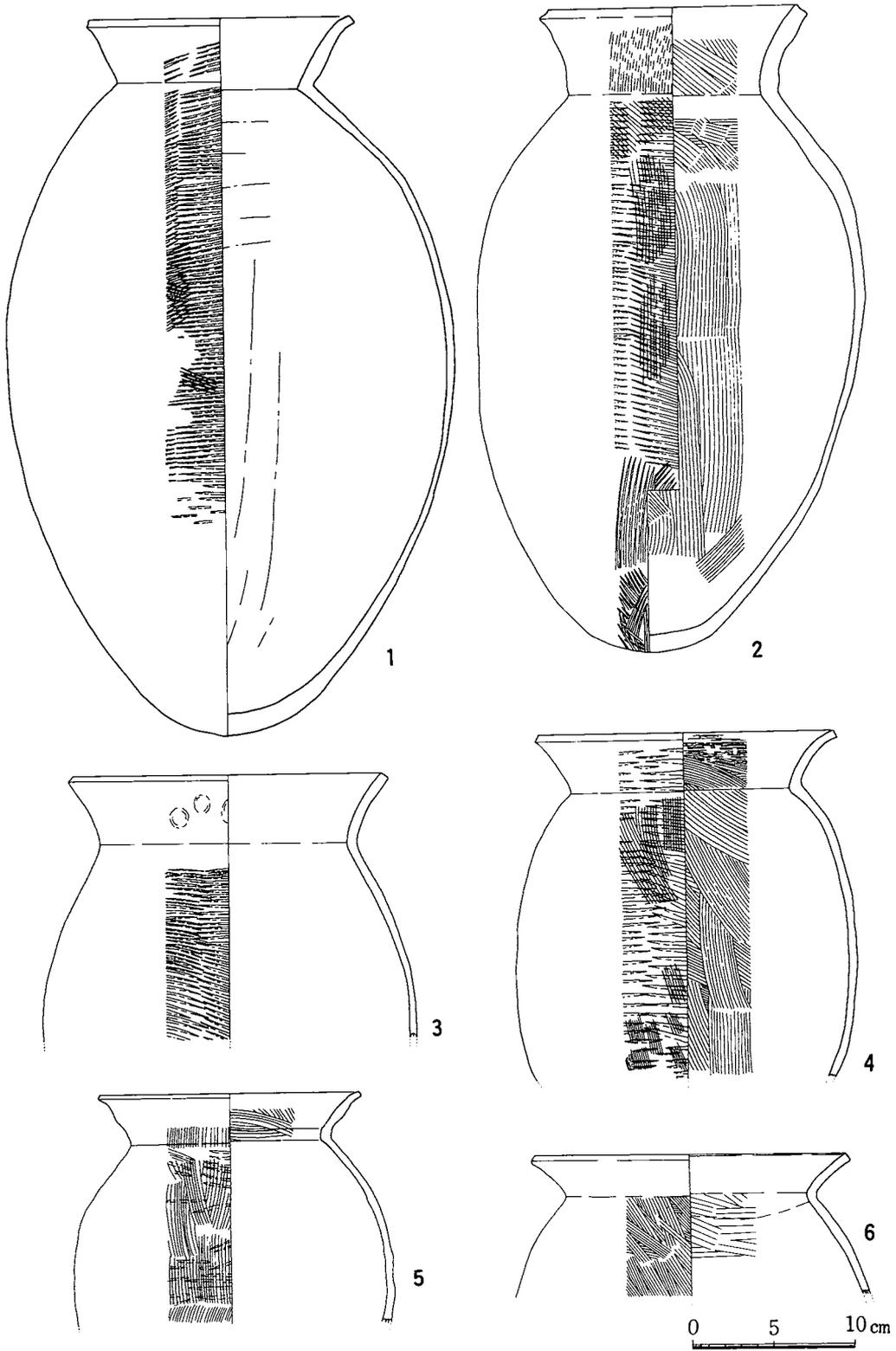
器種	図版 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
鉢 形	73—4	口径(14.0) 器高(7.6)	完形品。やや内反する口縁部。 端部は丸い。底部は丸底。	外面は、縦方向の刷毛目の上に、 口縁端部は横方向のナデ、底部は ヘラケズリ。内面は横方向の刷毛 目の上に、口縁端部は横方向のナ デ、底部はナデ。	外、明黄褐色 内、明茶 褐色 0.2~0.3mmの砂粒。
鉢 形	73—5	口径(12.4) 器高(11.1) 胴径 14.6)	口縁部と胴部の一部欠損。や や外反する口縁部。端部は丸 い。胴径が口径より大きい。	口縁部両面、横方向のナデ。底部 外面をヘラケズリしたのちに胴部 外面全体をナデ。胴部内面は、ナ デ。	外、明褐色 内、暗灰褐 色 0.2~0.5mmの砂粒。
	73—6	口径(11.9) 器高(7.3)	口縁部と胴部の一部欠損。や や外反する口縁部。端部は、 やや角ばって丸い。底部は丸 底。	口縁部外面、左上りの刷毛目の上 を横方向にナデた後に文様状にヘ ラナデ。底部外面、左上りの刷毛 目の上をヘラケズリ。口縁部内面 は、横方向のナデ。底部内面、指 頭圧痕の上をナデ。	外、内、明褐色 1~2mmの砂粒を多量含 む。
鉢 形	73—7	口径(13.0) 器高(7.0)	ほぼ完形品。外反する口縁部。 端部は尖っている。胴部は半 球形。底部は突出し、丸みをも った平底で不安定。	口縁部両面、横方向のナデ。胴部 外面、右上りの叩き目をナデ。胴 部上半内面、右上りの刷毛目。胴 部下半内面、右上りの刷毛目をナ デ。底部はハリツケ?	外、明褐色 内、暗褐色 1~2mmの砂粒。
鉢 形	73—8	口径(11.2) 器高(7.2) 頸径(9)	各部分が大きく欠損。外反す る口縁部。胴部は半球形。底 部わずかに突出し、丸みをも った平底で不安定。	口縁部両面、横方向のナデ。胴部 両面、ナデ。	外、淡褐色 内、明茶褐 色 0.1~0.3mmの砂粒。
鉢 形	73—9	口径(9.9) 器高(5.9) 頸径(8.0)	欠残存。外反する口縁部。胴 部は、やや扁平な半球形。底 部は尖り底。	全面、横方向のヘラナデ。	外、内、明赤褐色。 0.2~0.5mmの砂粒。 朱塗り?



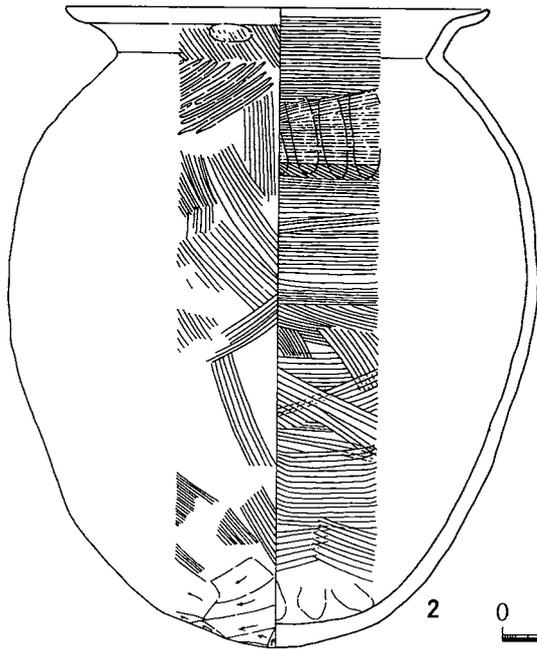
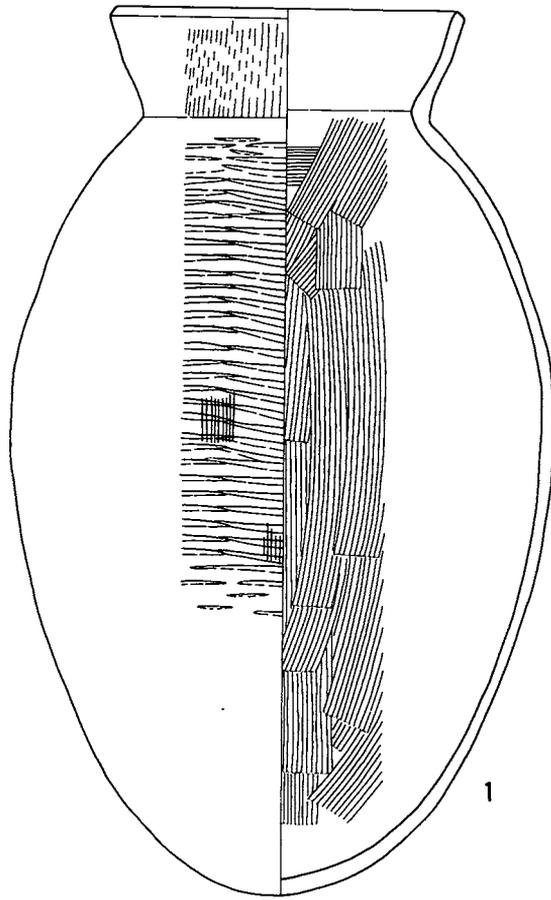
第67圖 古式土師器



第68図 古式土師器

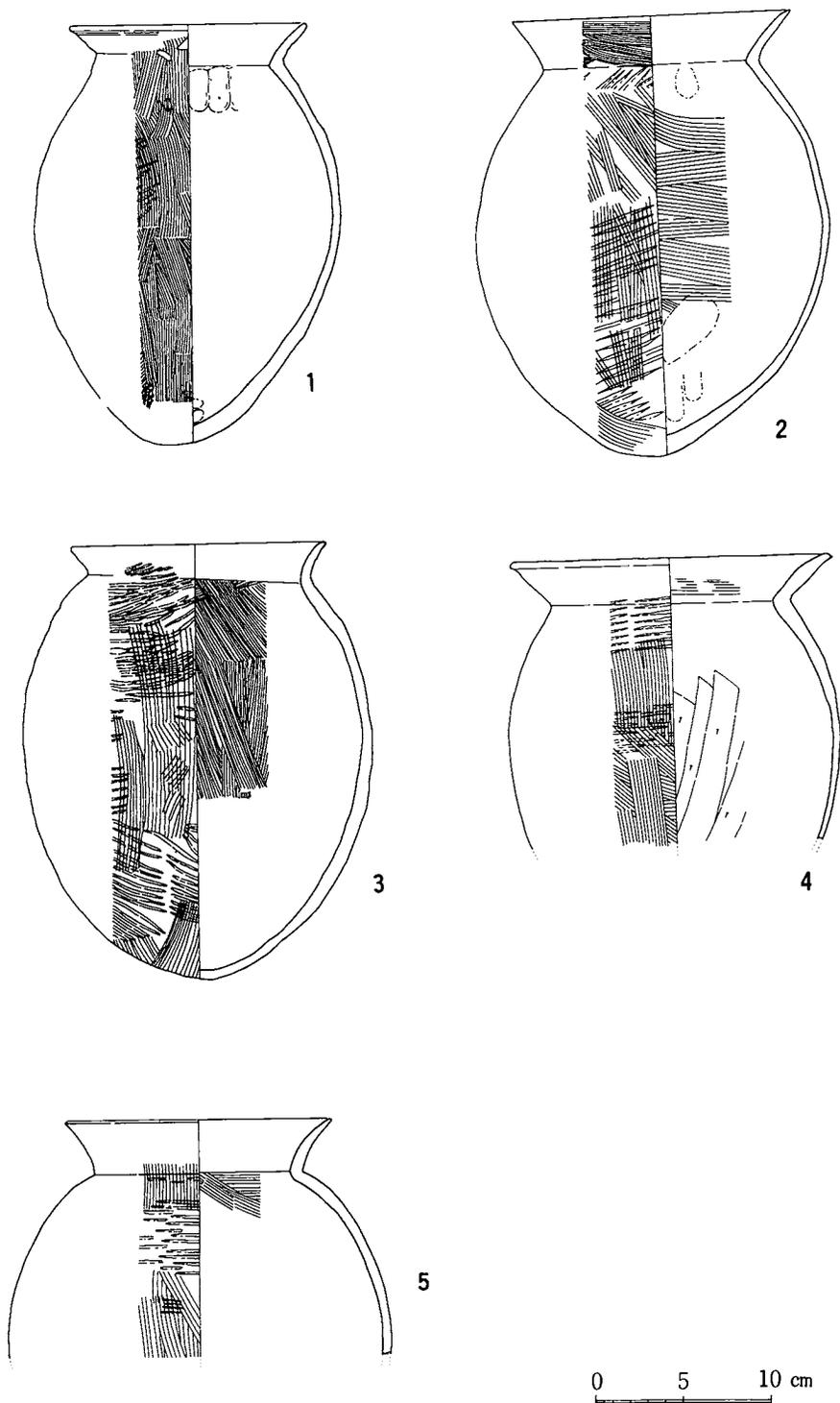


第69图 古式土師器

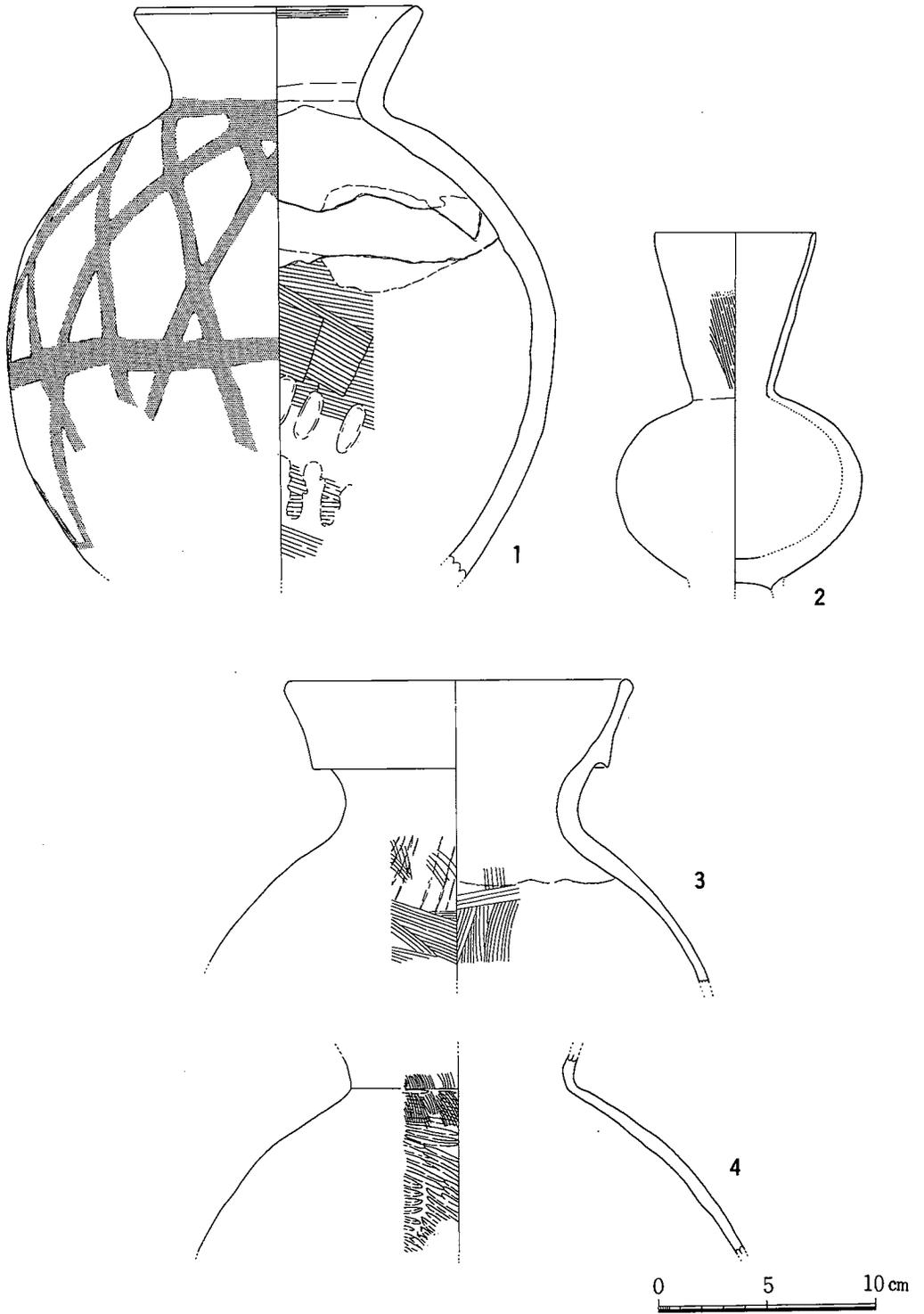


0 5 10 cm

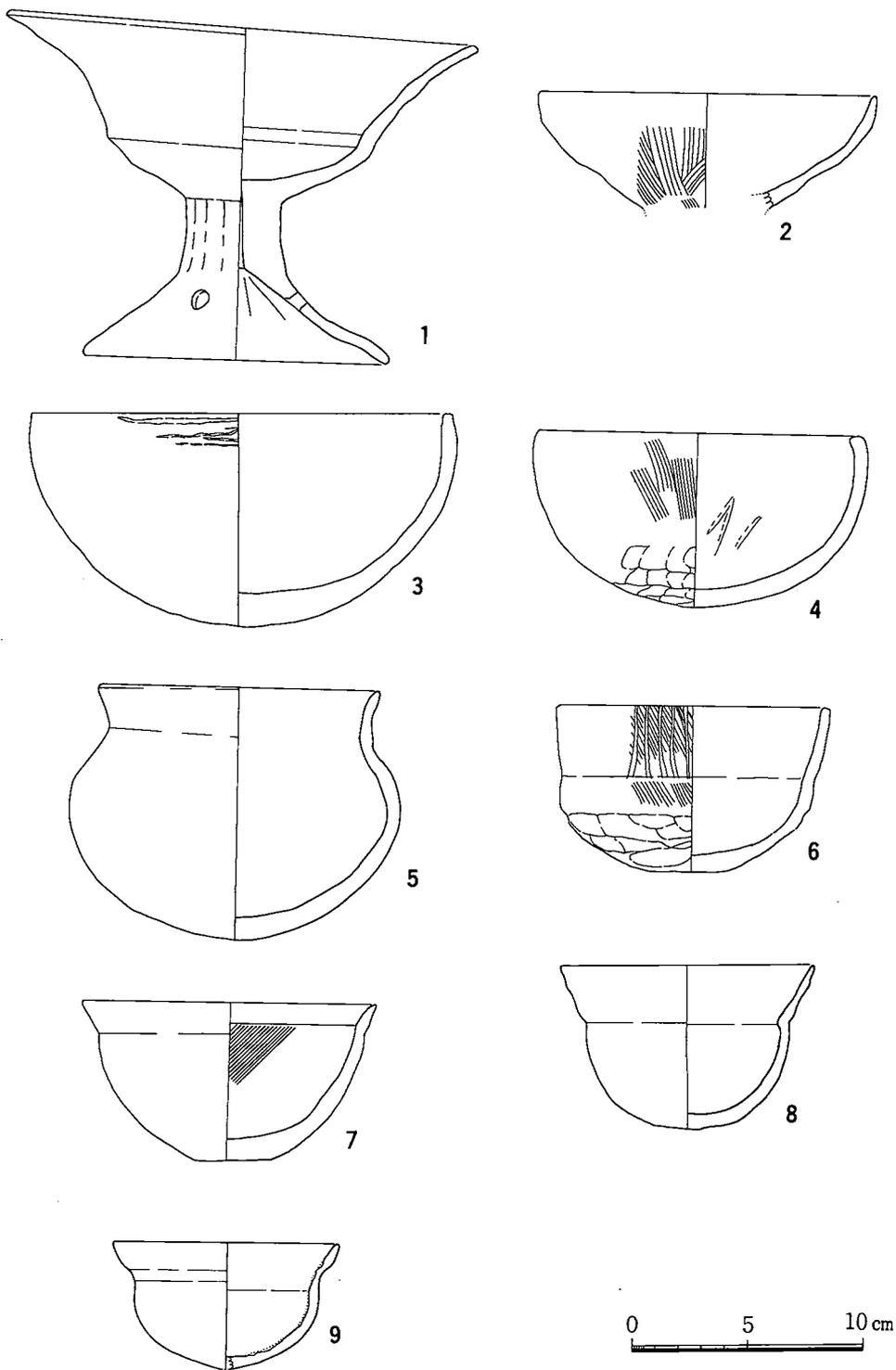
第70図 古式土師器



第71图 古式土師器



第72圖 古式土師器



第73図 古式土師器

3. 歴史時代の遺物

歴史時代の遺物としては、土師器、須恵器、須恵質土器、瓦器及び青磁が出土した。以下それぞれについて概説する。

(1) 土師器

土師器には、高台付坏、高台付埴及び高台をもたない坏がある。高台についてはほとんどが粘土を貼り付けたものであり、わずかに第 74 図 9 のみが削り出しによると思われる。^{注1} 時期については、平安時代前半のものと思われる。

(2) 須恵器

須恵器には、高台付坏、高台付埴及び高台をもたない坏がある。高台については、すべてが貼り付けによるものである。^{注2} 時期については、平安時代前半のものと考えられる。

(3) 須恵質土器

須恵質土器の蔵骨器が出土した。熊本県においてこの手の蔵骨器は、五ッ穴横穴群報告など^{注3}で紹介されている。時期については、奈良時代後期と思われる。

(4) 黒色土器

黒色土器は、不明瞭なものもくわえて4点出土した。いずれも高台付の埴であり、高台はすべて貼り付けによる。またこの手の黒色土器は表裏黒色のものと区別して黒色土器A式と呼ぶ^{注4}むきがある。^{注5} 時期については、平安時代前半と考えられる。

(5) 瓦器

瓦器については、不明瞭なものもくわえて3点ほど出土した。いずれも高台付の坏(埴)であり、高台はすべて貼り付けによる。^{注6} 時期については、平安時代後半と思われる。

(6) 青磁

青磁については、すべて龍泉窯系^{注7}のものであると考えられる。いずれも高台付の埴であり、^{注8} 時期については、中国における南宗前期のものと考えられ、13世紀前後と考えることができる

(清田純一)

(注1) 小田富士雄「窯業—九州—」『日本の考古学Ⅵ』河手書房1965

(注2) 同 上

「幸木遺跡」豊津町教育委員会1976

(注3) 村井真輝「五ッ穴横穴群」1979

(注4) 吉岡完祐氏の教示による。

(注5) 「池上遺跡—土器編—」大阪文化財センター 昭和45年3月

(注6) 小田富士雄「窯業—九州—」『日本の考古学Ⅵ』河出書房1965

(注7) 吉岡完祐「高麗青磁の發生に関する研究」田中学校博物館1979

(注8) 同 上

第8表 歴史時代遺物

器種	図版番号	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
埴	74-1	口径(12.7) 器高(3.9) 底径(7.85)	• 底面は丸底きみの平底を呈し、底部から口縁部直下まで小さく湾曲し、口縁部は外反する。	• 内外面ともロクロピキによって調整し、底面は、ヘラ切のあとロクロピキによって調整。	• 色調：内面一暗茶褐色 外面一黒褐色 • 胎土：砂粒を含む。 • 土師器。 • 香残存。
坏	74-2	口径(12) 底径(6.2)	• 平底を呈し胴部は、ほぼ直線的に口縁部にいたる。	• 内外面ともロクロピキによる調整。	• 色調に緑灰色 • 胎土：0.2~0.3mmの砂粒を含む。 • 須恵器
坏	74-3	口径(12.6) 底部(2.8)	• 平底でゆるく、短くラップ状に外反する。	• 外面、内面ともにロクロピキによって調整し、底面はヘラ切による。	• 色調：褐色 • 胎土：0.2~0.3mmの砂粒を含む。 • 土師器
高台付埴	74-4	口径(12.3) 高台ハリ付部径(6.85) 底部径(7.6)	• 口縁がラップ状に開き、外反する高台を有する。	• 内外面ともロクロピキによって調整し、高台はハリ付による。	• 色調：茶褐色 • 胎土：0.1~0.2cmの砂粒を含む。 • 香残存。 • 須恵器。
高台付埴	74-5	底径(5.8) 高台ハリ付部(6.4)	• 約7mmの高さを有し直立する高台をもち、ハリ付部から湾曲しながら口縁部へ向う。	• 外面の調整は、器面が荒れており、観察がむずかしい。内面は、ロクロピキによって調整する。 • 底面は、器壁が荒れており観察がむずかしい。高台はハリ付により、接合はロクロピキによる。	• 色調：内面一灰褐色 外面一褐色 • 胎土：0.3~0.5mmの砂粒を含む。 • 香残存 • 黒色土器A類か？
高台付埴	74-6	底径(6.2) 高台ハリ付部(6.5)	• 約1.2cmの高さを有し、直立する高台をもつ。	• 内外面ともロクロピキによる調整をほどこす。 • 底面はヘラ切のあとロクロピキによって調整し、高台をハリ付ける。接合はロクロピキによる。	• 色調：赤褐色 • 胎土：0.2~0.4mmの砂粒を含む。 • 香残存。 • 土師器。
高台付埴	74-7	底径(6.6) 高台ハリ付部(6.6)	• 約8mmを有する高台をもち、やや外反し、ハリ付部からやや湾曲しながら口縁部へ向う。	• 調整については、内外面とも荒れており観察がむずかしい。 • 底面はヘラ切のあとロクロピキによって調整し、高台をハリ付ける。接合は、ロクロによるナデによって行なう。	• 色調：赤褐色 • 胎土：0.2~0.3mmの砂粒を含む。 • 香残存。 • 土師器。
高台付埴	74-8	底径(6.9) 高台ハリ付部(6.5)	• 約12cmの高さを有し、直立する高台をもつ。	• 内外面ともロクロピキによる調整をほどこし、見込みはロクロピキのあとナデをほどこす。 • 底面はヘラ切のあとロクロピキによって調整し、高台をハリ付ける。接合はロクロピキによる。	• 色調：赤褐色 • 胎土：0.2~0.4mmの砂粒を含む。 • 香残存。 • 土師器。
高台付埴	74-9	底径(6.9) ハリ付部径(6.6)	• 約1.5cmの高さを有する高台をもち、外反しハリ付部から内湾しながら口縁部へ向う。	• 内外面ともロクロピキによる調整を行ない、底部はヘラ切による。 • 高台は切り出しにより、埴部との接合は、ロクロピキによって行われる。	• 色調：淡褐色 • 胎土：1mm前後の砂粒 • 香残存。 • 土師器。
埴	74-10	口径(6) 器高(3.1) 底径(5.8)	• 器高は低く大きくラップ状に開き、底部は平底を呈する。	• 内外面ともロクロピキにより調整を行ない、底部はヘラ切による。	• 色調：灰色 • 胎土：0.1~0.2mmの砂粒を含む。 • 香残存。 • 須恵器。
坏	74-11	底径部(6.0)	• 平底でゆるく上へ立ち上る埴である。	• 内外面ともロクロピキによって調整し底面はヘラ切による。	• 色調：灰色 • 胎土：0.1~0.2mmの砂粒を含む。 • 底部のみ残存。 • 須恵器。

器種	図版 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
高台 付壺	74-12	口径(11.2) 器高(4.7)	• 三角形の高台を持つ壺であり底部から口縁部にかけて、直線的にたちあがり、口縁付近で若干の外反をみる。端部は丸みをおびている。	• 内外面ロクロビキにより調整し、高台はハリ付けによる。	• 色調：赤褐色 • 胎土：0.2~0.3mmの砂粒を含む。 • 土残存。 • 須恵器。
高台 付環	74-13	口径(15.2) 高台ハリ付部(10.8) 底部径(10.6)	• 底部径のわりには、立ち上りが小さく、皿に近い環である。	• 内外面とも調整については、器面が荒れており観察がむずかしい。 • 高台はハリ付により、接合はロクロビキによって行なわれる。	• 色調：黄灰色 • 胎土：0.5~0.8mmの砂粒。 • 土残存。 • 瓦質土器か？
高台 付環	74-14	底径(9.2) 高台ハリ付部(9.1)	• 約8cmのやや外反する高台を有し、ハリ付部からほぼ直線的に口縁部へ向う。	• 内外面とも、ロクロビキによって調整し、底面はヘラ切りにより、ロクロビキによる調整のあと、高台をハリ付ける。	• 色調：内面—灰色 外面—黄灰色 • 胎土：0.1~0.2mmの砂粒を含む。 • 土残存。 • 瓦器。
高台 付環	74-15	底径(6.6) 高台ハリ付部(7.6)	• 約1cmの斜行するハリ付高台を有する。	• 内外面ともロクロビキによって調整し底面はヘラ切りによりのちにロクロビキによって調整する。	• 色調：暗灰色 • 胎土：0.5~0.8mmの砂粒を含む。 • 高台部のみ残存。 • 須恵器。
高台 付環	74-16	底部径(8.9) 高台ハリ付部(9.2)	• 約0.5cmの高台を有し、接合部から小さく湾曲しながら口縁部へ向う。	• 内外面ともロクロビキによって調整し、底面はヘラ切りによるもので、のちに高台をハリ付ける。	• 色調：灰色 • 胎土：0.1~0.3mmの砂粒を含む。 • 土残存。 • 須恵器。
環 フタ	74-17	口径(15.6)	• ラッパ状に開く環フタ。	• 内外面ともロクロビキによる調整。	• 色調：灰色 • 胎土：0.1~0.2mmの砂粒を含む。 • 土残存。 • 須恵器。
高台 付壺	74-18	口径(14.1)	• 口縁部はやや外反し、胴部はややふくらむ。	• 内外面ともロクロビキによって調整し、内面は調整あとススを吸着させ、そののち口唇下2cmまでヘラによる研磨をほどこし、以下はタテナデをほどこす。	• 色調：内面—黒褐色 外面—淡褐色 • 胎土：0.2~0.3mmの砂粒を含む。 • 土残存。 • 黒色土器A類
高台 付壺	74-19	底径(5.8) 高台ハリ付部径(5.9)	• 約0.5mmの高さを有する高台をもち、やや外反しハリ付部から小さく内湾しながら口縁部へ向う。	• 外面はロクロビキによって調整し、内面は煤を吸着させたのち、見込みから上部ヘナデ上げによって調整する。 • 底面はヘラ切りにより、水ビキによって調整し、高台をハリ付け、接合はロクロビキによって行う。	• 色調：外面—明褐色 内面—黒褐色 • 胎土：0.2~0.4mmの砂粒を含む。 • 土残存。 • 黒色土器A類
高台 付環	74-20	底径(6.8) 高台ハリ付部(6.6)	• 約5mmを有する高台をもち、やや外反し、ハリ付部からほぼ直線的に口縁部へ向う。	• 外面はロクロビキによって調整し、内面は水ビキによる調整のあとススを吸着させ、さらに見込みから上部ヘナデ上げる。 • 底部はヘラ切りのあとロクロによるナデによって調整し、高台をハリ付ける。接合はロクロビキによって行う。	• 色調：外面—明褐色 内面—黒褐色 • 胎土：0.2~0.3mmの砂粒を含む。 • 土残存。 • 黒色土器A類
高台 付環	74-21	口径(14.1) 底径(7.8) 高台ハリ付部(7.9)	• 口唇部からわずかに湾曲しながら底部へいたり、約0.5mmの直立した高台を有する。	• 外面はロクロビキにより調整し、高台をハリ付ける。	• 色調：暗灰色 • 胎土：0.2~0.3mmの砂粒を含む。 • 土残存。 • 瓦器。
高台 付壺	74-22	底部径(5.6)	• 高台は、ほぼ直立し、高台接合部からやや湾曲ぎみに口縁部へ向う。	• ロクロにより作成し、高台は切り出しによる。 • 見込みには、くし状器具による法相華を施す。全面に貫入がみられる。	• 色調：オリーブグリーン • 胎土：精練されている。 • 土残存。 • 龍泉系青磁

器種	図版 番号	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
埴	74-23	口径(14.8)	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部のみが残存であり、直行ぎみに底部へ向う。 	<ul style="list-style-type: none"> 内外ともにロクロにより形成し、そのちに釉をかける。内外面には貫入がはいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 色調：オリーブグリーン 胎土：精練されている。 土残存。 龍泉系青磁
坏	75-1	口径(12.6) 最大胴径 (11.2) 底部径 (7.8)	<ul style="list-style-type: none"> 底部は、やや上底ぎみをなし、胴部はわずかにふくらみ、口縁部にいたる。 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面はロクロビキにより、調整し、底部はへら切りのあとへらナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 色調：灰色 胎土：0.2~0.3mmの砂粒を含む。 土残存。 須恵器。
坏	75-2	口径(12) 器高(5.7)	<ul style="list-style-type: none"> 底部は多少のふくらみをもつ平底である。胴部はほぼ直線的に立ち上り、口縁部近くで外反する。端部は丸い。 	<ul style="list-style-type: none"> 内外面ともロクロビキにより調整し、底部はへら切りのあとへらナデ。 	<ul style="list-style-type: none"> 色調：淡灰色 胎土：0.2~0.5mmの砂粒を含む。 須恵器。
蔵 骨 器	75-3		<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は欠落し、頸部から口縁部へ向ってなだらかに外反する。肩部はわずかなふくらみもち、なだらかに傾斜し、胴部への移行部でくの字に屈折する。又、頸部から土の地点と胴部への移行部に凸帯を有する。胴部は、わずかなふくらみもち、急な傾斜をもって底部へ移行し、外反する高台をハリ付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面は頸部から肩部へ向っては、ロクロビキによって調整し、胴部は斜格子目タタキをほどこしたのちに、へら削りを行う。底面はへら切りにより、高台部は内外面ともロクロビキにより調整する。内面は、頸部から肩部へ向っては、ロクロビキによって調整し、胴部は同心円状のタタキのあと、ロクロビキによって調整する。見込みは横ナデによる。 	<ul style="list-style-type: none"> 色調：内外面とも灰褐色 断面は褐色 胎土：0.3~0.5mmの砂粒を含む。 土を欠損。 須恵質土器 口縁部は意識的な打欠きかもしれない？

第Ⅳ章 特殊遺物

1. 土製品 (第76図 1~8)

用途不明品、円板、土偶、手捏ね土器などがある。

1は全体の半分以上を欠いていると見られ、本来の形態を知る事ができぬ用途不明品である。遺物は真中の円盤状部と、両側面の脚状部分とからなっていて中心部分は空洞である。脚部的部分には、外面から内側への焼成前の貫孔が3ヶ所見られる。調整は全て指頭圧によってなされており、焼成は良好で器面は暗灰褐色を呈する。胎土は0.2~0.5mmの砂粒を多く含む。時期は判別しかねる。

2は土器片を再利用した円板である。形状は隅丸四角形で三面を研磨して成形されており残り一面は欠損であろう。素材となった土器は粗製の深鉢形土器で、外面は横方向の条痕の上からヨコナデを行い部分的にヨコヘラナデを行なっている。胎土は0.5mm前後の砂粒を多量に含み、色調は外面が暗褐色で内面が明黄褐色を呈している。

3も2と同様の円板である。形状は隅丸長方形で全周にわたり研磨されている。これも粗製の深鉢形土器の破片が利用されており、外面は横方向の条痕の上をヨコナデし更に部分的にヨコヘラナデを行なっている。

4も2, 3同様の円板である。形状は不整円形状で大部分が欠損している。精製土器の破片を利用しており、外面は横方向の条痕後にヨコヘラ研磨が行なわれている。内面も同様である。胎土はあまり砂粒を含まず、色調は明茶褐色を呈している。

5も円板であるが、前述のものとは違い粗製の深鉢形土器の底部を利用している。内面は不定方向のナデ調整を行ない、胴部との接合部分は研磨によって仕上げている。

6は非常に小形の円板で粗製土器を利用しており、全周に研磨が行なわれている。いずれも縄文晩期の所産であろう。

7は土偶の腕と思われものだが、左右どちらであるかは判断がつかない。手捏ねによって成形された後にナデ調整されている。胎土は0.2~0.5mmの砂粒を含み、色調は黄灰色を呈す。後期末から晩期前半にかけての所産であろう。

8は手捏ねのミニチュア土器で最大胴径が5.8cmを測る。形態は胴部が張り平底である。調整は、外面が指圧後に刷毛目を施し、内面は指圧のみである。焼成の際の器面の剝離が見られ、口縁端部は欠損している。時期は判別しかねる。
(久保伸洋)

2. 石製品 (第77図 1~4)

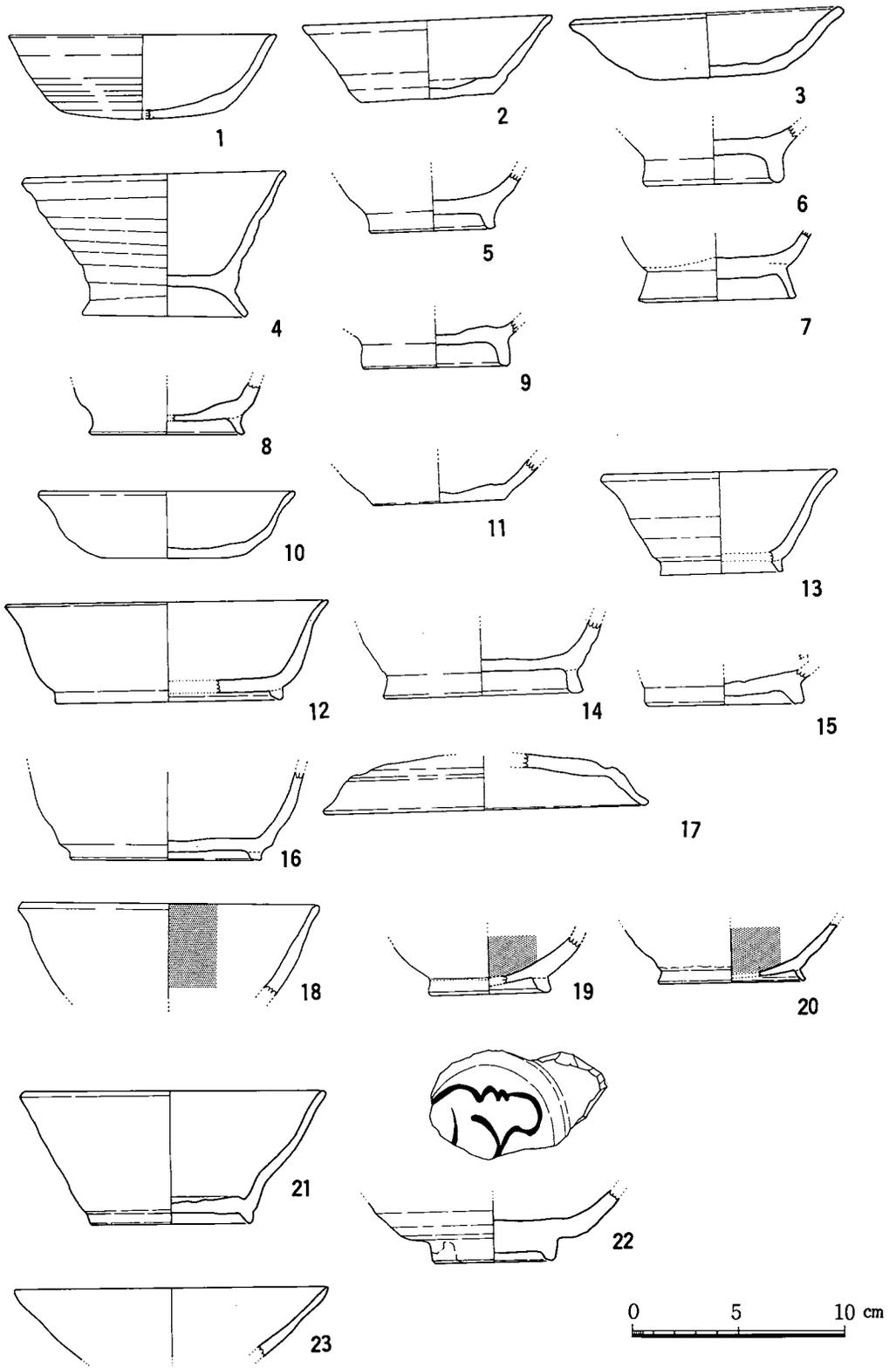
1は破損品である。板状節理の扁平な緑泥片岩を素材とする多頭形石器で十字形を呈する。周辺の両面から細かな薄い剝離を施し、十字形に成形する。現在で60gの重量がある。未だ用途不明で問題の多い石器である。

2は破損していて製作当初の原形を想定できない。現状では3つの突起を有し、その基部はくびれている。表面は磨耗かあるいは磨痕か判断不可能である。重量は現存で100gを測る。石材は砂岩である。

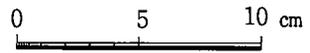
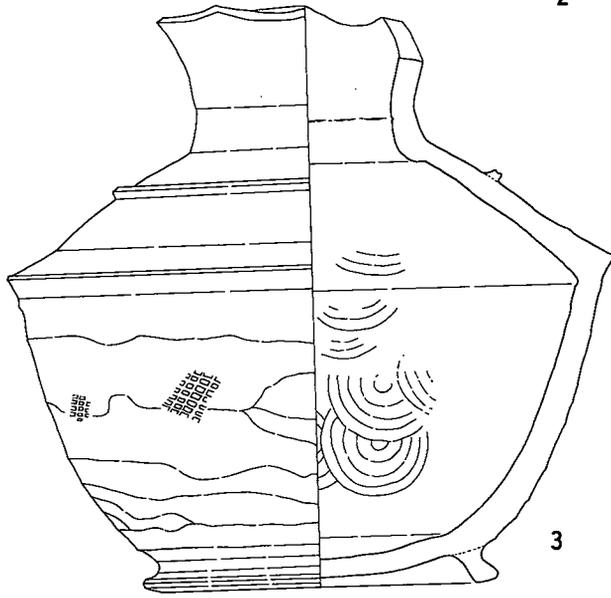
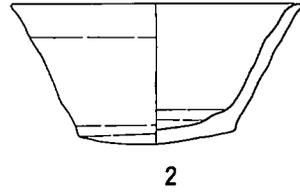
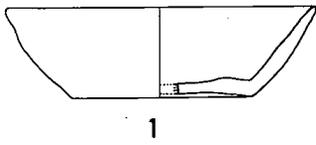
3は岩偶の右脚部である。研磨によって成形されているが、足裏は研磨されておらず胴部に近づくにしたがって研磨が粗くなり、脚部を強調した跡がうかがえる。脚部外側は丸みを帯びており内側は鋭っている。また、つま先部分はやや抽象的である。

4は軽石を素材とし歯車状を呈する。中心に径1.0cmの円孔が穿たれていて、周囲側面に鋸歯状の加工を施している。重量は16gを測る。類例がなく用途不明である。

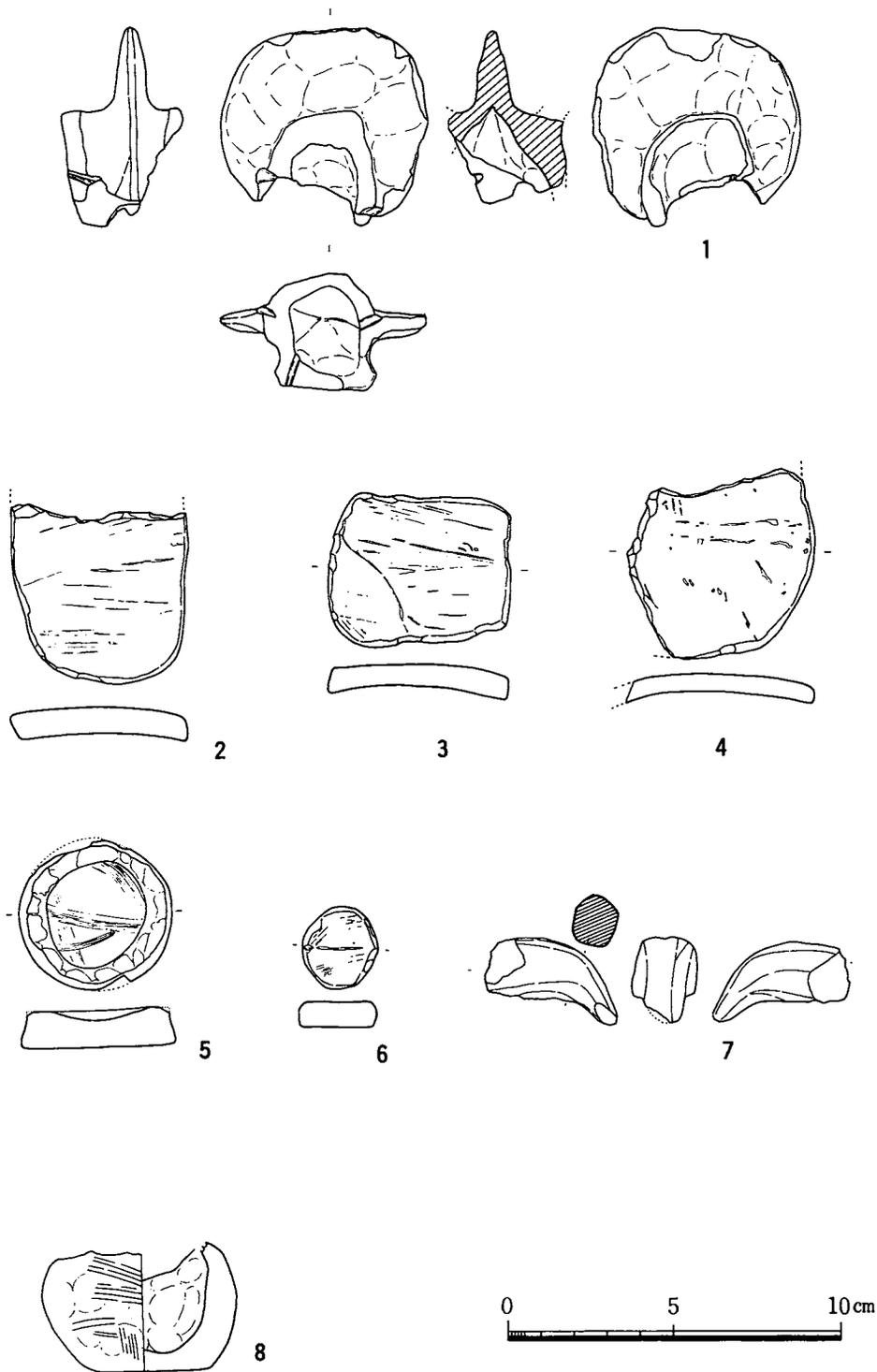
いずれも土偶同様後期末から晩期前半にかけての所産であろう。 (道上康仁)



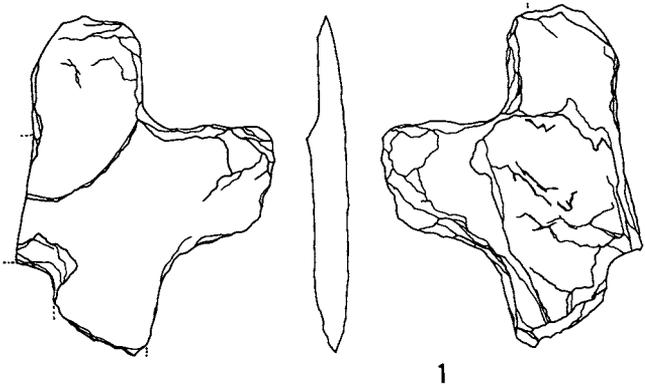
第74図 歴史時代遺物



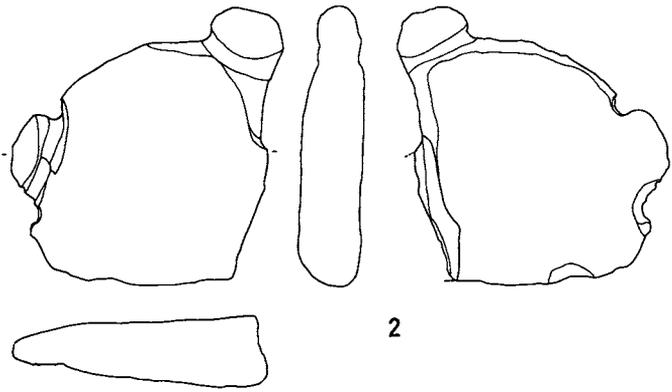
第75図 歴史時代遺物



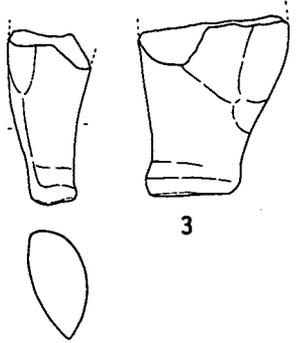
第76図 特殊遺物



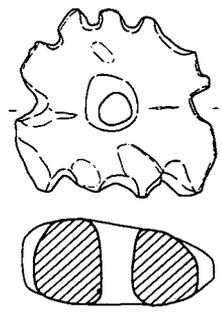
1



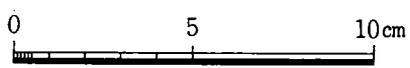
2



3



4

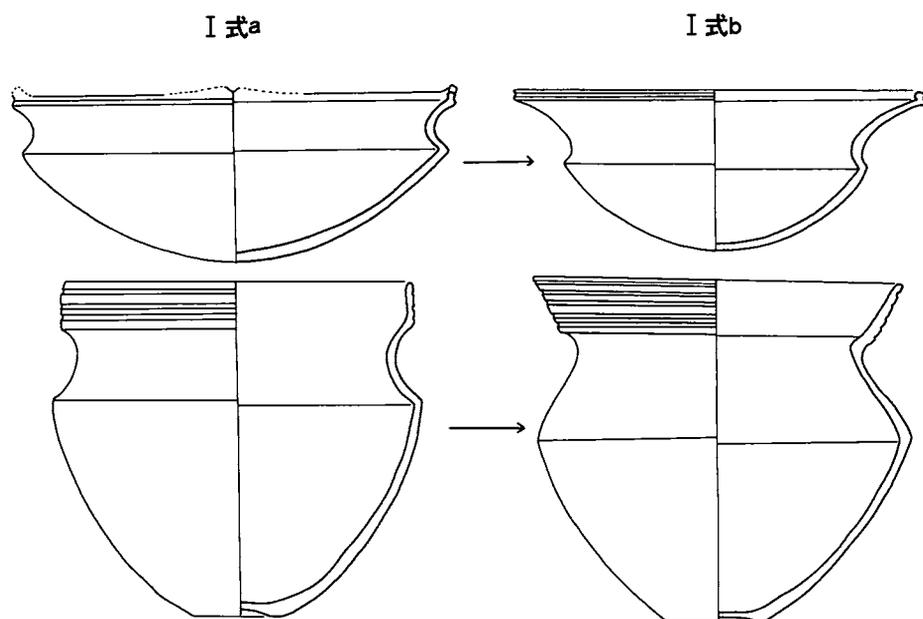


第77圖 特殊遺物

第V章 ま と め

古閑遺跡発見の土器の主なものは縄文晩期にあたる。これを九州の晩期土器の編年にあてると、その主体は晩期Ibを主体とし、一部は晩期Ⅱ式に及ぶものと考えられる。晩期Ⅰ式土器は、下図の如く、深鉢形の粗製土器と、精製土鉢形土器からなる。深鉢形土器はく字形に屈折する頸部と、上げ底を特徴とするもの。その直口する口縁体部からタガ上の粘土の積み上げをなし、その部位に数条の凹線文を施すものである。黒色磨研の浅鉢形土器は、く字形に屈折する頸部を特徴とする丸底で、口縁体部に粘土紐をつなぎ、ここにも屈折部をみせる。深鉢形・浅鉢形ともに口縁部は山形に隆起するものと平縁のものとは共存する。また一部に弧状の沈線（凹線）を併行して施文するものがみられ、この施文法が畿内一帯の晩期土器との関連を指摘する材料となっている。以上の土器形式を晩期Ⅰ式aとすれば、Ⅰ式bは、深鉢形土器の口縁体部から積み上げるタガ状の口縁部は、タガの幅がaに比して広く、外反し一般に胴部のく字形屈折部が顕著である。浅鉢形土器は、頸部が外反しながら長く延び、口縁体部、口唇部に粘土を巻いて段をつける。

Ⅰ式aは大分県大石遺跡、Ⅰ式bは大分県桜町遺跡・熊本県新南部遺跡などに好例をみることが出来る。古閑遺跡出土土器が、晩期Ⅰ式に属し、その細分からⅠ式bを主体とすることが実測図作成の結果明らかにされた。この土器に共伴する石器のうち興味深い点は、石鏃の後退が目立ち、剝片石器に混在して扁平打製石斧が目立つことである。この石器は、その扁平性、使用に



第78図 I式土器形態図

よる折損などの多い点などから、重量を要求する通常の斧と違って土掘り具とみてよい。これらは手斧的用途を使用痕から観察することができるので鋤的要素が強い。この石器の用途については多くの学者間に意見の多いところであるので問題を後の機会にゆずることにする。扁平石斧の材質について大分大学教育学部守山善蔵教授の検査により、安山岩（橄欖石安山岩やや玄武岩に近い組織—単斜輝石安山岩、単斜輝石橄欖石安山岩）と判定されている。また石鏃、剥片石器などに使用されている黒曜石の元素組成（元素比強度）検査を京都大学原子炉研究所東村武信教授に依頼して実施した結果、その大部分は佐賀県伊万里市腰岳産出の黒曜石を原材として求めていることが明らかとなった。安山岩の原産地同定も近い将来において確立されるであろうから石器を何処の産地に求めたか、という問題を物理化学的応用に依存して精度な研究が可能になるものと思われる。

（賀川光夫）

附

天 城 遺 跡

——熊本県菊池市大字赤星字天城——

出土縄文土器の報告

天城遺跡 —熊本県菊池市大字赤星字天城—

出土縄文土器の報告

I

調査の契機 県営圃場整備事業による畑地の整理によって露出した。また同地区はかつて坂本経堯氏によって調査された地点に近く、遺構の存在が予測されたので発掘調査の実施となった。

調査者 調査主体は熊本県文化課。〔調査参加者は隈昭志・桑原憲彰・安達武敏・富田紘一・坂本経昌・松本健郎・野田拓治・高木正文・田中義和・松村道博・江本直・石橋新次・島津義昭・熊本県立第二高校考古学クラブ(高野啓一教諭・クラブ員諸氏)・熊本商科大学文化財研究会。また短期間の調査であり、かつ重要な遺構の発見があったので研究者に遺跡の見学を呼びかけたところ、白木原和美・賀川光夫・古田正隆・木村幾多郎の諸氏が来訪された。〕

調査期日 1974(昭和49)年10月1日～11月3日。

本報告書の作成 遺跡の概要については、それぞれの関連で論及されることがあったが、出土遺物が膨大な量であるので整理が未だ完成していない。しかし遺跡の内容は菊池地方の縄文期の様相を明らかにするというばかりでなく、西日本の縄文後・晩期の社会を考えるうえで重大な資料を提出するものと考えられる。

今回の報告は、1980(昭和55)年1月から3月にかけ、島津義昭・清田純一が整理した縄文土器の報告に限っている。石器は高木正文が集計したデータに基いて記述した。また遺構関係の図面の製図は島津、土器の実測図作成・製図および観察表の作成は清田が行った。本文記述はI・II・IIIを島津、IVを清田、Vを島津、清田がおこなった。

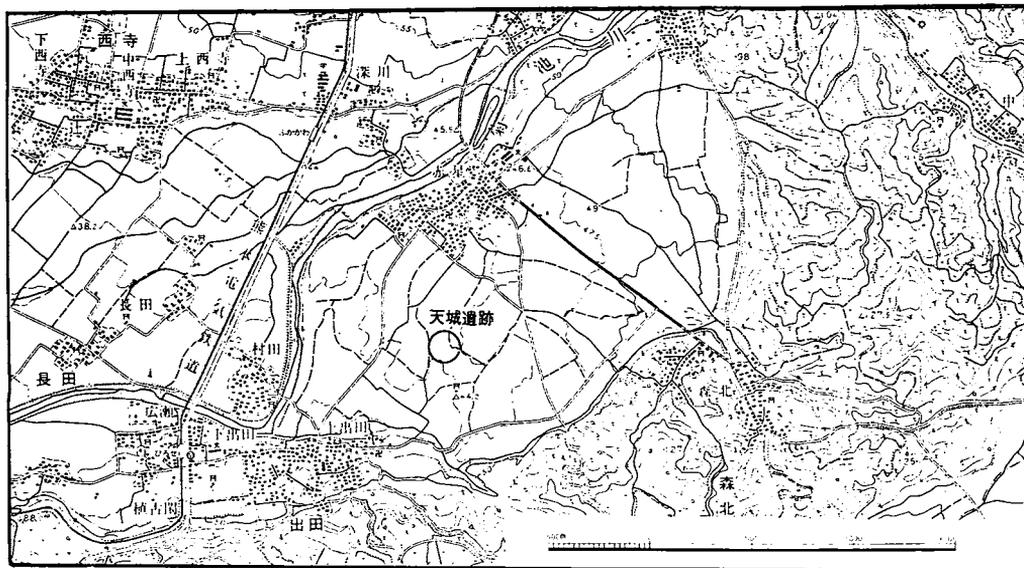


Fig. 1 天城遺跡周辺の地形

II

遺跡の立地 菊池一鹿本盆地(菊鹿盆地)の最奥に位置する。扇状地に形成された微高地の先端部(標高44.6~44.9m)に立地する。発掘調査を実施した面積は約3700㎡あったが、遺跡は未掘の北東方向に延びるとみられる(Fig. 1・2)。

調査区の設定 圃場整備により削手される部分に10m×10mのグリットを設定した。北隅を起点として南北を1~10、東西をA~Gと呼ぶ(Fig. 2)。

土層 第1層(褐色土 厚さ約30cm) 第2層(黒褐色土 約15~20cm) 第3層(黒褐色土 約20cm) 第4層(黄色ローム状土) 第5層(砂礫層) 第1層と第2層の間に鉄分の集積がみられる。また第4層は場所によって形成されていない部分がある。第3層の上~中位部分が遺物包含層であるが、包含層内の文化層を分離することはできなかった。

III

検出遺構は多種がある。縄文時代から中世に及ぶ(Fig. 3)。

竪穴住居址 11ヵ所(縄文時代2 古墳時代9) 縄文時代のものは円形と方形。古墳時代のものは全て北側の中央部にカマドをもつ。そのうち1ヵ所は小竪穴で全面が焼けていた。

土壇 2ヵ所あり1は長楕円形をなすもので、主軸長3.7m、幅0.7~1.5mをはかる。東側に深鉢の口縁部半分が外面を上にして出土した。2は不定形で縄文土器が多量出土した。

掘立柱建物 2棟分 1は南北3間×東西4間 2は南北4間×東西4間

溝 4ヵ所あり、3ヵ所は縄文時代のもの。縄文時代の1は幅3.5m~5m、深さ30cmの台地の縁に作られたもので浅皿状をなす。2、3は半月形の溝。中世のものと思われる大溝は長さ23m、幅3.5m、深さ1.3mをはかる。

道 幅2.5m~3m、長さ30m以上におよぶ。西北から南西にかけて一直線にあり、方向はN30W。地山に人頭大の円礫を無雑作に積む。道の南側に幅30cm、深さ20cmの小溝をもつ。

配石遺構 自然礫を集めた遺構であるが、方形をなすもの2ヵ所と円形、楕円形のもの数ヵ所がある。後者の中には深鉢形土器が裾えられていたものもみられた。

集石 A~C・1~5区にかけて自然礫が夥しくみられた。掌から人頭大のものを雑然と集合させた状態である。

IV

土器 縄文土器が主体を占めるが、その他に竪穴住居址から出土した土師器と数片の弥生式土器がある。縄文土器は、今回報告する縄文後・晩期のものの外に楕円押型土器が1片あった。出土した縄文土器の個体数については明らかでないが、仮に底部の残存品の半分以上のものが個体数の近値を示すとするとするなら、1217点をかぞえる。また深鉢形土器を単独に裾えた「甕

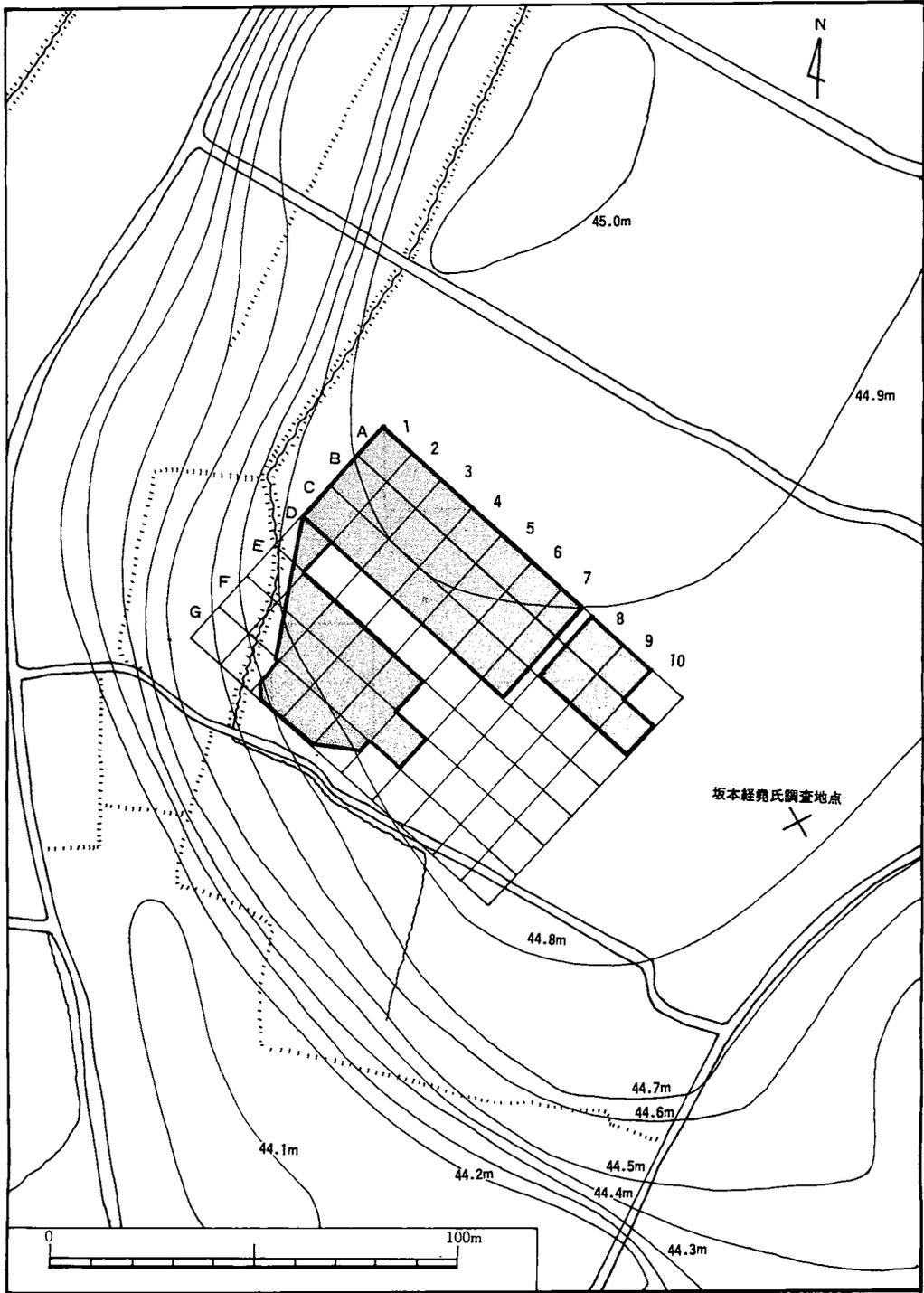


Fig. 2 天城遺跡発掘区設定図

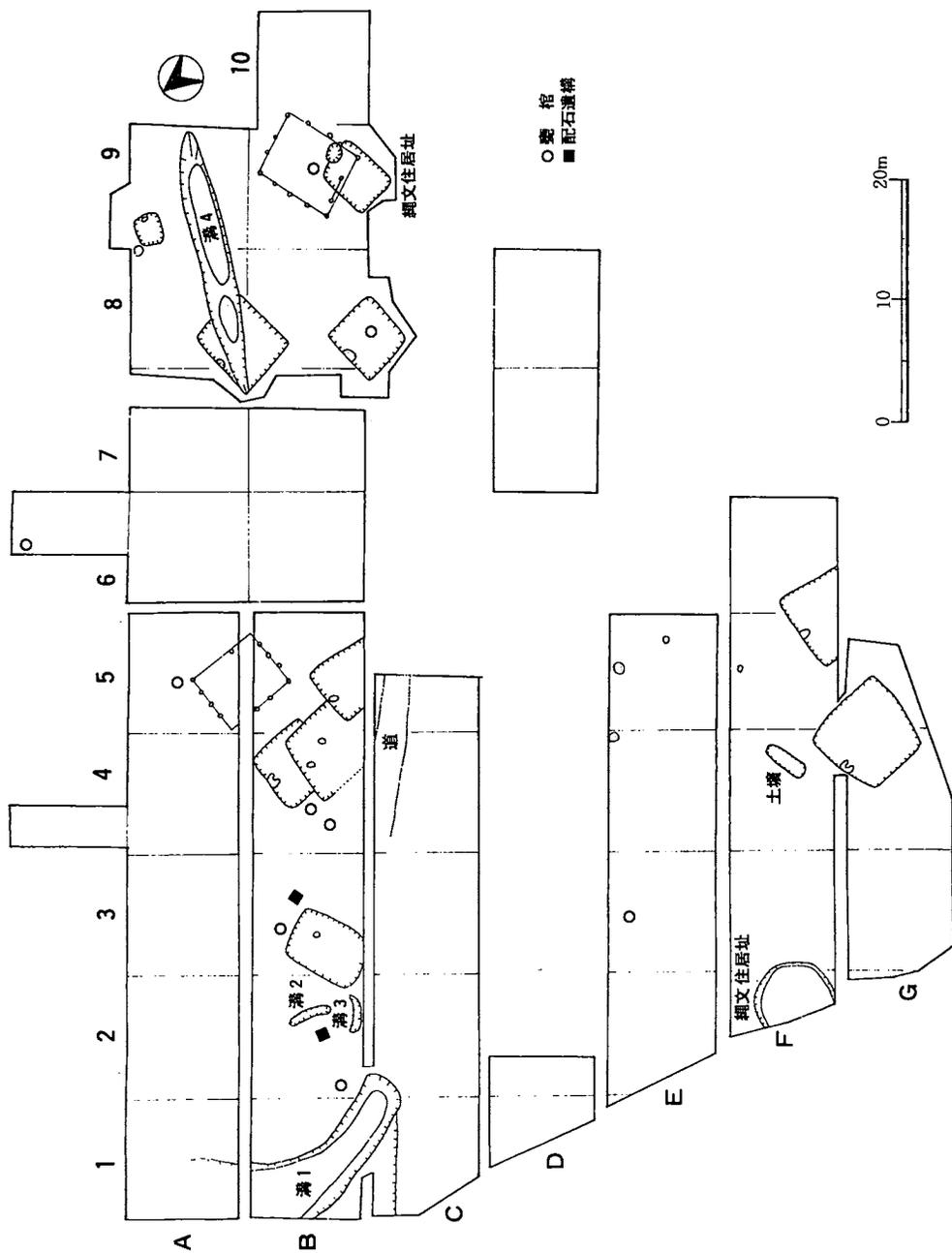


Fig. 3 天城遺跡遺構配置図

棺」とみられるものが7基検出された(Fig. 3)。

石器	磨製石斧	22	半磨製石斧	8	打製石斧	415
	打製石庖丁形石器	13	打製石鎌形石器	6	十字形石器	6
	Y字形石器	1	円盤形石器	45	磨石・敲石	56
	石皿	多数	石匙	3	石錘	53
	石棒	2	石鏃	数点		

以上の外に、黒曜石の剥片が多数みられる。

(石器の点数については将来の整理作業によっては若干の点数の増加がみこまれる)

土製品 紡錘車形土製品 土偶(4個体分)

V

天城遺跡出土の縄文土器は深鉢・浅鉢・鉢・注口土器・脚台付鉢などの形式がみられるが、主体をなすものは深鉢と浅鉢である。以下形式毎の説明をおこなう。

(1) 深 鉢

深鉢A 口縁帯を有するが、文様をもたないもの。頸部および胴部の形態によって2種に細分した。

A-1 口縁部が内傾あるいは内弯する形態。頸部は外反もしくは直行し胴部上半に最大径をもつ。波状口縁のものもある(1~4・193)。

A-2 口縁部が直立あるいは外弯する形態。頸部は外反し、肩部が長く伸び、胴部の最上段に最大径をもつ。肩面は平肩をなす(5~7・69・195・199)。

深鉢B 口縁帯を有し文様をもつもの。口縁部の文様、頸部および胴部の形態によって4種に分類した。

B-1 A-1の口縁部、胴部に文様を有するもの。文様には①縄文 ②擬似縄文 ③細線羽状文がある。波状口縁のものもある(12~16・63・176~182・204~208)。

B-2 口縁部が内傾し、凹線文を施すもの。頸部は外反し、胴部への移行部分はしまる。胴部の最上段に最大径をもつ。口縁部に凹点をつものがある(17~22・183)。

B-3 口縁部は内傾、直立あるいは外傾するが、口縁部に沈線文を施す。頸部は外反し、胴部への移行部はすぼむが、この点が最大径となる。底部には上底と平底のものがある(88~11・23~34・66~68・184~190)。

B-4 口縁部が外傾し、口縁部に条痕をもつ。頸部は外反し、胴部への移行部はV字状を呈し、その点が最大径となる。底面は平底をなす(72・191・192・201)。

深鉢C 口縁帯をもたないもの。頸部および胴部形態の違いによって5種に細分した。

C-1 頸部が直立するものと、わずかに外反するものがある。肩部に三条の沈線をもつ

ものもある。胴部の上半に最大径をもつ。底部は上底をなす。内面に一条の沈線をもつもの波状口縁のもの等がある(39・41・42・45・48～51・62・64・65)。

C-2 頸部が外反するが、文様をもたない。胴部への移行部はV字状をなし、そこが胴部最大径となる(35～38・40・43～44・46・47・52・70・71)。

C-3 口縁部から底部に向って直行する形態。口唇部直下に凸帯状の張出しをもつもの(55)がある(53～55・58・194・197・198)。

C-4 口唇部近くで内弯し、それ以下は直行し底部へ向う。口唇端および口唇部近くに最大径がある(56・59～61)。

C-5 口縁部、頸部が外反し、口縁部に一条の凹線をもつ。この類は本来B種に入るべきものであるかもしれないが、口縁部と頸部が一体化しているので別種とした(57)。

深鉢D 口縁部が内弯気味に外傾する形態で頸部は外反する。口縁部あるいは胴部に数条の沈線をもつ(202・203)。

(2) 浅 鉢

浅鉢A 口縁部に文様をもつもので、頸部および肩部の有無、文様形態などにより3種に細分した。

A-1 口縁部が内傾あるいは内弯気味に直立、外反気味に直立する形態の文様には①縄文 ②細線羽状文 ③沈線がある。この種は頸部を形成しない。胴部への移行点はく字形に屈曲し体部はやや丸味をもち底部へ続く。山形突起を有するものもある(75～84・214・215・233)。

A-2 口縁部が外反あるいは内傾する形態で頸部をもつものともたないものがある。口縁部には二条および三条の凹線文をもつ。口縁部に凹点文をもつものもある(92～97・99～101・212・213・216・217)。

A-3 Aのうち頸部を形成するもの。口縁部の文様、形態および山形突起の有無によって4種に細分できる。

a 山形突起をもち口縁部に二条の凹線をもつ。口縁部には内傾、直立、外傾するものがある。頸部はゆるやかに外反する。体部との境はく字形をなすが、この部分に界線をもつものがある。口縁部の山形突起部に凹点をもつものともたないものがある(108～110・112・118・119・219～220)。

b 口縁部に山形突起をもたないもの。口縁部は直立あるいは外傾し、口縁部に二条の凹線をもつ。頸部は強く外反し、胴部と体部の境はく字形をなす(102～106)。

c 口縁部に山形突起をもち、直立あるいは外傾する。口縁部に一条あるいは二条の沈線をもつ。頸部は短く体部との境はく字形をなす。境に界線、凹点をもつもの、口縁部に凹点をもつものもある(113～117・134・218)。

d 山形突起をもたないもので口縁部は直立あるいは外傾する。口縁部には1条ないし二条の沈線をもつが多条のものもある。頸部は外反し体部との境は強く字形をなす。界線をもつものもある。口縁部の凹点はみられない。

e 頸部が短くなり、口縁部が外反する。口縁部には一条の沈線をもつものが多い。

A-4 鉢形土器ともみられるが本報告では深鉢形土器に含めた。口縁部に一条ないし二条の沈線を施す。頸部は強く外反するものとそうでないものもある。体部との境に界線を有するものとそうでないものがある。147は口縁部が退化した形態であるがこの種に含める(142~147)。

浅鉢B 口縁部をもたない形態で、肩部の文様には有無がある。肩部と胴部の形態により2種に細分できる。

B-1 頸部から胴部への移行部が明瞭なもの(86)とそうでないもの(85)がある。前者は波状口縁をなす。胴部の上半に最大径をもつ。

B-2 頸部はゆるやかに外反する。頸部と胴部の境はく字形をなす。底部は丸底のものと同底気味の平底のものがある。文様帯は頸部と体部の境にあり、沈線のみもの、さらに沈線間に細線羽状文を施したものなどがある。内面の口唇部下端に一条の沈線がみられるものもある(87~91・150・209~211・231)。

浅鉢C 口唇部から底部に向って直行する形態(98・228・229)。

浅鉢D 口縁部をもたず、頸部が外反するものと直行するものがある。頸部と胴部の境には界線をもつ。137は凸帯をもっている。

(3) 鉢

口縁部が外傾し、頸部が短く外反する形態である。口縁部に条痕を施す(111・120)。

(4) 注口土器・その他

a 口縁部をもたず、頸部が短く直立気味のもの。端部がわずかに内弯し肩部が長く伸びる。胴部上半は少し外傾し、その上段に最大径を有する。肩部から胴部の上半にかけて六条の幅広い凹線を有する。沈線間には細線羽状文を施し円形の凹点を加える。

b 口縁をもたず、頸部が長く伸び肩部が短く傾斜する。胴部上半がわずかに外傾し、その上段に最大径をもつ。頸部から胴部にかけて数条の凹線を施し、凹線間に羽状文と変形三角状の凹点を施す。

c 口縁部をもち頸部が外反する形態。口縁部、肩部および胴部の上半に二条の凹線をもち凹線間に羽状文と円形の凹点を施す。胴部上半に小さな把手をもつ。

d 口縁部が外反気味に直立する。肩部は張り壺状を呈する。肩部にS字状の沈線をもつ。

脚台 脚の下半が空洞になるもの(a)と、柱状のもの(b)がある。

VI

型式設定 以上、天城遺跡出土の土器を深鉢形土器、浅鉢形土器、鉢形土器、注口土器、脚台にわけ、それぞれ類別をおこなった。これ等は数型式を含む土器群であるが層位的な識別はできなかつた。したがって、ここでは発掘報告がなされ、型式内容の明瞭な「御領式土器」^{註1}を基準として、型式的にそれより先行あるいは後出するものを抽出して天城Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの型式を設定しておく。Ⅱ式がほぼ御領式土器に相応する(Tab.1)。なお、三万田式と御領式土器の中間期の型式として設定された「鳥井原式土器」^{註2}は、天城遺跡でも各形式を抽出することが可能であるので、分布の広がりをもつものである事が知られる(深鉢形土器-42・47、深鉢形土器99を除いたA-2などが該当する)。

型式	形式	深 鉢 形 土 器	浅 鉢 形 土 器	鉢 形 土 器	注 口 土 器	脚 台
天城Ⅰ		A-1 B-1 C-1	A-1 B-1 B-2		d c D a	b
天城Ⅱ		B-2 C-3? (47) (42)	A-3b A-2 A-3a C D			a
天城Ⅲ		A-2 B-3 C-2 B-4 C-4 C-5	A-3c A-3d A-3e A-4	(111・120)		

Tab.1 天城遺跡縄文土器の型式構造 ()は図版番号をあらわす。-----は時期幅を示す。

器種の変化 天城Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを通じて器種の組合せに基本的な変化はみられない。ただし浅鉢形土器は天城Ⅲの段階で種類が増加する現象がある。Fig.4にみるように、口径の大小のばらつきが著しい。また定形化した鉢形土器が出現するのも天城Ⅲの段階である。これが在来的な土器の形式化であるのか、他地からの影響によるものかはっきりしない。

時期について 天城Ⅲには滋賀里式土器を伴うとみられる。また(100)なども在来の土器の流れの中からは現われない形式である。天城Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式は、それぞれ時期差も反映しているとみられる。御領式土器を後期末に置く坪井清足氏の説を踏襲して天城Ⅱ式を後期末とするならば、天城Ⅰ式が後期後半、Ⅱ式が後期末、Ⅲ式が晩期前半に比定できよう。

註

- 1 坪井清足「御領貝塚」『城南町史』所収 1965年
- 2 富田絨一「鳥井原遺跡発掘調査報告書」1977年

深鉢A-1類

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
1	B2-16区4	A ₁ 27.3 A ₂ 28.8	26.6	—	—	—	↔方向の丹念な磨き。	口縁部から頸部にかけて↔方向の丹念な磨き。	○山形突起を有する。 ○内面口唇部に小指大の黒斑をみる。 ○色調：外-暗褐色 内-褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石、軽石粒等を含む。
2	B2-7区1	A ₁ 24.1 A ₂ 27.2	21.3	—	—	—	口縁部は↔方向の丹念な磨き、以下は→方向の丹念な磨き。	口縁部は×方向の丹念な磨き、頸部は↔方向の丹念な磨き、肩部は←方向のナデ。	○山形突起を有する。 ○外面頸部にカーボンが点在。 ○色調：外-暗褐色 内-褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
3	B2-7区2	A ₁ 28.4 A ₂ 30.5	—	—	—	—	口縁部は↔方向のナデ、頸部は↔方向のやや粗い磨き。	↔方向のナデ。	○内外面口唇部数箇所に黒斑をみる。 ○外面頸部にカーボン点在。 ○色調：外-暗褐色 内-淡褐色 ○胎土：0.3mm前後の砂粒を含む。
4	F2P2一括	A ₁ 33.4 A ₂ 34.2	28.2	—	—	—	↔方向の丹念な磨き。	↔方向の丹念な磨き。	○内面口縁部と頸部に黒斑。 ○外面頸部全面にカーボン附着。 ○色調：外-暗褐色 内-褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの砂粒を含む。
193	A4 下層一括	—	—	—	D ₁ a2.0 D ₂ a5.3	—	↔方向の丹念な磨き。	↔方向の丹念な磨き。	○外面肩部にカーボン。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.3~0.5mmの石英及び長石粒等を含む。

深鉢A-2類

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
5	A2-2,3区 4下層	A ₁ 32.6 A ₂ 32.4	28.3	—	D ₁ 2.0 D ₂ a3.0	—	口縁部は↔方向のナデ、頸部は←方向のナデのあと↔方向の粗い磨き。	口縁部は↔方向のナデ、頸部は↔方向の磨き。	○外面口縁部と頸部に黒斑。 ○色調：明灰褐色 ○胎土：0.5~1mmの石英及び長石粒等を含む。
6		A ₁ 34.6 A ₂ 31.0	—	—	D ₁ 5.2 D ₂ a0.4	—	←方向の研磨。	←方向の研磨。	○外面口縁部に径3.0cm前後の黒斑。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石粒等を含む。
7	B1下層 4区3	A ₁ 34.8 A ₂ 33.7	—	—	D ₁ 2.7 D ₁ a0.7	—	口縁部は↔方向のナデ、頸部は↔方向のナデのあと↑方向の粗い磨き。	↔方向のナデのあと↔方向の磨き。	○色調：外-淡褐色 内-黒褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
69	B8 西側 住居址内 カメ棺	A ₁ 41.8 A ₂ 42.4	B ₁ 39.4 B ₂ 7.6	40.2	D ₁ 2.7 D _{2a} 1.0 D _{2b} 17.0 D _{3a} 25.0 D _{3b} 0.6	3.2	二枚貝条痕により粗調整ののち ↔方向の粗い磨き。	口縁部から頸部に かけては二枚貝条痕による粗調整ののち↑方向の粗い磨き。	○外面全面にカーボン付着。 ○内面胴部下半に黒色有機物。 ○色調：灰褐色 ○胎土：0.3~0.5mmの砂粒等を含む。
195	A2.3層下 一括	—	—	—	D ₁ 5.8 D _{2a} 0.7	—	↔方向のナデ。	←方向の研磨。	○外面口縁部に黒斑。 ○色調：外一明灰褐色 内一暗褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石、軽石粒等を含む。
199	B1下層 3区2	—	—	—	D ₁ 2.1	—	口縁部は←方向のナデ、頸部は↙方向の二枚貝条痕。	口縁部は↔方向のナデ、頸部は↔方向の条痕のあと↔方向のナデ。	○色調：明灰褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石粒等を含む。

深鉢B-1類

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
12		A ₁ 16.0 A ₂ 16.4	11.0	—	D ₁ 0.7 D _{2a} 4.4	—	口縁部は↔方向の丹念な磨きのあとU状の沈線、頸部は↔方向の丹念な磨き。	←方向の丹念な磨き。	○外面頸部にわずかにカーボン付着。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.3~0.5mmの石英及び長石粒等を含む。
13		A ₁ 26.0 A ₂ 29.3	—	—	D ₁ 0.9	—	口縁部は↔方向の丹念な研磨のあとU状の二条沈線をほどこし、沈線の外に縄文をほどこす。頸部は←方向の丹念な研磨。	←方向の丹念な磨き。	○色調：外一暗褐色 内一褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石粒等を含む。
14	A3,4区	A ₁ 26.0 A ₂ 28.0	26.7	—	D ₁ 2.5 D _{2a} 5.7	—	口縁部は↔方向の丹念な磨きのあとU状の三条沈線をほどこし、沈線間に↗方向の羽状文、頸部は↔方向の丹念な磨き。	↔方向のやや粗い磨き。	○外面口縁部数箇所に径2.0cmの黒斑。 ○色調：褐色 ○胎土：0.5mm前後の長石粒及び長石粒等を含む。
15	F3-12区 (2)	—	27.3	24.1	D _{2b} 5.4	—	←方向の丹念な磨きをほどこし、肩部最上部と最下部にU状の二条沈線を有し、胴部への移行部に↘方向の羽状文をみる。	←方向の丹念な磨き。	○胴部にわずかにカーボン付着。 ○色調：外一暗褐色 内一明灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英粒及び長石、金雲母粒等を含む。
16	A3-16区 下層	A ₁ 30.3 A ₂ 32.5	28.4	—	D ₁ 2.3 D _{2a} 7.2	—	←方向の丹念な磨き、口縁部にU状の三条沈線。	←方向の丹念な磨き。	○外面口縁部に4.0×2.6cmの黒斑。 ○外面頸部にカーボン。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.8mm前後の石英及び長石、雲母粒等を含む。

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
63	A-3	A ₁ 36.2 A ₂ 38.7	34.5	36.8	D ₁ 2.3 D ₂ a5-1		↔方向の丹念な磨き、口縁部はU状の三条沈線をほどこし、沈線間に→方向の羽状文及びO状の凹点。	↔方向の丹念な磨き。	○外面頸部から胴部にかけてカーボン付着。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
176	A5区下層一括	—	—	—	D ₁ 1.5	—	↔方向のやや粗い磨き、口縁部にV状の二条沈線をほどこし沈線の外にアナタラ風の貝殻による、擬似縄文。	↔方向の丹念な磨き。	○外面頸部にわずかにカーボン付着。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.3~0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
177	C区一括	—	—	—	D ₁ 1.5	—	↔方向の丹念な磨き、口縁部にV状の二条沈線。	↔方向の丹念な磨き。	○外面口縁部にわずかにカーボン付着。 ○山形突起を有する。 ○色調：外-暗褐色 内-褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英、長石、金雲母粒等を含む。
178	A5-15区	—	—	—	D ₁ 1.7	—	↔方向の丹念な磨き、口縁部にV状の二条沈線。	↔方向の丹念な磨き、やや器壁荒れ。	○山形突起を有する。 ○色調：外-暗褐色 内-淡褐色 ○胎土：0.3~0.5mmの石英及び長石粒等を含む。
179	A5-下層一括	—	—	—	D ₁ 1.0	—	口縁部は↔方向のナデ、頸部は↔方向の丹念な磨き。	↔方向の丹念な磨き。	○外面口縁部に黒斑。 ○浅鉢A-3C類の可能性。 ○色調：外-暗褐色 内-黒褐色 ○胎土：0.3mm前後の砂粒等を含む。
180	A4下層一括	—	—	—	—	—	↔方向の丹念な磨き、口唇部直下にU状の二条沈線、沈線間に↘方向の羽状文、一定間隔に凹点、凹点内にV方向の羽状文。	↔方向の丹念な磨き、口唇直下にU状の一条沈線、沈線直上に↘方向の羽状文。	○内外面口唇下に親指大の黒斑。 ○色調：明灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
181	A3-下層一括	—	—	—	D ₁ 2.6	—	↔方向の丹念な磨き、口縁部にU状の三条沈線、沈線間に↘方向の羽状文、頸部への移行部にV状の羽状文。	↔方向の丹念な磨き。	○口縁部に黒斑。 ○色調：褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石、軽石粒等を含む。
182		—	—	—	D ₁ 1.2	—	↔方向の丹念な磨き、口縁部にV状の二条沈線。	器壁荒れ観察不可能。	○色調：明灰褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英、長石、雲母粒等を含む。
204	B3-3下層	—	—	—	—	—	↘方向の縄文をほどこし、U状の沈線で区かくし、区かく外を↔方向に丹念に磨く。	↔方向の磨き。	○色調：外-暗褐色 内-淡褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
205	B2-7区1	—	—	—	—	—	↔方向の丹念な磨きのあとV状の沈線、沈線外に羽状文。	器壁荒れで観察不可能。	○色調：外-灰褐色 内-淡褐色 ○胎土：0.3~0.5mmの石英及び長石、金雲母粒等を含む。
206	B1-下層 10区3	—	—	—	—	—	↔方向の丹念な磨きのあとV状の沈線、沈線間に鋸歯文。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：暗褐色 ○胎土：0.3~0.5mmの石英及び長石粒等を含む。
207	B1-5区	—	—	—	—	—	頸部にO状連点文、肩部は↘方向の縄文施文のあとベルト状に↔方向の丹念な磨き、そののちU状の沈線で区かく。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：明灰褐色 ○胎土：0.3~0.5mmの石英及び長石粒等を含む。
208	B2-9区	—	—	—	—	—	頸部に凹状連点文、肩部は↘状の縄文施文ののち↔方向の丹念な磨き、そののちU状の沈線で区かく。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：外-暗褐色 内-褐色 ○胎土：0.3~0.5mmの石英及び長石粒等を含む。

深鉢B-2類

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
17	B2下層10 区-2	A ₁ 22.8 A ₂ 25.6	—	—	D ₁ 3.0	—	↔方向の丹念な磨き、口縁部はV状の四条凹線。	口縁部は↔方向のナデ、頸部は↔方向の丹念な磨き、頸部への移行部にV状のえぐり。	○外面頸部にカーボン点在。 ○色調：外-黒褐色 内-暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
18	B3-20区	A ₁ 22.4 A ₂ 25.6	20.8	27.1	D ₁ 2.7 D _{2a} 4.8 D _{2b} 5.2	—	頸部最上部は↔方向のナデのあと↔方向の磨き、他は↔方向の丹念な磨き。	口縁部から頸部最上部は↔方向の丹念な磨き、頸部は↔方向の丹念な磨き、肩部への移行部は↔方向の丹念な磨き。	○外面頸部と胴部の一部にカーボン付着。 ○口縁部一部に黒斑。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.3mm前後の石英及び長石粒等を含む。
19	A3下層 4区	A ₁ 26.4 A ₂ 26.4	23.3	(26.6)	D ₁ 2.7 D _{2a} 3.5 (D _{2b} 4.8)	—	↔方向の丹念な磨き。口縁部にU状の二条凹線、胴部への移行部にU状の界線。	↔方向のやや粗い磨き。	○外面頸部のほぼ全面にカーボン付着。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
20	A4 20区	A ₁ 27.2 A ₂ 28.1	27.0	—	D ₁ 2.2 D _{2a} 0.4	—	↔方向の丹念な磨き、口縁部にU状の凹線、頸部への移行部にO状の凹点。	↘状のやや粗い磨き。	○色調：明灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英、長石粒等を含む。 ○外面口縁部と内面口縁部から頸部にかけて黒斑。 ○外面頸部にカーボン点在。

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
24	A1-14区 下層一括	A ₁ 30.1 A ₂ 31.6	30.1	—	D ₁ 1.5 D _{2a} 5.0	—	二枚貝条痕による粗調整のあと ↔方向のナデ。	口縁部から頸部最上部は↔方向のナデ、以下は器壁が荒れ観察不可能。	○色調：外-暗褐色 内-淡褐色 ○胎土：0.5mm前後の砂粒を含む。
25	A1-14区 下層一括	A ₁ 31.8 A ₂ 32.7	30.7	—	D ₁ 1.3 D _{2a} 8.0	—	二枚貝条痕による粗調整のあと ↔方向のナデ。	口縁部から頸部最上部は、二枚貝条痕のあと↔方向のナデ、以下は↑方向のナデ。	○色調：外-暗褐色 内-淡褐色 ○胎土：0.3~0.5mmの石英及び長石粒等を含む。
26	A1 3層下 一括	A ₁ 33.6 A ₂ 33.6	31.85	—	D ₁ 2.2 D _{2a} 0.5	—	口縁部から頸部最上部にかけて↔方向のナデ、以下は↑方向の粗い磨き。	口縁部は↔方向のナデ、頸部は↔方向のやや粗い磨き、頸部への移行部にV状のえぐり。	○色調：灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石、金雲母粒等を含む。
27		A ₁ 16.4 A ₂ 16.5	15.9	—	D ₁ 1.6 D _{2a} 0.2	—	口縁部は↔方向のナデ、頸部は↗、↘方向のナデ。	↔方向のナデ、頸部への移行部にV状のえぐり。	○外面全体にカーボン附着。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石、金雲母粒等を含む。
28	A2.3 層下面	A ₁ 27.5 A ₂ 27.6	26.5	—	D ₁ 1.6 D _{2a} 6.0	—	↔方向の丹念な磨き、口縁部はV状の二条沈線をほどこし、頸部への移行部に○状の凹点。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：黒褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
29	A2-10区 4下層	A ₁ 26.3 A ₂ 26.7	21.5	—	D ₁ 2.2 D _{2a} 5.9	—	口縁部は↔方向のやや粗い磨き。頸部最上部は↔方向のナデ、以下は↔方向の丹念な磨き。口縁部にV状の三条沈線。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：外-暗赤褐色 内-明灰褐色 ○胎土：0.3mm前後の砂粒。
30	A2-3 層一括	A ₁ 29.2 A ₂ 29.9	28.6	—	D ₁ 1.7 D _{2a} 0.5	—	口縁部は↔方向の丹念な磨き、頸部最上部は、擦痕、以下は↔方向のやや粗い磨き。	↔方向の丹念な磨き、頸部への移行部にV状のえぐり。	○色調：外-暗褐色 内-灰褐色 ○胎土：0.3~0.5mmの石英及び長石粒等を含む。
31	B2-8区1	A ₁ 35.8 A ₂ 34.4	33.7	—	D ₁ 2.0 D _{2a} 0.2	—	↔方向の研磨 口縁部にV状の三条沈線。	器壁荒れて観察不可能。	○内面口縁部から頸部上半にかけて上下幅約2.0cmの黒斑をみる。 ○色調：明灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
32	A1-17区 下層	A ₁ 31.4 A ₂ 31.2	30.1	—	D ₁ 2.8 D ₂ 1.0	—	口縁部は↔方向のナデ、頸部は↔方向の粗い磨き、口縁部にU状の二条沈線。	↔方向の粗い磨き。	○外面口縁部に親指大の黒斑、頸部に全面にカーボン点在。 ○色調：外-暗褐色 内-褐色 ○胎土：0.5~1mmの石英粒等を含む。

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
33	B4区	A ₁ 30.0 A ₂ 29.5	29.0	—	D ₁ 1.3 D ₂ 0.2	—	口縁部は↔方向のやや粗い磨き、頸部は↘方向の粗い磨き、口縁部にU状の二条沈線。	口縁部は↗方向の粗い磨き、頸部は↖方向の粗い磨き。	○外面頸部にカーボン点在。 ○色調：外一暗褐色 内一暗黒褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
34	B4-3層 下面	A ₁ A ₂					口縁部は↔方向のナデ、頸部最上部は↔方向のナデのあと↔方向の粗い磨き、以下はナデのあと↘方向の粗い磨き。	↔方向のナデのあと↔方向の粗い磨き。	○外面口縁部に親指大の黒斑、内面、口縁部から頸部にかけて上下幅4.0cm横幅2.0cmの黒斑をみる。 ○色調：褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
66	A1-16区 カメ棺	A ₁ 34.2 A ₂ 34.7	32.8	36.4	D ₁ 1.5 D _{2a} 1.0 D _{2b} 15.0 D ₂ 16.0 D ₃ 28.2	9.4	貝殻による粗調整のち↔方向の粗い磨き。	口縁部から頸部は貝殻による粗調整のあと↔方向の粗い磨き、胴部は↘方向の粗い磨き。	○色調：淡褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石粒等を含む。
67	A4-15区 土壙	A ₁ 30.2 A ₂ 30.2	29.3	33.0	D ₁ 3.30 D _{2a} 0.7 D _{2b} 12.7 D ₂ 13.4		↔方向の二枚貝条痕のあとかなり丹念な磨き。	↔方向の粗い磨き、頸部への移行部にU状の沈線様のえぐり。	○胴部全面と頸部最上部にカーボン付着。 ○外面口縁部に親指大、頸部に小ぶし大の黒斑をみる。 ○色調：外一暗褐色 内一明灰褐色 ○胎土：0.3~0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
68	A1-8区 下層 カメ棺	A ₁ 25.4 A ₂ 26.9	25.5	31.7	D ₁ 2.0 D _{2a} 1.6 D _{2b} 9.3 D ₂ 10.9 D ₃ 16.2	5.5	↔方向の粗い磨きののち口縁部にV状の沈線。	↔方向の粗い磨き。	○外面胴部にカーボン、内面に黒色有機物付着。 ○色調：外上-暗褐色 下-淡褐色 内上-暗褐色 下-褐色 ○胎土：0.3~0.5mmの石英及び長石粒等を含む。
184	A1-11区	—	—	—	D ₁ 1.9 D _{2a} 0.4	—	↔方向の丹念な磨き、口縁部にU状の沈線。	↔方向の丹念な磨き。	○外面にわずかにカーボン付着。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
185	F3区				D ₁ 2.9 D _{2a} 5.8		口縁部は↔方向のナデのあと↔方向の丹念な磨き、頸部は↔方向の丹念な磨き、口縁部にU状の二条沈線。	↔方向の丹念な磨き。	○外部ほぼ全面にカーボン点在。 ○色調：外一暗褐色 内一明灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
186	A1-15区				D ₁ 2.4 D _{2a} 1.1		口縁部から頸部最上部にかけて↔方向のナデ、頸部は↔方向の丹念な磨き。口縁部にV状の四条沈線。	↔方向のやや粗い磨き。	○外面頸部にわずかにカーボン付着。 ○色調：外-灰褐色 内-灰褐色 ○胎土：0.3mm前後の長石粒及び石英粒等を含む。
187	B1-3区				D ₁ 3.0 D _{2a} 1.1		口縁部から頸部最上部にかけ↔方向のやや粗い磨き。以下は↘方向のやや粗い磨き、口縁部はV状の三条沈線。	口縁部から頸部最上部は↔方向のナデのあと↑方向のやや粗い磨き、以下は↗方向のやや粗い磨き。	○色調：外-暗褐色 内-淡褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石、金雲母粒を含む。
188	A1-12区				D ₁ 2.0 D _{2a} 0.7		口縁部から頸部最上部にかけて↔方向のナデ、以下は↑方向のやや粗い磨き。口縁部にU状の三条沈線。	口縁部は↔方向のナデのあと↔方向のやや粗い磨き。以下は器壁荒れて観察不可能。頸部への移行部にV状のえぐり。	○色調：外-暗褐色 内-灰褐色 ○胎土：0.3~0.5mmの石英及び長石粒等を含む。 ○頸部にわずかにカーボン。
189	A3-2区				D ₁ 1.3 D _{2a} 0.2		↔方向の丹念な磨き、口縁部にU状の二条沈線。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
190	E3-下面一括				D ₁ 4.3 D _{2a} 0.7		↔方向のナデ、口縁部にU状の数条沈線。	↔方向のやや粗い磨き。	○色調：灰褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石粒等を含む。

深鉢B-4類

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
72	F3-(6X4)	A ₁ 44.8 A ₂ 41.4	B ₁ 39.6 B ₂ 10.8	42.4	D ₁ 4.8 D _{2a} 2.0 D _{2b} 11.6 D _{2c} 13.6 D ₃ 26.0 D 1.8 D 59.8	12.0	口縁部は↗方向の二枚貝条痕、頸部から胴部は↘方向の二枚貝条痕のあと↔方向のナデ。	↖方向の二枚貝条痕のあと↔方向のナデ。	○外面頸部に小ぶし大のカーボン付着、内面胴部に二段に帯状の黒色有機物。
191	E3-22区				D ₁ 3.4 D _{2a} 0.8		口縁部は↔方向のナデのあと→方向の幅2mmの条痕、頸部は↔方向のナデのあと↔方向のやや粗い磨き。	↔方向のやや粗い磨き。	○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
192					D ₁ 4.1 D _{2a} 1.5		口縁部は↘方向の二枚貝条痕、頸部は↔方向のナデ。	口縁部は↔方向の二枚貝条痕のあと↔方向のナデ。	○色調：外-暗褐色 内-淡褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石粒等を含む。

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
201					D ₁ 4.5 D ₂ a0.3		口縁部は←→方向のナデのあと ←→方向のやや粗い磨き、そのあと→方向の任意のJ状沈線。 頸部最上部は←→方向のナデ。	←→方向のナデ。	○色調：外一暗褐色 内一明灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。

深鉢C-1類

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
39	B2-1区 近くカメ棺	27.6	25.0	28.2	D ₁ 10.1	—	←→方向のやや粗い磨き、器壁荒れ。	←→方向の粗い磨き。	○外面肩部に黒斑。 ○内面口縁部から頸部に黒斑を有する。 ○色調：明灰褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石粒等を含む。
41	A5区下層 一括	17.25	17.0	18.0	D ₁ 5.9	—	←→方向のやや粗い磨きのあと肩部にJ状の三条沈線。	←→方向のやや粗い磨きのあと口縁部にV状の一条沈線。	○外面全体にカーボン点在。 ○色調：外一明灰褐色 内一黒暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石、金雲母粒等を含む。
42	A3一下層 2.3区	20.5	18.3	19.5	D ₁ a4.2 D ₁ b1.9	—	←→方向の丹念な磨き。	←→方向の丹念な磨きのあと口縁部にV状のえぐり。	○外面頸部にカーボン点在。 ○色調：明灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
45		15.1	B ₁ 13.1 B ₂ 12.5	12.7	D ₁ a2.4 D ₁ b1.7 D ₁ 4.1 D ₂ 9.6 D 16.8	4.0	頸部は←→方向のやや粗い磨き、胴部は↑方向のやや粗い磨き。	←→方向の粗い磨き。	○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石、金雲母粒等を含む。
48	B2-16区 3	16.0	B ₁ 14.8	15.8	D ₁ 4.5	—	←→方向のやや粗い磨き。器壁がやや荒れる。	←→方向のやや粗い磨き。	○外面頸部最下部にカーボン付着。 ○内面胴部の一部に黒色有機物。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等。
49	A2-25区 -2下層	21.0	B ₂ 19.3	21.3	D ₁ 6.0	—	←→方向の粗い磨き。	←→方向の粗い磨き。	○内面胴部に黒色有機物付着。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.3mm前後の石英及び長石粒等を含む。
50	B22区	27.0	B ₁ 22.7 B ₂ 22.7	24.1	D ₁ a8.5 D ₁ b1.2 D ₂ (20.0) D(29.7)	(5.5)	頸部は←→方向の粗い磨き、胴部は器壁が荒れ観察不可能。	頸部は←→方向の粗い磨き、胴部は←→方向のナデ。	○色調：外一灰褐色 内一褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
51	A4—下層 一括	16.1	B ₂ 14.3	14.7	D ₁ 4.0	—	↘方向の粗い 磨き。	↔方向の粗い 磨き。	○色調：外—褐色 内—暗褐色 ○胎土：0.3~0.5mm の石英及び長石粒 等を含む。
62	B2—13区	34.6	B ₂ 31.2	35.4	D ₁ 12.2	—	↔方向のかなり 丹念な磨き。	↔方向のかなり 丹念な磨きの あと頸部最上部 にU状の一条沈 線。	○色調：灰褐色 ○胎土：0.5mm前後 の石英及び長石粒 等を含む。
64	A3—下層 11区	37.0	B ₂ 30.9	34.9	D ₁ 9.8	—	↔方向の丹念 な磨きのあと肩 部への移行部に U状の界線。	↔方向の丹念 な磨き。	○内外面の一部に黒 斑。 ○色調：灰褐色 ○胎土：0.5mm前後 の石英及び長石粒 等を含む。
65	A2—3.2 区3下層	39.6	B ₂ 35.8	37.6	D ₁ 11.1	—	頸部は↔方向 の粗い磨きのあ と↘方向の粗い 磨き、肩部は↔ 方向の粗い磨き、 胸部は↔方向 の粗い磨きのあ と↑方向の粗い 磨き。	↗方向の粗い 磨き。	○外面全体にカーボ ン点在。 ○色調：外—明灰、 胸部下半は 暗褐色 内—明灰褐 色 ○胎土：0.5mm前後 の長石及び石英粒 等を含む。

深鉢C—2類

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
35	A3—下17 区	25.5	B ₁ 22.8	25.9	D ₂ a5.5 D ₂ b8.2 D ₂ 13.7	—	↔方向のやや 粗い磨き。	↔方向のやや 粗い磨き。一部 は↘方向のやや 粗い磨き。	○内面口縁部及び胴 部に黒斑。 ○色調：褐色 ○胎土：0.3~0.5mm の石英及び長石粒 等を含む。
36	A4区	35.9	B ₁ 33.3	36.8	D ₂ a6.7 D ₂ b7.8 D ₂ 14.5	—	↔方向のやや 粗い磨きのあと ↑方向のやや粗 い磨き。	↔方向の粗い 磨き。	○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後 の石英及び長石粒 等を含む。 ○内面に黒斑。
37	A5—下層 一括	27.8	B ₁ 21.25	—	D ₂ a10.0	—	↔方向のやや 粗い磨き。	↔方向のやや 粗い磨き。	○外面にカーボン付 着。 ○内外面に小ぶし大 の黒斑。 ○色調：褐色 ○胎土：0.3~0.5mm の石英及び長石粒 等を含む。
38	A3.4区	28.2	B ₁ 25.6	27.3	D ₂ a5.0 D ₂ b8.2 D ₂ 13.2	—	↔方向の粗い 磨き。	↔方向のやや 粗い磨き。器壁 荒れ。	○色調：淡褐色 ○胎土：0.5mm前後 の石英及び長石粒 等を含む。
40	A3下層11 区	40.3	B ₁ 30.1	(30.6)	D ₂ a9.5 D ₂ b1.2 D ₂ 10.7	—	↔方向のやや 粗い磨きののち 胸部への移行部 にU状の界線。	↔方向の粗い 磨き。	○外面の一部にカー ボン附着。 ○色調：明灰褐色 ○胎土：0.5~0.8mm の石英及び長石粒 等を含む。

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
43	A1-17区 下層	19.9	B ₁ 19.4	20.5	D _{2a} 0.5 D _{2b} 8.5 D ₂ 9.0	—	↔ 方向のナデ。	↔ 方向のナデ のあと ↔ 方向 の粗い磨き。	○外面頸部から胴部 最上部にかけてカー ボン付着。 ○内外面頸部上半に 黒斑。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後 の石英及び長石粒 等を含む。
44	A1-17区 下層	22.5	B ₁ 22.2	23.2	D _{2a} 4.6 D _{2b} 3.6 D ₂ 8.2	—	頸部は ↔ 方向 のナデ、胴部は ↔ 方向のやや 粗い磨き。	頸部は ↔ 方向 のナデ、胴部は ↔ 方向のやや 粗い磨き。	○色調：暗褐色 ○胎土：0.3~0.5mm の石英及び長石粒 等を含む。
46	A3区下層 一括	20.5	B ₁ 16.65	18.0	D _{2a} 6.8 D _{2b} 1.5 D ₂ 8.4	—	↔ 方向の丹念 な磨き。	↔ 方向のやや 粗い磨き。	○頸部最下部にカー ボン付着。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後 の石英及び長石粒 等を含む。
47	A3-1区	23.5	B ₁ 20.0 B ₂ 20.0	20.8	D _{2a} 5.5 D _{2b} 6.1 D ₂ 11.6	(4.1)	頸部は ↘ 方向の やや粗い磨き。 胴部は ↔ 方向 のやや粗い磨き。	頸部は ↔ 方向 のやや粗い磨き。 胴部は ↔ 方向 のナデ。	○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後 の石英及び長石粒 等を含む。
52	A4-18区	25.8	22.9	24.0	D _{2a} 7.5 D _{2b} 3.5	—	頸部は ↘ 方向の 粗い磨き。胴部 は ↔ 方向の粗 い磨き。	↔ 方向の粗い 磨き。	○内面口唇部直下に 小指大の黒斑。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後 の石英及び長石、 金雲母粒等を含む。
70	A3-1区 カメ棺下層	24.6	21.0	22.3	D _{2a} 7.0 D _{2b} 5.0 D ₂ 12.0	—	頸部は ↗↘ 方向 の二枚貝条痕の あと ↔ 方向の 粗い磨き。胴部 は ↗↘ 方向の二 枚貝条痕、胴部 への移行部にU 状の界線。	頸部上半は ↗↘ 方向の二枚貝条 痕のち ↔ 方向 の粗い磨き。 頸部下半から胴 部は ↗↘ 方向の 二枚貝条痕。	○頸部から胴部上半 にカーボン付着。 ○内面口唇部直下に 親指大の黒斑点在。
71	B4-17区	42.8	35.5	38.8	D ₁ 7.5 D ₂ 9.2	—	頸部は ↔ 方向 の粗い磨き。胴 部は ↔ 方向の ナデのあと ↘ 方 向の粗い磨き。	頸部は ↔ 方向 の粗い磨き。胴 部は器壁が荒れ 観察不可能。	○外面胴部にわずか にカーボン付着。 ○内面頸部と胴部に わずかにカーボン 付着。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後 の石英及び長石粒 等を含む。
196	A1-下層 8区	—	—	—	D _{2a} 1.1	—	↔ 方向の粗い 磨き。	↔ 方向の粗い 磨き。	○内面にモミ痕？ ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5~0.8mm の石英及び長石粒 等を含む。

深鉢C-3類

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
53	B7-16区 4	28.3	—	—	—	—	↔ 方向のやや 粗い磨き。	↗ 方向のやや 粗い磨き。	○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後 の石英及び長石粒 等を含む。

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
54	B2東側 カメ棺	A ₁ 31.4 A ₂ 32.0	—	—	—	—	↔方向のやや 粗い磨き。	↔方向のナデ のち口縁部内 面にJ状の沈線。	○外部下半に親指大 のカーボン付着。 ○内面口縁部から幅 約10cmにわたって 黒斑。 ○色調：灰褐色 ○胎土：0.5mm前後 の石英及び長石粒 等を含む。
55		33.6	—	—	—	—	↔方向の丹念 な磨きのちセ ンコウ。	↔方向の丹念 な磨き。	○内面口唇部直下に 親指2本分の黒斑 が点在。 ○色調：外—暗褐色 内—褐色 ○胎土：0.5mm前後 の石英及び長石粒 等を含む。
58	E-2溝	19.0	—	—	—	—	↘方向のナ デ。	↘方向のナデ。	○外面全面にカーボ ン付着。 ○口唇部直下にタテ 幅約1cmの黒斑帯 を有する。 ○色調：外—暗褐色 内—淡褐色 ○胎土：0.5mm前後 の石英及び長石粒 等を含む。
194	B2-7区	—	—	—	—	—	↘方向の条痕。	↔方向のナデ。	○外面全面にカーボ ン付着。 ○色調：外—暗褐色 内—灰褐色 ○胎土：0.5mm前後 の石英及び長石粒 等を含む。
197	A1-24区	—	—	—	—	—	口縁部は↔方 向のナデのあと V状の二条沈線 胴部は↔方向 のナデのあと↑ 方向の粗い磨き。	↔方向の丹念 な磨き。	○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後 の石英及び長石粒 等を含む。
198	A4-23区	—	—	—	—	—	↔方向のかなり 丹念な磨きの のち口唇下にV 状の二条沈線。	↔方向のかなり 丹念な磨き。 器壁荒れ。	○色調：外—暗褐色 内—淡褐色 ○胎土：0.5mm前後 の石英及び長石粒 等を含む。

深鉢C-4類

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
56	A3-21区 下層	25.8	—	37.8	—	—	↘方向の幅約 1.5mmの条痕。	↔方向のかなり 丹念な磨き。	○外面全面にカーボ ン点在。 ○内面胴部下半に黒 色有機物。 ○色調：外—黒褐色 内—明灰褐色 ○胎土：0.5mm前後 の石英及び長石粒 等を含む。

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	D	外 面	内 面	
59	A5-6区	31.0	—	—	—	—	↑方向の幅約1mmの条痕ののち ↘方向の巻貝による条痕、口唇部には擬似縄文。	↔方向のナデ。	○色調：外—暗褐色 内—灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
60	B4.5区	40.0	—	41.0	—	—	↔方向の二枚貝条痕ののち↔方向の粗い磨き。	口唇部下約2cmの幅は↔方向のやや粗い磨き。以下は↘方向の粗い磨き。	○色調：外—暗褐色 内—明灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒を含む。
61	A3-下層一括	44.0	—	46.0	—	—	口縁部は↔方向のかなり丹念な磨き。胴部は↘方向のナデのあと↘方向の条痕様の磨き。	↔方向の粗い磨き。	○色調：暗褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石粒等を含む。

深鉢C-5

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
57	A1-17区	A ₁ 13.0 A ₂ 12.6	12.3	—	D ₁ 1.3 D _{2a} 4.3	—	口縁部は↔方向のやや粗い磨きのあと∪状の凹線、頸部は↑方向のやや粗い磨き。	↔方向の粗い磨きののち∪状のえぐり。	○色調：外—暗褐色 内—明灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○外面のほぼ全面にカーボン付着。

深鉢D類

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
202	B3-3層下	—	—	—	—	—	↔方向のナデのあと∪状の沈線。	指圧による調整。	○色調：外—淡褐色 内—暗褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石、金雲母粒等を含む。
203		—	—	—	D ₁ 5.3 D _{2a} 8.0	—	↔方向のナデのあと∪状の数条沈線。	器壁荒れで観察不可能、頸部への移行部に∪状のえぐり。	○色調：淡褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。

浅鉢A-1類

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
75	A4-下層 一括	A ₁ 15.5 A ₂ 16.4	—	—	D ₁ 2.3	—	↔方向の丹念な磨きのあとじ状の二条沈線、沈線外にく状の羽状文。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：外—塗褐色 内—黒褐色 ○胎土：0.3~0.5mmの石英及び長石粒等を含む。
76	B2-13区	A ₁ 18.8 A ₂ 18.6	—	—	D ₁ 2.6	—	器壁が荒れ観察不可能、口縁部にはじ状の三条沈線をほどこし上段と下段に↘方向の羽状文をほどこす。	↔方向の丹念な磨き。	○外面口縁部にカーボン付着。 ○色調：明灰褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石粒等を含む。
77	B2-21区	A ₁ 21.0 A ₂ 21.8	—	—	D ₁ 1.7	—	↔方向の丹念な磨きのあと↓方向のきざみ状の連続文。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：暗褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石粒等を含む。 ○焼成不良。
78	A2-25区 2下層	A ₁ 21.0 A ₂ 21.6	—	—	D ₁ 2.3	—	↔方向のかなり丹念な磨きののち口縁部にV状の三条沈線。	↔方向のかなり丹念な磨き。	○外面口縁部にカーボン付着。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒を含む。
79	A3-下層 16区	A ₁ 24.6 A ₂ 24.0	—	—	D ₁ 2.8	—	口縁部は↘方向縄文をほどこしたのち幅約0.6mmをのこしその他を磨消し、V状の四条沈線で区割する。胴部は↔方向の丹念な磨き。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：明灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
80	A3-3,4 区	A ₁ 23.6 A ₂ 24.6	—	—	D ₁ 2.8	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にじ状の三条沈線。	↔方向の丹念な磨き。	○内面口縁部に親指大の黒斑をみる。
81	B2-1区 近くカメ棺	A ₁ 30.0 A ₂ 30.0	—	—	D ₁ 2.3	—	↔方向の丹念な磨きののちV状の凹線、凹線内に↘方向の羽状文。	↔方向の丹念な磨き。	○口縁部にわずかにカーボン付着。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
82	A-2区	A ₁ 17.8 A ₂ 18.4	—	—	D ₁ 1.9	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にじ状の二条沈線。	↔方向の丹念な磨き。	○山形突起を有する。 ○色調：外—暗褐色 内—明褐色 ○胎土：0.3mm前後の石英及び長石粒等を含む。
83	A2-22区 4下層	A ₁ 21.6 A ₂ 21.6	—	—	D ₁ 2.1	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にじ状の二条沈線をほどこし、沈線内外に↘方向の羽状文。	↔方向の丹念な磨き。	○山形突起。 ○色調：褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
84	A2-32区 4 3層	A ₁ 24.4 A ₂ 24.1	—	—	D ₁ 1.8	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にU状の沈線をほどこし、胴部への移行部に↘方向の羽状文。	↔方向の丹念な磨き。	○外面口縁部にカーボン点在。 ○色調：褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
214	B2-26区				D ₁ 2.6		↔方向の丹念な磨きののち口縁部にU状沈線。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：外—口縁部—黒褐色 胴部—明褐色 内—褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
215					D ₁ 3.9	—	↔方向のナデののち口縁部にU状の四条沈線、胴部への移行部に↘方向のきざみ状連点文。	↔方向のやや粗い磨き。	○色調：外—明灰褐色 内—淡褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒を含む。
233	B4-2区				D ₁ 2.6	—	↔方向の丹念な磨きののちU状の三条沈線、沈線間に↘方向の羽状文。	↔方向の丹念な磨き。	○口唇部に小指大の黒斑。 ○色調：外—明灰褐色 内—暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒を含む。 ○口縁部から胴部にかけて丹塗り。

浅鉢A-2類

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
92	B4-4区	A ₁ 19.1 A ₂ 19.1	—	—	D ₁ 2.0	—	↔方向の丹念な磨きののちにU状の凹線、凹線内に↘方向の羽状文。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：黒褐色 ○胎土：0.5-0.8mmの石英及び長石粒を含む。
93		A ₁ 21.4 A ₂ 20.7	—	—	D ₁ 3.4	—	口縁部は↔方向の丹念な磨きのあとU状の凹線、胴部は↘方向のやや粗い磨き。	↔方向のやや粗い磨き。	○色調：外—褐色、一部赤褐色 内—黒褐色 ○胎土：0.3mm前後の石英及び長石粒を含む。
94	B3-3区	A ₁ 16.6 A ₂ 16.0	B 14.5	13.0	D ₁ 1.6 D _{2a} 0.1 D _{2b} 2.1 D ₂ 2.2	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にU状の二条凹線、胴部への移行部に一条凹線、頸部への移行部と胴部への移行部に○状に凹点。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：暗褐色 ○胎土：0.3mm前後の石英及び長石粒等を含む。
95	B-34区	A ₁ 24.2 A ₂ 21.8	—	—	D ₁ 3.2	—	口縁部はやや粗い磨きののちU状の三条凹線、胴部は↘方向のやや粗い磨き。	↔方向のやや粗い磨き。	○外面胴部全面にカーボン付着。 ○内面口縁部と胴部に黒斑。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
96	A3-8区	A ₁ 29.0 A ₂ 28.6	—	—	D ₁ 1.4	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にJ状の二条凹線。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
97	A2-下層 10区	A ₁ 37.4 A ₂ 36.5	—	—	D ₁ 1.7	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にJ状の二条凹線。	↔方向の丹念な磨き。	○外面胴部に親指大の黒斑をみる。 ○色調：外一暗褐色 内一黒褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒を含む。
99	A2-16区 3下層	A ₁ 35.0 A ₂ 36.1	—	—	D ₁ 1.2	—	口縁部は↔方向の丹念な磨きののちJ状の凹線、胴部は↘方向の丹念な磨き。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
100	A3-24区	A ₁ 19.4 A ₂ 19.5	—	—	D ₁ 2.8	—	↔方向の丹念な磨きののちJ状の三条凹線、凹線間に○状凹点。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
101	A4-18区	A ₁ 22.6 A ₂ 22.0	20.8	21.6	D ₁ 2.2 D ₂ 2.8	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にJ状の二条凹線。	↔方向の丹念な磨き。	○口縁部から頸にかけてカーボン付着。 ○色調：外一黒褐色 内一灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
212	A3下層 2区	—	—	—	D ₁ 3.1	—	↔方向の丹念な磨きのあと三段に↘方向の羽状文、二、三段目に○状の凹点。	↔方向の丹念な磨き。	○外面口縁部に黒斑。 ○色調：明灰褐色 ○胎土：0.3mm前後の石英及び長石粒等を含む。
213	A5-2区	—	—	—	D ₁ 3.0	—	↔方向の丹念な磨きののちJ状の三状凹線、口縁部下半に○状凹点。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：外一明灰褐色 内一褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
217	B4-4区	—	—	—	D ₁ 3.0	—	↔方向の丹念な磨きののちJ状の三条凹線。	↔方向の丹念な磨きののち口縁部と胴部への移行部にJ状の沈線。	○色調：明灰褐色 ○胎土：0.3~0.5mmの石英及び長石粒等を含む。
218		—	—	—	D ₁ 1.8	—	↔方向の丹念な磨きののちJ状の凹線、胴部への移行部に○状の凹点。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：黒褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。

浅鉢A-3a

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
108	A3-7区	A ₁ 20.8 A ₂ 20.9	18.1	19.1	D ₁ 1.6 D _{2a} 1.6 D _{2b} 1.3 D ₂ 2.9	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にV状の二条凹線、胴部への移行部にV状界線、そのち頸部と胴部への移行部に○状の凹点。	↔方向の丹念な磨き。	○M状の山形突起を有する。 ○色調：黒褐色 ○胎土：0.3~0.5mmの石英及び長石粒等を含む。
109	A2区	A ₁ 26.2 A ₂ 26.2	20.2	—	D ₁ 2.1 D _{2a} 4.8	—	口縁部は↔方向のナデののちやや粗い磨き、頸部は↔方向のやや粗い磨きののち頸部への移行部に○状の凹点。	↔方向のやや粗い磨き、頸部への移行部にV状のえぐり。	○色調：灰褐色 ○胎土：0.5~0.8mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○M状の山形突起を有する。
110	A2-22区 3下層	A ₁ 36.3 A ₂ 36.3	32.7	33.4	D ₁ 1.5 D _{2a} 2.6 D _{2b} 0.9 D ₂ 3.5	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にV状の二条凹線、胴部への移行部にJ状の界線、そのちに頸部への移行部に○状の凹点。	↔方向の丹念な磨き。	○M状の山形突起を有する。 ○外面全体にカーボン点在。 ○色調：外-黄灰褐色 内-上半…明褐色 下半…暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
112	A2-3区 3層下面	A ₁ 17.2 A ₂ 17.2	14.5	15.4	(D ₁ 0.9) D _{2a} 1.4 D _{2b} 1.1 D ₂ 2.5	—	↔方向の丹念な磨きののちV状の二条凹線、胴部への移行部にV状の界線。	↔方向の丹念な磨き。	○山形突起を有する。 ○色調：黒褐色 ○胎土：0.3~0.5mmの石英及び長石粒等を含む。
118	A2-3層 下面	A ₁ 23.4 A ₂ 23.6	22.0	24.8	D ₁ 1.6 D ₂ 3.5 D ₂ 2.8 D ₂ 6.3	—	↔方向のかなり丹念な磨きののちV状の二条凹線。	↔方向のやや粗い磨き。	○∩状の山形突起を有する。 ○外面全体にカーボン点在。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.3~0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
119	B4-8区	A ₁ 30.6 A ₂ 32.7	28.1	—	D ₁ 3.2 D _{2a} 2.5	—	↔方向の丹念な磨きののちV状の二条凹線、さらにそのちに凹線間に○状凹点、下段凹線内に∧状凹点。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：暗褐色 ○胎土：0.5~0.8mm前後の石英及び長石、雲母粒等を含む。
219	A1-16区	—	—	—	D ₁ 1.7 D _{2a} 1.7 D _{2b} 1.1 D ₂ 2.8	—	↔方向のナデののち口縁部にV状の二条凹線。	↔方向のやや粗い磨き。	○全面に丹塗り。 ○V状の山形突起を有する。 ○色調：外-黒褐色 内-暗褐色 ○胎土：0.5~0.8mm前後の石英及び長石粒等を含む。

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
220	A2-16区	—	—	—	D ₁ 2.0 D _{2a} 0.0	—	口縁部から頸部最上部は↔方向のナデのちV状の二条凹線以下は↙方向のやや粗い磨き。	↔方向のやや粗い磨き。	○凸状の山形突起を有する。 ○外面全体にカーボン付着。 ○色調：外-暗褐色 内-淡褐色 ○胎土：0.3~0.5mmの石英及び長石粒等を含む。

浅鉢A-3b

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
102	A3-下層 7区	A ₁ 26.1 A ₂ 26.4	23.3	23.8	D ₁ 1.8 D _{2a} 0.8 D _{2b} 0.9 D ₂ 1.7	—	↔方向のやや粗い磨きのあとV状の二条凹線。	↔方向のやや粗い磨き。	○外面頸部と胴部にカーボン付着。 ○色調：外-暗褐色 内-暗褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石、金雲母粒等を含む。
103	A2-3層 下面一括	A ₁ 25.0 A ₂ 25.0	25.4	25.8	D ₁ 0.8 D _{2a} 1.4 D _{2b} 1.2 D ₂ 2.6	—	↔方向の丹念な磨きのち口縁部にV状の二条凹線、胴部への移行部にV状の凹線状の界線。	↔方向の丹念な磨き。	○内面頸部に小指大の凹点。 ○色調：外-黒褐色 内-暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
104	A1-下層 8区	A ₁ 26.8 A ₂ 27.2	23.5	—	D ₁ 1.4 D _{2a} 0.5	—	↔方向の丹念な磨きのちV状の二条凹線。器壁荒れ。	↔方向の丹念な磨き。器壁荒れ。	○外面頸部にカーボン付着。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
105	A1-13区	A ₁ 31.4 A ₂ 31.4	27.6	28.1	D ₁ 0.9 D _{2a} 0.9 D _{2b} 0.8 D ₂ 1.7	—	↔方向のやや粗い磨き。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：外-暗褐色 内-淡褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
106	A1-3層 下面	A ₁ 35.2 A ₂ 35.5	30.9	32.0	D ₁ 1.2 D _{2a} -0.3 D _{2b} 1.1 D ₂ 00.8	—	↔方向のやや粗い磨きのち口縁部にV状の二条凹線。	↔方向のやや粗い磨き。	○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石、金雲母粒等を含む。
107	A2-16区 3下層	A ₁ 15.6 A ₂ 16.4	12.1	13.3	D ₁ 1.4 D _{2a} 1.7 D _{2b} 1.5 D ₂ 3.2	—	↔方向のナデのち口縁部にV状の二条凹線、胴部への移行部にV状の界線。	↔方向のナデ。	○外面口縁部と頸部に小指大の黒斑。 ○胎土：0.5~0.8mmの石英粒等を含む。

浅鉢A-3c

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
113	A2-下層 8区	A ₁ 20.8 A ₂ 20.6	18.3	17.6	D ₁ 1.6 D _{2a} 0.8 D _{2b} 2.0 D ₂ 2.8	—	↔方向の丹念な磨きのち口縁部にV状の二条沈線、胴部への移行部にV状の界線。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○∧状の山形突起を有する。

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
114	A2-6区	A ₁ 24.2 A ₂ 24.1	22.1	24.2	D ₁ 1.7 D _{2a} 1.4 D _{2b} 1.6 D ₂ 3.0	—	↔方向のやや粗い磨きののち口縁部にJ状の一条沈線、頸部最下部にJ状の界線、頸部及び胴部への移行部に○状の凹点。	↔方向のやや粗い磨き。	○M状の山形突起を有する。 ○頸部にカーボン付着。 ○色調：外—明褐色 内—淡灰褐色
115		(A ₁ 14.0) A ₂ 14.2	13.4	(14.6)	(D ₁ 0.8) D _{2a} 0.4 (D _{2b} 1.5)	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にJ状の一条沈線、胴部への移行部にJ状の界線。	↔方向の丹念な磨き。	○山形突起を有する。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.3mm前後の石英及び長石粒等を含む。
116	A2-6区	A ₁ 14.8 A ₂ 14.8	13.9	15.2	D ₁ 0.9 D _{2a} 0.4 D _{2b} 3.1 D ₂ 3.5	—	↔方向のやや粗い磨きののち口縁部にJ状の一条沈線、胴部への移行部にV状の界線。	↔方向の粗い磨きののち頸部及び胴部への移行部にV状のえぐり。	○色調：外—灰褐色 内—淡褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○M状の山形突起を有する。
117	A1-17区 下層	A ₁ 19.4 A ₂ 19.2	17.7	18.8	D ₁ 0.7 D _{2a} 0.7 D _{2b} 1.0 D ₂ 1.7	—	↔方向の丹念な磨きののちV状の一条沈線、胴部への移行部にV状の界線。	↔方向の丹念な磨き。	○Λ状の山形突起を有する。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
134	A2-9区 3下層	A ₁ 37.7 A ₂ 37.0	34.3	34.7	D ₁ 1.0 D _{2a} 0.5 D _{2b} 0.6 D ₂ 1.1	—	↔方向のかなり丹念な磨きののち口縁部にV状の沈線。	↔方向のかなり丹念な磨き。	○外面全体にカーボン付着。 ○内面頸部に親指大の黒斑。 ○色調：外—暗褐色 内—淡褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石粒等を含む。
218	A2-2区	—	—	—	D ₁ 1.3 D _{2a} 0.4	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にJ状の二条沈線。	↔方向の丹念な磨き。	○内外面器壁荒れ。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5~0.8mm前後の石英及び長石粒等を含む。

浅鉢3d類

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
121	A1区	A ₁ 20.8 A ₂ 21.4	18.9	19.7	D ₁ 1.9 D _{2a} 2.5 D _{2b} 1.5 D ₂ 4.0	—	↔方向のナデのあと口縁部にJ状の四条沈線。	↔方向の粗い磨き。	○外面全体にカーボン点着。 ○色調：明灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
122	A2-19区 2下層	A ₁ 34.6 A ₂ 33.8	31.4	32.0	D ₁ 0.9 D _{2a} 0.6 D _{2b} 0.6 D ₂ 1.2	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にV状の一条沈線。	↔方向の丹念な磨き。	○外面胴部下半にカーボン付着。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○口縁部に丹塗りの痕跡。

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
123	A2-3層 下面	A ₁ 40.0 A ₂ 34.0	35.2	35.4	D ₁ 1.5 D _{2a} 1.9 D _{2b} 0.8 D ₂ 2.7	—	↔方向のかなり丹念な磨きののち口縁部にU状の二条沈線、胴部への移行部にV状の界線を有する。	↔方向のかなり丹念な磨き。	○色調：外—黒褐色 内—褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石粒等を含む。
124		A ₁ 39.6 A ₂ 39.0	34.8	35.6	D ₁ 1.0 D _{2a} 1.6 D _{2b} 1.0 D ₂ 2.6	—	口縁部から胴部上半にかけては↔方向のかなり丹念な磨きののち口縁部にV状の二条沈線、胴部下半は↑方向のかなり丹念な磨き。	↔方向の丹念な磨き。	○外面口縁部と胴部に黒斑。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
126	A2-6区	A ₁ 44.0 A ₂ 43.7	22.5	23.4	D ₁ 1.0 D _{2a} 3.5 D _{2b} 1.3 D ₂ 4.8	—	↔方向の丹念な磨きののちV状の沈線。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：外—黒灰褐色 内—黒褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
127	A2-一下層 9区	A ₁ 11.0 A ₂ 11.2	19.3	—	D ₁ 1.1 D _{2a} 0.4	—	↔方向のやや粗い磨きののち口縁部にV状の二条沈線。	口縁部から頸部にかけて↔方向のやや粗い磨き、以下は↖方向の粗い磨き。	○外面口縁部に小指の大黒斑。 ○色調：外—暗褐色 内—黒褐色
128		A ₁ 28.6 A ₂ 28.6	23.2	23.8	D ₁ 0.7 D _{2a} 1.4 D _{2b} 1.1 D ₂ 2.5	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にU状の一条凹線、胴部への移行部にV状の界線。	↔方向の丹念な磨き。	○内面口縁部から頸にかけて黒斑。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
129	A2-2,3 層下	A ₁ 29.6 A ₂ 29.0	24.7	25.3	D ₁ 1.6 D _{2a} 1.2 D _{2b} 1.4 D ₂ 2.6	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にV状の二条沈線、胴部への移行部にV状の界線。	↔方向の丹念な磨き。	○外面頸部にカーボン。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
221	F4-14,19 区土城內	—	—	—	D ₁ 0.4 D _{2a} 0.8 D _{2b} 1.0 D ₂ 1.8	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にU状の一条沈線。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：外—黒褐色 内—暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
222	A2-22区 1下層	—	—	—	D ₁ 1.4	—	↔方向のやや粗い磨きののちV状の二条沈線。	↔方向のやや粗い磨き。	○山形突起を有する。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○A-3c類
226	A5区下層 一括	—	—	—	D ₁ 0.8	—	↔方向の粗い磨き。	↔方向の粗い磨き。	○外面口縁部に親指大の黒斑。 ○色調：外—暗褐色 内—褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。

浅鉢3e類

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
125	A3下層 12区	43.0	41.8	41.8	D ₁ 0.8 D ₂ 0.7	—	口縁部から頸部は→方向のナデ、胴部は→方向のナデのあと←方向のやや粗い磨き。	←→方向のやや粗い磨き。	○色調：黒褐色 ○胎土：0.3~0.5mmの石英及び長石粒等を含む。
130		17.4	16.1	16.3	D ₁ 0.7 D ₂ 0.4	—	←→方向のやや粗い磨き。	←→方向の丹念な磨き。	○色調：外一暗褐色 内一黒褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
131	B1-4区 1下層	28.0	26.2	26.2	D ₁ 0.5 D ₂ 1.4	—	←→方向の丹念な磨き。	←→方向の丹念な磨き。	○色調：黒褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
132	A1-14区	28.1	26.5	26.7	D ₁ 0.8 D ₂ 0.9	—	←→方向の丹念な磨き。	←→方向の丹念な磨き。	○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
133	A1-8区	31.8	30.5	30.1	D ₁ 0.4 D ₂ 1.2	—	←→方向のかなり丹念な磨きののち肩部への移行部にV状の沈線。	←→方向のかなり丹念な磨き。	○外面全体にカーボン点在。 ○色調：外一黒褐色 内一暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
139	A3-11区	18.6	17.4	18.0	D ₁ 0.9	—	←→方向のかなり丹念な磨き。	口唇直下から胴部最上部にかけて←→方向のかなり丹念な磨き。以下は←→方向のやや粗い磨き。	○外面胴部にカーボン付着。 ○色調：外一暗褐色 内一黒褐色 ○内面口唇部直下に丹塗り痕。
140	A3-下層 12区	25.8	25.3	25.5	D ₁ 0.8 D ₂ 0.4	—	←→方向の丹念な磨き。	←→方向の丹念な磨きののち頸部にU状の沈線。	○色調：黒褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
141	B1-2層	26.2	24.8	25.0	D ₁ 0.8 D ₂ 0.9	—	←→方向の丹念な磨き。	頸部から胴部最上部にかけて←→方向の丹念な磨き、以下は×方向の丹念な磨き。	○色調：外一暗褐色 内一黒褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
223	G3-2区 (2)	—	—	—	D ₁ 0.5 D ₂ 0.4	—	器壁荒れて観察不可能。	器壁荒れて観察不可能。	○色調：明褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
224		—	—	—	D ₁ 0.6 D _{2a} 0.3 D _{2b} 0.9 D ₂ 1.2	—	←→方向の丹念な磨きののち口縁部にV状の一条凹線。	←→方向の丹念な磨き。	○色調：黒褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
225	G3,4区	—	—	—	D ₁ 1.0	—	頸部は←→方向のナデ、胴部は←→方向のやや粗い磨き。	頸部から胴部最上部は←→方向のやや粗い磨き、以下は\方向のやや粗い磨き。	○色調：外一暗褐色 内一黒褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。

浅鉢A-4類

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
142	A2区	A ₁ 26.0 A ₂ 26.0	22.9	23.4	D ₁ 0.8 D _{2a} 2.2 D _{2b} 3.5 D ₂ 5.7	—	↔方向のナデののち↔方向のやや粗い磨きさらにそののち口縁部にV状の二条沈線。	↔方向のナデののち↔方向のやや粗い磨き。	○色調：暗灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
143	A2-9区4下層	A ₁ 24.8 A ₂ 24.0	22.7	—	D ₁ 1.35 D _{2a} 0.9	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部に一条凹線、さらにそののちに口唇部に凹点。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
144	A1-3層下	A ₁ 26.5 A ₂ 25.3	22.8	28.0	(D ₁ 1.3) D _{2a} 0.5 D _{2b} 5.8 D ₂ 6.3	—	↔方向の丹念な磨きののちU状の二条沈線。	↔方向のかなり丹念な磨きののち頸部への移行部にV状のえぐり。	○山形突起を有する。 ○色調：外一暗褐色 内一暗灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
145	B1-4区4下層	A ₁ 33.0 A ₂ 32.0	31.2	31.4	D ₁ 1.05 D _{2a} 0.1 D _{2b} 4.7 D ₂ 4.8	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にV状の一条沈線、胴部への移行部にU状の界線、さらにそののちに口縁部に○状の凹点。	↔方向の丹念な磨き。	○外面頸部にカーボン附着。 ○色調：外一暗褐色 内一黒褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
146	A2-18区	A ₁ 33.2 A ₂ 33.0	32.4	—	D ₁ 1.45 D _{2a} 0.25	—	↔方向のやや粗い磨きののち口縁部にV状の一条沈線。	↔方向の粗い磨き。	○外面全体にカーボン附着。 ○内面口縁部に親指大の黒斑。 ○色調：外一暗褐色 内一褐色
147		25.5	22.9	—	D _{2a} 1.6	—	↔方向の丹念な磨きののち口唇部直下にV状の沈線。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：黒褐色 ○胎土：0.3mm前後の石英及び長石粒等を含む。

浅鉢B-1類

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
85	A3下層9区	28.3	28.1	28.7	D ₁ 0.7 D ₂ 1.65	—	↔方向のやや粗い磨き。	↔方向の粗い磨き。	○外面全体にカーボン附着。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
86	B2-2区	29.0	28.3	29.0	D ₁ 2.2	—	↔方向の丹念な磨き。	↔方向のかなり丹念な磨き。	○外面全体にカーボン点。 ○山形突起を有する。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。

浅鉢B-2類

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
87	B2-下層 11区(1)	29.2	25.8	—	D ₁ 3.9	—	↔方向の丹念な磨きののち肩部にU状の二条沈線、沈線間に↙方向の羽状文。	↔方向の丹念な磨きののち口唇部直下にU状の一条沈線。	○頸部にわずかにカーボン附着。 ○外面口唇部直下に黒斑。 ○色調：黒褐色 ○胎土：0.5~0.8mm前後の石英及び長石粒、金雲母粒等を含む。
88	A5-下層 一括	24.3	21.2	21.9	D ₁ 3.8 D ₂ 1.2 D ₃ 3.6	—	頸部から肩部にかけては↔方向のかなり丹念な磨きののち肩部にU状の二条沈線。胴部は器壁が荒れ観察不可能。	↔方向のかなり丹念な磨き。	○外面肩部の一部にカーボン附着。 ○色調：外一褐色 内一暗褐色 ○胎土：0.3mm前後の石英及び長石粒等を含む。
89	A4-下層 一括	28.3	25.5	25.7	D ₁ 3.3 D ₂ 1.4	—	↔方向の丹念な磨きののち肩部にV状の二条凹線、そののちに凹線間に↘方向の羽状文、胴部に↘方向の羽状文。	↔方向の丹念な磨きののち口唇部直下にU状の一条沈線。	○外面全体にカーボン点在。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石粒等を含む。
90	B2-21区 (4)	24.2	23.4	23.8	D ₁ 0.35 D ₂ 1.65	—	↔方向のかなり丹念な磨きののち肩部にV状の三条沈線。	↔方向の丹念な磨き。	○外面胴部にカーボン附着。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
91	A5-10区	17.6	15.6	16.5	D ₁ 4.4 D ₂ 0.6	—	↔方向の丹念な磨きののち肩部にU状の二条沈線。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
150	A1-下層 8区	13.9	8.6	9.5	D ₁ 3.6 D ₂ 0.3 D ₃ 0.7	8.7	↔方向のナデののち↔方向のやや粗い磨き。	↔方向のナデ。	○外面頸部に小指大の黒斑。 ○色調：明灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
209	B2-4区	—	—	—	D ₁ 1.3 D ₂ 1.4	—	↔方向の丹念な磨きののち肩部にU状の三条沈線。	↔方向の丹念な磨き。	○肩部にカーボン点在。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
210	B2-下層 3区(3)	—	—	—	D ₁ 0.9	—	↔方向の丹念な磨きののち肩部に凹線、凹線間に↘方向の羽状文。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：外一淡褐色 内一明灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
211	A4-19区	—	—	—	D ₁ 1.1 D ₂ 1.5	—	↔方向の丹念な磨きののちU状の三条凹線、さらにそののちに上段と下段凹線に↘方向の羽状文。	↔方向の丹念な磨きののち口唇部直下にU状の一条沈線。	○外面全体にカーボン附着。 ○色調：外一暗褐色 内一褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
231	B3-15区	—	—	—	D ₁ 5.0 D ₂ 1.1	—	↔方向の丹念な磨きののち肩部にV状の二条凹線。	↔方向のやや粗い磨きののち口唇直下にJ状の一条沈線。	○色調：外—黄灰褐色 内—黒褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。

浅鉢C類

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
98	A4-15区	13.4	—	—	—	—	口唇下約1cmは↔方向のナデののち↔方向の磨き。以下は↔方向のナデののち↗方向のやや粗い磨き。	↔↗ 方向の丹念な磨き。	○外面、口唇直下に小指大の黒斑。 ○色調：外—灰褐色 内—暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒を含む。
228	A3,4区	—	—	—	—	—	↔方向のやや粗い磨き。	↔↗ 方向のやや粗い磨きののち口唇下約0.5cmの部分にV状の一条沈線。	○色調：外—灰褐色 内—暗褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石粒等を含む。
229	A3-2区	—	—	—	—	—	↔方向のナデ。	↔↗ 方向の粗い磨き。	○色調：外—褐色 内—暗褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石粒等を含む。

浅鉢D類

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
135	A4区	9.4	7.9	8.2	D ₁ 2.0	—	↔方向のかなり丹念な磨きののち胴部への移行部にV状の一条沈線。	↔↗ 方向の丹念な磨き。	○色調：暗褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石、金雲母粒等を含む。
136	A3一下24区	15.5	12.7	13.4	D ₁ 3.0 D ₂ 1.4	—	頸部は↔方向のやや粗い磨きののち胴部への移行部にV状の界線、胴部は↗方向のやや粗い磨き。	↔↗ 方向の粗い磨き。	○色調：灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
137	A4一下層一括	14.0	12.2	13.2	D ₁ 1.75 D ₂ 0.4	凸帯幅—1.0	↔方向のやや粗い磨き。頸部から胴部への移行部にJ状の凸帯。	↔↗ 方向の丹念な磨き。	○色調：外—褐色 内—暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
148	B2-11区	29.4	27.3	27.8	D ₁ 2.4 D ₂ 1.1	—	↔方向のやや粗い磨き。	↔↗ 方向のやや粗い磨き。	○頸部から肩部にかけてカーボン附着。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。

図版 番号	出土地 A	法 量 (cm)					技 法		備 考
		BA	CB	DC	ED	E	外 面	内 面	
227		—	—	—	D ₁ 4.2 D ₂ 2.5	—	↔方向のかなり丹念な磨き。	↔方向のかなり丹念な磨き。	○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○頸部から肩部にかけてカーボン付着。
232		—	—	—	D ₁ 2.8	—	頸部は↗方向の二枚貝条痕ののち↔方向のナデ、胴部は→方向の二枚貝条痕ののち↘方向の削り。	↔方向の二枚貝条痕ののち↔方向のナデ。	○色調：外一褐色 内一黒灰色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石粒等を含む。

浅鉢E類

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
235	F3,4区 (2)	—	—	—	D ₁ 2.6 D ₂ 0.5	—	↔方向の丹念な磨き。	↔方向の丹念な磨きののち頸部にJ状の一条沈線。	○外面胴部に黒斑。 ○色調：灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○外来土器か？

鉢

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
111	E3-23区	A ₁ 28.2 A ₂ 27.5	25.6	28.0	D ₁ 1.8 D _{2a} 0.6 D _{2b} 6.5 D _{2c} 7.1	—	↔方向のやや粗い磨きののち口縁部にV状の三条沈線。	↔方向のやや粗い磨きののち頸部への移行部にV状のえぐり。	○外面頸部にカーボン点在。 ○色調：明灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
120	A2-8区	A ₁ 41.0 A ₂ 39.0	38.0	—	D ₁ 3.4 D _{2a} 0.3	—	口縁部は→方向の二枚貝条痕以下は↔方向のナデ。	↔方向のナデののち↔方向の粗い磨き。	○外面全体にカーボン付着。 ○色調：外一暗褐色 内一褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石粒等を含む。

注口土器

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
138	A2一下層 6区	25.5	25.9	(30.0)	D ₁ 1.1 D ₂ 1.9	—	↔方向の磨き。器壁荒れで観察がむずかしい。	↔方向の粗い磨き。	○外面口唇直下に小指大の黒斑。 ○色調：外一褐色 内一暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
151		11.9	10.9	C ₁ 13.3	D ₁ 1.3 D ₂ a 1.0 D ₂ b 1.9 D ₂ 2.9	—	↔ 方向の丹念な磨きののち口縁部にU状の二条凹線、頸部下半にU状の二条凹線。凹線間にく方向の羽状文及びO状の凹点。	↔ 方向の丹念な磨き。	○ U 状の把手を有する。 ○ 色調：外—褐色 内—暗褐色 ○ 胎土：0.3mm前後の石英及び長石粒等を含む。
152		10.6	10.7	C ₁ 13.9 C ₂ 13.2	D ₁ 5.7 D ₂ 1.8 D ₃ a 1.1	—	↔ 方向の丹念な磨きののちU状の数条凹線、さらに凹線内に羽状文及び凹点。	↔ 方向のやや粗い磨き。	○ 色調：暗褐色 ○ 胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
153	A2-25区 1下層	(12.3) A ₁ 5.4	13.3	C ₁ 20.5 C ₂ 20.2	D ₁ 2.4 D ₂ 2.9 D ₃ a 2.0 D' 6.8	—	↔ 方向の丹念な磨きののち肩部から胸部上半にかけてU状の六条沈線、沈線間に↗ 方向の羽状文、胸部上半に○状及び○状の凹点、凹点外に↘ 方向の羽状文。	↗ 方向の丹念な磨き。	○ 外面肩部に親指大の黒斑。 ○ 色調：暗褐色 ○ 胎土：0.3mm前後の石英及び長石粒等を含む。
154		—	—	—	—	—	↻ 方向のやや粗い磨き。	○ 削り。	○ 色調：暗褐色 ○ 胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
156	C-1	A' 3.1	—	—	D' 8.5	—	↗ 方向の丹念な磨き。側面に刻目文様。	—	○ 外面一部にカーボン附着。 ○ 胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。

脚台A類

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
157	B1-下層 8区(4)	—	—	—	3.2	3.8	凸帯の上部は↔ 方向のやや粗い磨き。以下は↑ 方向のやや粗い磨き。	丹念な磨き。	○ 脚中央に U 状の凸帯を有する。 ○ 外面下半に小指大の黒斑。 ○ 色調：明灰褐色 ○ 胎土：0.5mm前後の石英及び長石、金雲母粒等を含む。
159	B3-P2	—	—	—	6.5	4.5	底面上約1cmは↔ 方向のやや粗い磨き。その上は↗ 方向のやや粗い磨きののちU状の四条凹線、凹線内に↘ 方向の羽状文、中央部に○状の穿孔。	↔ 方向のナデ。	○ 底面上約1.5cmにわたって小指大の黒斑。 ○ 色調：褐色 ○ 胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
160	A5-5区	—	—	—	3.5	3.6	底面上約1cmは ←→方向の丹念 な磨き。以上は ↑方向の丹念な 磨きののち○状 の穿孔。	←→方向のナデ。	○色調：黒褐色 ○胎土：0.3mm前後 の石英及び長石粒 等を含む。

脚台B類

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
158	B5-4区	—	—	—	6.7	3.1	↑方向のやや粗 い磨きののち底 面上約1.2cmに 四ヶ所の○状穿 孔。	—	○色調：褐色 ○胎土：0.5mm前後 の石英及び長石粒 等を含む。

その他

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
149	A3-21区 下層	12.1	—	—	—	—	←→方向のかなり 丹念な磨きのの ちU状の三条 沈線、沈線外に ←→方向の羽状 文。	←→方向のやや 粗い磨き。	○色調：外—明灰褐 色 内—暗褐色 ○胎土：0.5mm前後 の石英及び長石粒 等を含む。 ○注口土器の可能性？
155		—	—	—	—	—	↑方向のかなり 丹念な磨きのの ちV状の二条沈 線、沈線間に↗ 方向の羽状文。	—	○親指大の黒斑。 ○色調：明灰褐色 ○胎土：0.5mm前後 の石英及び長石粒 等を含む。 ○把手か？
200	A3-3区 下層一括	—	—	—	—	—	←→方向の丹念 な磨き。	←→方向の丹念 な磨きののちに U状の一条沈線。	○外面口唇下約1.5 cmにU状凸帯。 ○色調：外—明灰褐 色 内—暗褐色 ○器種不明
230	A3区— 下層一括	—	—	—	D ₁ 2.8	—	↑方向の丹念な 磨きののち口縁 部にU状の二条 凹線。	←→方向の丹念 な磨き。	○色調：明灰褐色 ○胎土：0.5mm前後 の石英及び長石粒 等を含む。 ○浅鉢か？
234	A1-22区	—	—	—	—	—	←→方向のかなり 丹念な磨きのの ちV状の三条 沈線。	←→方向のナデ。	○色調：明灰褐色 ○胎土：0.5mm前後 の石英及び長石粒 等を含む。 ○鉢か？

1号住居址及びピット内遺物

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
242	F2区 ピットNo1	—	—	—	D ₁ 1.9	—	↔方向の丹念な磨きののちし状の二条沈線。	↔方向のかなり丹念な磨き。	○色調：黒褐色 ○胎土：0.3~0.5mmの石英及び長石粒等を含む。 ○深鉢B-1類。
243	F2区 ピットNo1	—	—	—	D ₁ 1.4	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にV状の二条凹線及び頸部への移行部に○状の凹点。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：外-黒灰褐色 内-灰褐色 ○胎土：0.3mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○浅鉢A-2類。
244	F2区 ピットNo2	—	—	—	D ₁ 0.75	—	↔方向の丹念な磨き。器壁荒れ。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：外-明褐色 内-明赤褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○深鉢。
245	F2区 ピットNo3	—	—	—	D ₁ 2.0	—	↔方向のかなり丹念な磨き。	↔方向のかなり丹念な磨き。	○外面全体にカーボン付着。 ○色調：外-暗褐色 内-黒褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○深鉢C-2類。
246	F2区 ピットNo3	—	—	—	D ₁ 0.9 D _{2a} 2.0 D _{2b} 0.9 D ₂ 2.9	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にし状の一条沈線。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：黒褐色 ○胎土：0.3~0.5mmの石英及び長石粒等を含む。 ○浅鉢A-3d
247	F2区 ピットNo4	—	—	—	D ₁ 0.9 D _{2a} 2.7 D _{2b} 0.5 D ₂ 3.2	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にV状の一条凹線。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：黒褐色 ○胎土：0.3~0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
248	F2区 住フク土	—	—	—	D ₁ 3.15	—	↔方向の丹念な磨きののちし状の三条凹線。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○浅鉢A-2類。
249	F2区 住フク土	—	—	—	D ₁ 3.5	—	↔方向の丹念な磨きののちし状の三条凹線、さらに上段及び下段の凹線内に、方向の羽状文。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：明赤褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○浅鉢A-2類。
250	F2区 住フク土	—	—	—	D ₁ 2.0	—	↔方向の粗い磨き。	↔方向の丹念な磨き。	○外面全体にカーボン付着。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○深鉢C-4類。

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
251	F2区 住フク土	—	—	—	D ₁ 0.9 D ₂ a2.3	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にV状の一条凹線。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：灰褐色 ○胎土：0.3~0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○浅鉢A-3d類。
254	F-2区 住フク土	—	—	—	D ₁ 0.7 D ₂ 0.6	—	↔方向の丹念な磨き。	↔方向の丹念な磨き。	○外面一部にカーボン付着。 ○色調：外-灰褐色 内-黒褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。
255	F2区 住フク土	20.5	17.5	19.9	D ₁ 4.15 D ₂ 2.7	—	↔方向の丹念な磨きののち胴部への移行部にV状の界線。	↔方向のかなり丹念な磨き。	○外面全体にカーボン点在。 ○色調：外-灰褐色 内-暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石、金雲母粒等を含む。 ○深鉢C-2類。
256	F4区 ピットNo6	A ₁ 31.8 A ₂ 31.1	29.5	—	D ₁ 3.3 D ₂ a2.7	—	口縁部から頸部にかけて↔方向のナデののち↔方向の丹念な磨き。以下は↘方向の粗い磨きののち口縁部にU状の二条沈線。	↔方向のやや粗い磨き。	○外面全体にカーボン付着。 ○色調：外-暗褐色 内-褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○深鉢B-3類。
252	F4区 ピットNo6	—	—	—	D ₁ 0.7 D ₂ a2.7	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にU状の一条沈線。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：黒褐色 ○胎土：0.3~0.5mmの石英及び長石粒等を含む。 ○浅鉢A-3d類。
256	F4区 ピットNo6	—	—	—	D ₁ 3.4 D ₂ a1.3	—	口縁部は↔方向の二枚貝条痕。以下は↔方向のやや粗い磨き。	↔方向のナデののち↔方向のやや粗い磨き。	○色調：外-黒褐色 内-黄灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石、金雲母粒等を含む。 ○深鉢B-4類。

2号住居址内ピット遺物

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
236	B区ピット No11	—	—	—	D ₁ 0.9 D ₂ a0.5 D ₂ b0.6	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にV状の一条凹線。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：黒褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○浅鉢A-3d。
237	B区ピット No10	—	—	—	D ₁ 3.15 D ₂ a0.8	—	↔方向のナデののちV状の三条沈線。	口縁部は↔方向のナデ、頸部は↔方向のやや粗い磨き。	○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○深鉢B-3類。

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
238	B区ピット No10	—	—	—	D ₁ 0.8 D _{2a} 2.25.	—	↔方向の丹念な磨きののちU状の一条沈線。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：灰褐色 ○胎土：0.3~0.5mm 前後の石英及び長石粒等を含む。 ○浅鉢A-3d類。
239	B区ピット No11	—	—	—	D ₁ 0.7	—	↔方向のナデののち↘方向の粗い磨き。	↔方向のやや粗い磨き。	○色調：外-灰褐色 内-黄灰褐色 ○胎土：0.3~0.5mm の石英及び長石、 金雲母粒等を含む。 ○深鉢C-2類。
240	B区ピット No11	—	—	—	D ₁ 4.1 D _{2a} 0.4	—	↔方向の二枚貝条痕ののち↔方向のナデ。	↔方向の二枚貝条痕ののち↔方向のナデ。	○色調：外-淡褐色 内-灰褐色 ○胎土：0.5~0.8mm の石英及び長石粒等を含む。 ○深鉢B-4類。
291	B区ピット No11	—	—	—	D ₁ 4.75	—	口縁部は↔方向の二枚貝条痕、 以下はナデ。	↔方向の粗い磨き。	○色調：淡褐色 ○胎土：0.5mm前後 の石英及び長石粒等を含む。 ○深鉢B-4類。

溝-1遺物

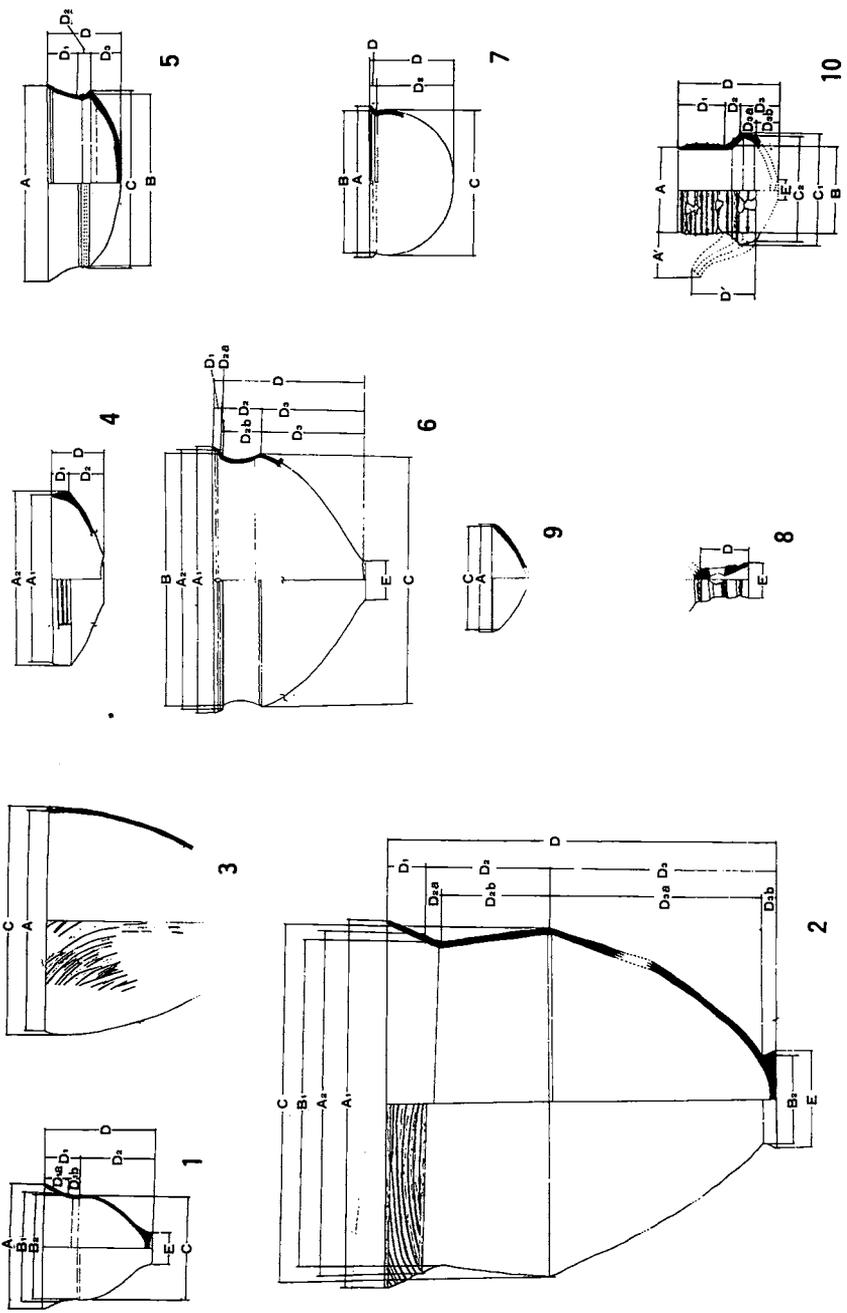
図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
250	A1区	A ₁ 25.0 A ₂ 25.3	23.0	—	D ₁ 2.0 D _{2a} 0.3	—	↔方向のやや粗い磨きののち口縁部にV状の三条沈線。	↔方向のかなり丹念な磨き。	○外面頸部最上部にカーボン付着。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後 の石英及び長石、 金雲母粒等を含む。 ○深鉢B-3類。
259	A1区	A ₁ 29.8 A ₂ 30.6	27.1	—	D ₁ 2.1 D ₂ 6.4	—	↔方向の粗い磨きののちV状の二条凹線。	↔方向のやや粗い磨き。	○外面頸部全面にカーボン付着。 ○色調：外-暗褐色 内-黄灰褐色 ○胎土：0.5~0.8mm の石英及び長石粒等を含む。 ○深鉢B-2類。
262	B1区	A ₁ 25.0 A ₂ 24.6	10.8	10.8	D ₁ 0.8 D _{2a} 0.8 D _{2b} 0.8	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にV状の一条沈線及び胴部への移行部にV状の界線。	↔方向の丹念な磨き。	○外面胴部最上部にわずかにカーボン付着。 ○内面頸部に親指大の黒斑。 ○色調：黒褐色 ○胎土：0.3~0.5mm の石英及び長石粒等を含む。 ○浅鉢B-3d類。

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
263	A1区	A ₁ 28.8 A ₂ 29.2	24.8	—	D ₁ 1.3 D _{2a} 1.3	—	↔方向のかなり丹念な磨きののちV状の二条沈線及び○状凹点。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：黒灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○浅鉢B-3c類。
264	A1区	A ₁ 11.4 A ₂ 11.2	10.3	10.5	D ₁ 0.3 D _{2a} 0.5 D _{2b} 0.6	—	↔方向の丹念な磨きののち口縁部にJ状の一条沈線及び胸部への移行部にV状の界線。	↔方向の丹念な磨き。	○外面胸部に親指大の黒斑。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.3mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○浅鉢B-3d類。
265	B1区	A ₁ 14.5 A ₂ 15.4	14.8	19.6	D ₁ 0.8 D _{2a} 2.0 D _{2b} 2.0 D ₂ 4.0	—	↔方向のやや粗い磨きののち口縁部にV状の二条沈線及び胸部移行部にV状の界線。	↔方向の粗い磨き。	○色調：外—上半—淡褐色 下半—暗褐色 内—黄灰褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石粒等を含む。 ○深鉢B-3類。
266	B1区	12.6	—	—	—	—	↖方向のやや粗い磨きののち口唇下約1.0cmの部分にV状のえぐり。	↔方向の粗い磨き。	○外面胸部に親指大の黒斑。 ○色調：黄灰褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石粒等を含む。 ○深鉢C-5類。
267	A1区	A ₁ 12.8 A ₂ 12.6	—	—	D ₁ 1.1	—	↔方向のやや粗い磨きののち口縁部にJ状の二条沈線。	↔方向のやや粗い磨き。	○色調：黄灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○浅鉢C-3類。
268	B1区	15.3	12.8	12.8	D ₁ 1.9 D ₂ 0.9	—	頸部は↔方向のやや粗い磨き、胸部は↖方向の粗い磨き。	頸部は↔方向の丹念な磨き、胸部は↖方向の粗い磨き。	○内面頸部に親指大の黒斑。 ○色調：灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○浅鉢D類。
271	B1区	—	—	—	D ₁ 1.4 D _{2a} 1.2 D _{2b} 1.1	—	↔方向のやや粗い磨きののち口縁部にV状の一条沈線。	↔方向のやや粗い磨き。	○色調：黒褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石粒等を含む。 ○浅鉢B-3C。
272	A1区	—	—	—	D ₁ 1.2 D _{2a} 1.1	—	↔方向の丹念な磨きののちV状の二条沈線（ただし上段沈線は磨き以前にほどこしたもの）及び口唇及び頸部に○状の凹点。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：黄灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○浅鉢B-3C類。
273	B1区	—	—	—	D ₁ 0.85 D ₂ 0.7	—	↔方向の丹念な磨き。	↔方向の丹念な磨き。	○色調：暗褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○浅鉢B-3l。
276	B1区	—	—	—	—	—	器壁荒れで観察不可能。	↔方向の粗い磨き。	○色調：黄灰褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石粒等を含む。 ○深鉢C-2類。

図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
277	B1区	—	—	—	D ₁ 1.15 D _{2a} 1.7	—	↔方向の丹念な磨きののちV状の二条凹線。	↔方向の丹念な磨き。	○外面口縁部に小指大の黒斑。 ○色調：暗褐色 ○胎土：0.3~0.5mmの石英及び長石粒等を含む。 ○浅鉢A-3b。
278	A-1区	—	—	—	D ₁ 1.8 D _{2a} 1.5	—	↔方向のナデのあと頸部下半は↘方向の粗い磨き。	↔方向のナデ。	○外面口縁部に小指大の黒斑。 ○色調：外一暗褐色 内一淡褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○浅鉢A-3d類。
279	A1区	—	—	—	D ₁ 2.05	—	↔方向の粗い磨きののちU状の二条凹線。	↔方向のやや粗い磨き。	○外面口縁部に幅約3cmの黒斑。 ○頸部全体にカーボン附着。 ○色調：外一暗褐色 内一黄灰褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石粒等を含む。 ○深鉢B-2類。
280	B1区	—	—	—	D ₁ 2.5	—	器壁が荒れており観察不可能。	器壁が荒れており観察不可能。	○色調：黄灰褐色 ○胎土：0.5~0.8mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○深鉢B-3類。
281	B1区	—	—	—	D ₁ 2.8	—	↔方向のナデののちV状の三条沈線。	↔方向のナデ。	○色調：外一暗褐色 内一黄灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○深鉢B-4類。
274	B1区	—	—	—	D ₁ 0.8 D ₂ 0.6	—	↔方向の丹念な磨き。	↔方向の丹念な磨きののち口唇部直下に一条沈線。	○外面全体にカーボン附着。 ○色調：灰褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○浅鉢A-3e類。
275	B1区	—	—	—	D ₁ 0.7 D _{2a} 0.2 D _{2b} 0.8	—	↔方向の丹念な磨きののちV状の一条沈線。	↔方向の丹念な磨き。	○口縁部沈線内に丹塗りの痕跡。 ○色調：黒褐色 ○胎土：0.5mm前後の石英及び長石粒等を含む。 ○浅鉢A-3d類。

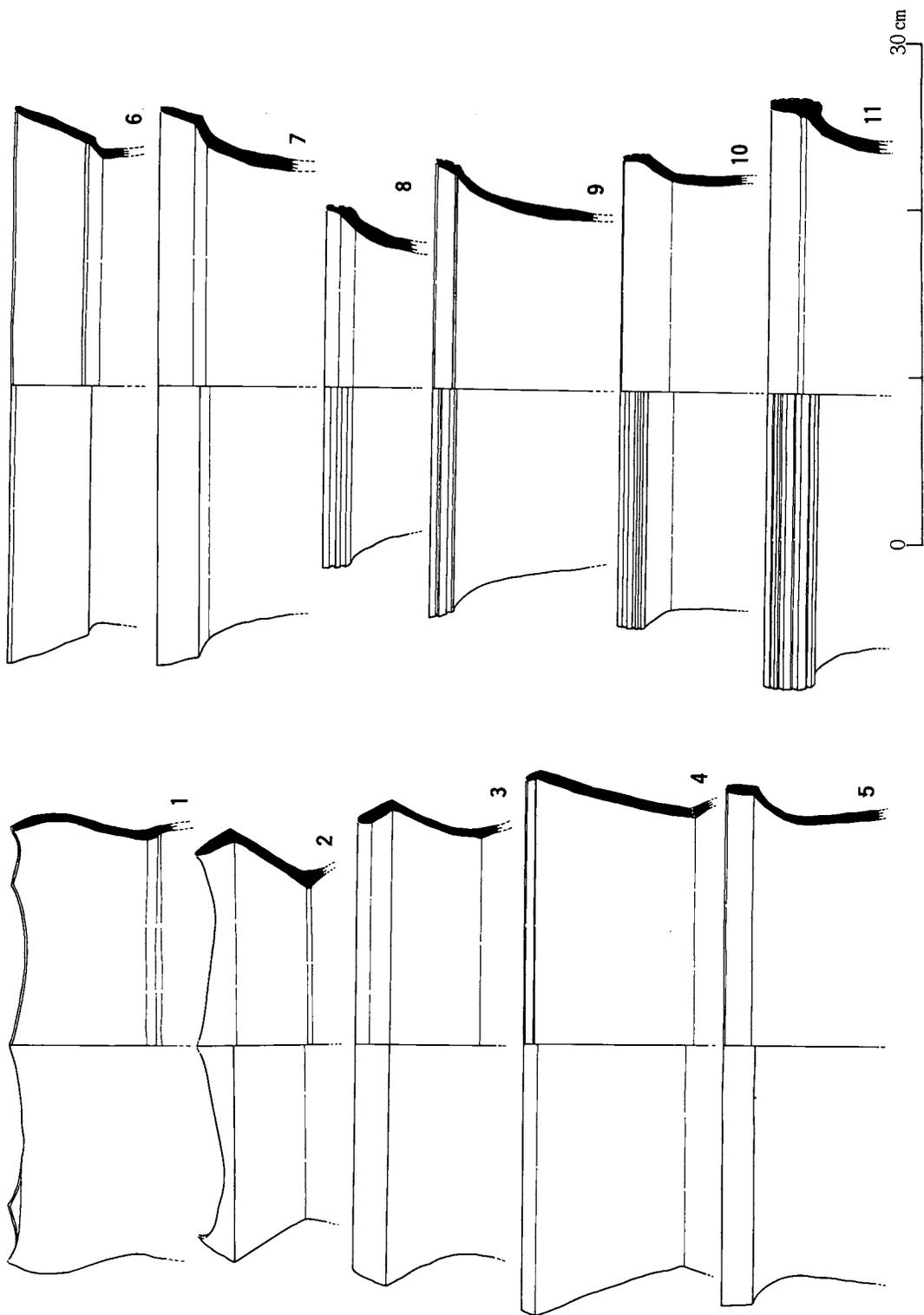
溝-2遺物

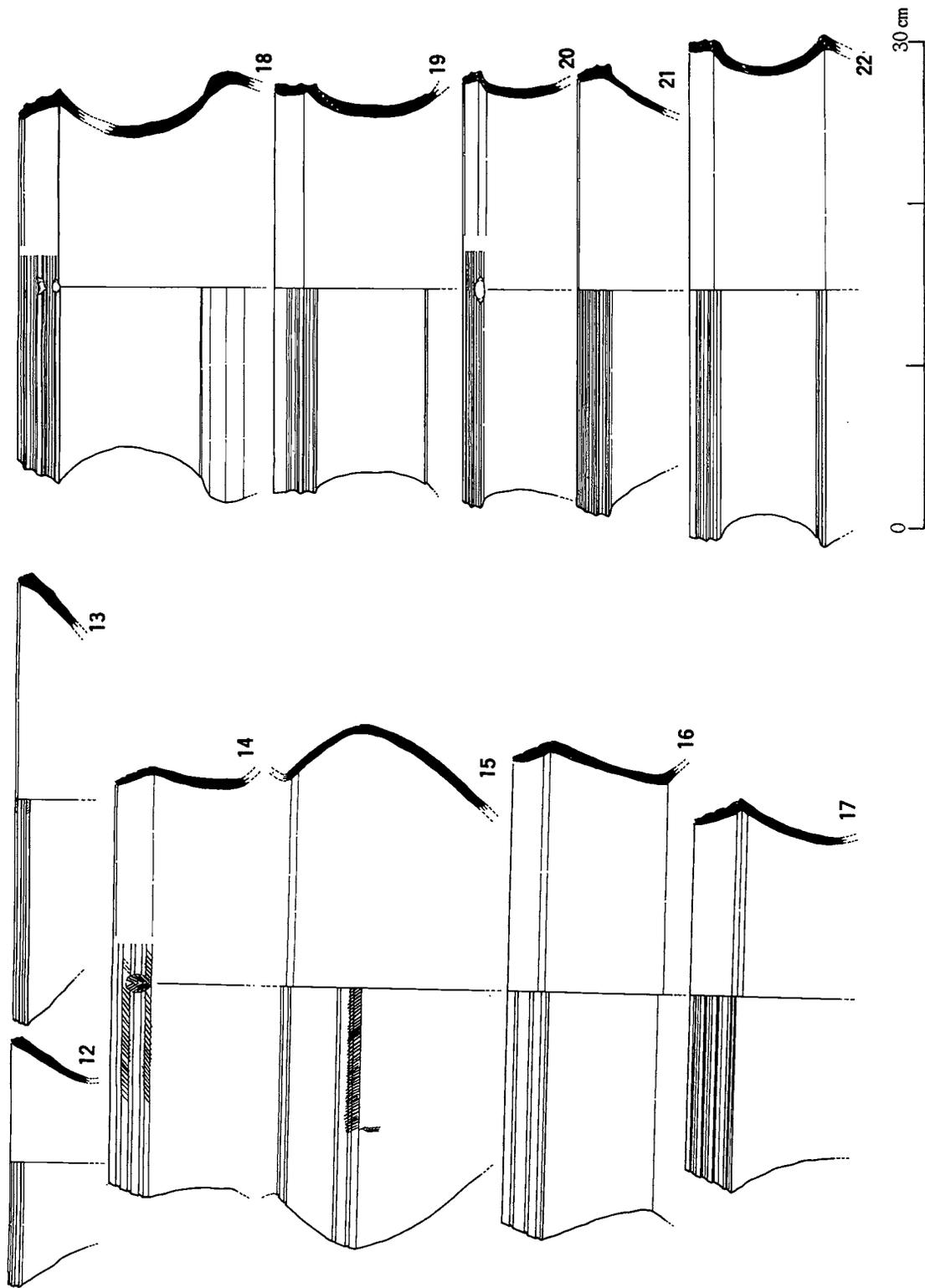
図版 番号	出土地	法 量 (cm)					技 法		備 考
		A	B	C	D	E	外 面	内 面	
257		21.5	—	—	—	—	↑方向のかなり丹念な磨き。	↔方向のかなり丹念な磨きののちU状の一条沈線。	○色調：外一黒褐色 内一暗赤褐色 ○胎土：0.5~0.8mmの石英及び長石粒等を含む。

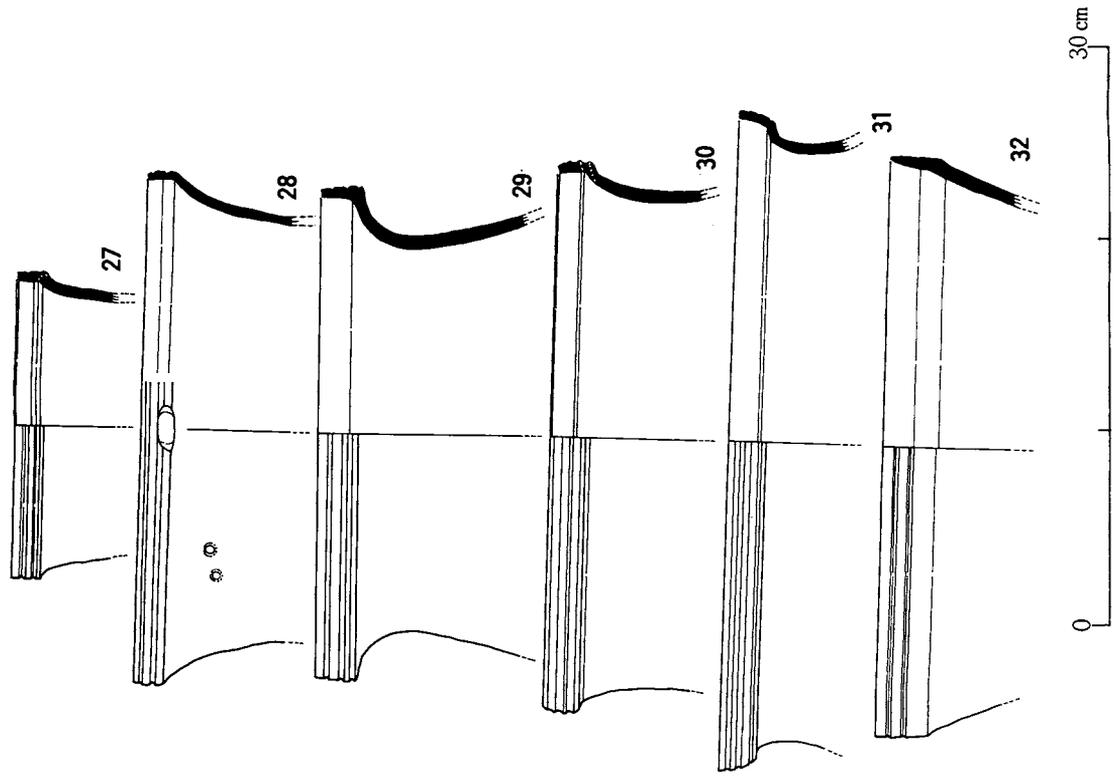
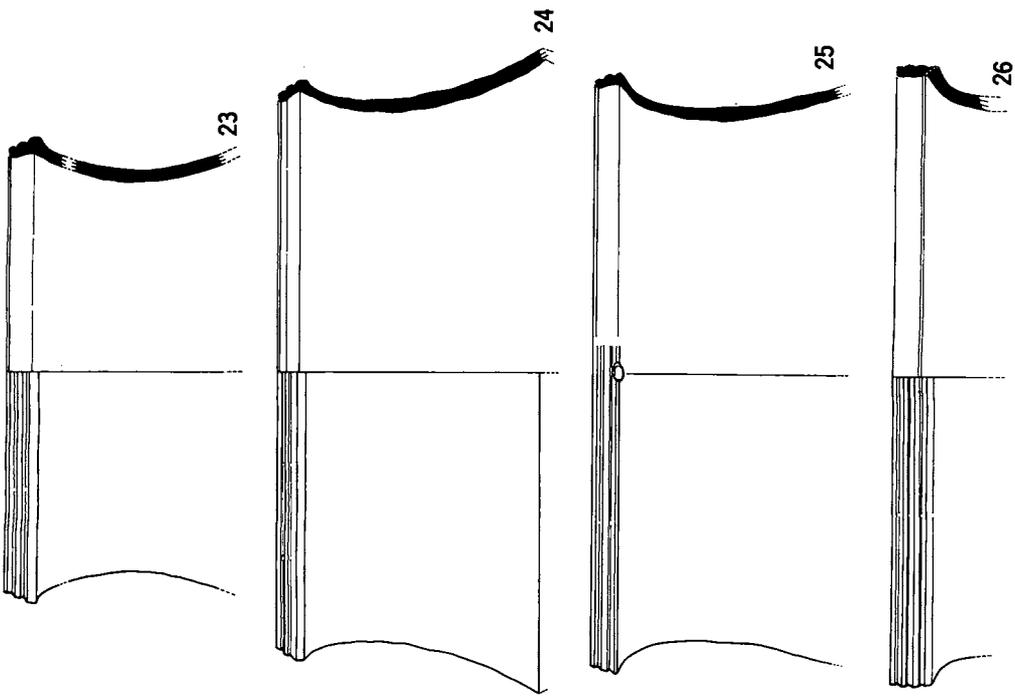


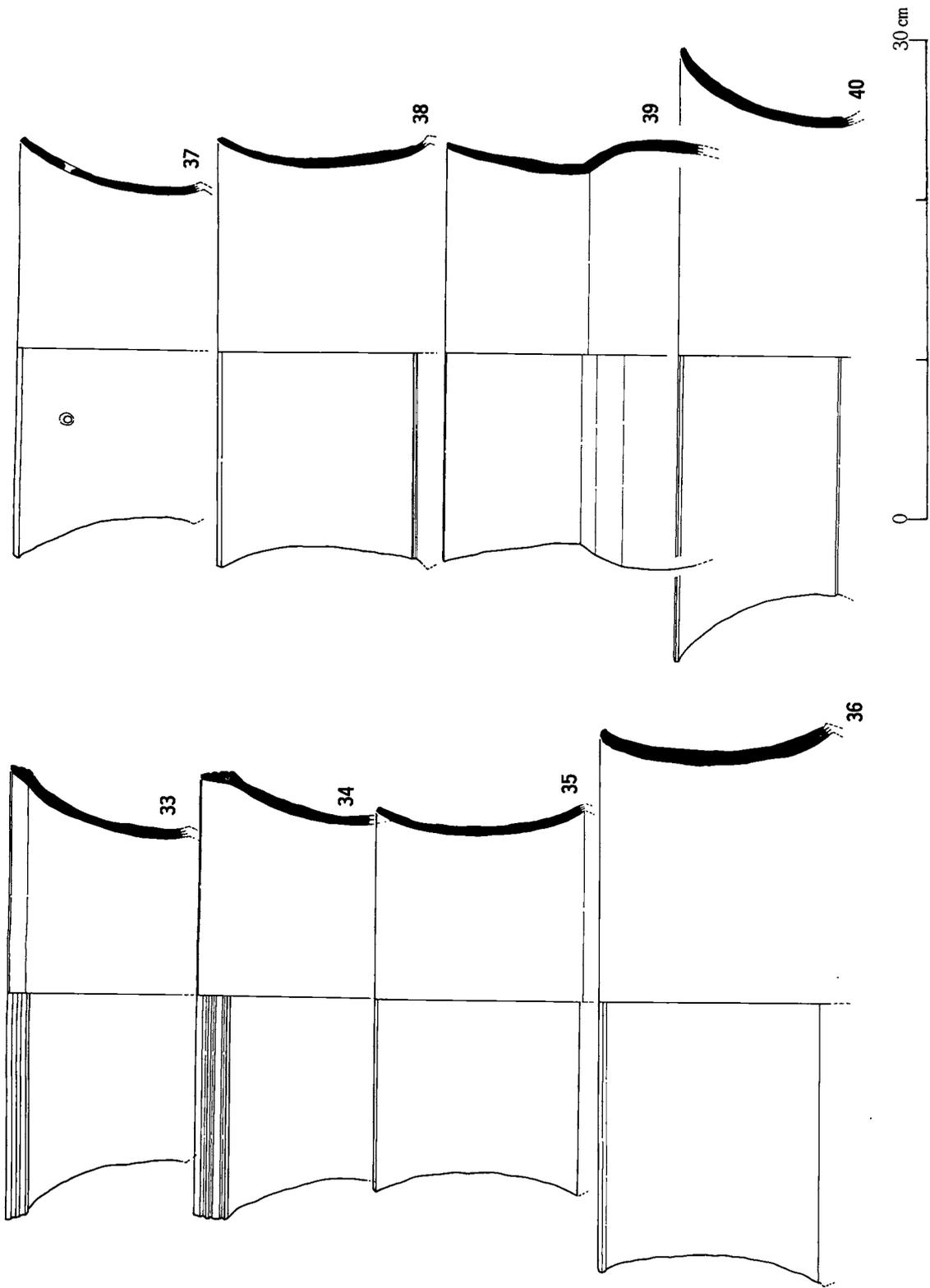
類別計測点一覧表

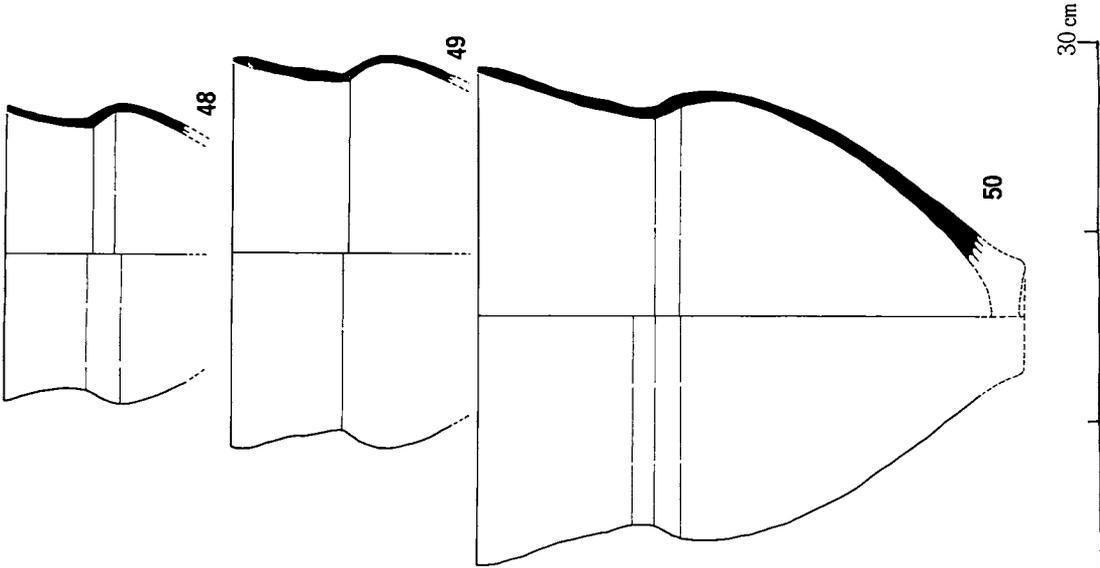
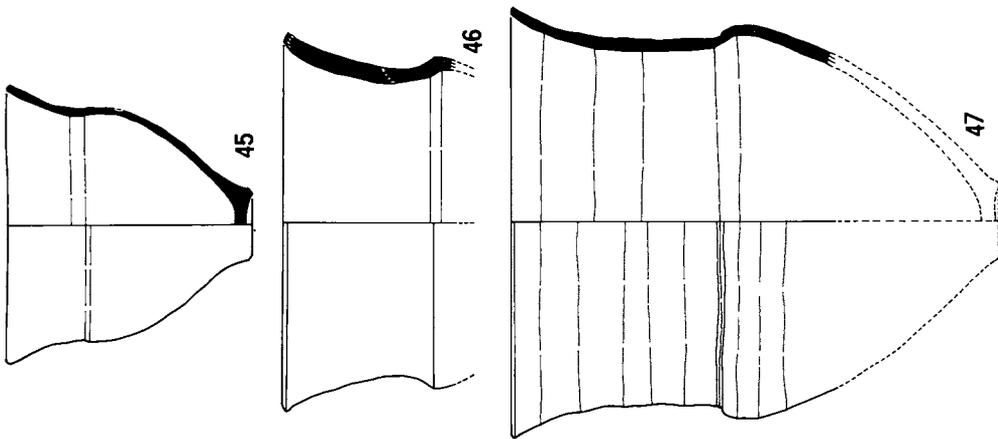
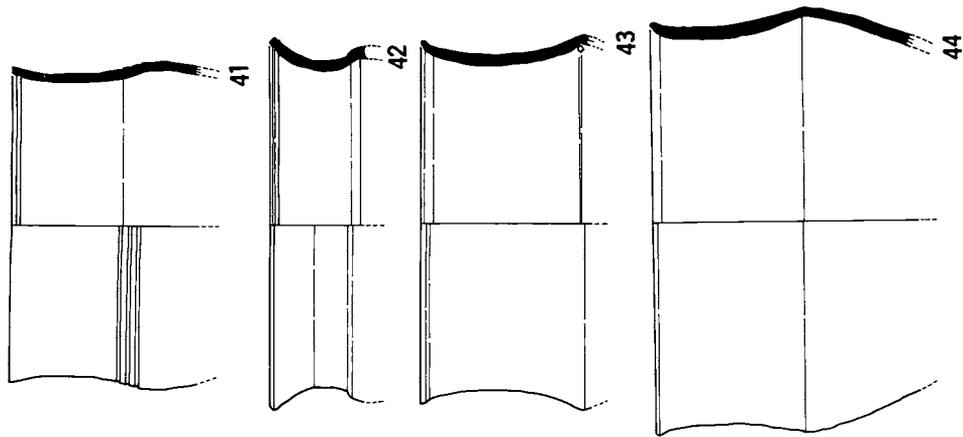
番号	形 態 別 分 類	計 測 点 の 名 称				
1	深継 C-1・2	A 口径	B ₁ 肩部径	C 胴部最大径	D 器高	E 底径
			B ₂ 胴部径		D _{1a} 胴部測点までの高さ	
2	深継 A-1・2 B-1・2・3・4 C-2・5 D	A ₁ 口径	B ₁ 胴部径	C 胴部最大径	D 器高	E 底径
		A ₂ 口縁下段径	B ₂ 胴部径下段径		D _{1a} 胴部高	
					D _{1b} 胴部高	
3	深継 C-3・4	A 口径	C 胴部最大径			
4	浅継 A-1・2	A ₁ 口径	D ₁ 口縁高	E 底径		
		A ₂ 口縁下段径	D ₂ 胴部高			
5	浅継 B-2 D	A 口径	B 肩部径	C 胴部最大径	D ₁ 胴部測点までの高さ	E 底径
					D ₂ 胴部高	
6	浅継 A-3b・3c・3d 4	A ₁ 口径	B 胴部径	C 胴部最大径	D 器高	E 底径
		A ₂ 口縁部最下段径			D _{1a} 胴部高	
7	浅継 A-3e	A 口径	B 胴部径	C 胴部最大径	D 器高	E 底径
					D ₁ 胴部高	
8	継台	D 器高	E 底径			
9	浅継 C	A 口径	C 胴部最大径			
10	注口主器	A 口径	B 肩部径	C 胴部最大径	D 器高	E 底径
		A ₁ 口縁部増から注口部増までの高さ		C ₁ 胴部下段側径	D ₁ 胴部高	
				D ₂ 肩部高		
				D ₃ 胴部高		
				D ₄ 胴部上半高		
				D ₅ 胴部下高		
				D ₆ 胴部上段から最下段までの高さ		

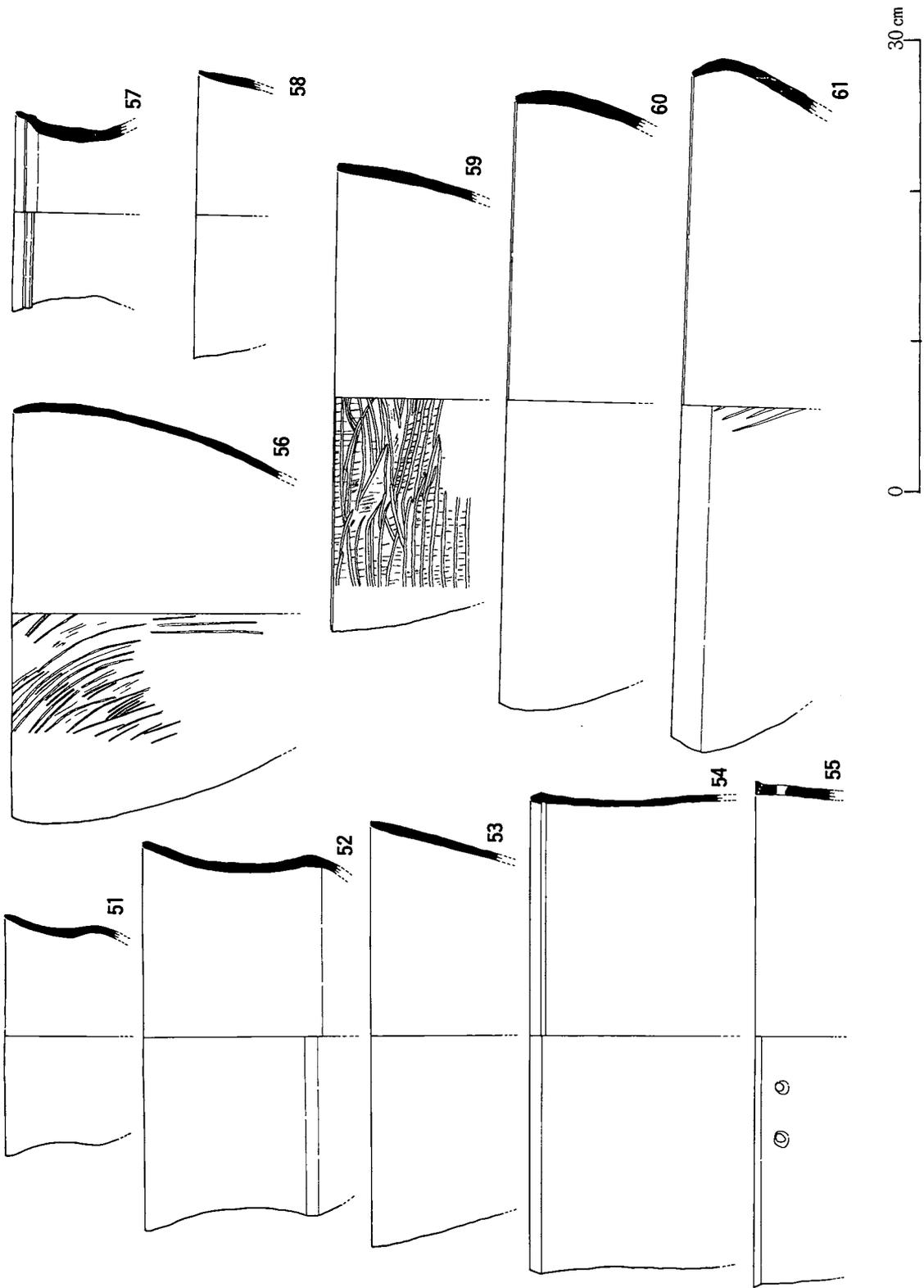


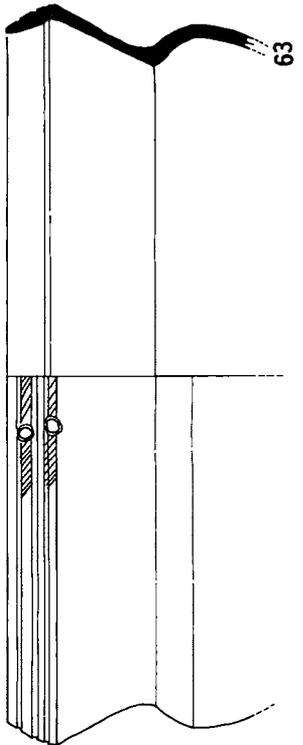
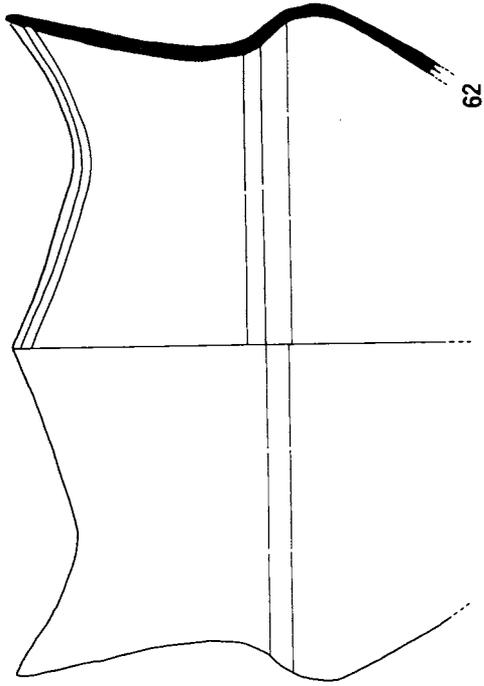
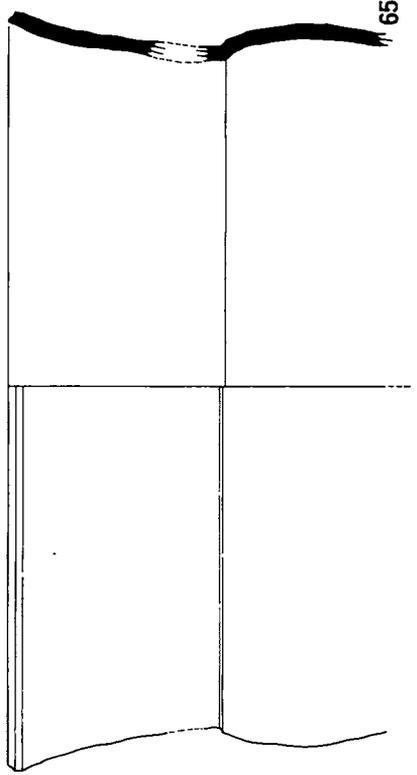
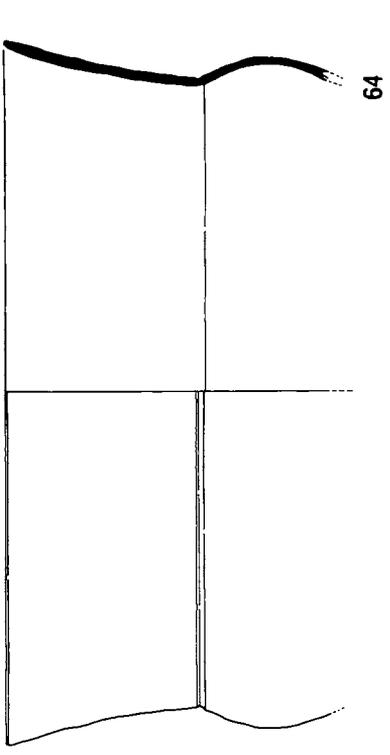


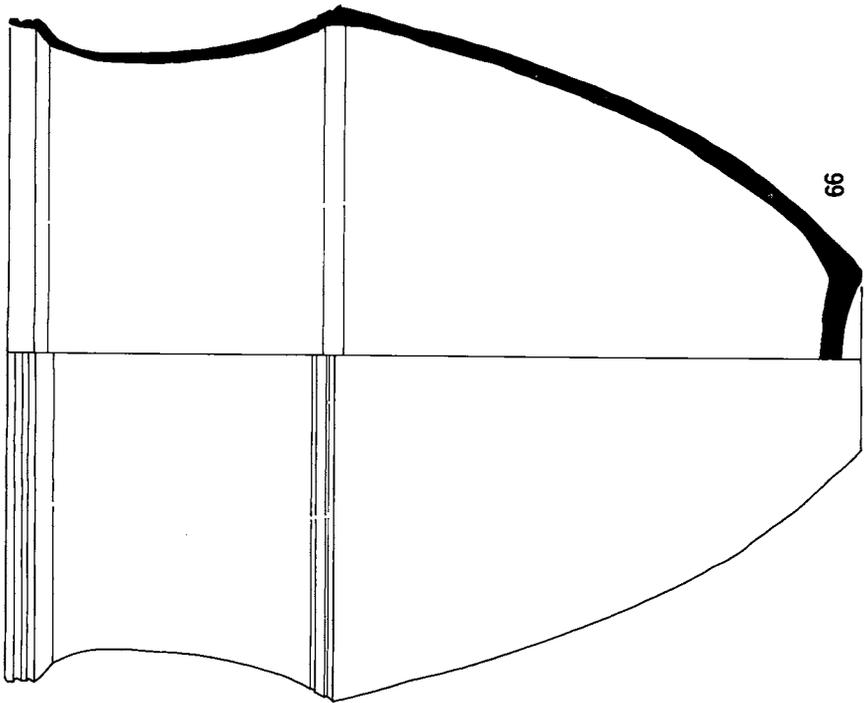
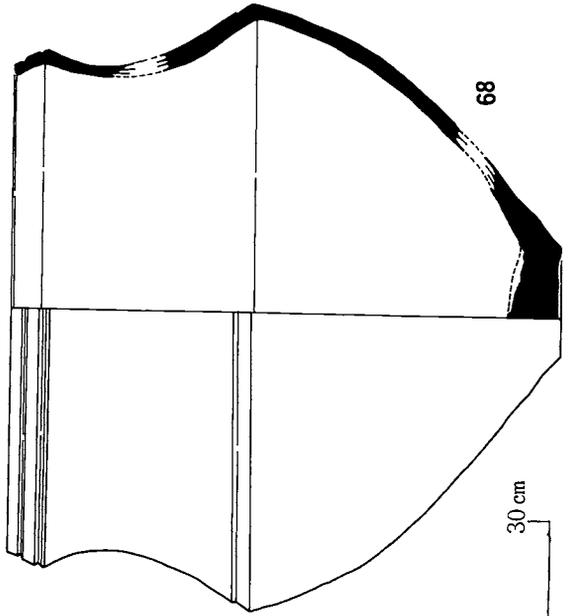
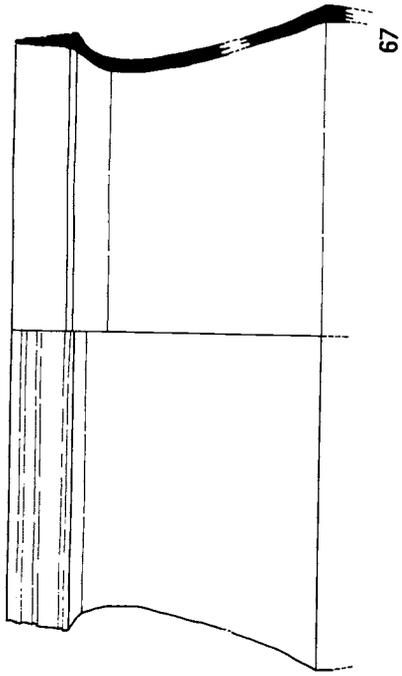


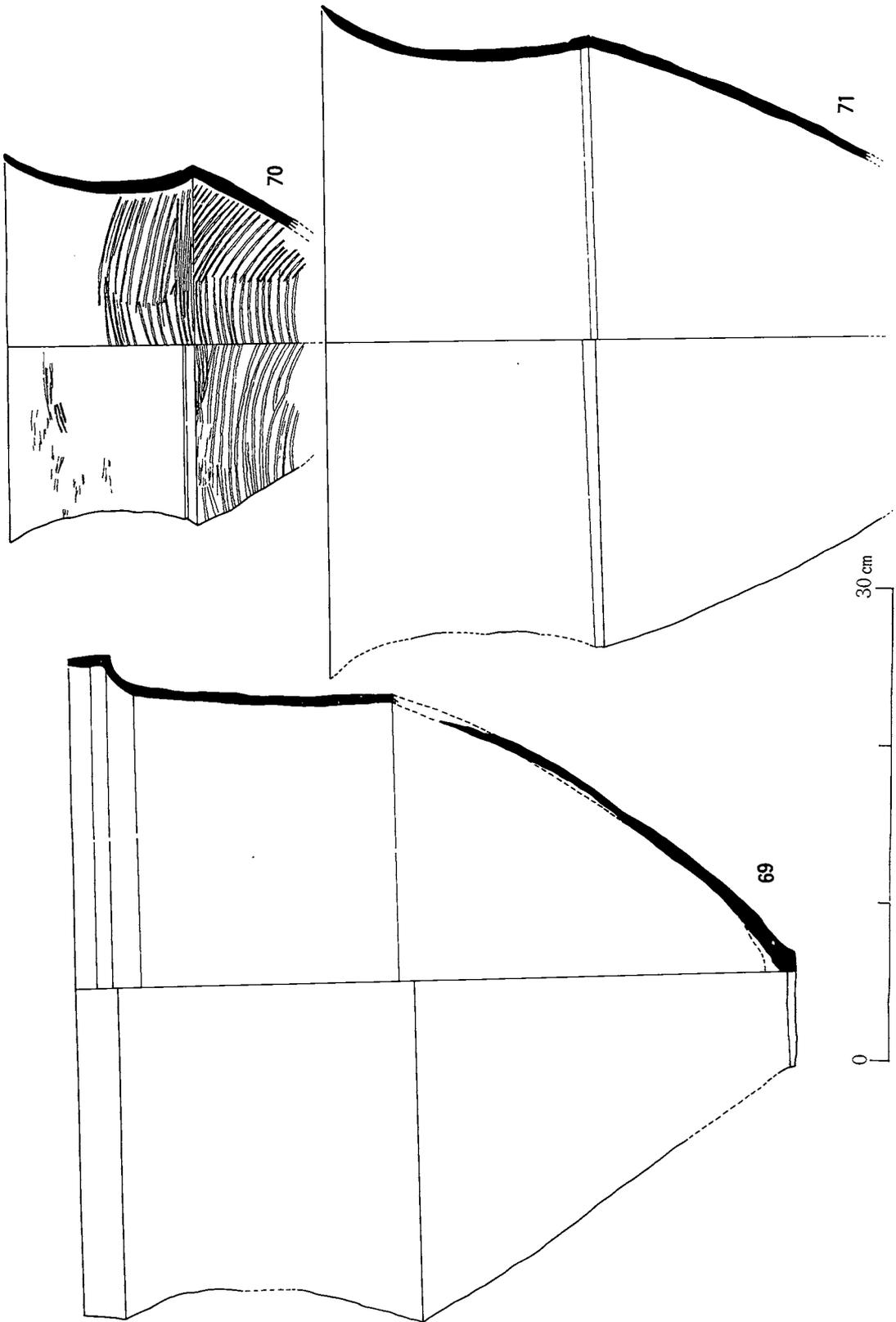


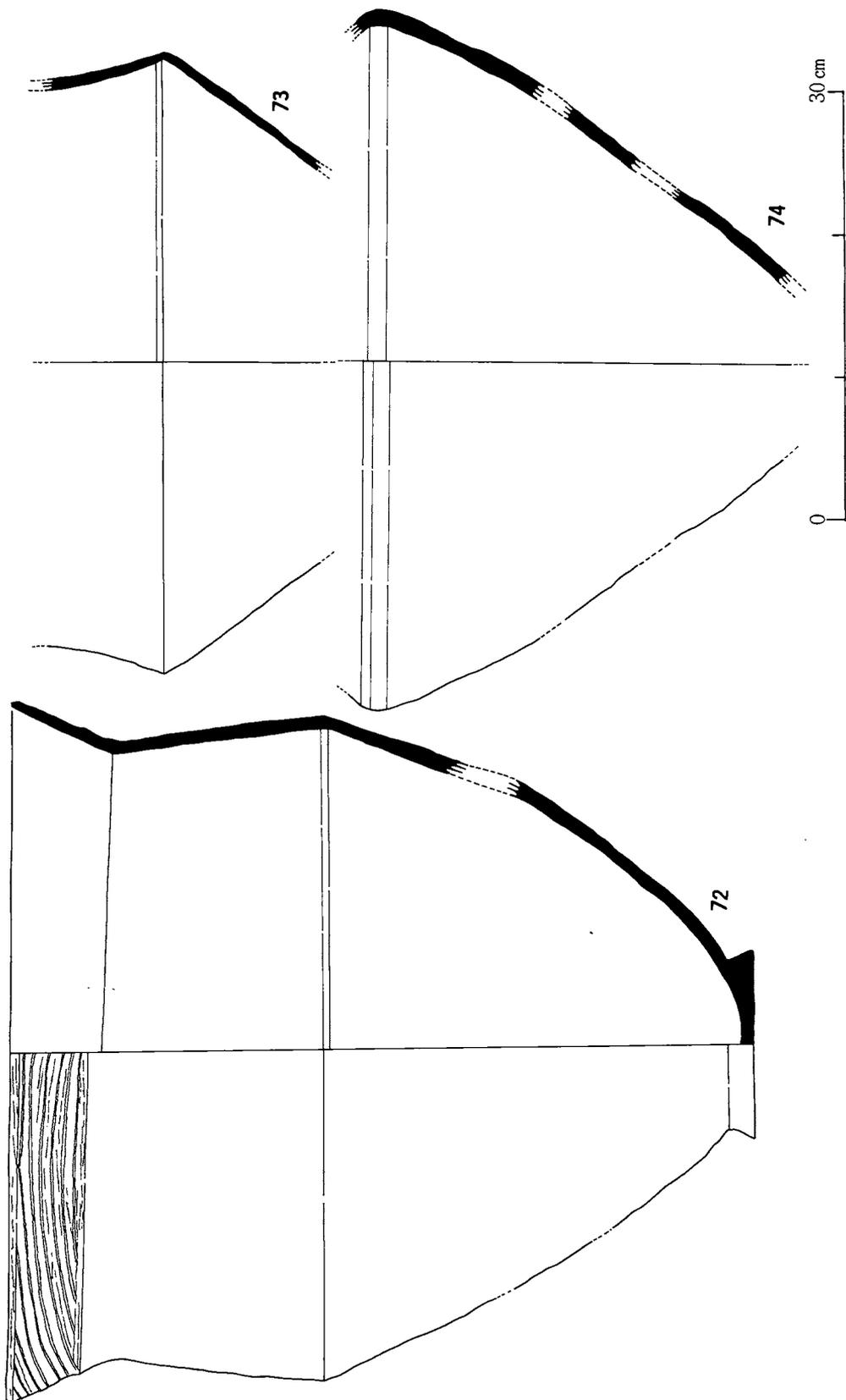


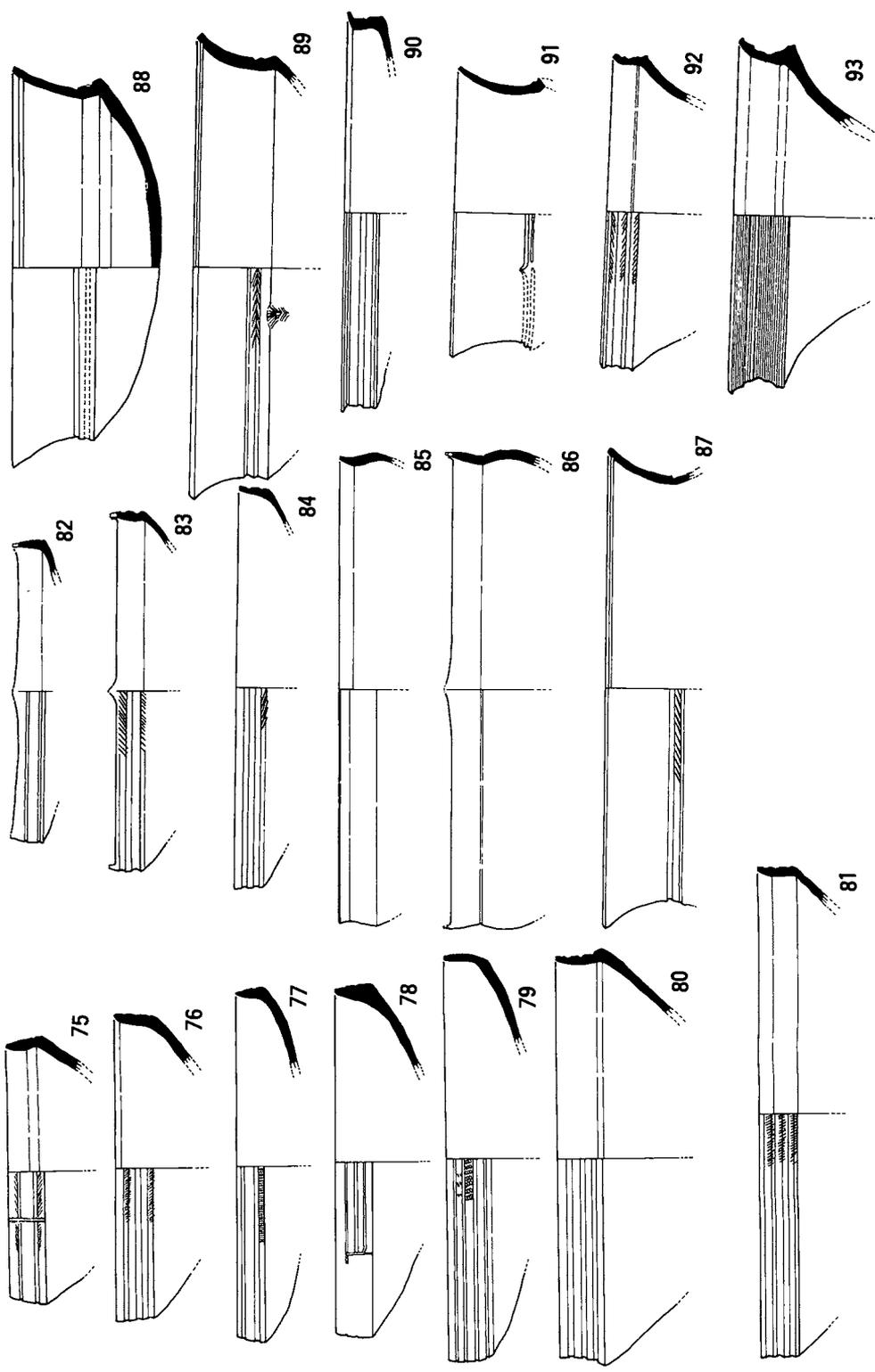




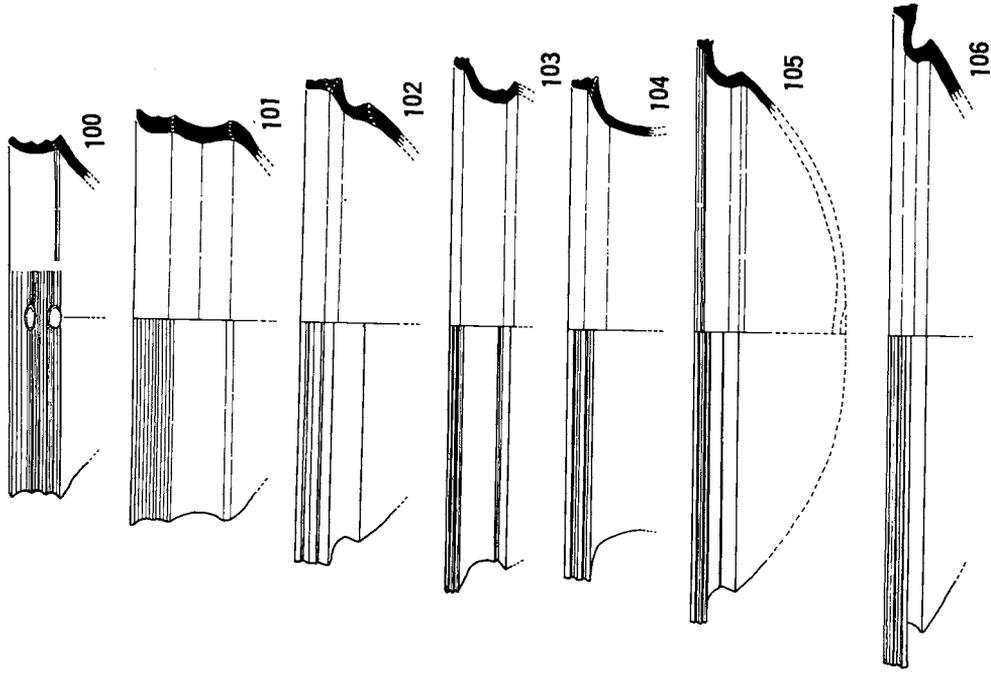
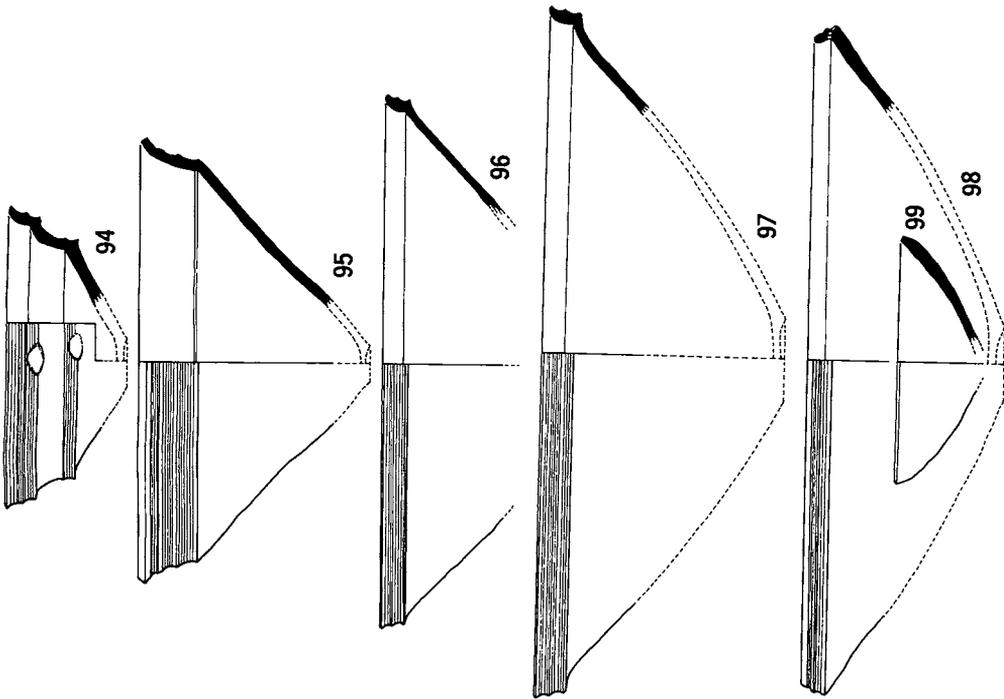


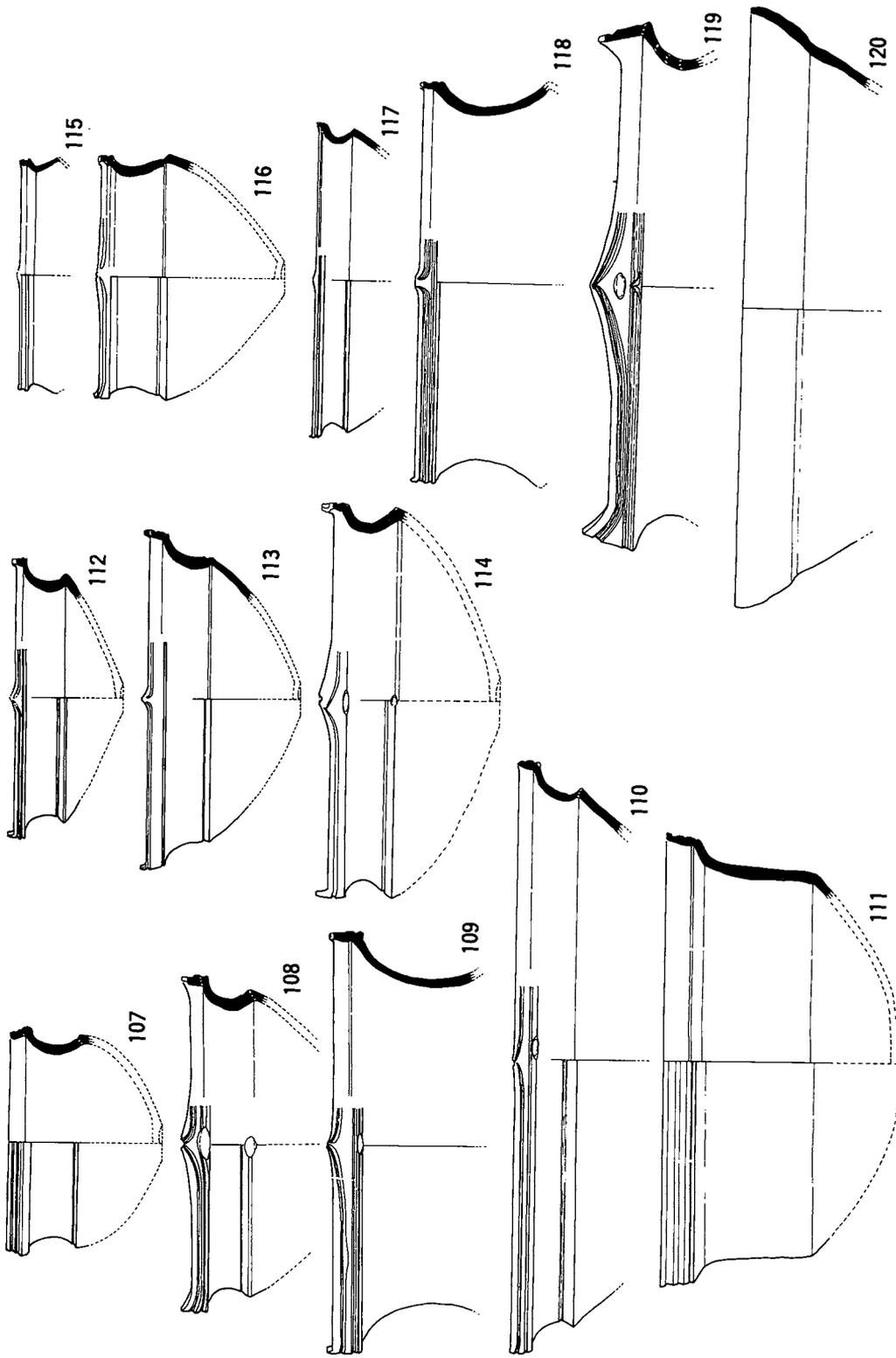


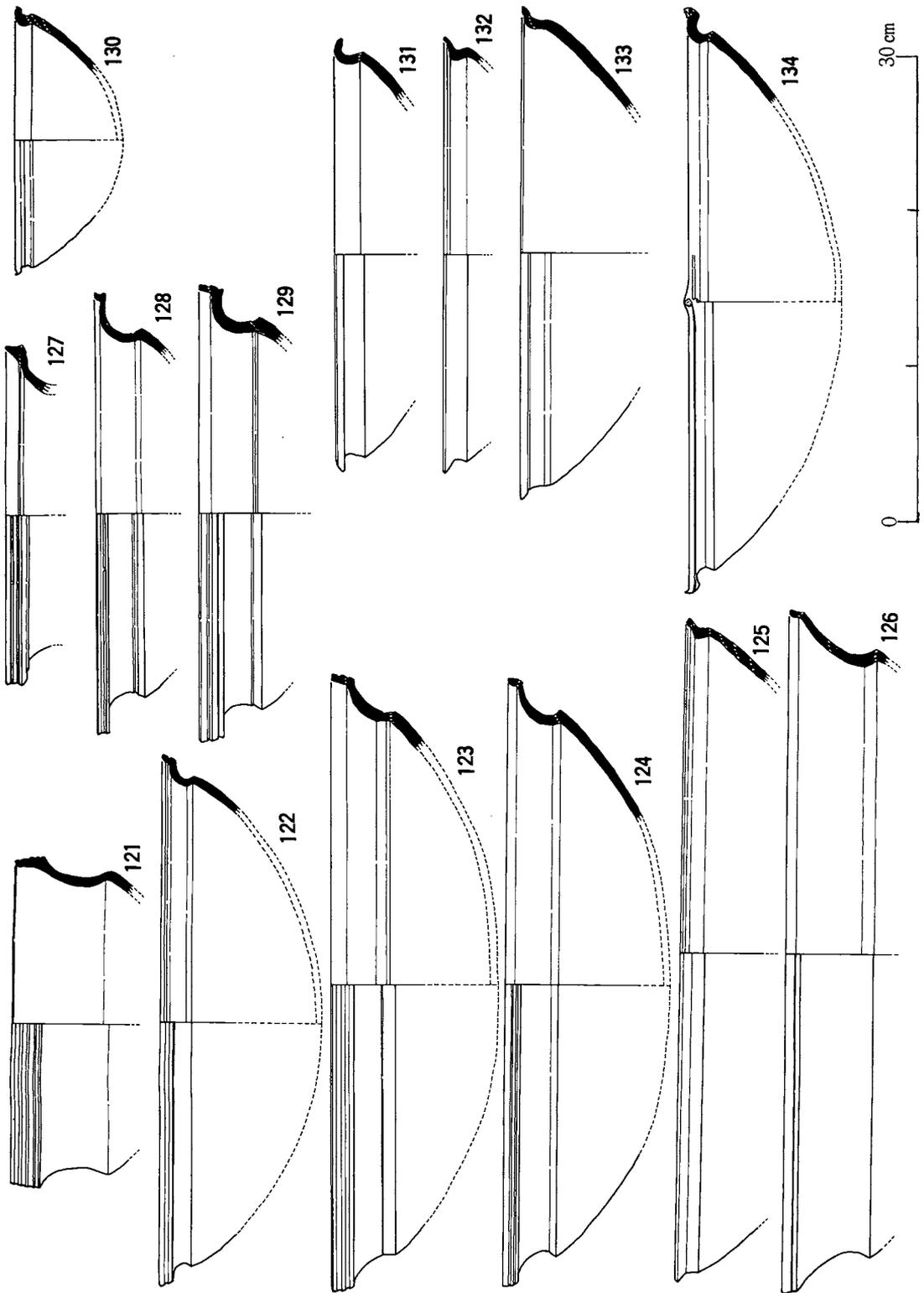


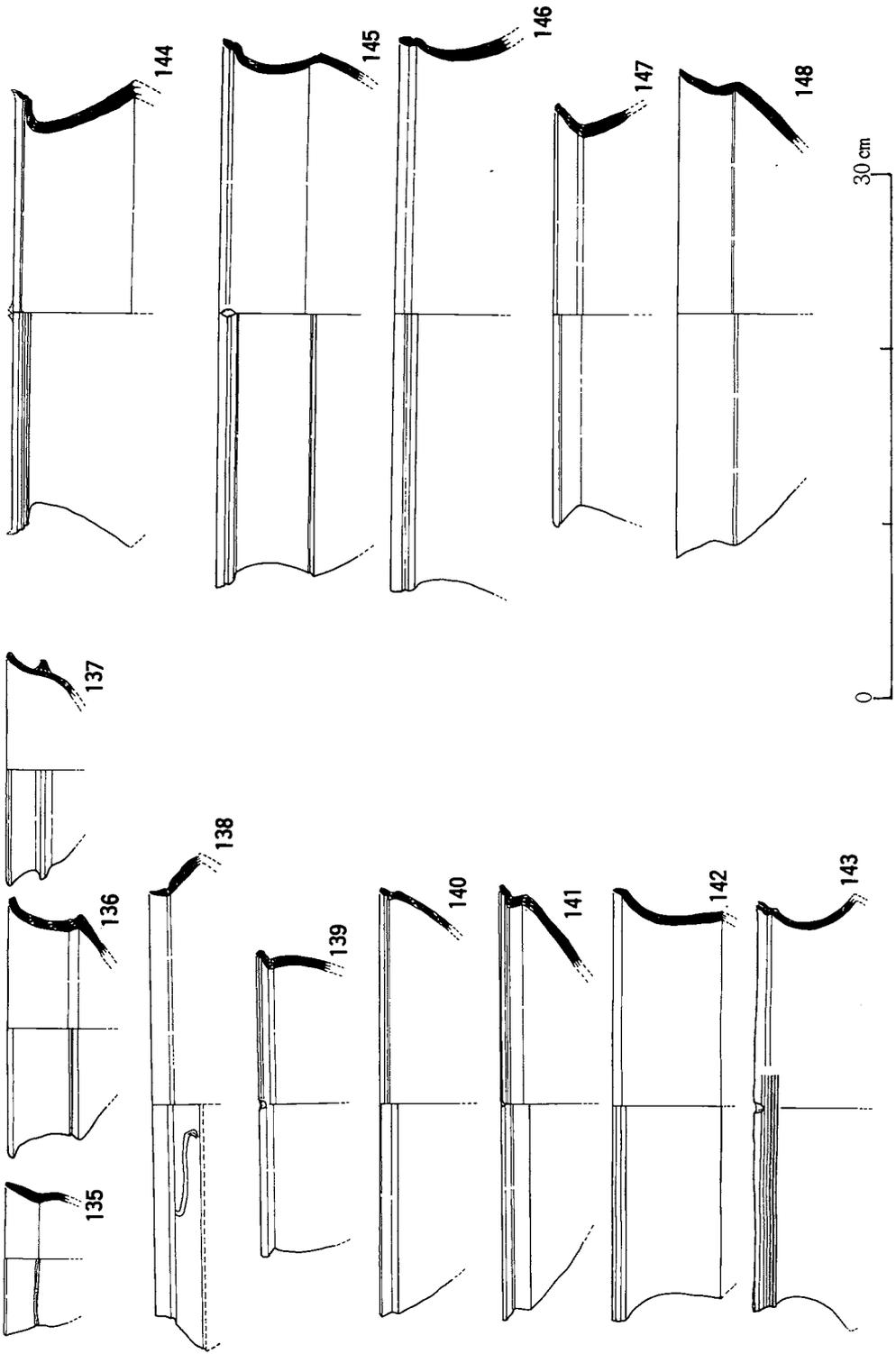


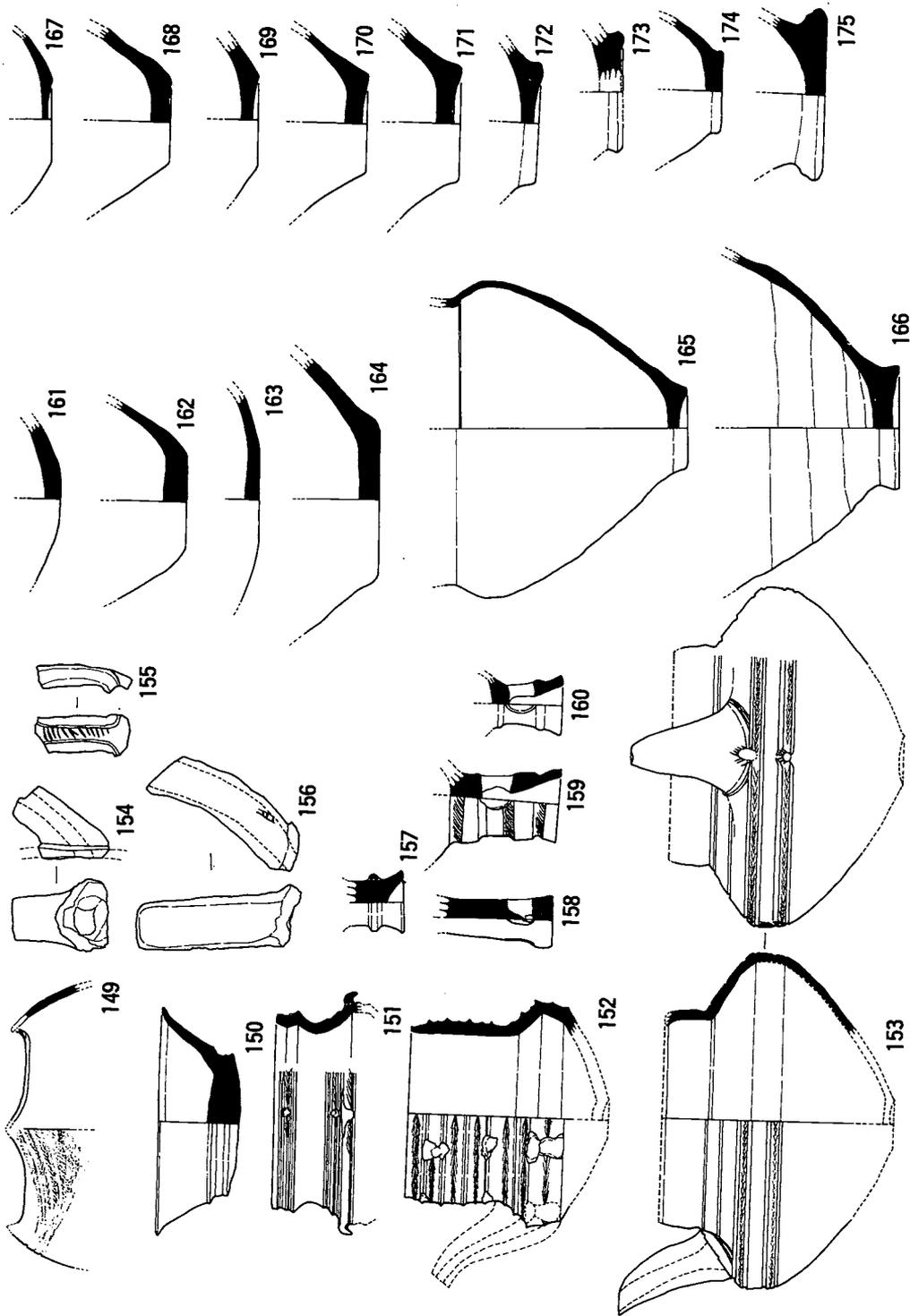
0 30 cm

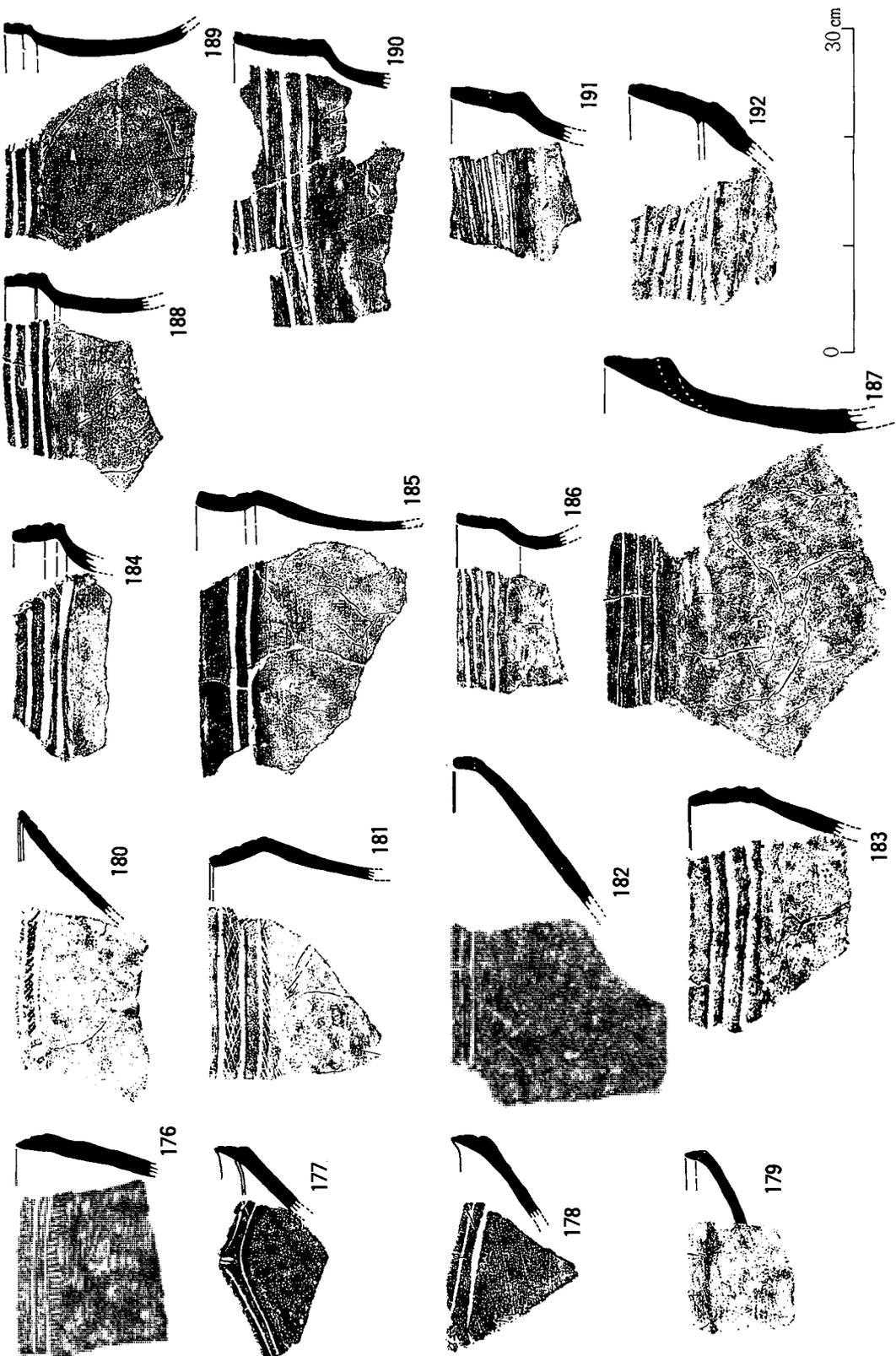


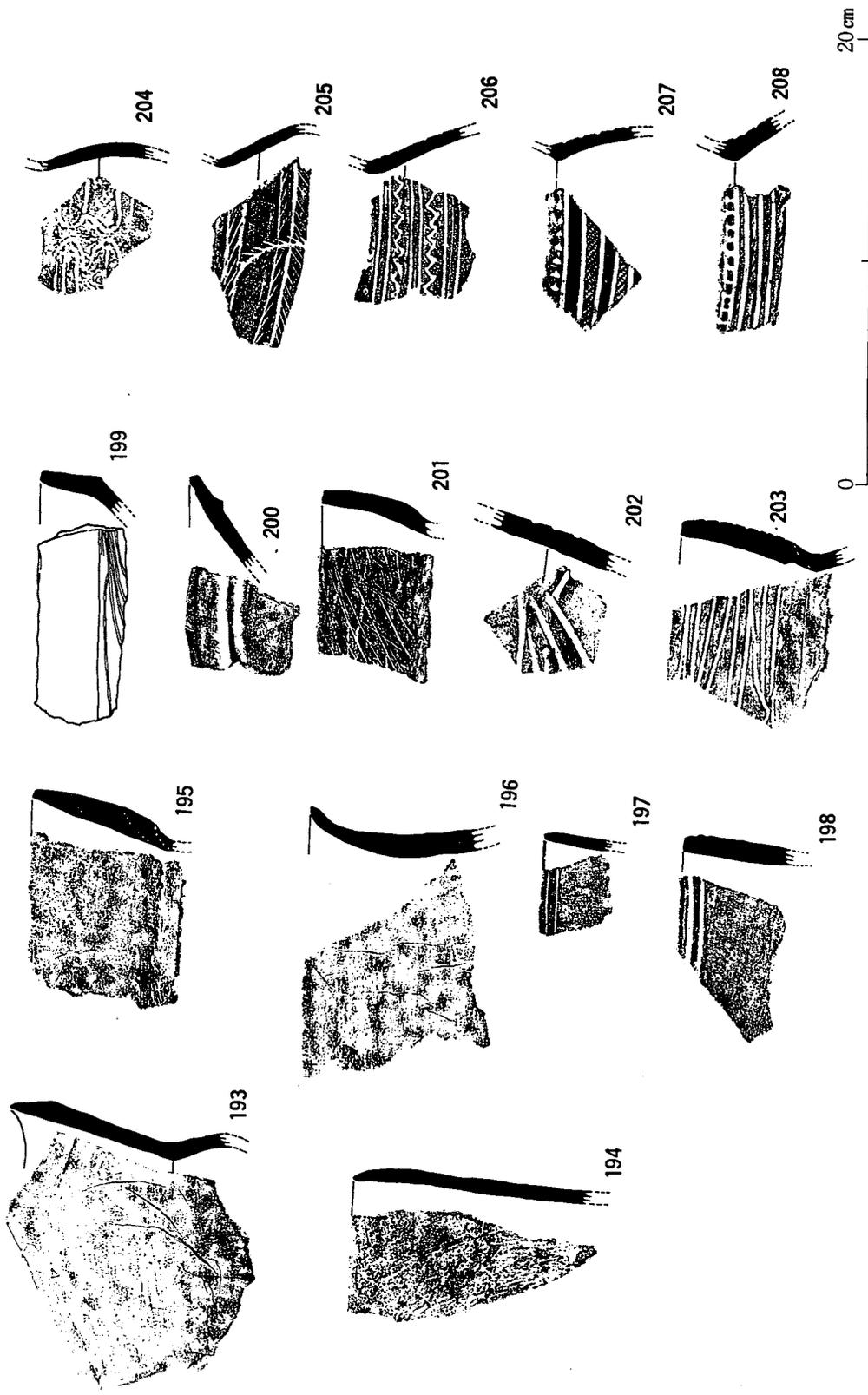


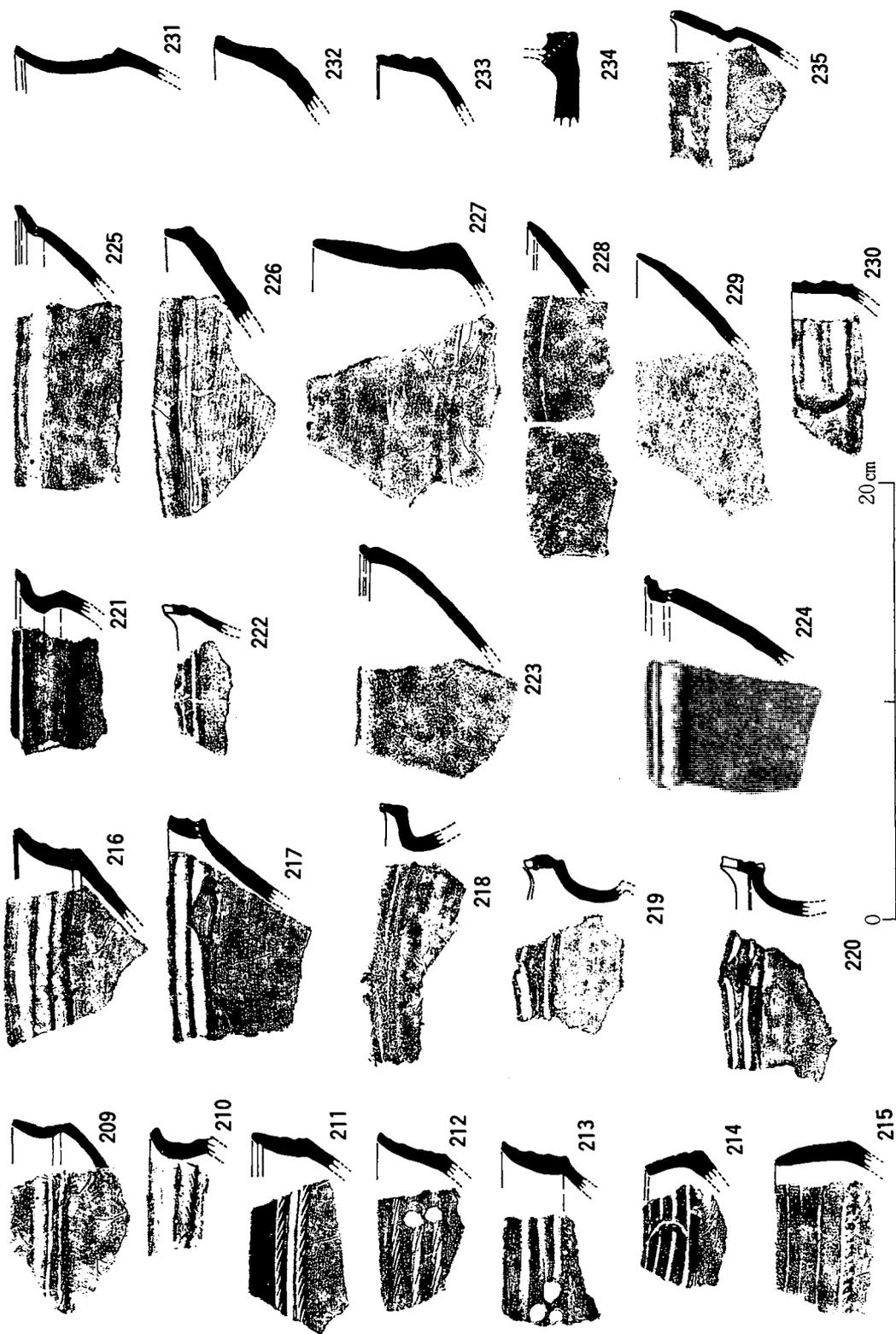


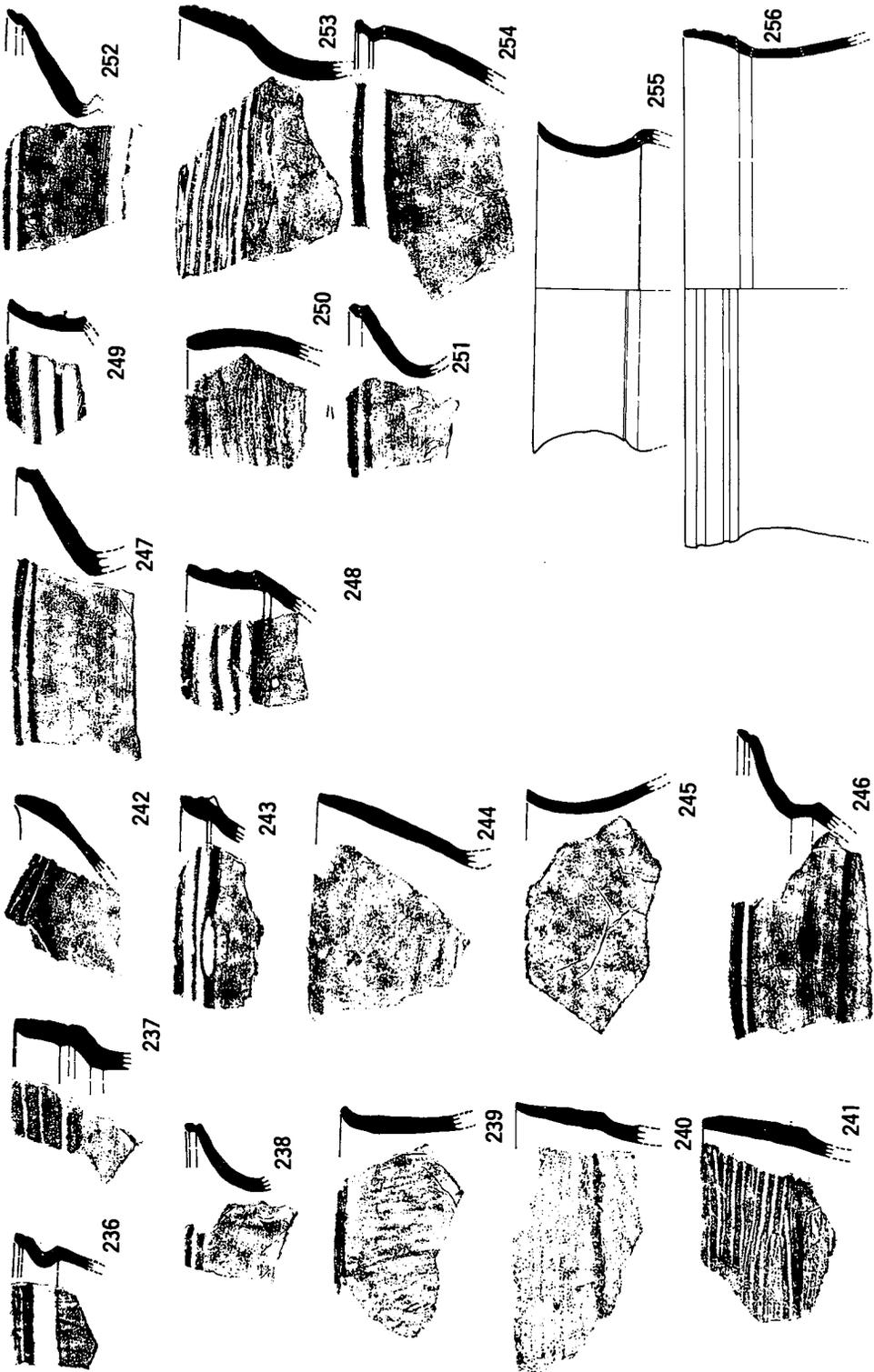


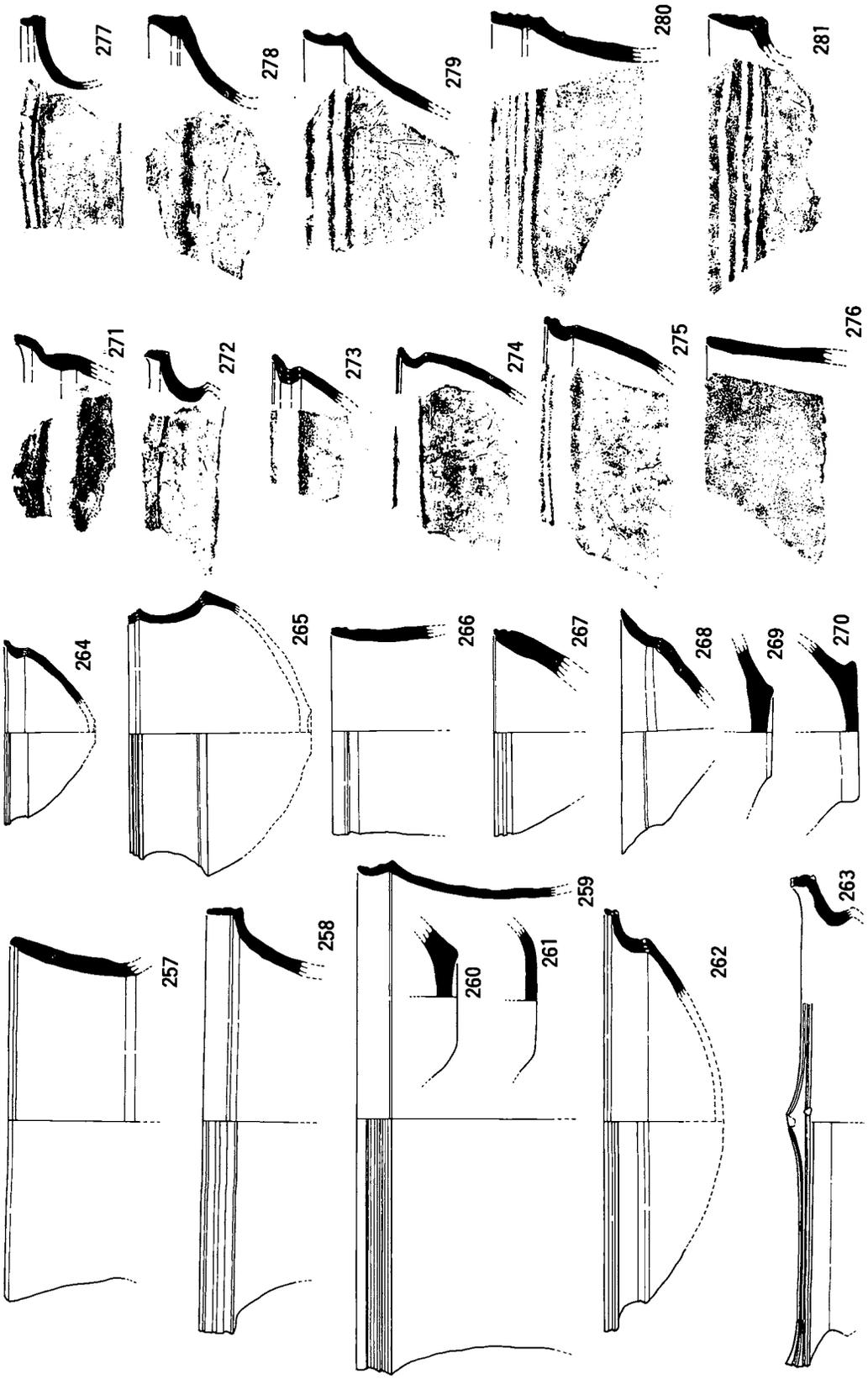


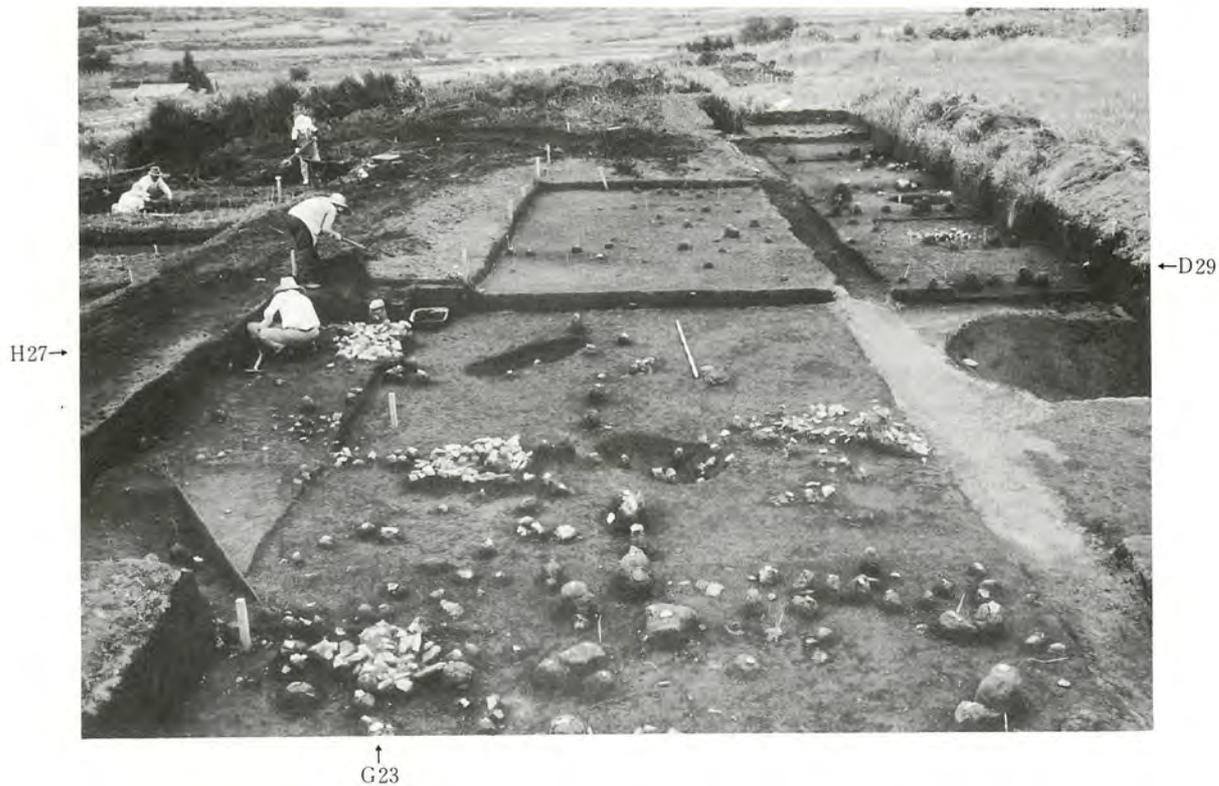




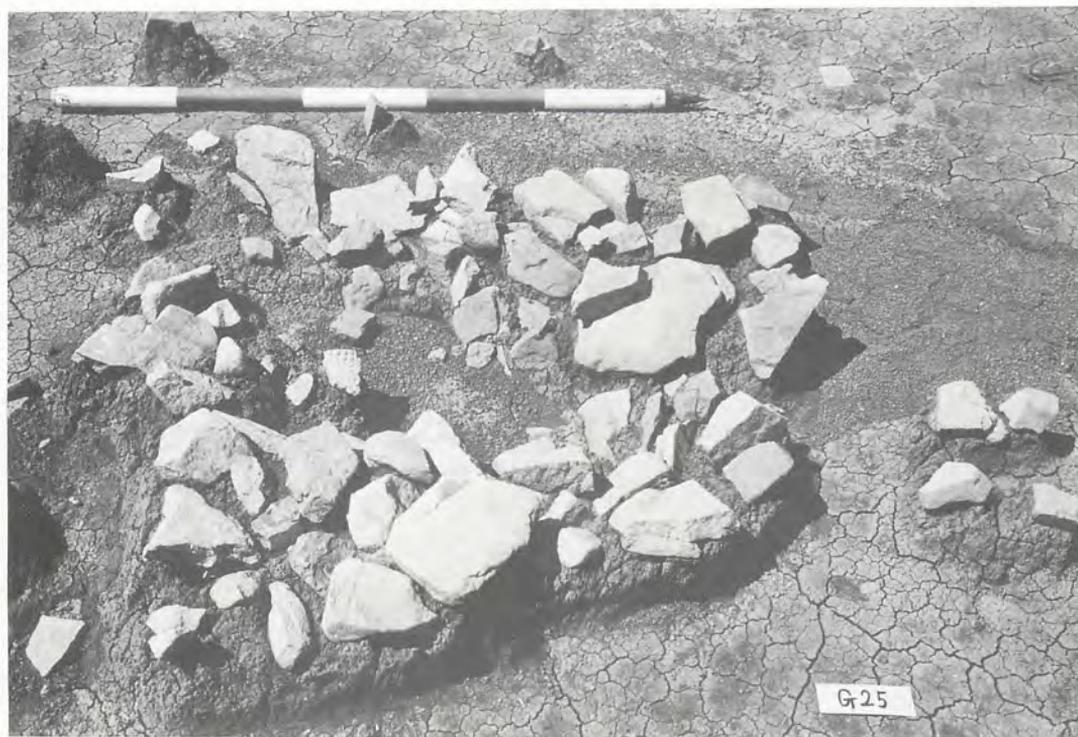








(上) 集石遺構 (下) C区土器出土状況



(上) G25集石遺構 (下) G23集石遺構



(上) D29集石遺構 (下) F34集石遺構



(上) B区土城
(下) B区土城検出状況



(上) B区土城と柱穴
(下) B区土城



(上) C13集石断面状況
(下) P09夜臼式土器片



(上) K19集石遺構
(下) H27集石遺構



(上) B区土塚と柱穴



(下) C区楕鉢状の掘り込み



(上) 阿高式土器検出状況



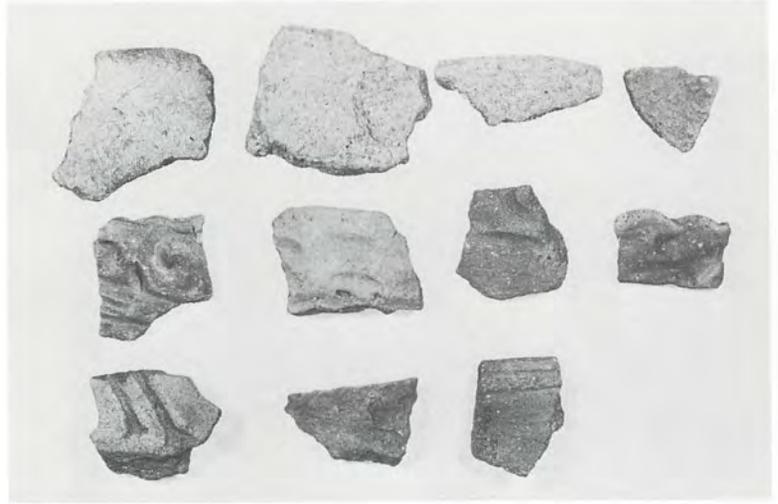
(下) 阿高式土器片



- 耕作土
- 黄褐色層(雲仙?)
- 黒土層
- 硬質黒土層
- 赤土(新期ローム層)



(上) D12土層 (下) 土層調査区と唐芋穴



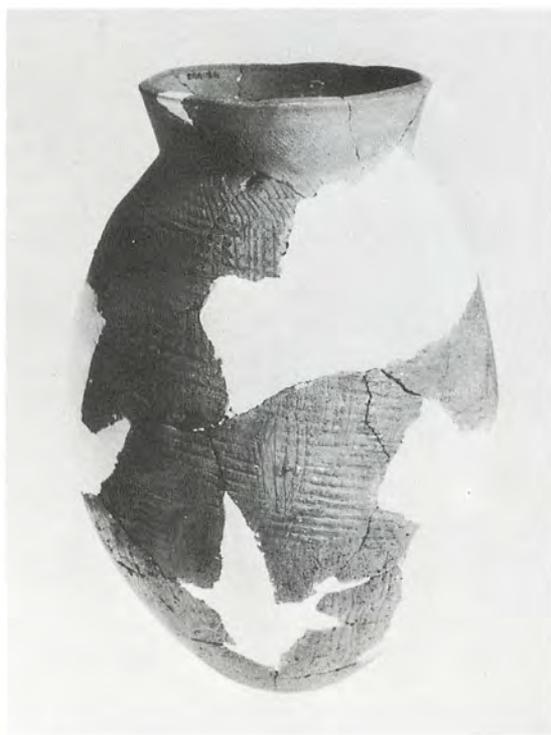
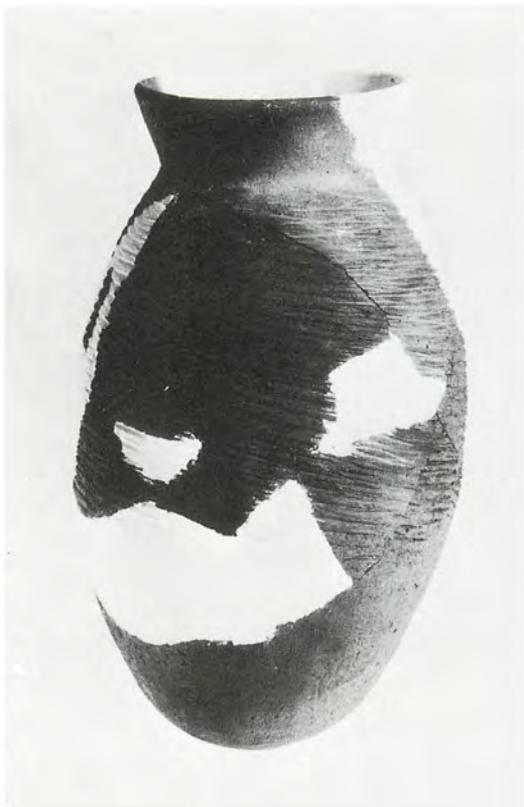
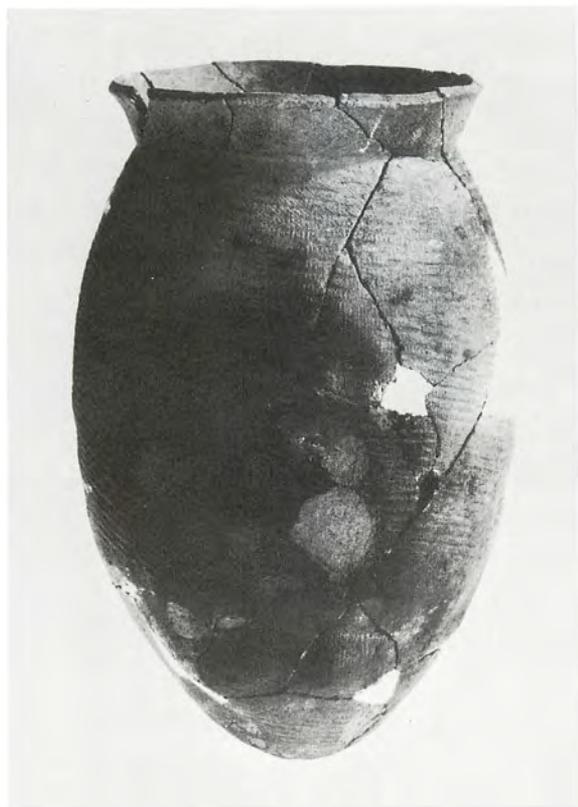
(上)
縄文晩期以前の土器
(中)
縄文晩期の土器
(下)
縄文晩期の土器



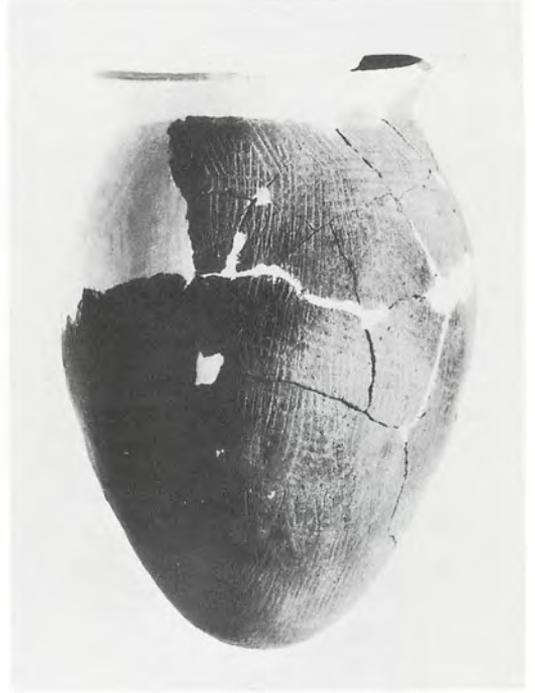
縄文晩期の土器



縄文晩期の土器



古式土師器



古式土師器



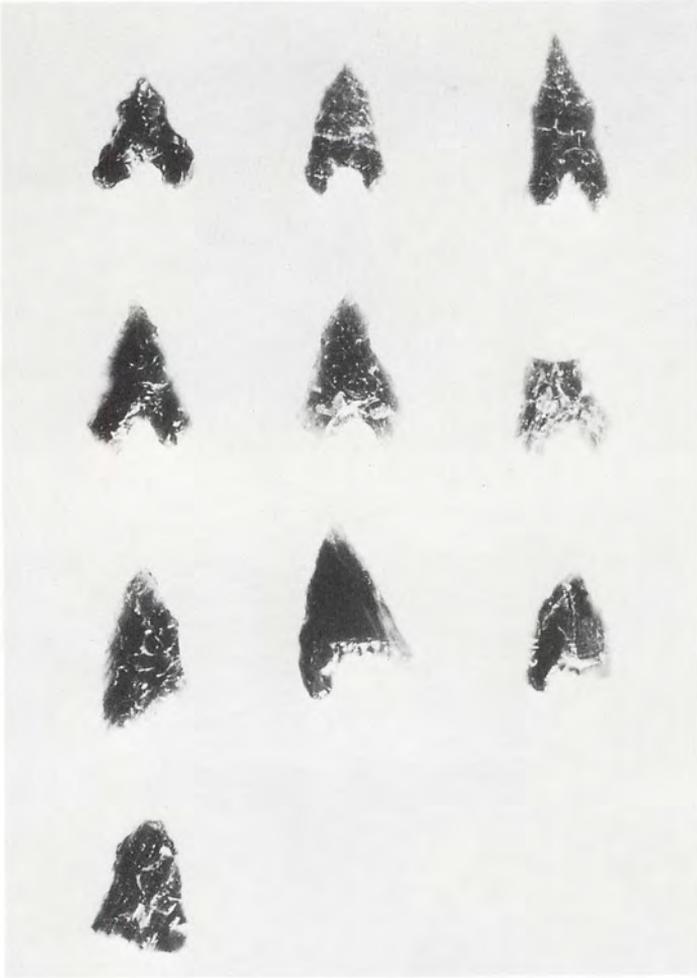
古式土師器



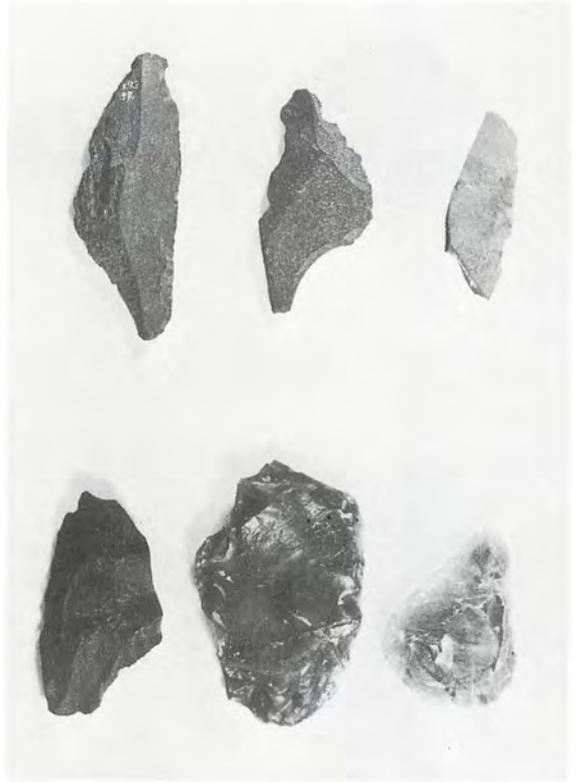
古式土師器



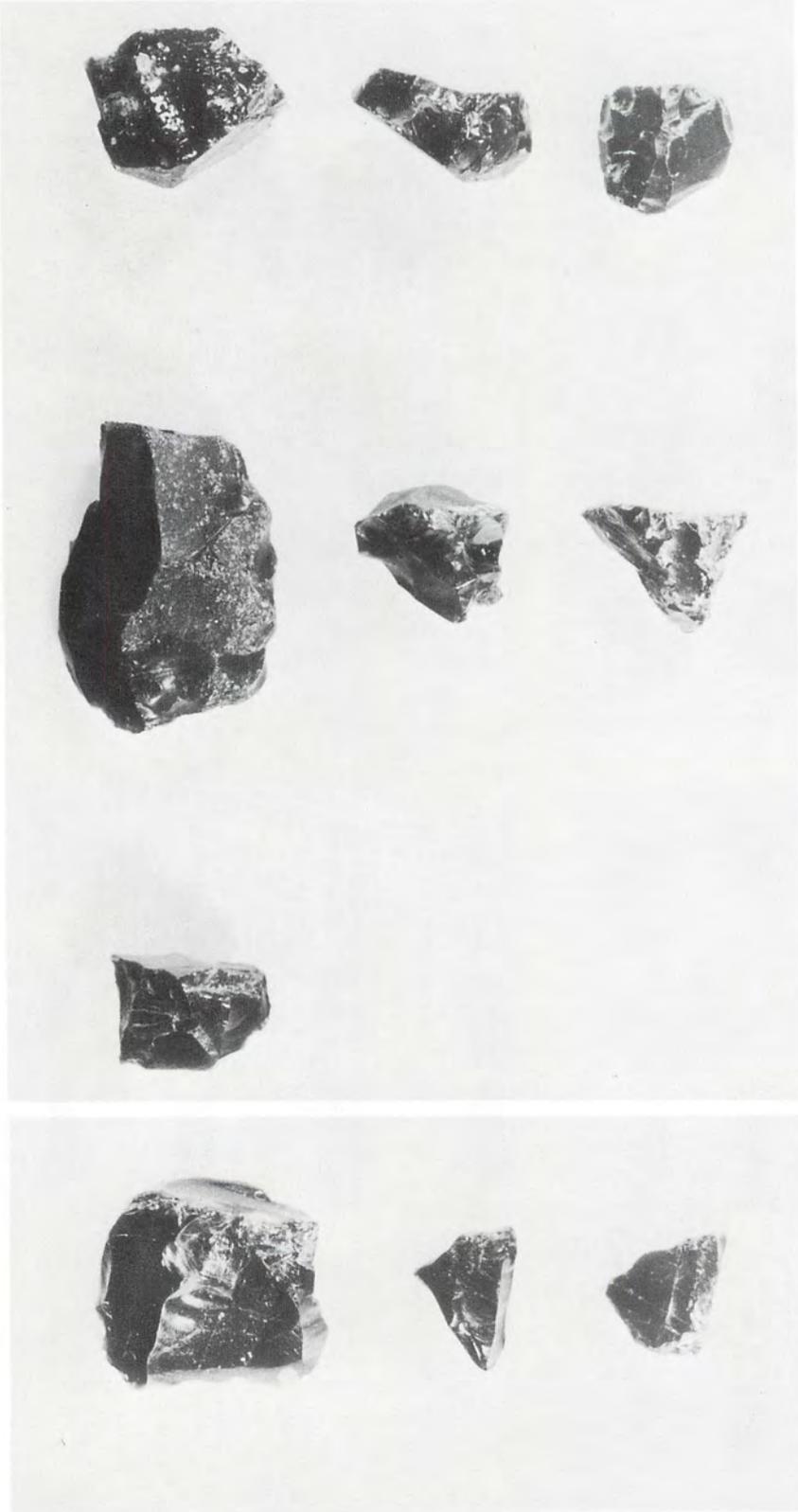
歴史時代の遺物



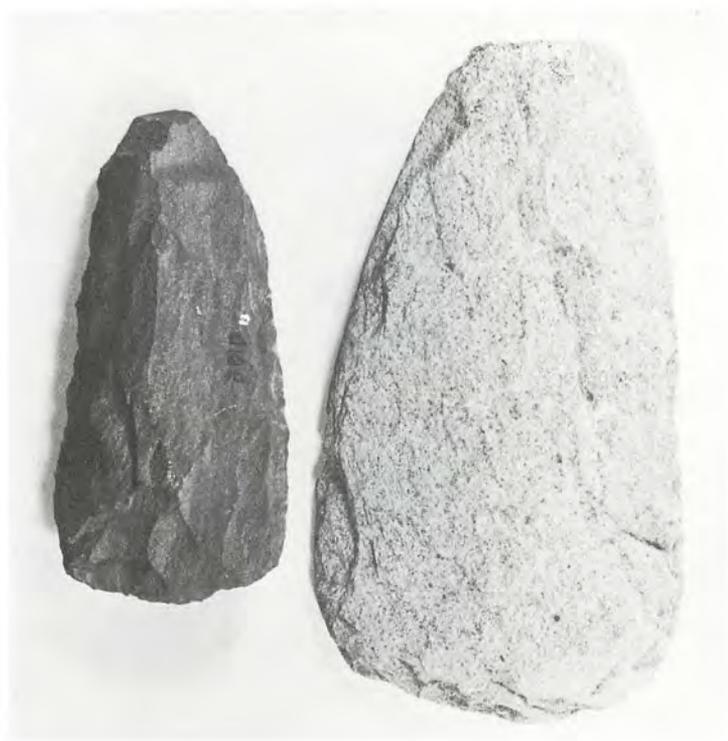
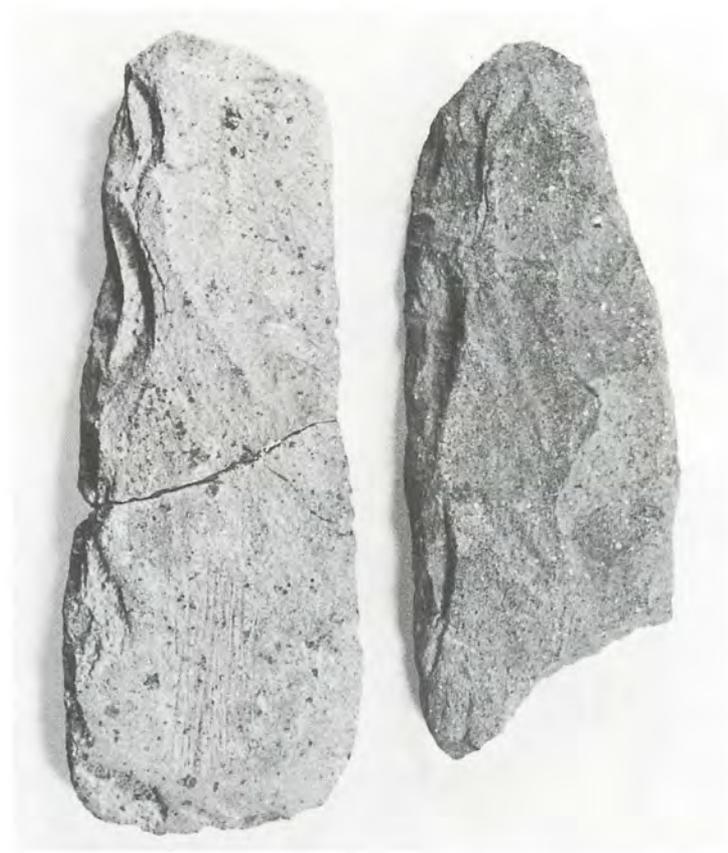
石 器 (石鏃・石錐・楔形石器)



石 器 (二次加工剝片)



石 器 (石核)



石 器 (扁平打製石斧)



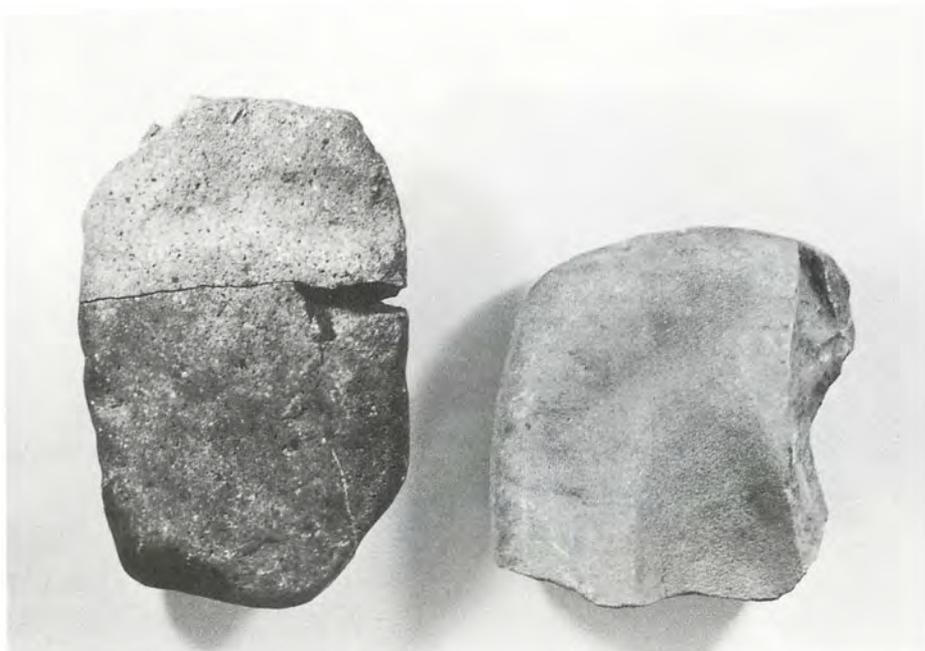
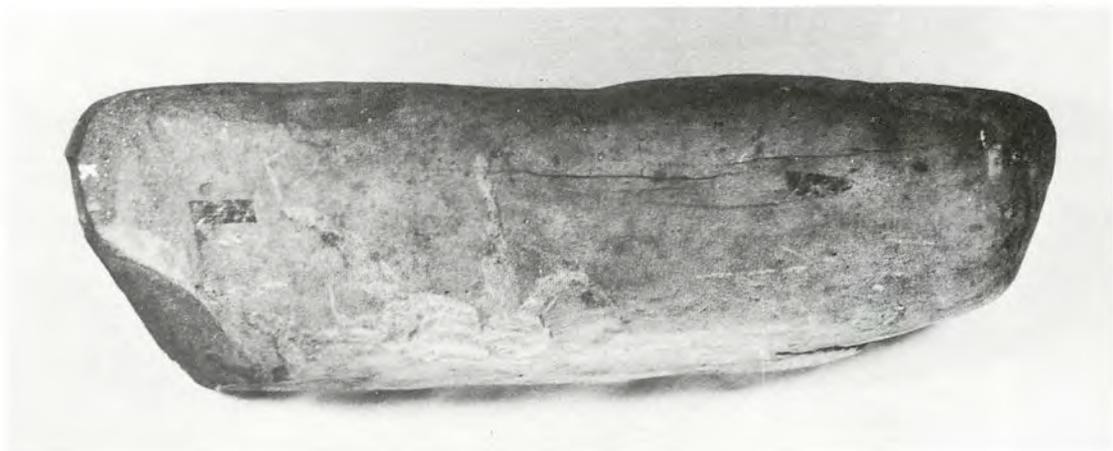
石 器 (扁平打製石斧)



石器 (磨製石斧・ノミ状石器)



石 器
(石 錘 · 磨 石 · 敲 石)



石 器 (石皿・砥石)



穀類の種子痕付の土器



PL.1 天城遺跡空中写真

○印が調査地点



テントの部分がA-1区(天城)

天城遺跡の北東の台地

熊本県文化財調査報告 第47集

古保山・古閑・天城

昭和55年3月31日

編集 熊本県教育委員会

発行 〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷 熊本県印刷センター

〒860 熊本市清水町高平1255

☎ (0963) 44-8321(代)

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 47 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：古保山 古閑 天城

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日